
ソラニワ

緒浜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソラニワ

【コード】

N9903E

【作者名】

緒浜

【あらすじ】

少年は暗闇の中で目が覚めた。自分が誰なのか、ここがどこなのか、何も思い出せない。

そんな少年の前にとつぜん現れた、夜色の瞳を持つ少年・ジイン。彼は少年を「ソラ」と呼び、さして歳が離れていないにも関わらず自らをソラの親代わりだと名乗る。

「おれとおまえなら、なんだってできる気がしないか」

決して死なない体のソラと、貴重な“生まれつき”の魔法使いであるジイン。

その特殊な能力ゆえに追われる身となった二人は、荒廃した街を捨て空の向こうへ渡ろうと試みる。
母なる大地を失い空に閉ざされた世界で、少年たちがたどり着く未来とは……。
運命に抗う二人の絆を描いた近未来SFファンタジー。

001 脱出

「空へ出よう。」

飛空船を買ってさ。

世界中を飛びまわって。

だれも知らない場所を探しに行こう。

なあ、ソラ。

おれとおまえなら、なんだってできる気がしないか」

その時の笑顔は、今も忘れないでいる。

黒い。まっくらだ。

まぶたを閉じてみる。まっくらだ。

まぶたを開けてみる。やっぱり、まっくらだ。

なにもない、からっぽの世界。

ぼくは、死んだのだろうか。

そう疑いたくなるほどに、目の前の闇は深かった。

闇というより、これは“黒”だ。すべてを呑み込む黒という色が、物質となって世界を埋め尽くしている。

少年は静かに呼吸をくり返した。

したたる水と、自分の息づかい。それ以外には何も無い。

腕を持ち上げる。のしかかる色が重すぎて、指先がわずかに動いただけだった。

息が苦しい。どろりとした闇が鼻や口から流れ込み、少しずつ肺に溜まっていく。それは血液と一緒に体をめぐり、もしかしたら、すでに脳まで達しているのかも知れなかった。

外からも内からも、その色はじわりじわりと少年を浸食していた。

食われる ……。

低くうめいて、少年は頭上を仰いだ。世界がわずかに揺らぎ、闇が和らぐ。どこからともなく降るしずくの連なりが、細い光を受けてキラキラときらめいた。

肌に当たっては砕ける光のかけら。心地よいリズムに、感覚が徐々に戻ってくる。

すぐ目の前に機械の壁が見えた。気味の悪い壁だ。くねくねとからみ合うコードが、邪悪な生き物のように見える。四方を同じような壁に囲まれている。とてもせまい。

どうしてこんなところにいるのだろう。

手が重い。頭が重い。体が鉄のかたまりみたいだ。目の前で弾けているはずの雫の音が、やけに遠い。見えない手が耳を塞いでいるようで、気持ちが悪かった。

なんだか、世界のすべてが自分から一歩遠ざかってしまったようだ。

頭上の白い亀裂が、悲鳴に似たきしみを上げて広がった。

光の中に影が揺らめく。

「……ソラ？」

人の声。誰かいる。誰だろう。

「ソラ……ソラだな？」

ソラ。

それは誰のことだろうか。

「早く！こつちだ……手を、のばせ！」

光の中から伸びてきた腕に、無意識に手を差し出す。さまよっていた指先が触れあい、たぐるように手首を掴まれた。

あつと息を呑む。熱い。

人の熱。肌の感触。

生きている、命の手ごたえ。

少し意識がはっきりする。そこで初めて、ソラは自分が全裸で全身ずぶぬれだということに気がついた。思い出したように鳥肌がた

ち、ぶるぶると震え出す。寒い。というか冷たい。これでは人肌を熱いと感じて当たり前だ。

知らない腕に引っぱられ、ソラはせまく窮屈なところから引きずり出された。

途端に視界が真っ白になる。

「……っ！」

両手で目を覆う。痛い。まばゆい光が両目に突き刺さる。

暖かい手が肩に触れた。

「大丈夫か？」

静かな声だ。まだ若い。心配そうではあるけれど、不安げではない。真夜中の澄んだ空気を思わせる、不思議と心地よい声だ。

痛みが徐々に治まっていく。恐る恐る両手を外すと、にじむ視界の向こうに一对の瞳が見えた。

わずかに緑みがあった、深い青。ほとんど黒に近いのに、どこまでも澄んでいて、底がない。

不思議な色。本当にきれいな色だ。人間の細胞が作り出したとは到底思えない。これは虹とか夕焼けとか、人の手には負えない類いの色だ。

夜空色の瞳をゆっくりと瞬かせて、少年は言った。

「ケガはないか？どこか痛いところは？」

熱い手のひらが肌の露を払う。

少年は、かつちりとした作りの上着をまとっていた。どこかの制服だろうか。上等な布だ。細身で裾が長く、ボタンがいつぱいついていてかっこいい。お城とか舞踏会とかにも着ていけそうなくらい上品な感じがする。

なにより灰色の上着は、少年の黒髪によく似合っていた。

ふいに少年の手が止まる。ぐつとなにかをこらえる面もちで、少年が薄いまぶたをふせた。

「ソラ……本当に、ソラなんだな……」

噛み締めるような呟きに、ソラは思わず首を傾げる。

ぼくは本当にソラなんだろうか？

恐ろしいことに気がついて、ぞわりと全身の毛が逆立った。
わからない。思い出せない。

自分が本当にソラなのか。

この少年が誰なのか。

頭のどこを探しても、“記憶”というものが見つからなかった。
からっぽの体に、風が吹きすさぶ。

“記憶があった”という記憶だけが、かろうじて頭の隅に引っかかっていた。

誰かと過ごした時間。歩んできた景色。育んだ想い。願い。

そのぬくもりだけが、残っている。

大切だったはずだ。あたたかかったはずだ。

それが、なくなってしまった。

なぜ失くした。どこで落としたり？

「ソラ」

肩を掴まれる。あざやかな色のまなざしが視界に飛び込んできた。

「しっかりしろ、大丈夫か？」

どこまでも澄んだ色。これに似た色を、どこかで見たことがある。

ああ、そうだ。

よく晴れた冬の夜、はるか彼方の上空で輝く『神ノ庭』の淡い光
がこの国にも届くと、空がこんな色に……。

「あ……！」

ソラはいま初めてまぶたを開いたような心持ちで、目の前の少年
を見つめた。

知っている。ぼくはこの人を、この瞳を知っている。

“知っている”ということしか思い出せないけれど、ただそれだ
けが、からっぽのソラを満たし、ソラを“ソラ”にした。

少年がふいに顔を上げる。眼光がにわかには鋭くなった。

「来たか」

少年の横顔が、抜き身のナイフに似た鋭利な光を帯びる。俊敏に

立ち上がると、少年は着ていた上着を脱いでよこした。

「とりあえず、これ着とけ」

さらりと乾いた布の感触が、濡れた肌に心地よい。かすかに残る少年の熱とにおいが、冷えた体をまるごと包み込んだ。

なんだか、安心する。

鼻の頭まで上着を引き上げて、ソラは深く息を吸い込んだ。

「立てるか？」

問われてうなずいたものの、体が思うように動かない。

少年の腕を借りてようやく立ち上がると、どこからか荒々しい靴音が近づいてきた。少年がソラを背に庇うのとほぼ同時に、数人の男たちが並んだ装置の間から飛び出してきた。

「動くな！」

向けられた銃口に息を呑む。

銃身の先にぽっかりと空いた穴が、少年とソラを見つめていた。ぎゅう、と臓腑の奥がせり上がる。

身を縮め、少年の背中にしがみつくと、夜色の瞳が振り返った。切れ長の双眸が、ふっと微笑む。

「心配するな」

少年の腕が静かに上がる。パキン、とガラスを割る澄んだ音が響き、少年の手のひらに、無色透明の物体が現れた。

ガラス……いや、氷？

それはパキパキと音を立てて長さを増し、数秒のうちに人の背丈ほどになった。

いつかどこかで見た、鉱物の結晶に似ている。

細長い棒状の物体で、少年が床を軽く打つ。透明な音とともに、目には見えない何かが波紋のように広がって、足首あたりをかすめていった。

「『支柱晶』……！」
ヒスタル

「魔法士が、なぜ……！」

男たちが途端に動揺する。銃口をさげる者、顔を見合わせる者、

みな困惑した表情を浮かべている。

『支柱晶』をくるりと回転させ、少年は二本の指で水平に空を切った。とてもなめらかな動きだ。それは波紋をたてずに水面をなでるような繊細さで、柔らかく、どこか優雅でもあった。

少年の指先にあわせて、銃口がわずかに揺らぐ。

「……銃身を曲げた。指を吹き飛ばされたくなければ、引き金は引かない方がいい」

静かな声に、男たちの視線が一斉に手元へと向けられた。

その隙に、少年が『支柱晶』で床に大きく円弧を描く。軌跡は一瞬青白くきらめいたかと思うと、次の瞬間、赤く燃え上がった。

「う……っ！」

熱風に思わず目を細める。ちりちりと頬が熱い。

人の背丈を超える大きな火柱が、何も無い床から噴き出していた。それはごうごうと勢いを増しながら、男たちへと迫っていく。

揺らぐ炎の隙間から、悲鳴を上げて後じさる男たちが見えた。

「行くぞ！」

手を引かれ、ソラは通路を駆け出した。

思うように動かない足がもつれ、その度に少年の肩を借りる。

通路はどこまでもまっすぐに伸びていた。天井が高い。通路といふより、ここは巨大なホールのような。前後左右に大きな装置が等間隔で並んでいて、それが壁のようにどこまでも連なっていた。

装置の影に駆け込むと、少年が腕時計を確かめた。チカチカと光る数字の列を指でなぞる。

「そろそろ、いいか」

ソラを一步下がらせて、少年が深く息を吸う。まぶたを伏せ、ゆっくりと息を吐くと、水平に持った『支柱晶』がふわりと浮き上がった。

「乗れ」

「え？」

言われた意味がわからず、ソラは思わず聞き返した。

『支柱晶』はちょうど腰あたりの高さで、空中に静止している。取り出したゴーグルを装着して、少年は再び言った。

「いいから、乗れってば」

「乗れって……この棒に？」

「そうだよ、ほら早く！」

腕をつかまれ半ば強制的に、ソラは『支柱晶』にまたがった。両手にひんやりとしたガラスの感触が伝わる。おそろおそろ体重を預けると、それは水面に浮かぶ小船のようにわずかに沈んだ。

少年がソラを後ろから抱え込む格好で『支柱晶』に足をかけた。頬が触れ合うほど近いその横顔を、横目でちらりと見る。

唇の端に、赤い血がにじんでいた。

「しっかりつかまっつけ……頼むから、落っこちるなよ！」

笑いを含んだ声が、耳元で囁く。

次の瞬間、全身を押しつぶす圧力とともに、足が床から離れた。胃が浮き上がる感覚に思わず悲鳴をあげる。

身を屈め、必死で『支柱晶』にしがみつきながら、ソラは恐る恐るまぶたを開けた。

足の下で、装置の群れが猛スピードで背後に流れていく。

ふたりを乗せた『支柱晶』は、空中をすべるように飛んでいた。

空気のかたまりが顔にぶつかる。うまく息ができない。まぶたを開けているのもやっただ。それでも恐怖を感じたのはほんの一瞬で、生まれて初めての感覚にソラの心は浮き立った。

まるで鳥に、いや風になったみたいだ。

ざわりと首筋が粟立つ。叫びたい。あらん限りの声を発して、この風と真っ向から対決してみたい。そんな衝動に、唇がむずむずした。

前方に灰色の壁が見えた。

改めてまわりの景色を見る。途方もなく広い空間に、数えきれないほどの装置が並んでいる。人の姿は見当たらない。奇妙なところだ。なにかの施設だろうか、まるで見当もつかない。

何本ものコードを生やし、見ようによっては生き物のようにも見える装置の群れを見下ろして、ふと気がつく。

ついさっき自分が這い出てきたのは、あの装置のうちのひとつだったらしい。

ということとは、もしかして。

この装置のひとつひとつに、人間が入っているのだろうか。

「抜けるぞ、しっかりつかまってる！」

風圧が増して、耳元で風が唸る。本当に息ができない。

少しでも油断すると、体を持っていかれそうだ。

少年が何かを叫ぶ。

直感的に身を屈めて、固く目を閉じた。

次の瞬間、凄まじい爆音が全身を呑み込んだ。

世界が回転し、どちらが上か下か下かも曖昧になる。

体がバラバラになりそうだ。

背中に少年の体温を感じる。

そのぬくもりだけを頼りに、ソラは待った。

永遠のような一瞬を抜けて、突然、すべての音が霧散した。

空気の質が変わる。風の音がやわらかい。

ソラはゆっくりとまぶたを開けた。

…… 青い。

上も下も。

右も左も。

地面はどこにも見当たらない。

本当に、ただ、青い……。

砕けた壁の残骸が降りそそぐなか、空はどこまでも果てしなく、ただ青かった。

「……いつてえ……」

すりむいたひじをさすりながら、ソラはのろのと身を起こした。かたい地面の確かな感触。まばらに生えた木々は横からの強風でどれも奇妙な形に歪んでいる。林と呼ぶにはあまりにもお粗末だが、吹きさらしよりはいくらかマシだ。

切り立った崖の上、わずかに木々が茂る場所に、二人は着地した。不時着……いや、墜落といったほうが近いかもしれない。

陸島の端ギリギリに建てられたあの施設を脱出してから、小一時間。二人を乗せた『支柱晶』は、陸島の側面……地上からは死角になる崖にそって飛んでいたが、少年の「もう限界」という一言で急上昇し、次第によるよると勢いをなくして、これはもう地上にたどり着けないのではないかとソラを戦々恐々とさせながら、かろうじて地面のあるところに到達した。

派手に地面を転がったせいで体中があちこち痛む。すりむいたひざからは盛大に血が出ているが、ひどい怪我はなさそうだ。

足元にゴーグルが落ちている。少年がしていたやつだ。

ソラから数歩離れたところに、少年は倒れていた。

ああむけに四肢を投げ出したまま、ぐったりと動かない。

どくとんと心臓が跳ね上がる。

「大丈夫ですか!？」

駆け寄ってその肩に触れる。細い肩だ。少年の唇がわずかに動く。何か言っているが、聞き取れない。

「……い……」

「いたい? どこが痛いんですか!？」

口元へ耳を寄せる。

「……ねむい……」

「は？　ねむい……えっ!？」

少年はすでに寢息を立てていた。その寝顔は穏やかで、外から見るかぎり大きな怪我也見当たらない。

がつくりと全身の力が抜け、ソラはその場にへたり込んだ。

腕が小刻みに震えはじめ。ずっと『支柱晶』を握りしめていたせいだ。自分の意志とは無関係にふるふると痙攣する手のひらを握ったり広げたりしながら、ソラはぐるりと林を見まわした。

そういえば『支柱晶』が見当たらない。

消えてしまったんだろうか。現れた時と同じように。

手のひらに残る、ひんやりとしたガラスの感触。

あんなものに乗って、空を飛んだ。

まるでおとぎ話の魔法使いみたいに。

魔法士が、なぜ……。

男たちの言葉を思い出す。

“マホウシ”とは何者だろう。

ソラは目の前に横たわる“マホウシ”の少年を、改めて観察した。少しクセのある黒髪に、透き通るような白い肌。彫りが深く、まつげが長い。とてもきれいな顔だ。美人、という言葉が真っ先に思い浮かぶ。男相手に“美人”という表現を使っているのかどうかわからなかったが、なんとなく、この人にはそれが似あっている気がした。

華奢とっていいくらいの細身だが、弱々しい感じはしない。むしろ、線の細さにあり余る存在感が、少年の内から溢れている。

歳は、十五、六ぐらい。自分より少し年上だろうか。そもそも自分の年齢自体が定かでないのだけだ。

この人と自分は、一体どういう関係なのだろう。

もしかして、兄弟だったりするのだろうか。

兄貴。兄さん。おにいちゃん。

口の中で呟いてみる。

「なんか違うなあ……」

どれも舌になじまない。

自分の前髪を引っぱってみる。光に透ける金色は、少年の黒髪と似ても似つかない。肌の色、骨格、髪の本質、そしておそらく顔立ちも、自分と少年はまるで違った。

外見だけで断定はできないが、ただ漠然と、血のつながりはないように思えた。

けれど自分に向けられたまなざしは、とても近しい人のそれだった。

親子、兄弟、それに等しい大切な誰か。

少年が身じろぎする。薄いまぶたが少し震えた。黒いシャツの胸が穏やかに上下する。

頬にかかる前髪で隠れたところに、青あざが見えた。いまできたやつだろうか。

眠った人間をただ眺めるのもさすがに飽きて、ソラは手持ちぶさたにきよるきよるとあたりを見回した。

吹きすさぶ風のほうへ顔をむけると、木々のむこうで地面がぶつりと途切れている。

大地の終わり。好奇心がむくむくと頭をもたげる。

地面の強度を確かめながら、そっと崖へ近づく。腹ばいになると、ソラは恐る恐る垂直の崖を覗き込んだ。

「う……わ……！」

どこまでも続く空と岩のコントラスト。遠くへ行くほどその境は白くかすんで曖昧になっていく。崖は内陸にむかってゆるくカーブし、その下には空と雲があるだけだ。

風のかたまりが前髪を吹き上げる。

「これが、大地の果て……」

陸島の端は地盤の脆いところが多く、たいがい立ち入り禁止になっている。頭上の空は見上げることができるが、陸の下に広がる空は飛空船にでも乗らない限り見ることはできない。『支柱晶』で飛んでいる時ならもつとよく見えただろうが、あの時は景色を楽しむ

余裕はなかった。

頭ではわかっていたつもりでも、こうして実際に目の当たりにすると、言葉では表しきれない現実の強さに圧倒される。

本当に、浮かんでるんだ……。

「すごい……」

地面の端を強く掴む。いま自分は大地の端っこをつかんでいるのだ。

このまま激しく揺さぶったら、大地が揺れるだろうか。ぐわんぐわんと揺れる街を想像して、ソラは思わずにやりと笑った。

少し身を乗り出す。遙か下にあると言われる『空ノ底』は、やはり肉眼では見えない。

「そこから落っこちても、助けてやらないからな」

からかうような声音に振り返る。横たわったままの少年が、瞳だけをこちらに向けていた。

夜色の瞳が、いたずらっぽく光る。

「知ってるか？ 墜落して『空ノ底』に消えた飛空船が、何十年も経った後、上から降ってきたって話。ガッチガチに凍って、乗客は全員冷凍ミイラ……まっ、本当かどうかは知らないけどな。でも話どおりだとしたら、『神ノ庭』と『空ノ底』が繋がってるってことになる……それってすごいよな」

少年が両手を空に伸ばす。

「創世の空白期、失われた大地の行方……科学技術は日々進歩しているのに、世界はまだまだ謎だらけだ。なっ、この国を出たらさ、遺跡とかもガンガンまわろうぜ！」

少年が楽しげに笑う。無邪気な笑みだ。少年が一気に幼く見えた。その笑顔にそぐわないくまが、目の下に黒々と浮いている。肌が白いせいか、少し目立って痛々しい。

どこか具合が悪いのだろうか。

「うっっ、寒い……！」

吹く風に身を震わせ、少年が薄いシャツをたくり寄せた。

「あ……すみません、上着。返します」

「なんで敬語なんだよ」

笑いながら少年が言う。

「上着はそのまま着ていいよ。おまえマツパだし。返されても逆に困る。てゆうかおまえこそ素足で寒くないのか？」

素肌に着一枚という格好で、ソラは首を傾げた。びゅうびゅうと吹きつける風はたしかに冷たいが、体はぼかぼかしている。

「大丈夫、です」

「ふうん。見てるこつちが寒いけどな。そういえば昔から寒さ熱さに強かったもんなあ、おまえは」

“昔”という言葉に、どきりと胸が高鳴る。

「いったいどんな“昔”だったのだろうか。」

この人は、どのくらい“ソラ”を知っているのだろうか。

昔のこと。“ソラ”のこと。少年のこと。

知りたいことがありすぎて、何から聞けばいいのかわからない。

そうだ、まずは記憶がないことを言わなければ。

「あの……」

口を開きかけて、ソラは少年の視線に気がついた。

夜色の瞳が、じっとこちらを見つめている。その視線があまりにもまっすぐなので、ソラは何だが落ち着かない気分になった。

なんだろう。ぼくの顔になにかついてるのだろうか。

あ。

まさか、よく見たらぼくが“ソラ”じゃなかったとか。

そんなオチってあるのだろうか。

まさかまさか、そんなこと……。

「ソラ」

ふいに少年が手招きする。名前を呼ばれたことに少しほっとして、ソラは少年のすぐ近くにしゃがみ込んだ。

手振りに誘われて、さらに顔をよせる。

「？」

かがんだところをいきなり抱きすくめられ、ソラは少年の上に倒れ込んだ。

「わっ、ちょ、なにっ!？」

「ソラだ……」

少年が腕に力を込める。前のめりの無理な姿勢で背骨が折れそうだった。

「ちょ……くる、し……っ」

「ソラだ、ソラだ、ソラだ!! ついにやったぞ!!」

足をばたつかせながら、少年が幼子のように歓声を上げる。その声がわずかに震えていることに気がついて、ソラはもがくのを止めた。

少年は、心の底から喜んでいた。頭のとっぺんからつま先、鼓動、吐く息にまで、喜びが溢れている。

ああ、この人は。

本当に、“ソラ”が好きなんだな。

ぎゅぎゅうと抱きしめられながら、ソラはどこか他人事のようにそう思った。

「ああ、ソラだ……ちゃんと生きてる。生きて……」

少年が声を詰まらせる。泣いているのだろうか。

見ないふりをすべきかどうか迷っていると、とっぜん体が持ち上がった。ソラの目と鼻の先で、夜色の瞳が子どものようにきらきらと輝く。

「なあ、どこに行きたい？ 紅富都？ 珀林？ とりあえず海見たいよなあ、海。あと白絹砂漠と、輝日野の原生林と……どこでも好きなところへ行ける。おれたちは、もう自由だ」

双眸が強く光る。さっきの無邪気な輝きとは違つ、ざらりとした刃のような光だ。

「もうこんなゴミ溜めみたいな街で、腐りきったゴミみたいなやつらと一緒にいなくていい。どこか遠いところへ行つて、ふたりで楽

し、く……っ」

息を詰めた少年の顔が歪む。

「どうしたの」

痛みを堪えるようなその表情に、ソラは思わず腰を浮かせた。

なんでもない、と少年が首を振る。その瞳が、ふっと遠くなつた。

「……本当に長かった。おまえが捕まつてから毎日、もう殺されてるんじゃないかとか、二度と会えないんじゃないかとか、考え出すと止まらなくて。こんな日が永遠に続くのかもしれないと思うと、本当に気が狂いそうだった。でも、終わった……もう二度とあいつらの好きにはさせない。いいか、ソラ」

腕を強く掴まれる。挑むような瞳が、再び鮮烈な光を宿した。

「もう絶対に、おれはおまえと離れたりしない」

強い意志が鼓膜にぶつかる。

いや、意志なんて生易しいものではない。これは誓いだ。少年の魂が、そう誓っている。少年は自らの命を賭して、それを必ず実現するだろう。

鼓動が高鳴る。

魂には、魂で応えなければならない。

ソラはまっすぐに少年を見つめたまま、全身の力を絞り出すように、ゆっくり一度だけうなずいた。

安堵したように、双眸の光が和らぐ。少年の腕から力が抜けた。

「魔法院がおれたちを追ってくるだろうけど、内々に済ませようとして、始めのうちにはあまり大きく動かないはずだ。軍が出てくる前に、“裏”の空港からとりあえず玖倉へ渡る。出国するまでは気が抜けない。おまえもおれから離れるなよ」

少年が再びまぶたを閉じる。ぐったりと体を投げ出して、深いため息を吐いた。ひどく疲れているようだ。

「どこか具合が悪いの？」

「いや……“力”の使い過ぎでちょっと疲れただけだ。少し休めば、大丈夫」

少年が片手で顔を覆う。

「飛空はとくに神経を使うんだ。しかも二人乗りで長距離はかなりキツイ。正直、あのまま落っこちるかと思った。ちよつと危なかったな」

小さく笑った少年が、ふいに真顔になる。

「おまえこそ、何ともないのか」

「え？」

「“え？”じゃないだろう。おまえこそ体は大丈夫なのか？ ずっと冷凍されてたんだし、あの時の怪我だって……」

ひんやりとした指が首筋に触れる。

「首はちゃんと繋がってるみたいだけど」

少年がくすりと笑う。いろんな笑顔を操る人だなとソラは思った。「あの状況じゃ覚えてないだろうけどさ、おまえ、頭とれそうだったんだぞ？ すごい出血だったし、あの時はおれも本気でおまえが死んだと思ったよ。まさか本当に不死身だなんて思ってなかったからさ」

風がふたりの間をすり抜けていく。少年はもう笑ってはいなかった。

「あの時……おまえがおれをかばって竜に噛まれたあと、ようやく魔法士団が来たんだ。通報からどのくらい経ってたと思う？ 丸二日だよ。もう何十人も死んでた。残の群れの連中もほとんどやられたよ。結局、あの竜だっておれが……あいつら、全部終わったあとにのこのこ出てきやがって。おれたちを助けに来たんじゃない。ただ、竜の死骸と、竜に噛まれた人間を回収に来たんだ」

少年の声音はひどく静かだった。時折、悲鳴に似た音をたてて過ぎる風のほうが、よほどうるさいくらいだ。表情の消え失せた少年の顔はきれいな人形のように、体温を感じさせないほどに無機質だった。

けれど、その見た目とは裏腹に、夜色の瞳の奥で高温の何かが燻っていることに、ソラは気がついていた。

怒りとか憎しみとか、それに似た何か。

唇の端に滲む血が、やけに赤く見える。

「おまえが竜毒を受けた“死体”として連れて行かれそうになって、おれは思わず“力”を使った。それで結局おれも捕まって……護送される直前に、おまえが動いたんだ。あいつらの驚きよう、おまえにも見せてやりたかったよ。おまえは『ハコ』に連れて行かれて、おれは魔法士として院に従うことを強要された。おまえが生きていることはわかってたから、表面上は素直に従うふりをして、助け出す機会をうかがってたんだ」

二年、と少年が呟く。

「居場所の特定と『ハコ』へのアクセスに、二年かかった。本当はもっと早く助けてやりたかったんだけど……ごめんな」

消え入りそうな声で、少年が目を伏せる。ソラは唇を噛んだ。

謝らなければいけないのは自分のほうだ。

この人は、こんなにも“ソラ”のことを想っている。声音から、まなざしから、指先から、少年のすべてから溢れ出る想いは、言葉よりも強い力で、ソラの心を震わせた。

それなのに、自分はどうか。一切の記憶をなくし、少年の名前はおろか、自分のことすら思い出せない。

罪悪感で臓腑が軋む。情けない気持ちでいっぱいだ。頭を打って記憶が戻るなら、いまずぐ地面に打ちつけてやるのに。

唇を強く噛み締める。

その時、ぎりぎりと縮んだ胃から、ぐきゅうぐるる、とマヌケな音が出た。

それは沈んだ空気をぶち壊し、長々と余韻を響かせながら、ソラと少年の間を抜けて、晴れ渡った空へと消えていった。

少年と目が合う。わずかな間を置いて、少年が思いきり吹き出した。

顔が熱くなる。恥ずかしい。どこかに埋まってしまいたい。

あああああ。

「ここから街まではかなり時間がかかるけど、着いたら真っ先にメシを食おう。ああ、でもそのまえに服を調達しなくちゃ……ふふっ、しかし今のは傑作だったな」

笑いながら少年が肩を震わせる。なんかもう最低だ。それでも……。

「ああ……思いきり笑ったのなんて、久しぶりだな」
吐息まじりに言いながら、少年が空を仰ぐ。

この人が笑ってくれるなら、なんだっていいような気がした。

「現在地は……まだ第三区か。地下水路から四区に出て……うん、なんとかなりそうだな」

腕につけた端末を操作しながら、少年が肩をすくめる。

「実はちよつとヘマつてさ。おまえ助けるの、本当は今日じゃなかったんだ。不正アクセスがバレて捕まりそうになったから、そのまま成り行きで……まっ、色々と段取り悪いけど、勘弁な」

弾みをつけて少年が身を起こす。

「うわ、頭じゃりじゃり」

あちこちについた砂を払いつつ、こきこきと肩を鳴らして大きく伸びをした。

「よし、じゃあ行くか」

「あ……ちよつと待って！」

立ち上がりかけた少年を、ソラはあわてて引き留めた。

大事なことを忘れていた。まだ言っていないのだ。

記憶がないということ。

なにも覚えていないということ、まだ言っていない。言わなくちゃ。

口を開きかけて、ソラはためらった。

「どうした？」

先を促すように、少年が首を傾げる。

夜色の瞳をまっすぐに見れないまま、ソラは黙り込んだ。

どうしても言葉が出ない。

怖かった。

少年は、きつとがっかりするだろう。苦勞して助け出した“ソラ”の中身がからっぽだと知ったら。あなたのことをなにも覚えていない、と言ったら。たぶん悲しむだろう。もしかしたら、怒るかも知れない。がっかりする顔を、見たくなかった。

「ソラ」

少年がソラを呼ぶ。静かに澄んだ声音だ。瞳の色と同じように、深い夜空を思わせる声。

相手をまるごと包み込むような、何もかもを許容する深い響きで、少年はソラを呼ぶ。

少年に名を呼ばれるたびに、ソラは自分の存在が濃くなっていくのを感じた。

ぼくも、呼べるだろうか……そんな風に。

「大丈夫だよ」

冷たい手のひらが頬を包んだ。少年が目線を合わせてくる。

「今度こそおまえを守ってみせる。どんなことがあっても、おれたちはずっと一緒だ」

だから大丈夫と、少年が繰り返す。

その言葉は不思議と的を得ていて、ソラを勇気づけた。

「どんなことがあっても、ずっと一緒……」

一音一音を噛み締めるように呟いて、ソラは大きく息を吸い込んだ。

「……なまえを」

「名前？」

「教えてほしいんです。あなたの……」

「あなたのなまえを」

あなたがぼくを呼んでくれるように。
ぼくは、あなたの名を呼びたい。

「黒瀬路音、十五歳。ぼくの研究室に所属している一等錬士だ……当然知っているよね？」

大きなモニターに黒髪の少年が映し出される。今より少し幼い。夜色の瞳からは、何の感情も読み取れなかった。

当然だ。ここに映っているのは、黒瀬路音の表面だけなのだから。そして、今まで自分が見ていたのも。

「その彼が、本日11時32分頃『ハコ』に侵入し、“ヒトガタ” 一体を連れ出して現在も逃亡中だ」

沢木瑞彦は、黒瀬の画像と彼にまつわるデータからゆっくりと目を離れた。こんな記述を読んだところで、彼のことをかけらも知ったことにならない。

「それでね、沢木くん」

淡く透けるモニターの向こう側で、男がにっこりと微笑む。

「本格的な捕縛部隊を出すまえに、自ら院に戻るよう、まずは何人かで彼を説得してみようと思ってるね。その役を、きみに頼みたい」

モニターの隅に着信を告げる文字が現れ、わずかに遅れて電話のベルが鳴り出した。ダイアル式のずいぶん古い代物だ。デジタル信号をわざわざ変換して電話機に繋いでいるらしい。酔狂なことだ。それがこの男の嗜好なのだろう、木製のデスクや革張りの椅子、重厚なカーテンなど、部屋全体が懐古的な雰囲気だ。まとめられている。生の素材を使った部屋は、最新の合成素材で整えられた部屋よりも壮麗で美しく、どこか威圧的でもあった。

けたたましい金属音を少しも気に留めずに、男は話を続ける。

「人選はきみに任せるよ。ぼくには彼の交友関係はよくわからないから。ただ、きみは彼と一番親しいように見えてね……今回のことについて、なにか思い当たるふしはあるかい？」

「いえ……なにも」

「だろうね」

微細な光の粒子が流動し、画像が展開する。大きなモニターいっぱい、今度は拘束具をつけた少年が映し出された。うなだれていた少年がふいに顔を上げる。動画だ。

見覚えのある顔立ちと、夜色の瞳。

今よりもずっと幼い、黒瀬路音。

しかし、決定的な何かが違う。

“ソラを返せ”

幼い黒瀬が低く唸る。

目だ、と瑞彦は思った。目が燃えている。

黒く深く、そして静かに。

触れればきつと、痛みを感じる間もなく、肉をそがれる。

それほどの強さで、夜色は燃えていた。

憎悪。

強いて名付けるなら、そんな名前だろう。

モニターの向こうで、男が笑う気配がした。

「かわいだろう？ 彼が保護された時の映像だよ。“ソラ”とい

うのが、連れ出した“ヒトガタ”の名前だ……ああ、彼が『貧困街』出身というのは知っていたかい？」

「いいえ」

“ソラを、返せ……！”

鮮烈な意志が鼓膜を揺さぶる。心臓を掴まれるような声だ。

黒瀬は、こんな声を出すのか。

「『貧困街』で保護された時、彼は“ヒトガタ”と一緒にいた」

「……血縁者ですか？」

「いや、データ上は赤の他人だよ」

画像が再び展開する。

台の上に乗るで標本のように横たえられた、金色の髪の少年。眠る顔はまだあどけなく、死人のように白い頬がどこか痛々しかった。これが“ソラ”。

なるほど、黒瀬とは少しも似ていない。

「彼はなぜ“ヒトガタ”を？」

「さあ……『ソラ』は群れるからね。兄弟とでも思っていたんじゃないかな。ははっ、笑えるね。魔法使いと“ヒトガタ”が兄弟だなんて。今頃、殺しあっているかもしれないね」

モニターが消える。隔てるものを失って、男のうすら笑いが直接目に刺さった。

男はいつでも笑っていた。この男から笑顔がはがれたところを見たことがない。きちんと整えられた銀鼠色の髪に、上品な物腰と柔和な顔つき。清涼感のある顔立ちも手伝って、温厚で人当たりがいいと多くの院生は思っているようだが、それが間違いであることを瑞彦は知っていた。

男からは漏れていた。笑顔の向こう側にあるものが、どろどろと。男はそれを隠そうとはしていなかった。張りついた笑顔は、彼の本性を覆い隠すためのものではないのだ。だから少し目の利く者であれば、たいていが彼の不穏さに気がつき、困惑する。

美しい花から突然這い出てきた毒虫に驚き、顔をしかめるように。そうして人が動揺するさまを、男は楽しんでいるようだった。

男は、今も笑っていた。

「ぼくの個人的な伝手に話をつけておこう。“東”のね。身を隠すならあちら側だろう。たぶんどこかしらに引っかかるはずだ。ああ、このことに関しては他言無用で頼むよ。あまり自慢できる友人たちではないからね。必要な情報は、ここに……」

男が薄いチップを差し出す。受け取ったそれを携帯用端末に差し込むと、無機質な瞳と燃える瞳が手の中で重なった。

ソラを返せ。

黒瀬、これがおまえの正体か。

「飛空を使ったそうだよ」

思わず顔を上げる。飛空は院でも数人しか使うことができない、高度な技術だ。

黒瀬が、飛空を。

ありえない話ではない。黒瀬なら、島ひとつ浮かすくらいできるような気がする。そのくらいの意志を、彼は持っていた。

唇の端がわずかに歪む。これは自嘲の笑みだろうか、それとも……。

「能ある鷹は爪を隠すと言っけれど、ふふっ、彼は爪どころか牙まで隠していたようだね。ついでに毒まで仕込んであるんじゃないかと気が気でないよ」

男がゆったりと手を組む。再び電話が鳴り始めた。

「できれば穏便に解決したいけれど、彼が素直に従うとは思えないからねえ。きみたちが説得したとしても、聞き入れてくれるかどうか。こちらが把握していない能力も持っているようだし、最終的には、多少の武力行使もやむを得ないだろう。きみも知っているとおり、彼は貴重な天然の魔法使いだ。院に従う意思がなくても、生きてさえいれば、彼には十分使い道がある……いや、たとえ死体でも、研究材料として保存しておく価値は十分あるよ」

さも楽しそうに男が笑う。

使い道。研究材料。保存。

どれも人に対して使われるべき単語ではない。

「……桐生導師」

「なんだい？」

「黒瀬が説得に応じて院に戻った場合、彼の処遇は……」

桐生が中指で眼鏡をくい、と上げる。

「そうだねえ……何らかの処罰はあるだろうけど、これからも院に忠誠を誓うというのなら、悪いようにはしないよ。行動制限や思想矯正、魔力制御装置の埋め込みだとか、生活管理の厳重化は免れないだろうけど、さつきも言ったとおり、彼は貴重な人材だからね。ある程度の権利と生活は保証する」

「では、院への忠誠を拒んだ場合は？」

「階級及び一切の権利の剥奪。その後の処遇は長老会の判断による

けど、おそらくは院で研究に“貢献”してもらつことになるだろう」

「貢献……ですか」

「死ぬまでね」

桐生がにっこりと笑う。

おぞましい笑顔に、瑞彦は密かに身震いした。

「さて、他に質問はあるかい？」

「一緒にいる“ヒトガタ”は」

「別の部隊が処理する。きみたちは“ヒトガタ”には手出しせず、黒瀬さんの説得に専念してくれればいいから」

あどけない少年の顔を思い出す。手の中の端末にも保存されているはずだ。

まだ十二、三歳ぐらいの子どもだった。

殺すのか。

いや、騙されるな。奴は“ヒトガタ”だ。

人の形をしているだけの、化け物。

「“壁”の検問は強化してある。何かあれば、直接きみのところへ知らせがいく手筈だ。急な動きがなければ、準備を整えて明朝より搜索にあたってくれ」

「わかりました。失礼します」

一歩下がって礼をとると、瑞彦はすばやく踵を返した。

さっさとこの部屋を出たかった。桐生の毒で息が詰まりそうだ。

それに……。

瑞彦は密かに唇を噛んだ。

魔法院は、背反する者に容赦しない。

院が生きた人間をそこまでぞんざいに扱うとは思えないが、桐生
の話を聞く限りでは、背反者として捕まった場合の黒瀬の処遇は、
かなり厳しいものになるだろう。

だとすれば、選択肢は二つ。

どちらにせよ、一刻も早く黒瀬を見つけないといけない。

そして。

「まさかとは思いつけど、彼を逃がそうなんて考えないようにね」
足が止まる。振り返らなくてもわかる、毒々しいその笑顔。

「ここだけの話、国外へ出られるのが一番困るんだ。空港は未認可のものも含めてすでに部隊を配備してある。他国へ渡すくらいなら、いつそその場で……ってね」

死、という一文字が、ひやりと首筋を撫でた。

電話が三たび鳴り出す。軽い舌打ちが聞こえた。

「うるさいなあ。どうせくだらない連中からのくだらないお小言だろっ」

桐生が二本の指でハサミを作り、ちよん、と空を切る。途端に、かすかな余韻を残して電話のベルが途切れた。絨毯にほとりと落ちたコードは、鋭利な刃物でそうされたかのように、きれいに切断されていた。

「みんなさつさと死ねばいいのになあ」

本気とも冗談ともつかない呟きを聞き流して、沢木は部屋を辞した。

扉が完全に閉じるのを待って、ようやく息をつく。

ガラス張りの廊下は人影もなく、しんと静まり返っていた。電力をふんだんに使った廊下は、真昼のように煌煌と輝いている。

ガラス越しに広がる夜空を見上げる。深く透明な青を、何層も重ねたような黒だ。よく似た色の瞳を思い出して、瑞彦はまぶたを伏せた。

できるか、自分に。

黒瀬を連れ戻すことが。

否、黒瀬を救うことが。

無理ですよ。

感情を伴わない静かな声音がそう告げる。黒髪が風に舞っていた。

あなたとおれは、違いすぎる。

つい数週間まえのことだ。抜けるような青空が鮮明によみがえる。黒瀬はあの時すでに、こうなることを知っていたのだろうか。

「沢木教士！」

廊下の向こうから少女が駆け寄ってくる。見覚えのある少年も一緒だ。

瑞彦は臍腑が重く沈んでいくのを感じた。

「笹原錬士」

「いったい、どういうことですか。路音……黒瀬くんは……」

白い頬がいつもよりさらに白い。一見落ち着いてはいるが、揺れる声音からその動揺が伝わってくる。

笹原小雪は、小さな背を伸ばしてまっすぐに瑞彦を見上げていた。色素の薄い瞳が、必死で真実を求めている。

なぜ、どうして。彼はいま、どこに。

いまだあどけなさの残る少女の、まなざしの強さに圧倒される。

あいつはいつもこんな目で見つめられていたのか。

嬉しそうに黒瀬を見上げる横顔を思い出して、瑞彦はなんとも言えない気持ちになった。

小雪は、どこまで知っているのだろう。

「いったい、黒瀬に何があったんですか」

小雪の後ろから、長身の少年が訊ねてくる。こちらも険しい顔だ。

黒瀬と同室の、名前は確か……北見聡太。

手間が省けたな。

緊急召集をかけようと思っていた二人を従えて、瑞彦は歩きながら手短かに状況を説明した。

黒瀬が『ハコ』から“ヒトガタ”を連れ出したこと。

軍が正式な捕縛部隊を派遣するまえに、少人数で説得を試みることに。

「……黒瀬はなぜ“ヒトガタ”を？」

「その“ヒトガタ”とは、兄弟のような仲だったらしい」

『貧困街』で、とそっけなく付け加える。北見は一瞬困惑したような表情を浮かべ、けれどすぐにそれを隠した。

「……黒瀬がその“ヒトガタ”とどんな関係だったか知りませんが」

ひとつひとつ言葉を選ぶように、北見が言う。

「だからって“ヒトガタ”を連れ出すなんて、正気じゃない」
自殺行為だ、と苦々しく吐き捨てて、北見は眉をひそめた。

「笹原」

押し黙ったままの小雪を振り返る。どこか遠くを見つめていた瞳が、瑞彦へ向けられた。

「黒瀬と親しかった人間を他に知っているか？」

わずかに思案した後、小雪が力なく首を振る。栗色の髪が頬をなでて揺れた。

「知りません。いない、と思います……たぶん」

「笹原が言うなら、確かです」

自信のなさげな小雪の言葉を、北見が後押しする。けれどそれを拒むように、小雪は再び首を振った。

「いいえ、わかりません。なにも知らないんです。彼のことは、何ひとつ……」

小雪が小さく笑う。痛々しい笑顔だ。

幼い日の記憶にはないその表情に、思わずどきりとする。

いつからこんな顔をするようになったのだろう。

時の流れに感嘆しながらも、いまだに小雪を幼なじみの小さな女の子として見ている自分に苦笑いする。

「沢木教士？」

「いや、なんでもない」

そうだ、今は懐かしさに浸っている場合ではない。

瑞彦は表情を引き締めた。

「明朝3：55三番ゲートに集合。4：00より搜索を開始する。
装備はL4……戦闘になる可能性もある。準備は怠らないように」

「戦闘……」

小雪の表情が曇る。北見が声を荒げた。

「戦闘って、黒瀬とですか？」

「あくまでも可能性だ」

言いながら、瑞彦は不安を覚えた。

そう、あくまでも可能性だが、ゼロではない。

黒瀬が攻撃を仕掛けてくる可能性は、十分にある。

幼い黒瀬の瞳を見れば、それは明白だった。

そしておそらく、彼は強い。

学科も実技も目立って優秀ではなかったけれど、彼はそういった院の定規にはまらない、もっと実践的な術に長けている気がする。

あるいは、この日のためにわざと能力を低く見せていたのかもしれない。

計り知れない能力を秘めた魔法士。

黒瀬が小雪を傷つけることはないにしても……いや、その可能性もなくはないのだろうか。

わからない。黒瀬路音の輪郭が、どんどんぼやけていく。

「彦ちゃん」

呼ばれて顔を上げる。そこには久々に見る、幼なじみの顔があった。

あの頃のままのようで、そうではない面差しが、今は泣きそうに歪んでいる。

「路音は、大丈夫よね？」

立場や建前、そんな余計なものを取り払った、シンプルな問いかけ。

黒瀬への想いが詰まったそれは、血が通っていて重みがあった。

黒瀬は、大丈夫だろうか。

「おれにもわからない」

正直に首を振る。切実なまなざしに、気休めの嘘はつけなかった。「わからないけれど、これは彼が望んだことだ。どんな結果になっ

たとしても、黒瀬は……」

言いかけて口をつぐむ。

苦しい。

膝をつき、うなだれて、黒瀬は確かにそう呟いた。体の奥底から

漏れた呟きは、いまだに耳について離れない。

どんな結果になったとしても。

黒瀬にとつては、ここにいるよりマシなのではないか。

そんな言葉を呑み込んで、別の言葉にすり替える。

これ以上、小雪を傷つけるわけにはいかない。

「黒瀬もバカじゃない。何か考えがあるんだろう。とにかく、話をするためにも、一刻も早く彼を見つける必要がある。明日は走り回ることになるから、今のうちに少しでも体を休めておくように」

細い肩を掴んで、いいな、と念を押す。幼い頃よくそうしたように、少しかがんで視線を合わせた。

こくんとわずき、小雪が姿勢を正す。わずかに照れたような笑顔を見せてから、凜とした表情できれいな礼をとった。

「北見も、明日は頼むぞ」

「はい。微力ですが、力を尽くします」

敬礼に敬礼で応える。先に踵を返した小雪を追うようにして、北見も歩き出した。

遠ざかる二人の背中を見ながら、考える。

あなたはなにも知らない。

吹きすさぶ風の中、まっすぐに耳に届いた言葉。

悔るわけではなく、ただそれが事実なのだと、声音は告げていた。

そつだ。確かにおれはなにも知らない。

けれど。

「……今から知ることだつて、できるだろう」

すべてを知ることとはできなくても、知ろうとすることはできるはずだ。知り得たことを理解しようと、努力することはできるはずだ。それが黒瀬を救うことに繋がらなくても、そのくらいのがままは許されるはずだ……“友人”として。

今頃、殺しあっているかも知れないね。

そつという可能性も、なくはない。

港に現れて、殺される可能性も。

「……生きていますよ、黒瀬」

口の中で呟いて、瑞彦は星の见えない闇空を睨んだ。

「あの……ジインさん？」

「ジインでいい。“さん”いらぬい。“爺さん”みたいでいやだ。

あと中途半端な敬語もやめろよ、調子が狂う」

「じゃあ、ジイン……聞くけどさ」

「うん」

「なに、ここ」

ド派手な壁紙に、ふかふかのカーペット。へんてこなかたちのベッドはてらてらと光り、悪趣味なこと極まりない。

ピンクの色水に浸したような部屋は、いかがわしさに溢れていた。立ち尽くすソラの横で、顔色ひとつ変えずにジインが答える。

「ええと、ここはラブホテルといって、おもに恋人同士がちちくりあう……」

「そんなの知ってるよ！そうじゃなくて、どうしてこんなところに来たのかって聞いてるんだ！」

「え、知ってるんだ……ふーん。おれのこと覚えてないのに、ラブホは覚えてるんだ。ふうーん」

半眼で言われ、肩をすくめる。

「う……ごめん」

「冗談だよ」

くすりと笑って、ジインの手が頭をくしゃりと撫でた。記憶をくすぐる懐かしい感触に、頬が熱くなる。

手の甲で頬をこすりながら、照明がピンク色でよかったと、ソラは思った。

「……覚えてない？」

記憶がないとわかった時のジインの反応は、意外なものだった。

「覚えてないって……え、何も？」

ジインが目を丸くする。

いたたまれない気持ちで、ソラはうなづいた。

「おれのことも、自分のことも……なにもかも、全部？」

わずかに間を置いて、再びうなづく。

まばたきをひとつとして、ジインは黙り込んだ。

ふたりの間に、風が吹きすさぶ。

重苦しい沈黙。

険しい表情で押し黙ったまま微動だにしないジインを、ちらりと上目遣いに盗み見る。

怒っているのだろうか。

それとも、がっかりしているのだろうか。

そうだとしても仕方がない。自分のことを忘れられてしまうなんて、自分が逆の立場だったら、ひどく落胆するだろう。

胃のあたりがぎゅうつとなる。空腹のせいではない。

所在なげに視線を落としたソラの頭に、いきなり衝撃がきた。

ごっつ、と世界が揺れる。

殴られた頭を抱えて、ソラはしゃがみ込んだ。

世界が涙でみるみる歪んでいく。

理不尽なげんこつに、立場も忘れて、ソラは思わず声を荒げた。

「いつ……てええ！な、なにすんだよ?!」

「いや、記憶が戻るかなと思って。どう?」

「どうって……戻るわけないだろこんなことで!」

拳をさするジインを、涙目で睨みつける。ジインは悪びれる様子もなく、首を傾げている。

「うーん、じゃあ、あったためてみるか?脳みそがまだ凍ってるのかも」

ジインが手をかざす。吹き出す炎を思い出して、ソラは後じさった。

「いいよ、もういい!」

叫んだ拍子に、ぐう、と腹が鳴る。あっと声を上げて、ジインが

手を叩いた。

「飯食つたら戻るかもよ?!」

なんなんだこの人。

思わず口を開けたまま、まじまじと見つめる。

視線に気がついたジインが、眉をひそめた。

「なんだよ、信じてないな。いいか、食事をとれば脳に糖分が……」

「いいです。もうわかりました」

「うっわ、ムカつく。何だよその言い方」

「だっていきなり殴るから!」

「前もって言つたら効果ないだろ。今からびつくりさせますよって前フリしてしゃっくりが止まるか?」

「それとこれとは別問題だろ?!」

「あーうるさいうるさい。記憶がなくても、それだけうるさきや、大丈夫だな」

にやりとジインが笑う。

あ。

もしかして、慰めてくれたのだろうか。

「ああ、そうだ、名前な。おれはジイン。おまえの親みたいなものだ。よろしくな」

そう言つてにかりと笑ったあざやかな笑顔は、ソラの中に渦巻いていた後ろめたさや不安や心配を一瞬できれいさっぱり吹き飛ばしたのだった。

「しかし不思議だよなあ。言語とか一般常識は覚えてるのに、他のことは忘れちゃうなんて」

「……ごめんなさい」

「謝るなつてば。そんなもんだろ、記憶喪失つて。何かの本で読んだけど、記憶が完全に消えることはなくて、本人が忘れているだけで、脳のどこかには残ってるらしい。だからおまえも、そのうちけろっと思ひ出すかも……あ、なんならまた衝撃を与えてみるか?」

につこりと笑って、ジインが拳を作る。

「……遠慮しとく」

「あっそ。まあ、あんまり気にするなよ」

さらりと言うジインの横顔を見ながら、ソラはかすかな寂しさを覚えた。

「……ジインは平気なの？」

「なにが」

「ぼくがジインを覚えてなくても……」

「平気なわけないだろ」

きっぱりと言われて、押し黙る。かげりのない夜色の瞳がまっすぐソラに向けられた。

「悔しいし、もどかしいし、寂しいよ。でもそれはおまえのせいじゃないし、ごちゃごちゃ悩んでも仕方ないだろう。冷凍睡眠から目覚めて、こんなに早く身体機能が回復したことだけでも良しとしな。いと。それに……」

ソラの頭を引き寄せて少し屈み、ジインが目線を合わせる。

「心配しなくても、きつと思ひ出す。おまえの脳みそは、そんなにヤワじゃない。大丈夫だよ」

こくんとうなづきながら、ソラはさりげなく視線を落とした。顔が近すぎて恥ずかしい。ジインはことあるごとに肩を抱き、頭を撫で、屈託なくソラに触れる。それが嫌なわけではないけれど、慣れないせいかな、その度にどきまぎしてしまう。

ジインの指はいつもさらりと乾いていて、少し冷たかった。

「まあ、なくして惜しむほどの記憶でもないんだけどな」

その唇に皮肉な笑みが浮かぶのを見て、ソラは訊ねた。

「いったいどんな暮らしだったの？」

“ソラ”がジインと町外れの廃工場で暮らしていたことは、道すがらに聞いていた。ふたりとも身寄りがなく、住民登録もなければ『身分証』^{パス}もない。群れをなして路上で生活する浮浪児童……いわゆる『ノラ』というやつだ。

「財布盗つたり、食いモンちよるまかしたり、まあ普通の極貧生活だ。な。といつても、そこらの『ノラ』に比べたら生活水準高いほうだったけど……ああ、これこれ。これが使いたくてここに来たんだ」
ジインの指先が小さなテーブルに触れる。突然、部屋いっぱい女の喘ぎ声が響き渡った。

とんでもない格好で絡み合った男女の裸体が、リズムカルに弾みながら、テーブルの上でゆっくり回転しはじめる。

「なっ、ななななにそれっ！」

後じさり、壁に張りつく。耳が熱くなり、全身から汗が噴き出した。

「ホロだよ。粒子流動ホログラフ。ここ数年で普及したんだ。これは完全立体型で、他に平面型もある。おまえ、見るの初めてだよな」
ジインが操作板に触れる。男女の裸体が融解し、光る粒子の流れが色とりどりの魚に変わった。草原を走る馬の群れ、砂に煙るカーレース、何かの映画のワンシーン……円盤の上に、小さな立体世界が現れては消えていく。

「映像受信用のネットワークシステム。うまく使えば、これでやつらの動きが多少調べられる」

ジインが慣れた手つきで台座の裏蓋を開ける。いくつかの配線を変え、腕の端末から取り出したチップを小さな隙間に挿入した。

「西側でネットが使えるような高級ホテルは、エントランスに入るだけで『身分証』が必要なんだ。アクセスも見張られてる。でもこういういかかわしいホテルなら『身分証』もいらないし、これは映像用の受信専用機だから、わずらわしい仕掛けは一切なし。方法さえ知っていればいくらでも情報を引き出せる。ここはラブホの中でも最高ランクのところだから、建物のセキュリティもわりといいし、金さえ渡せば“売られる”心配もないから、そこらの安宿より安全なんだ」

「“売られる”って？」

「密告だよ。どこぞの幹部が密会してたとか、逃亡中の奴が隠れて

る、とかね」

ジインの指先が操作板の上を軽快に跳ねる。淡い緑に発光する文字が、羽虫の群れのように円盤上を旋回し始めた。

「おまえ、先にシャワー浴びてこいよ。使い方、わかるだろ？服は下着も全部、浴室の機械に入れてボタン押しとけば、出る頃にはきれいになってるから」

「……なんか、ずいぶんくわしいんだね」

よく来るの？と訊ねそうになって、あわてて口をつぐむ。さすがにそれは不躰だし、どんな答えが返ってきてきても困る。

でも、気になる。

さっきの男女がしていたようなことを、ジインもするのだろうか。ゆっくりまわる二つの裸体。あまりにもあけすけで、ひどく滑稽だった。

ジインも誰かとあんなことを？

「……いやだな」

知りたいような、知りたくないような気がした。

クリーム色の浴室は真昼のように明るく、乾いていて寒かった。

脱いだ服を機械へぶち込み、言われたとおりボタンを押す。

冷たいタイルの上をつま先立ちで足踏みしながら、赤い取っ手をひねり、出てきた冷水に思わず悲鳴を上げた。しばらくしてからやっと出てきた熱いシャワーを、まずは頭から豪快に浴びて、浴室と体を温める。がびがびしていた髪や肌が、水氣を得て今度はぬるぬるになった。あの機械に満ちていた液体の残りだ。唇を少し舐めてみると、しょっぱい味がした。

ボディソープをよく泡立てて、体中をこしこしと洗う。

部屋側の壁は全面が大きな鏡になっていて、浴室のすべてを映し込んでいた。同じ部屋にもう一人、裸の人間がいるみたいで、なんだか落ち着かない。

もうひとりの自分と向き合ってみる。

金色の髪。青い瞳。

これが、ソラ。

平凡な見かけに、少しがっかりする。

ジインが持つているような、引力というか強さというか……そう、存在の密度みたいなものがない。

ぱつとしない、普通の少年。舞台の役名で例えるなら、街の子B、といった感じだ。

こんなんで、ジインを守れるだろうか。

「……あれ？」

守る？ジインを？ぼくが？

どうして、急にそんなことを思ったのだろう。

けれど、それはなんだかとてもしっくりくる気がした。

記憶を失う前、“ソラ”はジインをかばって竜に噛まれた。

ぼくだって同じだ。ぼくだって同じ場面に出くわしたら、同じことをするだろう。

だって、ぼくは“ソラ”なんだから。

ジインを守る。それはソラが“ソラ”であるためのひとつの条件のように思えた。

握った両手に力がこもる。

とりあえず、見かけだけでももう少し強そうに見せなければ。

しかめっ面をして、肩を怒らせる。やはり背が足りない。背伸びしたら、ふくらはぎをつりそうになった。

背丈は今後努力することにしよう。

強そうに見えるポーズをしばらく研究した後、せめて人相が悪くなるようにと、眉間にあらん限りのしわを寄せたまま、ソラはがしがしと頭を洗った。

全身の泡とぬるぬるをシャワーで流し、清潔なタオルにくるまる。機械に入れておいた服は、自動で洗濯され、すっかりきれいに乾いていた。ここに来る途中で、ジインが買ってくれたものだ。大きなフードとポケットがたくさんついた、かっこいい上着。丈夫なザックと、替えの下着もある。かっこいいひも靴も買ってもらった。

ジインはまだホログラフの前に座っていた。円盤の上には、半透明のごつごつした岩のようなものが浮かんでいる。岩の表面には、ちかちかと光る小さな赤い点がいくつもちりばめられていた。

「それ、なに？」

「立体地図だよ、この国の」

拡大されていた画像が縮小する。クロワツサンを太らせたような、いびつなカタマリが現れた。

「これが鋼雪陸島。おれたちが今いるのはこのあたり……第四区だ」
ジインの指が島の真ん中あたりを示し、そのまま左へ滑る。

「この枠の中が第一区……議会や軍の重要機関が集中してる、国政の中枢だ。セキュリティが厳しくて、限られた人間しか入れない。そのまわりが第二区。閥族や大企業なんかが集まっている。第三区はそれに従事する人間、第四区はそのまた下の人間……てな具合に、外側へいくほど貧乏度数が高くなる。それぞれの区域は“壁”できつちり隔たれていて、行き来するには『身分証』が必要だ」

「この溝は？」

「カラスダイク虹ノ谷……キャンディータウン彩色飴街だ」

現在地から少し東、島をちょうど東西に二分して黒い亀裂が走っている。

「深い谷の両側に、鉄くずみみたいな街がこびり付いている。この国を“西”と“東”に隔てる街だ。街自体も、同じように見えて両側では生活水準がずいぶん違う……いや、人間の種類が違う、のほろが正しいかな」

白い指先が、暗い溝から右へと滑る。

「ここが花柳街で、そのすぐ東が『裏』……花柳街の元締めがいる、この国で一番ヤバイ地域だ。その下が『貧困街』のゴミ市場……おれたちが暮らしてた工場は、このへんだな」

ジインの指先が、クロワツサン右側の下方に触れる。ホログラフの粒子が歪んで、ゆらゆらと虹色の波が立った。

「ああ、そつだ」

ジインが襟首を探る。引っぱり出された細い鎖に、同じ形の鍵が二つぶら下がっていた。

「工場の鍵。二度と使わないだろうけど、一応渡しておくよ。まあ、お守りみたいなもんだな」

引っこ抜いた配線用の細いコードに通し、首から下げられるようにしてジインがそれを差し出す。鉛色の鍵が、ピンク色の照明に鈍く光った。

「なるべく別行動は避けるようにするけど、もしも突発的な事故やなんかで、お互いの居場所がわからなくなった時はこの廃工場で待ち合わせしよう。大体でもいいから場所覚えとけよ」

大きく伸びをして、ジインが立ち上がった。

「さ、おれもシャワー浴びてこようっと」

「ねえ、この赤い点はなに？」

地図のいたるところで赤い印が点滅している。百個以上はあるだろうか。

振り向いたジインが不敵に笑う。

「おれの手下だよ」

冗談めかした声音でひらりと手を振ると、ジインは浴室に行ってしまった。

ホログラムの前に座って、赤い点を眺める。それらは主に、『彩色飴街』に集中していた。

一体何の印なのだろう。ジインはあんな風に言っていたけれど、本当に手下がいるとは思えない。協力者の居場所だろうか。それにしても多すぎる。

とにかく、廃工場の場所とだいたいの地形ぐらいは把握しておかないと。

「ええと、ここが『彩色飴街』で、このへんが花柳街」

ジインに教えてもらった地名を呟きながら、視線で追っていく。

「『裏』、『貧困街』、『ゴミ市場』……廃工場」

廃工場。ふたりが暮らしていたところ。

首から下げた鍵を握りしめる。
もう二度と帰れないだろうと、ジインは言っていた。

「おれたちが追われる理由は二つ」

言いながら、ジインが人差し指をぴんと立てる。

「その一。おれが魔法使いだから」

「魔法使い？」

「そう。手を触れずに物を動かし、炎を操る。そういう力を持つ人間を魔法使いと呼ぶんだ」

ジインが手をかざす。風のように、風よりも確かな感触のなにかが、ソラの頬を撫でていった。

目には見えない、不思議な力。これが、魔法。

「どうして魔法使いだと追われなくちゃいけないの？」

「厳密に言つと、魔法使いだからというよりも、魔法使いなのに“魔法士”として国に尽くすことを拒否したからだ。魔法士は、国に従い、国のために働かなくちゃいけないんだ。法律でそう決まっている。“魔力を持って生まれた国民は、その能力を公共のものとし、公益および公の秩序のためにこれを使用しなければならない”
「国に従い、国のために働く……拒否できないの？」

「できないな。“これに背反する者は、法に従って厳重に処罰される”。まあそもそも、背反する者自体が少ないんだけど」

「どうして？」

「今いる魔法使いのほとんどが、人工的に生み出された“作りもの”の魔法使いなんだ。閥族やら金持ちやらが莫大な手術費用を払って、まだ母親のお腹にいる自分の子どもを“改造”する。赤ん坊が魔法使いとして生まれる確率は7.2%。何人もの“はずれ”を生み出した末に生まれた貴重な魔法使いは、院で教育を受けて魔法士になり、軍部や政府、院の中枢と、閥族を繋ぐ重要なコネクションになる。そんなわけだから、魔法使いとして生まれた人間で、魔法士になりたくないなんて奴はまずいないし、許されない……という

か、魔法使いとして生み出された時点で、すでに魔法士になることが決まっているんだ」

「じゃあ、ジインは？」

「おれはしがなないチンピラの家生まれた、天然の魔法使いだから。軍部にも政府にも興味がないし、閥族連中に義理もない。……よく考えたら、両親が死んでからのうやむやで住民登録も消滅してるから、国民としての義務すらないな」

つまらなそうに鼻で嗤い、ジインは話を続けた。

「魔法士になれば、衣食住すべてにおいて最高級の生活が保証される。でもそのかわり国に忠誠を誓わされて、徹底的に管理されるんだ。日々の生活はもちろん、思想や嗜好、服の趣味までな。あいつらに飼われるぐらいなら、一生逃げ回るほうがマシだよ。それに……」

ジインの指先がソラの膝を示す。昼間に傷ができたところだ。半日も経っていないのに、すでにかさぶたが取れかかり、その下から真新しい皮膚が見えていた。

「おれたちが追われる理由その二が、おまえの特殊体質だ。そのめちゃくちゃな治癒能力。成長速度と身体能力も、普通の人間と比べ物にならない。おまえみたいな体質の人間は“ヒトガタ”と呼ばれて、捕まればモルモット同然の扱いを受けることになる。わかったか？おれたちが二人で平穩無事に暮らすには、この二つをうまく隠さなくちゃいけない」

「ぼくらを追っているのは、警察？」

「いや、国立魔法院だ。魔法士を管理育成総括する、公の機関……。院の長老どもは国政の実権も握っているから、そのうち警察や軍も動くだろうけど」

「そんな人たちから……逃げきれんの？」

「逃げきるさ」

ジインが不敵に笑った。

「そのために少しずつ準備してきたんだ……たとえ第一土団が来た

としても、うまく切り抜けてみせる」

シャワーの音が聞こえてきた。

なんとなく浴室のほうに目を向けて、思わずぎよっとする。半透明の壁の向こうに、黒と肌色がにじんでいた。

さっきは気がつかなかったが、浴室側では全面鏡になっていた壁が部屋側から見ると透けていて、不明瞭ではあるが浴室内が見えるようになっていた。部屋がうす暗いので、浴室はまるで発光する画面のように見える。

にじむ肌色からあわてて目を逸らす。

もしかして、さっきの背伸びやらしかめっ面やらも、透けて見えていたのだろうか。だとしたら、マヌケすぎる。

「うわあ、最っ低……」

ベッドに頭を埋める。

ガラスのにじみは大きく、人の形はわかるけれどその表情までは窺えない。そもそも作業をしていたジーンが浴室のほうに目を向けていたとは限らないのだが、マヌケなポーズを見られたかもしれないと思うと、部屋中を転がり回りたいくらいの恥ずかしさが込み上げてくる。

数分の間、うんうんと唸った後、ソラはベッドの上のリモコンを手にとった。このままでは、いやらしい映像を観ているようで落ち着かない。とりあえず部屋を明るくすれば、浴室もあまり目立たないだろう。並んだボタンを、適当に押してみる。

照明が青に変わった。

「お……」

別のボタンを押してみる。キラキラとミラーボールが回り始めた。

「おお……!!」

別のボタンを押してみる。ベッドがゆっくり回転し始めた。

「おおお!!」

おもしろい。この機能に何の意味があるのかわからないが。

ベッドにあおむけに寝そべって、天井を眺める。小さな白い光の粒が、ソラを中心にくるくると回る。まるで水の中にいるみたいだ。楽しくなってボタンを次々と押ししていく。

赤、黄、紫と照明が変わり、フラッシュが点滅したり、スポットライトが当たったり、ベッドが逆まわりになったりした。

ぱっと浴室側が明るくなる。見ると、頭を洗うジインの鮮明な後ろ姿が目飛び込んできた。

驚いて跳ね起きる。壁がない。丸見えだ。

曇りガラスが曇っていない。

あわててリモコンを見る。どのボタンを押したのか、まったくわからない。

ボタンを押していく。照明が青になる。ピンクになる。チカチカする。ベッドが回転する。

ジインがこちらを振り返る。心の中でぎゃーと悲鳴を上げ、ソラはベッドに突っ伏した。

寝たふりのまま数十秒が経過する。

恐る恐る顔を上げると、ジインはとくにあわてた様子もなく、体を洗っている。どうやらこちらには気づいていないようだ。

もしかして、浴室側は鏡のままなのだろうか。

ほう、と胸を撫で下ろす。いや、安心している場合ではない。ジインが浴室を出る前に、壁をもとに戻さなくては。

リモコンに視線を移そうとした瞬間、ソラはぎくりと動きを止めた。

白い泡が洗い流された、ジインの体。現れた無数の傷あとに、視線が釘付けになる。

斜めに裂かれたような傷、やけどらしき小さな点、すり傷、青あざ。古いものもあれば、いまだ鮮血が滲んでいるものもある。そしてそれらの多くは、服の外からは見えないところに集中していた。

臓腑の奥が熱くなる。

これは、事故やなにかで偶然できたものではない。人の手で、故

意につけられたものだ。

脇腹のひときわ大きな傷を、ジインの手のひらがそつと覆う。真新しい傷だ。ジインの視線が、鏡ごしに傷へと向けられた。表情は静かだ。

その表情と相反して、ソラの中に怒りが逆巻く。

誰だ。誰にやられた？

「魔法院……」

きつと、やつらに違いない。

今までソラは魔法院を、なにか得体の知れない生き物のように思っていた。巨大な力を持つ、国の最重要機関。国内全土へ根を伸ばしているその組織力は実体のない影のようで、つかみ所がない。ジインが一緒ならまだしも、何の力もない自分一人では立ち向かっても勝ち目はない、ひたすら逃げることしかできない。そう思っていた。

けれど今、その恐れは吹き飛んだ。

魔法院は、敵だ。

ジインを傷つけるなんて、絶対に許さない。

「ぶつとばしてやる……」

ジインのような力がなくても、この拳で、必ずぶつ飛ばしてやる。そう心に誓い、ソラは拳を握り込んだ。

シャワーの音が止まる。はつとして、ソラは我に返った。

「やばい……！」

壁をもとに戻さなくては。

手当り次第にボタンを押す。赤、青、ピンク、フラッシュ、ミラーボール、赤、スポットライト、フラッシュ。どれも違う。

ジインが服を着終える。

「わーっ！」

ジインが扉に手をかけたところで、リモコン側面にもボタンがあることに気がついた。

“主”と書かれたそのボタンを押す。ジインが浴室を出るのと同

時にすべての照明が消え、部屋が真っ暗になった。

「なに遊んでんだ？」

入口近くのスイッチで明りをつけたジインが、ソラを振り返る。照明は普通の白色になり、壁はもとの曇りガラスに変わっていた。

「うん、ちよっとね」

曖昧に笑って、ソラはそっとリモコンを置いた。

危なかった。心臓がばくばくしている。

「荷物は枕元に置いとけよ。何かあったらすぐ逃げられるように」
ホログラフの裏からチップを取り出し、ジインがベッドへ腰かける。首まで隠す黒いシャツに、暗色の細いジーンズ。その下に無数の傷が隠されているなど、立ち振る舞いからは微塵も感じられなかった。

「靴もすぐ履けるようにな」

「わかった」

「うー、疲れた。おれは寝るぞ」

さっさと毛布にくるまるジインの、当たり前のように空けられた左側におさまって、ソラはゆっくりと息を吐いた。

しんと静まり返った室内に、隣の部屋の喘ぎ声がやけに大きく響く。頼みもしないのに、まぶたの裏にホログラフの男女の姿が蘇った。それらを無理やり頭の外へ押しやって、ソラは耳まで毛布を引き上げた。

ふいに背中と背中が触れる。緊張して、ソラは身を硬くした。ジインの眠りを妨げないよう、身動きせず、呼吸も最低限に抑える。まぶたを閉じてみたが、意識は冴えて背中に向けられたままだ。

「こんなんでちゃんと眠れるだろうか」

靴をはく、上着をきる、荷物を持つ。意識を背中から遠ざけるために、何かあった時の逃げる手順を頭の中で繰り返す。

「記憶」

「えっ？」

掠れた声に、どきりとする。ジインが身じろぎした。

「記憶、早く戻るといいな」

「……うん」

揃いの鍵を握りしめる。背中がじんわりと温かい。

もしも脳みそがまだ凍っているのなら、やわらかなこの熱がきつと溶かしてくれるだろう。

ジインの寝息を聞きながら、ソラはしばらくの間、ド派手な壁紙をただぼんやりと眺めていた。

005 招かれざる

間違いないか。

ああ、確かだ。

連れは。

ガキが一人。金髪だ。顔は見えない。

当たりだな。ボスに連絡を。

部屋は。

705号室。

「……っ！」

驚いて飛び起きる。サイドテーブルに置かれたカードキーに目をやった。

“705号室”。

「ジン！」

となりに眠るジンを揺り起こす。

「ジン、起きてよ！誰か来るみたいだ」

靴を履き、上着を羽織って、荷物を手に取る。

低く呻いたきり起き上がるうとしないジンを振り返り、細い肩をもう一度揺さぶる。

「ちよつとジン……!!」

毛布を剥ぐ。横たわったままのジンを、ソラは無理やり抱き起こした。ジンの頭がかくんと傾ぐ。

「ジン……?」

いくら呼んでも、ジンは呻くだけでまぶたを開けようとしないう。体温がかなり低い。かすかに開いた口から、弱々しい吐息が漏れる。

「ジン?!」

ぐったりしたジンを抱きかかえて、ソラは部屋の中をおろおろと歩き回った。

どつしよつ。どつしたらいいんだ。

とにかく、ジインを連れて逃げなくちゃ。

「廊下、はだめだ……窓は……」

薄暗い部屋に、窓らしきものは見当たらなかった。廊下を通らずに外へ出るには、壁に設えられた非常用開閉口を使うしかない。

急いで歩みより、レバーに手をかける。

「だめだ」

胸元で掠れた声が出た。薄いまぶたが億劫そうに開かれる。

「ジイン！」

「この非常出口は、通りから丸見えなんだ」

絞り出すように、ジインが呟く。ずるずるとソラの腕から降りると、そのまま力なくしゃがみ込み、蒼白の顔を両手で覆う。

「吐きそう……」

「大丈夫？」

「大丈夫なもんか、くそ……っ！フロントの奴、二重取りしやがって」

毒づきながらよろよろとベッドへ戻り、手をかざす。

シーツの上を、見えない何かがかすめた。

「なにしたの？」

「熱を取ったんだ……で、何人？」

緩慢な、けれど無駄のない動きで靴をはいて、ジインが立ち上がる。

「“聞こえた”んだろう？何人来たんだ」

「わからない。五、六人だと思う」

「いまどの辺りにいる？」

「ええと……」

耳を澄まし、感覚の輪を広げる。

空調、水音、電子音、となりの部屋の喘ぎ声。

ありとあらゆる振動の海。その中から、これかと思うものを拾い上げる。

数階下の階段に、数人の硬い靴音。

「階段を上ってる。あとエレベーターも動いてるみたいだ」

「魔法士か？」

「そんなのわかんないよ」

「何か言ってた？」

「ええと、“間違いないか”とか、“連れは”とか、“ボスに連絡を”とか」

「ボス、ね。てことは、賞金稼ぎか。『裏懸賞金』はまだかかってないはずだけど……」

「ねえ、逃げなくていいの？」

悠長に上着を羽織るジインの横で、ソラはちらちらとドアのほうを見た。逃げるなら、一刻も早いほうがいい。

「逃げない」

驚いて、顔を見上げる。具合は悪そうだが、寝ぼけているようには見えない。

「逃げないって……じゃあ、戦うの？」

「戦わない」

「じゃあ、どうするんだよ」

思わず情けない声を上げると、だるそうな夜色の瞳が振り返った。
「かくれんぼする」

入口のドアがそつと開く。その隙間から、足音もなく数人の気配が滑り込んできた。身を隠しながら、侵入者たちはじりじりとベツドへと近づいていく。

すぐ足元を過ぎていく気配に、ソラはごくりと唾を呑んだ。

数分の静寂。ふいに男の苛立ち声が上がった。

「おい、誰もいないぞ」

急に濃厚になった気配たちが、次々と声を上げる。

「くそ、どこへ行った」

「逃げたのか？」

侵入者たちが部屋の中を引つかき回す。ベッドの下、浴室、窓の外。重い靴音があちらこちらへ移動する。

その様子を、ソラとジインは天井裏で聞いていた。クローゼットの天井に、人がぎりぎり通れるくらいの開閉口があることをジインは知っていた。そして、配管業者しか知らないというその開閉口の解錠の仕方、ジインはしっかりと把握していた。

ほこりっぱい闇の中で、じっと息を殺す。

クローゼットの扉が乱暴に開けられる。何か硬いもので開閉口が叩かれた。

「おい、ここは？」

「そんなところ、鍵がなきゃ入れない」

体のすぐ下から舌打ちが聞こえてくる。

「おい、ベッドが冷たいぞ。かなり時間が経ってる」

「ちっ、無駄骨かよ。フロントの奴、空売りしやがって」

「どこかに先越されたんじゃないのか」

「何にせよ、フロントはドボンだな」

酷薄な笑いが足元を過ぎる。荒々しい靴音を立てて、男たちは部屋を出て行った。

気配が廊下の先に消えるのを待って、ソラは安堵の息を吐いた。

“かくれんぼ”は成功だ。

「もう大丈夫みたいだよ」

肩に寄りかかっているジインの耳元に囁く。反応がない。まさかとは思いつつ顔をのぞき込むと、そのままかで、ジインは寝ていた。

ソラは大きなため息を吐いた。

呆れを通り越して感心してしまう。

こんな状況で寝るなんて、一体どういう神経をしているのだろうか。魔法の使い過ぎで疲れたと言っていたが、そのせいなのだろうか。そういえば、体温もずいぶん低い。

ジインが身を震わせる。上着を着込んで、眠るにはここは寒い。辺りを見回そうとして、ソラは天井に頭をぶつけた。

天井裏は狭くほりだらけで、体を折るか寝そべるかしなければいけなかった。けれど横には意外なほど広く、ところどころに柱を残して、何部屋も先まで見渡すことができた。

暗闇の中に、うねる配管やぶら下がった針金がぼんやりと見える。ジーンを引きずりながら、ソラは一番近いダクトへ近づいた。

「あちち！」

思わず声が出てしまい、慌てて口を塞ぐ。熱を放つダクトに寄りかかるうとしたが、これが意外と熱かったのだ。

けれど、これぐらいの熱があれば凍えずにすむだろう。

ダクトの側へ座って、ジーンを後ろから抱きかかえる。何本ものコードが床に敷かれていて、尻が痛い。ジーンの体が痛くならないように、コードを寄せて空き地を作った。

ため息まじりに、小さく笑う。

「なんだかぼく、お母さんみたいだ」

繊細かと思いきや、こんな状況でも平気で眠れる神経の持ち主で、頼りになるかと思えば、危うい場面でこんなに無防備な一面も見せる。

老人のような思慮深さと、子どものような無邪気さをあわせ持つ人。

よくしゃべり、よく笑い、けれどそれはどこか無理をしているようにもあって。

目が離せない。

幼子のようにすすすつと眠るジーンの重みを感じながら、世話を焼くのも悪くないかと、ソラは思った。

「聞こえなかった？」

ソラは驚いて、眠そうなジインの横顔を見上げた。

がたがたと床が揺れる。二人を乗せた旧式のエレベーターは、途中で分解しそうなほど乱暴な速度でぐんぐん下がっていた。天井からこのものとも知れないネジがひとつ落っこちてくる。

さりげなく手すりに掴まりながら、ソラは確認するようにもう一度訊ねた。

「ジインには、あの人たちの声が聞こえなかったの？」

昨日の夜、襲撃者たちがホテルのフロントで交わっていた会話を、ソラははっきりと覚えていた。

それだけではない。となりの部屋の甘い会話も、下の階のシャワーの音も、エントランスの自動ドアの開閉音も、ソラにははっきり聞こえていた。とくに意識をしなければ、それらは膨大な雑音として背景に溶け込んでいた。その中から特定の音を選び出すのは、景色のなかの一点に焦点を合わせるのと同じで、ソラにとっては容易いことだ。

けれど。

「おれも耳は良いほうだけど、さすがに七階も下の声は聞こえないな」

となりの部屋の声さえはっきり聞き取れないというジインに、ソラはきよとんと首を傾げた。

「どうして聞こえないの？」

「どうして……って言われてもなあ。おれが聞こえないんじゃないんですよ。おまえが聞こえすぎるんだよ。言っただろ？ 特殊な体質だつて。おまえは五感がずば抜けて良いんだ。並みの人間には聞こえない音がおまえには聞こえるし、肉眼では見えないものがおまえなら見える」

少し考えてから、ソラは再び口を開いた。

「じゃあ、ぼくにはジンよりも色んなものが聞こえてるってこと？」

「そういうこと。おれの力なんかよりもずっと便利だよ。昨日はおれも一応ドアに細工しておいたけど、おまえが早めに気づいてくれたから、奴らとやり合わずに済んだ。正直“飛空”でかなりへばつてたから、助かったよ」

ありがとな、とジインの手がくしゃりと頭を撫でた。

吸い込んだ空気で胸がふくらむ。

嬉しい。

ジンに褒められたこともそうだが、なにより自分に人より優れた力があることが嬉しかった。

そして、その力でジインを助けることができたことも。

けれど、まだまだだ。

昨夜の自分の慌てぶりを思い出して、反省する。敵の襲撃に早めに気がついて、脱出路を把握していなければ意味がない。せつかくの特殊体質も宝の持ち腐れだ。

この力をちゃんと生かすための知識と技術を身につけなくては。

耳を澄まし、目を凝らし、鼻を利かせて、危険を察知する。うまく使えば、たとえ人混みで追手が近づいてきたとしても、すぐ気づくことができるはずだ。高性能レーダーのように、怪しい奴を一人残さず察知して、かつこよくジインを助ける。そんな想像に、ソラはひとりでにやついた。

派手に軋む鉄格子の向こうで、景色が上へ上へと飛ぶように流れていく。すでに空は遠く小さくなり、だんだんと辺りが薄暗くなる。

『彩色飴街』は、がらくたを積み上げたような街だ。

もともとは『虹ノ谷』と呼ばれていた深い谷の両壁に、鉄くずでできた鈍色の街がびっしりとこびり付いている。

その昔、土地代を払えない人々が崖につき出した“空中”に家を作ったのが始まりだというこの街は、横に下にと増築を重ね、今や

横は陸島を南北に貫くほど、下は谷の底まで達していた。それは一つの街というより、もはや巨大な都市の集合体と言ったほうが近いだろう。

でたらめに増築を重ねた建物は形も大きさもバラバラで、人々はいたるところにある隙間や段差を橋や梯子で繋ぎ、その上を行き来している。つぎはぎだらけの配管が縦横無尽に這い回り、クモの巣のように張り巡らされた電線は、なけなしの空を覆い尽くさんばかりだ。

建物の合間からは時折、谷をはさんだ東側の街が見えた。下へ行くほどその姿は闇へ沈み、ぽつぽつと光る灯りが夜空に浮かぶ星のよう。

せり出した屋根の上で、子どもたちが遊んでいる。

「落つこちて死ぬ人とかいないの？」

「もちろんいる。酔っぱらいとか。降ってきた人間に当たって死ぬやつも結構多いぞ。まあ、どこだって人は死ぬけどな」

扉の横のメーターが、ぎこちない動きで“十八”を示す。

「そろそろ着くぞ。フードをちゃんとかぶれ」

よし、ここからが“高性能レーダー”の出番だ。

深く息を吸い込んで、ソラは感覚を研ぎすました。

悲鳴に似た音を立てて、エレベーターが止まる。全身からやる気をみなぎらせて一歩踏み出した途端、正面から見えないなにかが、どん、とソラにぶつかった。

うごめく人波、何千という足音、どこまでも続く屋台の列、飛び交う客引き口上、罵声、さざめき、立ちこめる煙。

そんなものがごちゃまぜになって、ソラのを感覚を埋め尽くした。

「う、わ」

女の笑い、焼ける匂い、うごめく人、罵倒、嬌声、ガチャガチャと鳴る金物、ぎらつく魚の鱗、汗の匂い、子ども泣き声、古着の山くらりと目がまわった。

「どつした？」

無意識に後じさった体を、ジインの腕が支える。

「音が、多すぎて」

言いながら耳を塞ぐ。手指で遮断しても、雑多な音の奔流は容赦なくソラの鼓膜を揺さぶり続けた。

「うるさい……うるさすぎて気持ち悪い……」

「うるさい？ 確かにここは騒々しいけど、まえばこのくらいの通りを平気で歩いてたぞ？ 外に出るのが久しぶりすぎて、感覚が過敏になってるのかもな」

少し考えてから、ジインは言った。

「おまえは目も耳も鼻もよすぎるからな。聞こえるもの、見えるものをそのまま全部受け入れてたら、キャパオーバーできつと頭が保たないと思う。必要なものだけを選んで、あとは適当に受け流したほうがいい。できるか？」

押し寄せる感覚でかき消えそうなジインの声を、ソラは必死で聞き取った。

「必要なものって……？」

「さあな。そこまではおれにもわからないよ。まあ、そのうち慣れるさ。昔は無意識でもちゃんとできてたんだ。すぐにコツを思い出すよ」

励ますように背中を軽く叩くと、ジインは喧噪の中へ歩み出した。慌ててその裾を掴み、ソラはジインの背に隠れるように路地を歩き出した。

ところどころにトタンを敷いた道は踏むたびにパコパコと音を立て、横からは無遠慮な物売りの手が伸びてくる。ただでさえ薄暗い視界を煙や人影が度々さえぎり、うまく避けても屋台の端や人の肩にぶつかったりするので、一瞬たりとも気が抜けない。人々が着込んでいるのはコンクリートに溶け込む床色の服ばかりで、色彩が少ないのが唯一の救いだが、それでももうごめく人波はソラの神経は恐ろしい勢いで消耗させた。

うるさい。本当にうるさい。目がちかちかするし、匂いもキツイ。

数分もたたないうちに、ソラはくらくらくらと目眩を覚え始めた。

強かに肩がぶつかり、舌打ちをされる。その拍子にジインを見失って、ソラはあわてて人波をかき分けた。

冷や汗が吹き出す。

ジインの服はどんな色だった？

情報の洪水は、その勢いで記憶まで曖昧にしてしまつらしい。

黒？ 濃紺？ それとも、濃い緑だったか。

暗色のフードを探す間にも、情報の洪水は容赦なくソラを押し流そうとしていた。

目眩を覚まそうと頭上を仰ぐ。生き物の内臓のような天井を見て、逆に気分が悪くなった。

頭のぐるぐるはさらに加速して、水洗トイレの渦よりも速くなっていく。

このまま渦に身を任せ、世界と一緒にまわってしまったら、楽になれるだろうか。

目眩に吊られて傾いだ体を、ぐ、と立て直す。

だめだ。しっかりしろ。

危険を察知するどころか、このままでは足手まといになってしま

う。

考えろ、ソラ。

今の自分にとって、必要な情報は。

「ソラ」

聴覚を埋め尽くす喧噪の中でも、その声だけははっきりとソラに届いた。

そして気がつく。

「あ……そうか」

今ジインを見失うわけにはいかない。

そのために必要な情報は。

姿、声、におい。ジインに関する、五感の情報。

それ以外は、いまは必要ではない。

ジンに意識を集中して、他のものを脇へ押しやる。感覚を狭くすると、見えすぎていたものが背景に溶けて逆に視界がクリアになった。

ほう、と安堵の息を吐き、額に滲んだ汗を拭う。

人を避けながら戻ってきたジンが、ソラの手を掴んだ。

「顔色が悪いぞ。大丈夫か？ 騒音がそんなにつらいなら、もっと静かな道を選べばよかったな」

心配そうなジンに、ソラは慌てて首を振った。

「人ごみに紛れた方がいいんでしょう？ 大丈夫。少しコツを掴んだみたいで、さつきより楽になったから」

「そうか。でもキツかったら早めに言えよ？ おまえの感覚は、おれにはわからないから」

ジンに手を引かれ、人混みを流れていく。

これじゃ、小さな子どもみたいだ。

けれど今はまだ、この手に頼るしかない。

かっこわるいな。

唇を噛む。ささやかな自信と意気込みは見事に砕けちり、その欠片は胸の奥に突き刺さって小さな痛みを生んだ。

今の自分は、本当にかっこわるい。

肩を並べて歩くことができないほどの雑踏の中で、体を斜めにしながら、ソラはひんやりとした指先を離さないよう、ほんの少しの悔しさも込めてしっかりと握り返した。

「夜になれば、灯りも人も増えてもつとにぎやかになる。この通りはこれでも小さいほうなんだ。もっと大きい路地もたくさんある。

『彩色飴街』はこういう市場とか住宅地とか、たくさん街が集まってできてるんだ。北から南まで三十七区、地上は四階から、地下は四十九層まで。西と東を一緒にして地上に並べたら、国土の半分は埋まる」

「いつもこんなに薄暗いの？」

「空が遠いからな。下のほうはもつと暗いぞ」

突然、すぐ近くから怒鳴り声が上がった。掴み合った二人の男が、通行人を巻き込んで通路に倒れ込む。途端に飛び交う、野次と罵声。人波はそこだけきれいに避けて流れ、殴り合いはすぐに喧噪の一部と化した。

ジンがその横を何事もないかのように行き過ぎたので、ソラもそれにならう。過ぎる時にちらりと盗み見ると、若いほうの男が馬乗りになって、もう一人の男を殴りつけていた。

殴られている男と、一瞬だが目が合った。

黄ばんだ目が、ソラを捕らえる。

助けてくれ。

唇がそう動いたような気がして、ソラは慌てて目を逸らした。

人波に流されるまま遠ざかり、男の気配は背後の喧噪に溶けて消えてしまった。安堵するとともに、胸がちくりと痛む。

見捨ててしまった。

名も知らない他人ではあるけれど、“見捨てた”という行為が、心の片隅に小さな影を落とす。

けれど、人に救いの手を差し伸べられるほど余裕のある状況でないことも、ソラにはわかつていた。

自分たちは逃亡中なのだ。

どうか彼が無事であるようにと心の中で祈ることしか、今のソラにはできなかった。

角を曲がり細い横道を抜けて、狭い鉄の階段を下りる。いくつかの壁を隔てただけであれだけうるさかった喧噪は遠く薄れ、その静けさにソラはほっと息を吐いた。

人影まばらな道には店の裏口やゴミ置き場、住居らしき入口が点在しており、人々の生活が窺えた。油とすすで真っ黒に汚れた路地は人よりもネズミが住みやすそうで、実際ネズミの親子が二度も前を横切った。列車のようにしっぽで繋がったネズミの母子を見て、繋いだままの手がふいに恥ずかしくなる。

これじゃあまるで親子か、幼い兄弟みたいだ。

自分から手放すこともできず何となく気まずいまま歩いていたが、梯子を渡したただけの小さな橋を通る時にそれは自然と離れた。ジインの手がするりと離れる瞬間、かすかな不安とともに何かを思い出しかけた気がしたけれど、結局それが何かはわからなかった。

「落っこちるなよ」

がしゃがしゃと揺れる橋をジインが軽々と渡っていく。持ち前のバランス感覚のおかげか、ソラも眼下の透ける頼りない橋を難なく渡ることができた。

橋は長いものも短いものもあり、なかには急な傾斜になっているものや、途中で別の橋へ移れるよう橋と橋にさらに橋がかかっているものもあった。いたるところにある建物の狭間は上か下に何階分も吹き抜けていて、それ自体が小さな谷のようだ。

見上げるとはためく洗濯物の合間で、遠い空がほんのわずかだが白く光っていた。

……。

「え？」

耳元で音がして、ソラは思わず立ち止まった。
きよろきよろと辺りを見回してみても、首を傾げる。

……。

また聞こえた。とてもきれいな音だ。
澄みきった、美しい響き。

まるで、ふわりと心が浮き上がるような。

「ジイン、聞こえる？」

「なにが？」

「この音。なんか鈴みたいな」

「鈴？ ……聞こえないけど。またどこか遠くの音を拾ったんじゃないか？」

「うつん、すぐ近くだよ……」

音は頭のすぐ上から降ってくるようだった。

始めは一つだった音が、次第に増え、重なりあっていく。美しい旋律。

うつとりと聞き入るうちに、自然と笑みがこぼれた。

細胞が震えて、体が軽くなっていく。

魂を持っていかれそうだ。

ああ、なんて心地いいんだろう。

ジインはゴーグルを外して頭上を仰ぎしばらく耳を澄ましていたが、やがてあきらめて首を振った。

「やっぱり、おれには聞こえないな」

言いながら前へ向き直ったジインが、戸口からふらりと出てきた男と強かにぶつかった。

「つてえな、どこ見てやがる！」

野太い悪態が上がる。避ける間もなく突き飛ばされて壁に激突したジインが、脇腹を押さえて顔を歪ませた。

脇腹の傷 ……！

「なにすんだよ！」

考えるより先に駆け出して、ソラは男を思いきり突き飛ばした。

「ぐえっ！」

大柄な男はまるで空き缶のように吹っ飛んで宙を舞い、路地を転がって何mも先のゴミ捨て場に突っ込んだ。

手をつき出したままの状態でソラは啞然とした。

そこまで力を込めたつもりはない。ちよつと押しただけなのに。人間って、こんなによく飛ぶものだったろうか？

「おい、何だ今の音は」

戸口から顔を出した数人の男が、ゴミ捨て場とジインたちを交互に見た。

「面倒な……」

ジインが低く舌打ちする。

「なんだア、お前ら」

取り囲む男たちを間近で仰いで、ソラは思わず咽せた。鼻を利かせるまでもない、ひどい酒の匂いだ。

ゴミ捨て場の男は完全に伸びているらしく、仲間に足で小突かれてもびくりともしなかった。

「おいおい、大丈夫かよ。まさかこんなチビにやられたんじゃねえだろうな」

「あららア、ガキのくせにいい服着てんなあ。どこぞの坊か？」

「羽振りがイイなら、俺らにもお小遣いチョーダイ？」

ぎゃはは、と酒臭い笑いが辺りに響く。

伸びている奴を除いて、男は四人。皆明らかに酔ってはいるけれど、足がふらつくほどではない。どの顔もちょうどいい暇つぶしを見つけたとばかりにニヤついており、隙を見て逃げるのは難しそうだ。

どうしよう。ジインはどうするつもりだろうか。

ソラはちらりとジインを窺った。

壁に寄りかかったまま、ジインは無表情で男たちを見上げていた。何を考えているのか、その横顔からはなにも窺えない。

『ハコ』の時のように魔法を使うのだろうか。それとも拳で戦うのだろうか。魔法使用であることは極力隠さなければならぬ。だとしたら、やはり素手で戦うしかない。

ほっそりした体つきからして、ジインはお世辞にも強そうには見えなかった。

ぐつと拳を握る。

いざという時は、自分がなんとかしなければ……。

「おい、聞いてンのか……」

ふいにジインが動いた。何の前触れもなく男の胸ぐらを掴むと、そのまま壁に顔面を叩きつけた。

「ぎゃー！」

潰れた悲鳴を上げてよろけた男の腹にすかさず拳を叩き込み、前のめりになった肩を蹴り飛ばす。後ろにいた一人を巻き添えにして男は吹っ飛び、路地を無様に転がった。

「え……」

流れるようなその動き。一瞬のできごとだった。

突然のことにその場にいた人間はソラも含めてみな凍りつき、身動きできなくなった。

人を殴れば逆に折れてしまいそうなほど細く白い手首をさすりながら、ジインがゆっくりとした足取りで倒れた男に近づいていく。冷たいその瞳は周りの人間を完全に無視していたけれど、その余裕がそのままジインの力量を表しているようで。

誰一人身動きがとれないまま、誰かが生唾を飲む。

今ジインの視界に入ることは、自殺行為のように思えた。

顔面から血を流す男の肩を踏みつけると、ジインは男のベルトにぶら下がる小振りのナイフを引き抜いた。

「生きたいか？」

切れ味を確かめるように指先で刃をなぞりながら、世間話をするような軽い調子でジインは言った。

浅い呼吸を繰り返す男の目玉が、きよろきよろと所在なく動く。

その鼻先にナイフを突きつけて、ジインは再び訊ねた。

「もう一度だけ聞く。生きたいか？」

「う、うう……」

血と涙でぐちゃぐちゃの顔が、小刻みにうなづいた。

「そうか」

逆手に持ったナイフが振り上げられる。男の目が恐怖に見開き、ソラは思わず叫んでいた。

「ジイン……」

「ひいっ」

バスン、と鈍い音を立てて、トタンの床にナイフが突き刺さる。

「……この先も生きていたいならさ、おっさん」

顔すれすれにナイフを残したまま、ジインは悠々と立ち上がった。

「おれのまえにちよろちよろ出てくるな。目障りだ」

双眸に侮蔑をにじませて冷たく言い放つと、何事もなかったようにジインは歩き出した。

すっかり酔いのさめた男たちは、ジインを避けるように壁伝いに移動し、倒れたままの男を戸口へと引きずっていった。

「おい、大丈夫か」

「うう、いてえ……いてえよ……」

「くそ、狂ってやがる……」

「しっ！ 止めとけ、殺されるぞ」

情けないすすり泣きの合間に、怯えたささやき声。

「おいソラ！」

弾かれたように顔を上げる。ジインが睨んでいた。

「何してんだ、行くぞー！」

「う、うん」

その場に立ち尽くしていたソラは、慌ててその背中を追った。

視界の端に、ちらりと男が映る。

「ちくしょう……何だっつてんだ……ちくしょうめ」

指の間から漏れるか細い呟きに、ちくりと胸が痛くなる。

ぎゅっと唇を噛んで、その声から逃げるようにソラは足を速めた。

「ジイン、ちよっと……ジインってば！」

角を曲がり、男のうめき声が届かなくなったところで、ソラは前を行くジインの袖を引っばった。

「うん？」

きよとんとした顔で振り返った少年に、ためらいがちに言う。

「ちよっとやりすぎじゃない？」

「なにが？」

「今の人たち。なにもあそこまでしなくても……」

ああ、とジインは何日も前のことを思い出したような顔で首を傾げた。

「なんかしつこそうだったからさ。追い回されたりしたら目立つし、まくのも面倒だろ？」

「でも、たくさん血が出たよ」

ジインが笑った。さっきまで冷徹な目で血だらけの男を見下ろしていた顔が、今は笑っている。

「あんなの、ほとんどが鼻血だよ。大したケガじゃない。顔面血だらけてインパクトがあるだろ？ だから脅しが利く。手っ取り早くビビらせるには、顔を狙うのが一番なんだ」

「でも……」

「なんだよ、酔っぱらいの肩を持つのか？」

「べつにそういうわけじゃないよ。けど……」

思わず不満げな言い方になる。短くため息をつくとき、ジインはくると向き直って両手を腰に当てた。

「あんな。言っておくけど、あのくらいで済むなんて奴らは運がいほうだぞ？ 相手の力量も量れずにケンカを吹っかけるなんて、この街じゃ“どうぞ殺して下さい”って言ってるようなもんだ。普通なら仲間共々殺されて、今頃その辺に転がってる。鼻血ぐらいで済んで、逆に感謝されてもいいくらいだ」

「でも……でも……」

「なんだよ、もう。言いたいことがあるならばつきり言えよ」

苛立たしげなジインの顔をまっすぐ見れないまま、ソラはもごもごと言った。

「なんていうか、ちょっと……あんなの、ジインらしくないっていうか」

「らしくない？ 記憶がないのに、おれが“らしい”か“らしくない”かなんてどうしてわかるんだ」

記憶がないのに。

刺のあるその一言が、ちくりと胸に突き刺さる。

「そんなの、わかんないよ。けど、でも」

「おれが“らしい”か“らしくない”かなんて関係ない。“やられる前にやれ”、それがこの街の鉄則だ。やらなきゃやられる。この街はそういう街なんだよ。それとも、何の手出しもせずにおれが奴らにボコられたほうがよかった？」

「そんなわけないだろ!!」

大声が路地に響く。ジインの目がぐるりと丸くなるのを見て、ソラは頬が熱くなるのを感じた。

「ご、ごめん。あの……そうじゃなくて、なんていうか……ジインがああいうことするの、見たくないっていうか……」

「見たくない？」

ジインの片眉が不機嫌そうに上がる。

「見たくないなら、見なきゃいいだろ」

「見えなければいいとか、そういうわけじゃなくて……」

必死で言葉を探しながら、もどかしさにソラは唇をかんだ。

自分でも何が言いたいのかわからない。

何かとても大切な感情が胸の奥底からわき上がっているのに、それが胸の入り口あたりでつかえて、頭で理解できない。

「いったい自分は、ジインに何を伝えたいのだろう。」

ため息をつくとき、ジインはくるりときびすを返した。

「いいよ、もう。血が出てびっくりしたんだろ？ 昔はおれが止める間もなく真っ先に殴りかかってたくせにな」

昔は、の一言に、つきんと胸が痛んだ。

その背中が、薄やみの中へ歩き出す。

同じベッドで眠ったジインの背中が、いまは少し遠い。

薄暗い角を曲がり、不揃いな階段を過ぎて、ひしゃげた梯子を降りたさらに先。

点々と続く電球は頼りない光で薄汚れた壁と床を照らし出し、それはまるで冥府の底へと誘う鬼火のようだ。闇を進むほどに人の気配は希薄になり、時折壁を隔てたどこか遠くを人の声が行き過ぎるけれど、いまこの通路に響くのは二人分の靴音だけだ。

安っぽい光の下を通過する度に、ジインの背中が闇の中に浮かび上がっては、また闇に吸い込まれていく。

気まずい空気を引きずったまま、ソラはただ黙ってジインの後ろを歩いていた。

怒ったかな。怒ったよね。

あれから一度も振り返らないコートの背中を見て、思う。

“見たくない”と言ったのは失敗だった。

そんなことを言われて、怒らない人などいない。

でも、嫌だった。ジインらしくない、というのが、たとえ自分の勘違いだったとしても。

暗闇から救い出してくれたジイン。優しく頭を撫でてくれたジイン。

その手が誰かを傷つけるところなんて、見たくない。

「ごめん」

「え？」

前に行く背中を見つめる。

わずかに歩を緩めたジインが、足音でかき消えそうなほどの声でぼそぼそと呟いた。

「さつきは……ちょっと言い過ぎた。記憶をなくしたのはおまえのせいじゃないのに」

「ごめん、と小さく謝る背中に、ソラは安堵と嬉しさで胸がいつぱ

いになった。

よかった。そんなに怒ってなかったみたいだ。

自分も言い過ぎたことを謝ろうと口を開きかけた瞬間、ジインがぼんやりと言った。

「やり過ぎ……だったのかなあ。何だか最近、そのへんの加減がよくわからないんだ」

独り言のように言って、ジインが闇に手をかざす。

白い手が、通り過ぎる照明の下で淡く輝いては闇に消える。

「もしかしたら、痛みが鈍くなったのかもしれない。相手の痛みにも……自分の痛みにも。

そうしないと……」

静かな声が闇に沈む。

相手の痛みにも自分の痛みにも鈍くならなければいけない状況とは、いつたいどういうものだったのだろう。

白い肌走る赤い傷跡が、脳裏をよぎる。

歩を速めて距離を詰めると、ソラはその顔を覗き込むようにしてジインを見上げた。

「ぼくも言い過ぎた。ごめんね」

袖を引いて、どこか深くへ沈みかけたジインの意識を引き戻した。こちらを向いた夜色の瞳が、ふわりと微笑む。

「じゃあ、仲直り」

差し出された手を握る。

ほっそりとした指。透き通るような肌。

こんなにきれいな手を、血で汚したくない。

ジインにやらせるくらいなら、オレが……。

「え……？」

なんだ、今の。

いま、なんて思った？

“ジインにやらせるくらいなら”。

“オレが”……？

「ほら、置いていくぞ」

「えっ？ あ、うん」

いつの間にか歩き出していたジインを慌てて追う。

今の感情は何だろう。

さつきから胸につかえていたものに、とても近い感情だ。

心の奥底から自然とわき上がったその思いは、自分にとつてとても“正しい”ように思えた。

通路が途切れ、黄色みがかった光が二人を包む。

少し開けた場所に出た。いくつかの通路が出会う合流地点。薄暗い部屋のような空間だ。白っぽいコンクリートの壁に、目立たない色の扉が三つ並んでいた。扉の前には、屈強な二人の男。

向けられた視線の鋭さに、ソラは思わず身を縮めた。二人ともジインの太ももくらいありそうな腕をしている。ぶん殴られたらただでは済まないだろう。男たちの腰には拳銃と大型のナイフもぶら下がっていて、どう見ても穏やかでない雰囲気だ。

用心棒、というやつだろうか。

「求紅に用がある」

ジインが言い終わらないうちに、男たちは目配せし扉を数回叩いた。

どうやらここが目的地らしい。

ほっと息を吐いたのもつかの間、扉の向こうから現れたのは二人の男よりさらに大柄な壁のような男だった。

お世辞にも友好的とは言えない双眸が二人を見下ろす。珈琲色の肌は暗がりには溶け込み、まるで闇そのものが立ちはだかっているようだ。

壁男の後ろで鉄の扉が再び固く閉ざされる。その音で、ソラは自分たちが歓迎されていないことを悟った。

「求紅は不在だ。お引き取り願おう」

低く響く遠雷のような声で、男は短くそう言った。

ジインが苦笑する。

「は……門前払いとは冷たいな。泥熊、おまえいつからそんな情なしになったんだ？」

ジインの軽口にも、泥熊は眉一つ動かさない。重苦しい沈黙が流れる。

先にしびれを切らしたジインが、苛立たしげに舌打ちした。

「おい、嘘ならもつとマシな嘘を吐け。居るんだろ？　すぐに済ませるから、さっさと取り次いでくれ」

「不在だと言っているだろう」

「なあ、ふざけるなよ」

ジインの声色が変わる。

凄んでも荒げてもない静かな声。唇には薄く笑みさえ浮かべているというのに、その声は凍てついた刃のような剣呑さを帯びていた。

体の横にだらりと垂らされた腕には、見えない凶器が握られているような気さえする。

血だらけの男の顔が脳裏をよぎり、ソラはハラハラした。

「おまえらと遊んでいられるほど、こっちはヒマじゃないんだ……そこをどけ」

ジインの腕がゆらりと動く。男たちがそれぞれ身構えた。男の手が腰の銃に伸びるのを見て、ソラは慌ててジインの腕に飛びついた。銃と魔法。どちらが強いかわからないが、このままでは血を見ることは避けられない。

「ジイン、ちよつと待っ……!!」

「あつれえ、ジインじゃないか」

場違いにのんびりとした声が通路に反響した。振り返ると、ソラと同じ年頃の少年が紙袋を抱えてこちらに歩んでくる。

「鳶広」

「生きてたんだ。もうとつくに捕まったかと思った」

小動物に似た愛嬌のある顔がにやりと笑う。その背後から小さな影が飛び出し、止める間もなくジインの足に飛びついた。

「ジン！」

「ああ、二葉か」

相好を崩し、ジンが女の子を抱き上げた。小さな腕をジンの首にまわして、女の子がきゃらきゃらと明るい笑い声を立てる。

その場の空気が一気に和らぎ、ソラはほっと胸を撫で下ろした。

鳶広が顔をしかめる。

「なんだよ二葉。オレに抱っこされると嫌がるくせに」

「へえ、そうなのか。男を見る目があるな、二葉は」

「おまえがタラシなだけだろ。気をつけるよ二葉、そいつは女だけじゃなく、オトコモババアもチビッコも見境なくなったらし込むんだぞ」

「なんだよそれ、人間きが悪いな」

「は！ 本当のことだろ」

眉をひそめるジンを鼻で嗤ってから、鳶広はソラに目を向けた。

「で、こいつが例の“ヒトガタ”？」

「な、なんだよ」

無遠慮な視線が注がれる。なんだかすごく嫌な感じだ。

鳶広はゆっくりとソラの背後にまわると、わざとらしく、ふーんと呟いた。

「なるほどね。見た目はやっぱ、普通の人間と変わらないんだ」

普通の人間と変わらない？

「それって、どういう……」

「あつ、ママ！」

二葉が嬉しそうな声を上げる。視線の先に目をやると、ちょうど褐色の肌の少女がこちらへやってくるところだった。

母親にしては随分と若い、ジンとさして変わらない年頃の少女だ。

ジンに気がついた少女が息を呑み、足を止める。驚きの表情はすぐに喜びと安堵に変わり、少女は大きな紙袋を抱えたまま、軽い靴音を響かせて駆け寄ってきた。

「ジン！」

二葉を降ろしたジインが少女を荷物ごと抱きとめる。

「久しぶりだな、朱世」

「久しぶりだな、じゃないわ！ どれだけ心配したと思ってるの？ ここしばらく音沙汰もなくて、いきなり昨日の騒ぎだもの……ああ、でもよかった。無事だったのね」

大きな二重の瞳が、まぶしそうに何度もまたたく。
好きなんだな、とソラは思った。

誰に言われなくてもわかる。この人は、ジインのことが好きなんだ。

殺伐としたこの街で日だまりのように輝くその横顔は、なんだかとても尊いもののように見えた。

この二人は、どういう関係なのだろう。

「ソラくんも無事に救い出せたのね」

「え？」

ふわりと空気が動き、しなやかな腕が体を包む。

何の前触れもなく抱きすくめられて、ソラは硬直した。

頬をくすぐる髪感触。石けんのいい香りがした。厚く服を重ねても伝わる胸の膨らみにばくばくと心臓が暴れ、耳が熱くなる。

朱世の体が離れて、止めていた息をソラはようやく吐き出した。

「全然変わってないわ……二年前のままなのね」

感心しているようにも、不審がつているようにも聞こえる声音で呟いた朱世の体が、背後へぐいつと引っぱられた。

「“ヒトガタ”に近づくな」

ソラから朱世を庇うように泥熊が立ちはだかる。今にもぎりぎりと言が聞こえてきそうなほど睨みつけられて、ソラは思わず身をすくませた。

相手を射殺さんばかりの眼光だ。それは単に睨みつけるといふより、なにか許容しがたいものを見るような目で、そこには警戒心や敵意だけではない他の“何か”が見え隠れしていた。

憎しみ……嫌悪？ いや、違う。

つい最近どこかで見た気もするけど、思い出せない。

けれど、そこに込められているものが何であれ、そんな目で睨まれるようなことをした覚えはなかった。

そもそも自分の場合、記憶自体がないのだけけれど。

「ヒトガタ”を店に入れることはできない。厄介な手配者もだ。わかったら、さっさとここを立ち去れ」

ジインがさりげなくソラの前に立つ。大の男でも震え上がるような泥熊の視線を、ジインは虫でも払うようにうんざりと一瞥した。

「用が済めば立ち去るさ。だから早く求紅に会わせるよ」

「ちよつと、泥熊」

眉をひそめて、朱世が泥熊を見上げた。

「ジインを通さないのは求紅の指示？」

背丈も歳もずつと下の少女に睨まれて、泥熊がもごりと口を動かす。鼻の頭にしわがより、仏頂面がさらに仏頂面になった。

「違うのね……うん、どっちでもいいわ。ジインは私の客でもあるのよ。求紅のところがだめなら、私の作業場に通してちょうだい」

「しかし……」

「ジインは私の家族みたいなものよ。少しでもいいから力になりたいの。……お願い、泥熊」

「おねがい、どろくま！」

朱世を真似て二葉が泥熊をのぞき込む。よく似た二対の瞳に見上げられ、泥熊は渋面のまま押し黙った。

これ以上ないほどに顔をしかめたまま、泥熊が渋々顎をしゃくる。それを合図に、用心棒の男が鉄の扉を開いた。

「ありがとう」

泥熊を見上げてにつこり微笑んでから、朱世はソラたちを振り返った。

「さ、入って。昨日仕上げたばかりの新作があるのよ」

「へえ、そいつは楽しみだな」

ちらりと泥熊を見上げたジインが、すれ違いざまにくすりと笑っ

た。

途端にまなじりをつり上げた泥熊の膨れ上がった二の腕あたりを、鳶広が慰めるようにぼんぼんと叩く。

「しかたねえよ。求紅だって朱世には勝てねえんだから」

低く唸る泥熊の脇をすり抜けて、二葉がジインの腕にぶら下がった。

「ジイン、ジイン、ふたばね、ちょうちよさん見たい！」

「ああ、いいよ。あとで出してあげようね」

「わあい！」

小さな足を揃えて、二葉がぴよんぴよんと飛び跳ねる。

まるで仲のよい親子のようなその様子に、ソラはなんだか居心地が悪くなった。

胸に疼くかすかな疎外感。ソラは慌てて首を振った。

あんな小さな子にやきもちを妬くなんて、どうかしている。

ちらちらとこちらを振り返る好奇心いっぱい視線には気づかないフリをして、そんな自分の子どもっぽさにソラは嫌気がした。

密かにため息を吐きながらジインの後について扉をくぐるうとしたその時、二葉とは別の視線を感じてソラは思わず振り返った。

用心棒たちが、あの突き刺すような鋭い目でこちらを見ている。

一瞬重なった視線は、あからさまな仕草ですぐに逸らされた。

けれどその瞬間、ソラはそこに見え隠れしているものが何かをはつきりと思い出した。

それは市場で殴られていた男や、血だらけの男の目にあつたものと同じ。

まぎれもない“恐怖”だ。

泥熊と屈強な用心棒たち。彼らは怯えている。

魔法士のジインではなく、このぼくに。

「どうして……」

いったいどうして？

ぼくが“ヒトガタ”だから？

“ヒトガタ”は、そんなに恐ろしいものなのだろうか。

“見た目はやっぱ、普通の人間と変わらないんだ”

何かを含んだ鳶広の言葉。

それはいつたい、どういう意味。

「ソラ？ どうかしたのか？」

「……なんでもない」

胸の中にわだかまるものから目を逸らすように、ソラは冷たい視線に背を向けた。

まさか本当に不死身だなんて

普通の人間と比べ物にならない

捕まればモルモット同然の扱いを

あの施設から脱出して丸一日。

時折わき上がる小さな疑惑は胸の隅に滞り、次第に大きくなり始めていた。

その答えとなる真実を、本当は知っているような気がしたけれど。

どうしてだろう。

今はまだ、それを思い出したくなかった。

“何でもする”

どこまでも澄みきった夜色の双眸。

一片の穢れもない一途さは狂気と見紛うほどだ。

すべてを削ぎ落とした眼差しはまっすぐであるが故に脆く、側面からちよつと力を加えれば一気に壊れてしまいそう。

この手で叩き壊したなら、さぞかし胸がすくことだろう。

打ち砕き、踏みにじり、二度と元に戻らないほど粉々に破壊する。

その快感を思つて、桐生は唇を笑みに歪ませた。

薄暗い部屋で発光するホログラフの、形よい唇が再び動く。

“あいつのためなら、何でもする。だから……”

口元の笑みが大きくなる。にやにやと笑いながら、桐生は手元の端末を操作した。映像を少し戻して、再生する。

“あいつのためなら、何でもする”

再び戻して、再生する。

“のためなら、何でもする”

戻して、再生。

“、何でもする”

“何でもする”

“何でも”

何デモスルワ。

とうに離れたはずの女の顔が脳裏をよぎる。

もう顔立ちも思い出せないけれど、病んでなお赤い唇だけが記憶に鮮やかだ。

唇はいつも、そこだけが別人のもののように妖しく微笑んでいた。

何デモスルワ。
才母サン、アナタノタメナラ。
何ダツテ、デキルノヨ。

「嘘つきめ」

ばき、と音を立てて、端末の液晶がひび割れる。

筋の収縮だけの笑みはいつのまにか消え去っていた。

その双眸に満ちているのは、深く冷たい憎悪と侮蔑。

何でもする、なんて。

「嘘を、吐くなよ」

卓上に設えられた電子パネルに手を伸ばす。画面が展開し、繋がった回線から女の声が聞こえてきた。

「桐生だ。木刃大佐に取り次ぎを……そう、捕縛部隊の出動要請だ」

「ソラは……あいつは無事なのか？」

再び動き出した映像から目を離さないまま、桐生は話した。

「……沢木？ああ、彼らは彼らで勝手にやるだろう。所詮まだ院生だ、何も期待はしていないさ。……いや、長老会がうるさくてね。

まあ、うまくすれば足止めぐらいにはなるかもしれない。それで予定より早い、こちらはこちらで本格的に動くことに……そう。もし彼に“適正”があれば“計画”は大きく進展する。成功する可能性は低い、試してみる価値はあるだろう。魔法士は貴重だのなんだのと渋っていた長老会も、狂った背反者なら文句は言わないはずだ。……いや、その必要はない。彼が投降する可能性はまったくのゼロだ。逆に捕縛には骨が折れるだろうね。彼の動きを止めるなら、むしろ……」

「何でもする。あいつのためなら、何でもする。だから……」

ホログラフが祈るように声を震わせる。

幼い路音の顔が苦しげに歪んだ。

「だから、ソラを殺さないで」

桐生が残忍な笑みを浮かべた。

「……“ヒトガタ”の殺処分を、最優先に」

「来たわね、厄介なのが」

そう言つて、求紅は煙管の煙を長々と吐き出した。洋燈の灯りで橙色に染まつた煙が、頭の上をゆっくりと流れていく。

用心棒に守られた鉄の扉のさらに奥。わざと迷わせるように作られているとしか思えない複雑な通路の先に、その店はあつた。

古ぼけた木製の扉に備え付けられた小さな灯りが、刻印された文字を金色に光らせる。

“ PUB 紅 ”

軋む扉を押し開けると、そこは入口から奥のカウンターまで十歩もない小さな酒場だつた。煙草の匂いが染みついた木製の床と壁。

吊るされた洋燈は落ち着いた色の光を灯し、テーブルも椅子も黒光りするほどに使い込まれている。薄暗い店内に客の姿はなく、しゅんしゅんと沸くポットと古びた時計の秒針だけが、やけに大きく耳に響いた。

二十人も入れれば満員になるであろう狭さや、ここまでの複雑な道のりからして、ここが普通の酒場として繁盛しているとは到底思えない。ここを訪れる“客”はおそらく、酒を楽しむ以外の目的を持つ人間なのだろう。

自分や、ジインのように。

「悪かつたな、“厄介なの”で」

足の長い椅子にどかりと腰かけると、ジインは求紅を軽く睨んだ。「あんたの番犬、ちゃんと躡けておけよ。危うく噛みつかれるところだつた」

「あら、懸命な判断じゃない。厄介ごとを追ひ払うのがあのコたちの仕事だもの。まっ、アンタは上客だし話くらいは聞いてあげるけど、正直なところ」

「求紅が頼杖をつく。」

「アンタみたいなの超ド級の厄介ごと、ハウキでぶっ叩いて今すぐ裏口から追い出したいわ」

そう言っつて、求紅は真っ赤な唇でにっこりと笑った。

「は……ひどい言い草だな」

「当たり前でしょ。院の背反者なんて冗談じゃないわ、ホントに」大げさにため息を吐いた求紅の目が、ちらりとソラを見た。

「で、この子がウワサの弟くん？」

「そう。ソラっつていうんだ」

ソラはぺこりと頭を下げ、ジインのとなりへ座った。

「ふうん、意外と可愛いじゃない。ちゃんとしゃべれるの？」

「なに言っつてんだ当たり前だろ」

途端にジインの眼光が鋭くなる。求紅は肩をすくめた。

「そんなに怒らないでよ。“ヒトガタ”と話すのなんて初めてなんだもの」

言いながら、求紅はびっしりとボトルが並んだ棚からカップを取り出した。しんとした店内にこぼこぼと湯を注ぐ音が響き、ほどなくして二人の前に熱いコーヒーが出された。

「ありがとうございます」

湯気の立つカップを引き寄せながら、ソラは求紅をちらちらと盗み見た。

なんというか、すごい迫力だ。

てらてらと光る薄手のドレスは厚い胸板ではち切れそうだし、シヨールを羽織った肩はがっしりとしていて、ジインの二倍くらい骨が太そうだ。ネックレスと揃いの大きなイヤリングで耳は半分隠れ、頬のあたりでカールしているショートボブの髪はこともあるうかど派手なチェリーレッド。

真っ赤な口紅で縁取られた口から発せられる声の太さは、間違いなく男性のもので。

うつかり目が合っつて、ソラは慌てて手元のカップに視線を落とし、黒褐色の表面から白い湯気がひっきりなしに立ち上っつては、ゆ

らゆらとのたうつて消えていく。

「で、どうするの」

「玖倉へ渡りたい。できるだけ早くに」

「この状況で？アンタのことはもうけっこう広まってるわよ」

「時間が経てば国外にも手配がまわりかねない。裏懸賞金は？」

「まだただけど時間の問題ね。港はもう表も裏も見張られてる」

「あんななら裏の裏まで手が回るだろう？」

橙色の灯りに求紅が煙を吹きかける。

「裏の裏、ね……それならアタシより“魔女”に頼んだほうがいいんじゃない？」

……魔女？

ソラの頭の中で三角帽子をかぶった鷲鼻の老女がキヒヒと笑う。

魔女。女の人の魔法使いのことだろうか。どこか揶揄めいたその響きは、ジインの“魔法使い”とは少しニュアンスが違うようだ。

「彼女の力を借りれば、出国なんてカンタンでしょ」

ジインの横顔がわずかに曇った。

「……もうあの人と関わるつもりはない」

「散々貢がせといて今さらなに言ってるのよ」

「貢がせたわけじゃない、ちゃんとした仕事の報酬だ」

「何だつていいわ。とにかく彼女の力は今や『裏』の二大勢力を凌ぐほど強大よ。それを利用しない手はないでしょう」

「利用なんて、あの人がさせてくれると思うか？」

眉をひそめて、ジインは首を振った。

「無理だよ。たとえ土下座して助けを求めたとしても、素直に手を貸してくれるような人じゃないんだ。下手をすれば逆に状況が悪化しかねない。危険すぎる……あの人の気まぐれに命は預けられない」

「でも、アンタは彼女のお気に入りなんでしょ？」

「……お気に入りなんて他にいくらでもいる」

ぼそぼそとジインが呟く。求紅はなおも食い下がった。

「アンタは特別でしょう。アンタに会うためにわざわざ西までお出

かけになるくらいだもの。“お人形”の中でもアンタが一番……”
「求紅！」

鋭い声が求紅の言葉を遮った。

手荒に置かれたカップが、かしゅんと音を立てる。

「やめてくれ！そんな話をしに来たんじゃない……蓮乃さんに頼れるのならとつくにそうしてる。それができないから求紅、こうしてあなたに頼んでいるんだろう？……何度も言わせないでくれ」

「……あっそ。せつかく観月屋の総取締役と親しいっていうのに、もつたいないことね」

ふん、と鼻息を吐いて求紅は不服そうに押し黙り、ジンもどこか不機嫌に視線を落とした。

こちこちと時計の音だけが流れていく。

求紅が協力を渋っているのは明らかだった。とはいえ、いま自分にできることは何もない。役立たずなのは歯がゆいが、この場はただジンに任せるしかなかった。

重苦しい空気の中、ソラはコーヒーをひとくち飲んだ。

「にが……っ！」

口が“イ”の形に歪む。ものすごく苦い。コーヒー牛乳と全然違う。

これがコーヒー？

もつと甘いものだとばかり思っていたのに。なんだか騙された気分だ。

「……それが本物の味よ、ぼうや」

あわてて口を塞ぐ。うっかり口走ってしまった。これで気を悪くされたら交渉が決裂しかねない。どうしよう。

「いや、あの、おいしいです。とつても……苦いけど」

ごまかすように、ソラはふたくちみくちと立て続けにコーヒーを飲んだ。やっぱり苦い。が、不味いのは違う気がする。この苦さを美味しいと思えるのが大人なのだろうか……それでも苦いものは苦い。

ジインは苦くないのだろうか。

ちらりとなりを見るとき、ちょうどジインと目が合った。その横顔がくすりと笑う。それだけでジインの雰囲気はがらりと変わり、別人のように柔らかくなった。

「へえ」

求紅が目を細める。

「アンタがちゃんと笑うの、初めて見たわ」

「……は？そんなこと、ないだろ」

「あるわよ。アンタが嬉しかったり楽しかったりして笑ってるところ、見たことないもの。朱世や二葉にだって寂しそうな笑顔しか見せなかつたくせに……そんなふうに笑うのね」

「なに、惚れちゃった？」

「まさか。……アンタこそ惚れてんじゃないの？」

「誰に？」

「そのぼつやに」

「……」

「うん、実はそうなんだ」

一度は堪えたコーヒートをソラは思いきり吹き出した。

「うわっ！汚いな、なんだよ？」

「ただだだっでジインが」

顔を真っ赤に染めるソラを見て、ジインは呆れ声で言った。

「ばか、冗談に決まってるだろ」

「そ、そうだけど……」

「拭けよほら」

差し出された紙ナプキンを受け取って、ソラはごめんと小さく謝った。

「……ふつうの子ね」

見上げると、アーモンド色の瞳がまじまじとこちらを見ていた。

「その辺の子とちっとも変わらない……こんな子が“ヒトガタ”だなんて」

ソラは紙ナプキンを握りしめた。

心の温度が急激に冷えていく。

“ヒトガタ”、“ヒトガタ”、“ヒトガタ”。

その言葉を聞く度に、ソラの心は氷水をかけられたようになった。

「……関わり合いたくないのはわかってる」

ジインが静かにカップを置いた。

「迷惑なのは百も承知だ。それでも今おれたちが頼れるのは求紅、あんたしかないんだ」

ジインがわずかに身を乗り出した。夜色の瞳が真摯に求紅を見上げる。

「あんたの力が必要なんだ……頼むよ、求紅」

祈るようにも、かき口説くようにも聞こえるその声音には、たとえ相手が見ず知らずの他人でも否と言わせない力があつた。

そいつは女だけじゃなく、オトコもババアもチビッコも見境なくなったらし込むんだぞ。

鳶広の言葉を思い出す。確かにジインには、良くも悪くも人を惹きつける何かがあつた。そしてそれを効果的に利用する方法も、ジインは心得ているようだった。

時計の音と煙管の煙が、ゆっくりと頭上を流れていく。

観念したように、求紅がふう、と息を吐いた。

「……明日の二十五時に出る船がある」

ジインの双眸がきらりと光った。

「積み荷は？」

「ヒトよ。たんまり乗せてるから、ひとりふたり増えたところでバレやしないわ」

「“普通の”密航者に混ざれって言うのか？」

「密航業者にも内緒でね」

「貨物船よりよっぽどチェックが厳しいんじゃないのか」

「貨物に人間が混ざるより、人間の中に人間が混ざるほうが目立たないでしょ。それにチェックが厳しいのは乗り込む前よ。船に乗っ

てしまえばわざわざ人数を数え直したりはしないわ……手引きを手配するからアンタは離陸した船に直接忍び込んで、向こうに着く直前に逃げ出せばいい。アンタならできるでしょ？」

「まあ、できなくはないけど……その手引きつてのは信用できるのか？裏懸賞金が高額なら、寝返る可能性もあるだろ」

「それは心配いらないわ。バレたらドボンなネタを握ってあるからジインが首筋をさす。それが何かを思案する時のジインのクセであることを、ソラはふいに思い出した。

「……わかった。あんたを信じるよ。贅沢を言える立場じゃないしな」

「じゃ、交渉成立ね。早速で悪いけど支払いはどうするの？時間的にも条件的にも今回はかなり厳しいから、それなりの額はもらうわよ」

「わかってる」

カウンターの隅に置いてある小さな紙に、ジインは何かを書き留めた。

「ここに金を預けてある。全額持っていってくれ」

金額を見た求紅が片眉を跳ね上げた。

「あらまあ……ずいぶん太っ腹なこと」

「口止め料込みだよ。余ったら二葉に服でも買ってやってくれ」

「前金を分けなくていいの？当日バツくれても知らないわよ」

「あんたはそんなことしないだろ」

「さあ、それはどうかしらねえ」

にやりと笑いながら、求紅はメモを胸元にしまった。

「正確な場所と時間は端末に送るわ。詳しい段取りもね」

「わかった」

「あと、今夜の宿は貸せないわ」

「それもわかってる。心配しなくても、これを飲み終わったらすぐに出て行くよ」

「……悪いわね」

ぼつりと呟いた求紅に、ジインはからりと笑ってみせた。

「いや、あんたはいい奴だよ、求紅。……朱世と二葉のこと、頼む」
おざなりに頷きながら、求紅はどこか苛立たしげに煙を吐いた。

「さ、行くぞソラ。朱世のところにも寄りなくちゃ」

ジインが立ち上がる。ソラは慌てて残りのコーヒーを飲み干した。
「ごちそうさまでした」

ぺこりと頭を下げ、カウンターに背を向ける。頭の上を漂っていた煙が、空気の動きに巻き込まれて消えた。

「……アタシが口を出すことじゃないけどね」

ためらいがちにそう言っつて、求紅は目を細めた。

痛々しいものを見るような、その瞳。

「先は、望めないわよ」

ジインがゆっくりと振り返る。一片の迷いもない瞳が、求紅をまっすぐに見た。

「そんなの、わからないだろ」

「……そう。そうね」

そうよね、と小刻みにうなずきながら、求紅は深いため息を吐いた。

ざわざわと胸が騒ぐ。

先は望めないとは、どういう意味だろう。

魔法院からは逃げ切れないということだろうか。

それとも……？

「じゃっ、あとはよろしく。あ、コーヒー美味しかったよ」

暗い雰囲気を一掃する明るい口調で、ジインはひらりと手を振った。扉が閉まる直前、ソラはもう一度カウンターを振り返ったが、求紅はもうこちらを見ていなかった。

ぱたりと扉が閉じ、橙色の光が途絶える。

離れていく、ジインの靴音。

ついて行かなくちゃ。

そう思うのに、足が動かない。

「ソラ？」

暗闇の先でジインが振り返る。

その先は。

先は、望めないわよ。

その一言が心に重くのしかかり、踏み出すことが出来ない。

「なんだよ、どうかしたのか？」

ジインの靴音が近づいてくる。同時に、心臓がばくばくと暴れ始めた。

聞かなくちゃ。

知らないふりは、もうできない。

「……………“ヒトガタ”は」

「え？」

「ずば抜けた身体能力をもつ人間だって、ジイン言ったよね」

「ああ」

「本当に、それだけ？」

“ヒトガタ”は。

人よりも耳や目や五感が優れ、力が強く、傷の治りが早い。

本当にそれだけだろうか。

見た目はやっぱ、普通の人間と変わらないんだ。

それは、つまり。

「“ヒトガタ”は……………」

動悸が激しくなる。かさかさに乾いた唇を、ソラは無理やり動かした。

「ぼくは……………人間だよね？」

不安を言葉にした途端、臓腑がせり上がって喉のあたりが苦しくなつた。

それは、ぱんぱんに膨らみ切った疑惑。

ぼくは、ちゃんと人間なんだろうか。

ジインと同じ、人間なんだろうか。

「当たり前だろう」

何言ってるんだと呆れたように笑われて、けれど不安は消えてくれない。

ふ、とジインが息を吐いた。

「ソラ」

伸びてきた腕に、ぎゅつと抱きしめられる。

「気にするな。人間は、自分と少しでも違うものを疎んじる生き物だ。“ヒトガタ”だのなんだのとうるさいだろうけど、そんな奴らは放っておけばいい」

ジインの手がぼんぼんと背中を叩く。

「それに、誰が何と言おうとおれはおまえの側にいるから。言ってる？絶対に離れたりしないって」

「……うん」

「なんだ、おれじゃ不満か？」

冗談まじりの台詞に、ぶんぶんと首を振る。少し躊躇ってから、ソラはジインの背に手をまわした。腕に力を込めてみる。応えるように、ジインが少し屈んだ。

ジインの匂い。鼓動。熱。それらに顔を埋め、胸に深く吸い込んだ。

抱きしめられると、心が安らぐ。けれどそれ以上に、誰かを抱きしめることがこんなに心地よいなんて。

知らなかった。いや、忘れていただけかもしれない。

かつての自分も、きつとこうしてジインを抱きしめたに違いない。なんて惜しいことをしたのだろう。

こんなにすばらしいことを、忘れてしまっなんて。

「ソラ」

「うん」

「ちよつと、苦しい」

言うなり、ジインがけほつと咳をした。

「えっ？あっごめん！」

慌てて体を放す。ジインの手が一瞬わき腹をかばったのを、ソラは見逃さなかった。

かあつと耳が熱くなる。忘れていた。ジインの体が傷だらけだということ。

「ご、ごめん。大丈夫？」

「うん。いや、そんなに謝らなくていいんだけど、おまえ人より力強いからさ。このくらいは大丈夫だけど、たぶんおまえが本気出したらおれ骨折れるからちょっと気をつけてな」

頭がもげそうなほど激しくうなずく。まったく、自分は何をしているのだろう。

己のうかつさに、ソラはしょんぼりと肩を落とした。

「ごめんなさい……」

「いや、だからそこまで気にしなくていいってば」

「でも傷が」

「傷？」

「あついや、なんでもないよー！」

全裸を見ましたなんて、口が裂けても言えない。

怪訝な顔をするジインの前で、ソラはぶんぶんと手を振った。

胸のざわつきは、いつの間にか風いでいた。

「“モグラ”を壊しちゃったの？」

朱世の作業場はまぶしいくらいの光に溢れていた。狭い部屋の壁が見えないほど物やら棚やらが積み上げられているけれど、整然と並んだそれらはきちんと整理分別されていて、散らかっているという印象は受けない。

正面のデスクには、アルファベットに埋め尽くされたモニターが三台。

「ああ、『ハコ』のセキュリティを無理やりこじ開けた時に」

「『ハコ』って魔法第三研究所のことよね。レベル5のセキュリティに“モグラ”を使ったの？無茶だわ」

言ってくれば専用のプログラムを組んだのに、と呆れる朱世の後ろで、ジインは肩をすくめた。

「まあ、コトが急だったもんで。悪かったな、チップをだめにして」「ううん。コピーならいくらでも作れるからそれは別にいいんだけど、よく突破できたわね」

「それは“モグラ”のすばらしい性能のおかげだよ」

腕組みをしたジインがモニターをのぞき込む。

「まさか朱世にハッカーの才能があるなんてなあ。『貧困街』にいた時にはちつともわからなかった」

ふふ、と笑って、朱世がキーボードを叩く。

「私もまだ信じられないわ。でもね、楽しいの。ここをこつすれば、もっと速くなる。こつちを当てはめれば、もっとシンプルになって、

終わりのないパズルを組み立てるみたいで」

「終わりのないパズルなんて、おれはやりたくないけどな」

考えただけでも気が遠くなりそうだ、とジインは苦笑いした。

「それで、“モグラ”のストックはあるか？」

「あるわよ。しかも先週できたばかりの最新版」

キヤスター付きの椅子を滑らせて、朱世が薄い引き出しを開ける。黒い合成布の上に小さなチップがいくつも並んでいた。

「今なら全種類揃ってるけど、必要なのは“モグラ”だけ？」

「いや、他のも一揃い欲しい。当分ここには来れないと思うから」
朱世の手が止まる。けれどそれは一瞬のことで、振り向いた笑顔にかげりはなかった。

「そう。じゃあ出血大サービス価格で、さらにオマケもつけちゃおうかな」

「本当？嬉しいな」

そう言って微笑んだジインよりもずっと嬉しそうな顔で、朱世は手袋をはめた。

「“モグラ”、“ネズミ”、“カメレオン”……クラッシュャー式にアダプターもつけとく？」

宝石のように並べられたチップが、次々と薄いケースに収められていく。

ソラはジインの袖を引っばった。

「ねえ。おもしろい名前だけど、何に使うものなの？」

「ああ、プログラム・チップって言ってな。端末に差し込んで、セキュリティの解除とかシステムへの侵入とか、まあ色々。ほら、ラブホから院の情報にアクセスしたたる？ああいうのとか」

「ラブホって、やだ、あなたたちそんなところに泊まったの？」

眉をひそめる朱世に、ジインが満面の笑みで答えた。

「そつ。おれたち、ラブホで寝た仲なんだ。なあ、ソラ？」

「ちよつ、何言ってるの?!」

思わず声が大きくなる。

「寝たつて、ぐーぐー寝ただけじゃん！」

「ぐーぐー寝ただけだよ？おれは他になにも言っていないけど。あつ！やだソラくんたらまさか変なコト想像しちゃった？やつらしー」
にやにやと笑うジインの踵をソラは軽く蹴った。

「いてっ！おまえ、蹴るなよ」

「だってジインが！」

「相変わらず仲がいいのね」

のんびりと言いながら、朱世はばちんとケースを閉じた。

「はい。これで全部よ」

「ありがと。代金は……」

「いらない」

「は？」

「お金はいらない」

「まさか、そういうわけにはいかないよ。金はちゃんと……」

「これ」

ジインが言うのを遮って、朱世はジインの手に何かを押しつけた。新作の“アオムシ”よ。アルファベット100個までならどんな回線からでも送れるの。それをあげるから、落ち着いたら連絡をしよう。……それが、“代金”」

金の代わりに連絡をと漆黒の瞳に見上げられ、ジインは困ったように首を傾げた。

「わかった、連絡はする。でもチップの代金はちゃんと払わせてくれ。でないと、あとで求紅に何て言われるか……」

「だめよ、受け取れない。受け取ったら、もう……二度と会えない気がする」

呟く声がかすかに震える。なにか言いかけたジインの視線を避けるように、朱世は手をかざした。

「いいの、わかってる。ごめんなさい。迷惑よね、こんなこと……でも私は、どんな形でもいいからあなたとの繋がりを絶ちたくないの」

「朱世」

「みんな、バラバラになってしまった」

朱世が視線を落とす。

「あの日、竜に襲われて群の子のほとんどが……命を落とした。無事だった子たちも結局、あの混乱で消息がわからなくなって……」。

あなたは私たちの群じゃなかったし、話をしたこともあんまりなくて、そんなに親しいわけじゃなかったけど、あの頃からの知り合いで今でも顔を合わせているのはあなたくらいなのよ。だから……あなたまでいなくなってしまうたら、私……」

朱世が唇を噛む。揺れる視線をまぶたで閉ざし、深く息を吸った。ゆっくりと息を吐く。再び開いた双眸には、強い光が宿っていた。意志の強い、生命力に溢れた目。

「とにかく、必ず生きて、無事でいてちょうだい。あなたの無事の連絡が、そのチップの代金よ。後払いでいいから、絶対に支払って……わかった。約束する」

「絶対よ」

「ああ、必ず」

器用にチップを指で回して、ジインは“アオムシ”を握り込んだ。「そういえば、残から連絡は？」

朱世のまなじりがきゅっと吊り上がる。

「ないわ。まったくどこで何してるんだか……たまにお金を送ってくるから、生きてはいるみたいだけど」

「残のことだ、なにか考えがあるんだろう」

「だといいけど……あれだけ溺愛してた姪っ子の顔も見に来ないなんて、どういっつもりかしら」

ため息まじりに朱世が言う。

残。その名前は聞いたことがあるような気がした。朱世の兄弟だろうか。ジインの知り合いなら、もしかしたら自分も知っているのかもしれない。思い出せないけれど。

そういえば、自分が記憶喪失だということをすっかり忘れていた。記憶がないことへの不安は、もうほとんどない。きつと、ジインがそばにいてくれるからだろう。

自分の過去は気になるけれど、思い出せないのならそれはそれでいいような気がした。

古い記憶など、どうせ新しい記憶の中に埋もれていくのだ。

このままジインと一緒にいられば、新しい、楽しい記憶がどんどん増えていくだろう。

もし、一緒にいることができるのなら……。

「……あれ？」

自分の思考に首を傾げる。

どうして、“もし、できるのなら”などと思ったのだろう。

ぼくはジインと一緒にいると決めたのに。

「ソラくん」

「えっ？あっはい」

やわらかな手がソラの手を包み込んだ。漆黒の瞳がまっすぐに向けられる。

強く見つめられ、ソラの心臓は跳ね上がった。思わず目を逸らしそうになるけれど、何かを訴えるようなまなざしから視線を外すことが出来ない。

「私はあなたを信じてる。あなたと、ジインのことを」

朱世の手に力がこもる。その両手は、まるで神に祈るようで。

「二人なら大丈夫だって、心からそう信じてるの。だから……」

「ジインー！」

部屋へ駆け込んできた二葉がジインに飛びつく。

「コラ待て二葉っ！」

その後を鳶広が追ってきた。

「二葉！作業場で騒いじゃダメっていつも言ってるでしょう！」

一喝され、二葉はジインの影に隠れた。母親の顔をうかがいながらも、瞳をキラキラさせながらジインの上着を引っばる。

「ジイン、ちょうちょ見せてー！」

「二葉、ジインは忙しいのよ」

「いいよ、大丈夫。ただしちょっとだけな。朱世、いらぬ新聞か何かを……」

困ったように微笑んで、朱世が棚から新聞を取り出す。合成紙で出来たそれをテーブルに広げ、その上にジインが片手を置いた。

大きな目をさらに開いて、二葉はジインの手元に見入っている。いったい何が起るのだろう。

二葉の気持ち伝染したように、少しわくわくしながらソラはジインの手を見つめた。

「え……」

一瞬、新聞の文字が動いたような気がして、ソラはまばたきをした。

息を呑む。錯覚ではなかった。印刷された文字がぞろぞろとぐめき、虫のようにジインの手の下に這い集まってくる。もう片方の手のひらも重ね、ゆっくり膨らませる。そこへ唇を寄せ、ジインは何事かを囁いた。

秘密めいたその仕草は、今まで見た中で一番魔法らしい魔法だった。

手のひらがそつと開かれる。そこには黒いアゲハチョウが一羽、ゆっくりと羽を閉じたり開いたりしていた。

「わああ!」

机の端を掴んで、二葉がびよんびよんと跳ねる。

ジインの手から飛び立ったアゲハチョウは、本物そっくりの動きでひらひらと部屋を舞った。

「すごい……」

思わず感嘆の声が漏れる。無関心そうに入口に寄りかかっていた鳶でさえ、アゲハチョウを目で追っていた。

テーブルの上に残った新聞紙には、蝶の形の穴が開いている。

「ね、どうやったの?」

訊ねるソラの耳元に、ジインはアゲハチョウから目を離さないまま囁いた。

「ヒミツ」

部屋を何周かしたところで、アゲハチョウはひらりと二葉の手に舞い降りた。止まってしまえば、それがただ紙を切り抜いただけのものだとわかる。

二葉がジインを見上げた。

「もうおしまい？」

「もうおしまい。ごめんな、もう行かなきゃならないんだ」

不満げに頬を膨らませる二葉の頭を、ジインは優しく撫でた。

「今度はもつとたくさん飛ばしてあげるから。赤いのも、青いのも、黄色いのも、いっぱい」

「ピンクも？」

母親とよく似た大きな瞳が、再びキラキラと輝き出す。

一片の曇りもない瞳は、それ自体が美しい宝石のようだった。

「ピンクも、ムラサキも」

「じゃあ、おやくそく！」

満面の笑みを浮かべて、二葉が小指を突き出した。ふくふくと小さな指に、ジインが自分のそれを絡ませる。

「やーくーそーくーおやくそく、やぶれば逆さまツボのなか！」

ぶんぶんと腕を振りながら二葉が歌う。

「求紅が、六番出口まで案内しろってさ」

面倒そうに言い、鳶広がじゃらりと鍵の束を鳴らした。

「それじゃあ、朱世」

「うん……気をつけてね。ソラくんも、元気で」

朱世がぎこちなく微笑む。ソラはなんだか胸が苦しくなった。

後ろめたさが残るのは、ぼくがジインを連れて行ってしまっただろうか。

そういえばさっきの話が途中だったが、続きを聞く時間はなさそうだ。

二人なら大丈夫だって、心からそう信じてるの。だから。そのあと朱世は、何と言おうとしたのだろう。

手を振る朱世のとなりで、二葉は手のひらのアゲハチョウにしきりに息を吹きかけていた。

「……守れない約束はしないほうがいいと思うぜ」

暗闇で鳶広が呟く。もうずいぶんと歩いた気がした。狭い通路は『彩色飴街』のさらに下層まで続いているようで、その広さと複雑さにソラは半ば感心、半ば呆れていた。

時折通り過ぎる小さな灯りに、ジインの輪郭がぼんやりと滲む。

「守れないかどうかなんて、わからないだろ」

「守れないに決まってる。というか、オレが守らせない」

立ち止まり、鳶広が振り返る。闇の向こうで、その眼光が鋭くなつた。

「二度とここに現れないでくれ」

「は……ずいぶんと嫌われたもんだな」

「好き嫌いの問題じゃない。あんた、危ないんだよ」

じり、とわずかに後じさる音が聞こえた。

「あんたの周りは、いつも危うい匂いがする。たまにいるんだよな、あんたみたいに厄介ごとを引きよせる質の人間てのがさ。まあ、好き好んで呼び寄せるわけじゃないだろうけどあんたの場合、厄介ごとのほうがあんたを好いてる……そんな感じがする」

鳶広の視線が、ジインの肩越しにソラへと向けられた。

「いや……好かれるばかりでもないか。わざわざ『ハコ』から“ヒトガタ”を連れ出すくらいだもんな、あんたも好いてるんじゃないかねえの？厄介ごとをさ」

先の尖った眼差し。また、あの“視線”だ。

再びざわつき始めた胸のあたりをぎゅっと掴む。

立ち位置をわずかにずらして、ソラはさりげなくジインの影に隠れた。

大丈夫。ぼくにはジインがいるんだから……。

「よりにもよって“ヒトガタ”を連れて歩くなんて、導火線に火のついた爆弾抱えてるようなもんじゃないか。爆発したら、いったい何人が巻き込まれると思ってる？死ぬのがあんた一人ならかまわないさ。魔法院にたてつこうが、“ヒトガタ”を連れて歩こうが、好きにすればいい。でも巻き込まれるのはごめんだぜ」

悲鳴のような軋みを上げて、小さな扉が開かれる。吹き抜けの闇の底へ螺旋階段が伸びている。遙か下に出口らしき四角い灯りが見えた。わずかだが、外の空気のおいもする。

「降りれば二十五層だ。ドンじいの医院の通りに入る。そいつと仲良くするのは勝手だけど、爆死するなら他所でやってくれ」

くれぐれもここを巻き込むな、という鳶広の声が、吹き抜けに反響して滲んだ。

声音が、視線が、早く出て行けと背中を追い立てる。

爆弾。

ぼくのせいで、人が、死ぬ？

それはいつたい、どうということ。

「そつだ、これを朱世に渡しておいてくれ」

「何だ？」

「電子マネー。チップの代金だ。今は受け取らないだろうから、頃合いを見ておまえから渡してくれ」

「ちよつと待つて」

鳶広に差し出された腕を、ソラは思わず掴んでいた。

「なんだ？」

「なんだじゃないよ！そんなことしたら、朱世との約束はどうなるの？」

少し驚いたように、ジインはゆっくりと目を瞬いた。

「連絡はするよ。でも金のことは話が別だ。餞別に受け取れるような額じゃない。おれの“連絡”にそこまでの価値があるとは思えないし」

「でも……」

ソラが何か言うより早く、鳶広の手がチップをひったくった。

「わかった。これはオレが責任を持って朱世に渡してやるから、あんたは安心して消えてくれ」

毎度アリガトウゴザイマシター、と憎たらしく言いながら鳶広は虫でも払うように手を振った。

むつとして、思わず睨んでしまう。

いやな奴だ。そういえば、初めて会った時も失礼な態度だった。いけ好かない。

視線に気づいた鳶広が、くん、と顎を突き出す。

「何だよ、文句あんのか？爆弾ちゃん」

「っ、さつきから爆弾爆弾って、一体どういう意味……」

「じゃあ鳶広、それは確かに頼んだからな」

行くぞ、とジインが上着の裾をひるがえした。

踏み外せばそのまま一気に地獄まで転がり落ちそうな闇の中を、かかん、かかんと、リズムよく靴音が降りていく。階段に灯りはなく、わずかな光に浮かび上がる一段一段のシルエットだけが頼りだ。不自然に会話を遮られ、なにか釈然としない気分のまま、ソラはジインの後を追った。

繋がりを絶ちたくないの。

そう言った朱世の音が、靴音の合間に滲む。

「あの二人はオレたちが守る！」

背中に鳶広の音がぶつかった。

「だからあんたは、もうここに現れないでくれ」

「……できるだけそうしたいけど、約束はできないな」

かん、と靴音を鳴らして、ジインが振り返った。

「守れない約束は、しないほうがいいんだらう？」

「……ほんつと、最後までムカつく奴だな」

さつさと食われちまえ、と毒づいて、鳶広はこれでもかというほど力一杯、扉を閉めた。

凄まじい金属音が反響し、次第に収まっていく。

反比例するように、鳶広の最後の言葉がソラの中で大きくなっていった。

さつさと食われちまえ。

「ジイン」

奈落のような闇を、ぐるぐると旋回しながら降りていく。

「ジン、待って」

一足飛びで駆け下りると、ソラはジンの腕を掴んだ。

狭い段の上で向かい合い、夜空色の瞳をまっすぐに見上げる。

「何だよ、朱世のことならもう……」

「違う」

確かに朱世のことも気になるが、それ以上に引つかかっていることがある。

こく、と喉が鳴った。

「……巻き込むって、何？ぼくが爆弾って、どういう意味？」

人々の冷たい視線は、自分が普通の人と違うからだと思っていたけれど。

「もしかして、ぼくのせいで何か良くない事が起きるの？」

導火線に火のついた爆弾。

死ぬのがあんた一人なら、と鳶広は確かに言った。

どういう意味かはわからない。

けれど、もし自分の存在がジンの生死に関わるのだとしたら

……。

「大丈夫だよ」

ジンが笑う。嘘の欠片も感じさせない、きれいな笑顔だ。

「良くない事なんて起きない。あいつの言ったことは気にするな」

「でも……」

「心配するなつてば」

くしゃりと頭を撫でられる。温かな指先がわずかに地肌に触れた。

この笑顔を、温もりを、失いたくない。

それでも……いや、だからこそ。

再び階段を降り始めた背中に、ソラは言った。

「もし、ぼくのせいでジンが……ジンの命が危険にさらされる

のなら、一緒にはいられない」

拳を握り込む。手のひらに爪が食い込んだ。

“ヒトガタ”という特殊な体質だというだけでも、もう十分迷惑

をかけているのだ。

さらにジインの命まで危険にさらすわけにはいかない。

かつん、と靴音が止まった。

「一緒に、いられない……?」

「そうだよ。ほくのせいでジインになにか危険なことが起きるのなら、これ以上一緒にいるわけには……」

ジインが振り返る。どきりとした。

「そんなこと、おまえが言わないでくれ」

いつもまつすくな夜空色の瞳。

そのまなざしが、揺れている。

「誰に何を言われてもかまわない。だけど、おまえが……おまえまで、そんなこと」

言わないでくれ、と囁く言葉は、声にならずに闇に溶けていく。

「ジイン……?」

声は掠れ。

視線は彷徨い。

輪郭が、頼りなく揺れる。

こんなジインは、見たことがない。

「……行こう」

顔を背けるようにジインは踵を返した。

「今日のうちに進めるだけ進んでおいた方がいい。『裏』の港はけっこう遠いんだ。もう『裏懸賞金』がかかっているかもしれないから、宿に泊まるのは危ないな。となると、今夜は野宿か」

水と食料を調達しないと、と早口に呟きながら階段を降りていく。その背中は。

何かから逃げているように見えた。

【ephemera I】《形》「1」 はかない、短命な
2」 ただ一日限りの

「……………なんでもする」？」

男がわずかに首を傾げる。照明がまぶしくて、その表情はよく見えない。

「なんでもする」、ねえ……………」

呟く男の影を、ジインは苦しげに仰いだ。視線と言葉。いま自由になるものは、それしかない。袖が胴体に巻き付いた、何だかよくわからない変な服を着せられて、椅子に座らされている。足も短いベルトで左右を繋がれて、走ったり蹴ったりできないようになっていた。

手も足も動かせないのに、心臓だけはばくばくと跳ねるように動いている。

あれから、どれぐらい時間が経ったのだろう。

部屋には窓も時計もなかった。そもそも、ここは部屋と呼べるのだろうか。わずかな凹凸もない壁と床。ピンポイントに自分だけを照らし出す照明も、別室のモニターに繋がっているであろう監視カメラも、音もなくスライドする電動ドアでさえ、壁や天井にきれいに埋め込まれていて、すべてがフラットで無機質だ。

部屋というより、四角い箱と呼ぶほうが近い。

この部屋で平らでないものは、椅子と自分、そしてこの男だけだ。出来の悪い人形のような格好のまま、ジインは待った。“なんでもする”という言葉を、この男がどう取るかはわからない。けれど、そんなことはどうでもよかった。

ソラが捕まった。

“ヒトガタ”として、魔法院に。

捕らえられた“ヒトガタ”がどうなるかをジインは知らない。けれど、当然ヒトとして扱われないだろうことはわかった。檻かなにかに入れられて、酷いことをされるのかもしれない。もしかしたら魔法の実験台にされて…………。

見えない何かが、ひやりと首筋をかすめた。

頭を振って、ジインは不吉な考えを追い払おうとした。けれど不安はどこからともなく忍び込んで、じわりじわりと心に冷たい染みを作っていく。

「…………お願い、します」

声が震えるのは、恐怖のせいだけではない。

悔しかった。

自分が、ソラが、いったい何をしたというのだ。

連れ去られ、引き離され、こんなところへ閉じ込められて。

できるなら、わき上がる怒りや憎しみをそのままぶつけてやりたい。

けれど、それはできなかった。

ソラの命は、この男の手に握られているのだ。

屈するしかなかった。

身震いするほどの悔しさを押し殺して、ジインは言った。

「お願いです。なんでもします。あなたたちの言うことは、何でも魔法士として一生ここで働けと言うなら、そうします。だからソラを…………」

ソラを、殺さないで…………。

男が一步近づいた。自分から跳ね返る光で、その顔が少し明瞭になる。

灰色の髪。紺色の制服。思っていたよりも若い。

唇の端を笑みに歪めてはいるけれど、眼鏡の奥の瞳は少しも笑っていない。

「…………そんなに“ソラ”が大事？」

凍てついた刃のような灰色の双眸。

その瞳がどんどん冷えていくように見えるのは、気のせいだろうか。

「世界中の誰よりも、何よりも……自分の、命よりも？」

男の唇から、ふいに笑みが消えた。

「じゃあさ、死んでみて」

「……えっ？」

言葉の意味が理解できず、ジインは瞬きした。

男が再び笑う。双眸は冷たくこちらを見据えたまま、頬の筋だけが吊り上がった、不自然な笑顔だ。まるでバラバラに切り貼りしたカラージユのようで、気味が悪い。

「“ソラ”のためなら“なんでもする”んだろっ？それなら、今ここで死んでみせてよ」

一度もまばたきしない男の目を、ジインはただ戸惑いながら見返した。

この男は、いったい何を言っているのだろっ。

イマ ココデ シンデミセテ ？

なにかの冗談だろうか。

けれど、男の目は少しも笑っていない。

心のどこかで警鐘が鳴り始める。

「そっちなあ、息を止めるのはさすがに無理だろっから、舌を噛むとかさ」

舌を出して、男は軽く噛む真似をして見せた。

「ほら、こうやって思いきり、ぐっと噛むんだ。ああ、子どものあごの力じゃ無理かもしれないね。手伝ってあげよう」

言いながら、男が近づいてくる。
なにを。

この男は、いったい何をするつもり。

男の手がゆっくりと頭の上に置かれた。

なにを。まさか。

まさか、本当に？

もう片方の手があごに触れそうになった瞬間。

「……っ！」

ぞくりと悪寒がした。

がたん、と椅子が揺れる。身をよじって振り落とした男の腕が、目の前にだらりと垂れ下がった。

「死ねないの？」

優しく撫でるような声音に、全身が粟立つ。

「ね、死ねないの？」

重ねて問われる。心臓がばくばくと耳元で鳴った。

よくある台詞だ。

何でもする。だからどうか、命だけは。

『貧困街』なら、日に一度は耳にする言葉。

嘘を言ったつもりはない。本当に何でもする覚悟はある。

けれど、これは。

この男は……。

「何でもする”って言ったのに」

あごを掴まれる。無意識に歯を食いしばり、唇を固く結んだ。

目の前に、灰色の双眸。笑んだままの唇が、動く。

「じゃあ、きみは嘘つきだ」

次の瞬間、耳のあたりに衝撃がきた。一瞬、目の前が真っ暗になる。

殴られたのだと理解したのは、頬に床の冷たさを感じてからだだった。

頭の芯がじんと痺れ、自分を中心に世界が回る。急激にまぶたが重くなった。

「きれいだなあ」

鼻の下を拭われる。その指先が、薄暗がりでもあざやかな赤い色に濡れていた。

「やっぱり血は、生きているものから出るのが一番きれいだね」

朦朧とした意識の中で、ジーンはただぼんやりと自分の血を弄ぶ

指先を見ていた。

床で打った顔半分が熱い。鉄臭い味がした。口の中も切れたのだろうか。

何より、とても眠たい。

「それとも、あれかな。きみは『オリエンタル』だろう。“肌は粉雪、髪は夏影、瞳は神の吹硝子”と謳われる人種なら、血の色も普通より鮮やかなのかな」

男の顔からすべての表情が消えた。

「もっと、見たいな」

胸ぐらを掴まれ、体が少し浮き上がる。頭がぐらりと傾いた。

なにも考えられないまま天井を仰ぐ。

ああ、どうしてこんなに眠いのだろう。

「ねえ、“ソラ”はどうなると思う？」

その一言に、心臓が跳ねた。一気に意識が明瞭になる。

その途端、強かに打った肩が、頬が、鼓動に合わせてずきずきと痛み出した。

にいつと笑って、男が耳元に唇を寄せる。

「“ヒトガタ”の使い道は色々あるんだ。生体での実験や解剖……魔法士の技能演習に使うこともある。もちろん、生きたままだね」

体が震える。震え出す。呼吸が荒くなり、心臓が壊れそうなほど速く脈打ち始めた。

「きみの扱いに関しては長老会が話し合っている途中だけど、今の長老会にはきみと同じ天然の魔法士が一人いてね。その手前、きみはおそらく魔法院で他の院生たちと一緒に魔法士としての訓練を受けることになるだろう。つまり、きみが“ソラ”を解剖する機会もあるかもしれないってことだ……ふふっ、楽しみだろう？」

毒を含んだ囁きが、まるで耳にねじ込まれるようだ。

やめて。やめてくれ。

そんなこと、聞きたくない。

「解剖より技能演習のほうがおもしろいかな？初めのうちは、あら

かじめ弱らせた奴を使うからね、そう難しくはないんだ。まずは動きを封じるために両目と手足を狙って、次に心臓を……」

「やめて！」
叫んでいた。

やめて。やめて。何でもする。自分が身代わりになってもいい。だからどうか、ソラだけは……。

「いいよ」
声を落として、男が囁いた。

「何でもする……きみがそこまで言うのなら、“ソラ”は生かしておいてあげよう。実験にも訓練にも使われないよう、手をまわしてあげる。そのかわり……」

男が手を放した。体が床に落ちる。

ばきん、というガラスを割るような音に、ジインは視線を上げた。男の手に何かが現れる。細長いガラス棒のようなその物体は、魔法士たちが一様に手にしていたものだ。

魔法使いの杖、みたいなものだろうか。

見る間に長さを増したそれが、とん、と肩に軽く触れた。

「……」

鋭い痛みが、肩で弾ける。

身を縮め、思わず漏れそうになった悲鳴を寸でのところまで呑み込んだ。

視界の端、破れてもいない白い拘束着にぽつぽつと血が滲む。

肌だけが、裂けた。

これは……魔法？

男が笑う。笑っている。本当に楽しそうな声で、笑っている。

この男は……。

唇を噛み締め、脂汗を滲ませながら、ジインは男を睨み上げた。

照明を背にした男の姿は、今や灰色の影にしか見えない。

その腕が、透明な杖をゆっくり、ゆっくりと振り上げる。

これは、なんだ。

これは何だ。
自分の身に起きている、これは。
目の前で笑っているこの男は。
こんなのは、おかしい。
まともじゃない。
狂っている。

それでも。

「そのかわり、これはきみとぼくだけの秘密だ」

これで、ソラが助かるのなら。

「ジン！」

揺さぶられて、目を開ける。闇の中に空色が見えた。
明るい、まるでそれ自体が光を放つような。

「……ソ、ラ？」

空色の瞳が瞬く。ソラが心配そうに顔をのぞき込んでいた。

「大丈夫？」

「あ……どこだ、ここ」

視線を廻らす。天井が低い。黒い床、黒い壁。体の下でトタンが
ばきりと音を立てた。ソラのすぐ後ろ、絡み合った配管の上を大き
なネズミが駆けていく。

闇の向こうにぼつぼつと見える光は星だろうかと考えて、ああそ
うかと思いつく。

『彩色鉛筆』 東十七楼三十二層。三十二・五層と言つべきだろう
か。ここは下層から見れば天井裏、上層から見れば床下に位置する、
階層と階層の狭間のデッドスペースだ。

遠い星のように見えるのは、深い谷を隔てた対崖の街の光。

「どうしたの？どこか具合が悪いの？」

「あ……いや。大丈夫、夫」

「でもすごい汗だよ」

言われて額に手をやる。確かにすごい汗だ。頭がずんと重みを増し、目の奥がしみるように痛む。

ほんの少し仮眠するはずが、思いのほか深く眠ってしまったらしい。

求紅のところを出てから半日。それらしき人間を何度か見かけはしたけれど、検問にかかることも賞金稼ぎに出くわすこともなく、行程はいたって順調だった。ここはもう街の東側で、無認可の積み荷を扱う密航港までは半日あれば十分の距離だ。けれどここから先は地上へ戻り、この街でもっとも最も危険な地域である『裏』を通らなければならない。人通りの少ない時間帯に動くのは返って目立つからと夜の間は身を潜めることに決め、けれど宿にはすでに『裏懸賞金』の話が回っているかもしれないので、決して人目につくことのないこの層と層の狭間で休むことにしたのだ。

全身に気だるさが重くのしかかる。体を休めていたはずなのに眠る前より体調が悪いなんて、ものすごく損をした気分だ。

それもこれも、すべてあの夢のせいだ。

舌打ちしそうになるのを堪えて、両手で顔を覆い深くため息を吐く。

「すごいなされてたんだよ。あんまり苦しそうだったから、何かの発作でも起きたのかと思った」

「そんなんじゃないよ」

無理に笑顔を作ってみせるが、顔が強張って上手くいかなかった。おそらくぎこちなく映ったであろう笑みにソラは何か言いかけたが、結局なにも言わないままかたわらのザックをごそごと探った。

「お水飲む？あんまり残ってないけど」

取り出したのは、つい数時間前に小さな店で買ったペットボトルだ。

「うん……ありがとう」

しっかりと受け取ったはずのボトルが指を滑り落ちて、ごとんと床を転がった。

「あ、あれ……?」

自分の手を見下ろす。そこで初めて、ジインは自分の手がひどく震えていることに気がついた。

「ジイン、」

「何でもない」

戸惑うソラの視線を避けるように、ジインは体を背けた。拳を強く握り込む。震えは治まるどころか、伝染するように全身に広がっていった。

ソラがおろおろと背中をさする。

「どうしたの?どこか苦しいの?」

「違うよ、何でもない。ちょっと冷えたただけだ。すぐに治まる……」
大丈夫、と無理に明るい声を出す。

抑え込もうとすればするほど、震えはひどくなる一方だった。

きみは、何を期待しているのかな?。

ふいに脳裏をよぎった声に、全身が粟立つ。

仮に“ソラ”を自由にしたとして、きみは彼をどうするつもり?
。

「うる、やい」

うるさい、うるさい、うるさい。

どうして今、それを思い出すんだ。

すべては順調に進んでいる。

このままいけば、明日の今頃にはもう空の上にいるはずだ。

この国を出て、ソラと二人で空の向こうへ。

夢にまで見た明日が、すぐ目の前にあるのだ。

それなのに。

たとえ空の果てまで逃げたとしても、事実からは逃げられない。
い。

鼓動が高鳴る。息が、苦しい。

いつか“その時”が来たら、きみが。

きみが、その手で“ソラ”を殺すのかな？

「ジン」

手の上に、手が重なる。

顔を上げると、空色の瞳と目が合った。

明るい真昼の空の色。雲ひとつなく晴れ渡っていた、あの冬の空と同じ色だ。

あんまりきれいだったので、それをそのまま名前にした。

あの日、この手で拾い上げ、自分が名付けた小さな命。

「何があったの」

真剣なまなざしが、まっすぐにこちらを見つめてくる。

「寒いなんて嘘だよね。……魔法院で、なにかひどいことされたんじゃないの？」

「……されてないよ、そんなこと」

内心どきりとしつつ、なんとか表情は崩さずに嘘を吐く。昔から嘘は得意だったけれど、この瞳に見つめられながら吐くのは苦手だった。

その視線がふいに逸れる。

「やめて”って”

「え？」

「寝言。“やめて”って、言った」

「……おれが、今？」

ソラがこくと頷く。低く呻いて、ジンは頭を抱えた。恥ずかしい。情けない。もう最悪だ。

ソラが袖を引っばった。

「ねえ、魔法院で何があったの？うなされるほど怖いことって何？」
「だから何も無いって言ってるだろ」

思わず棘のある言い方をしてしまい、ソラが少し不機嫌な顔にな

る。

「じゃあどうして、そんなに体が傷だらけなの？」

「え、傷？」

あつと声を上げ、ソラが口を押さえた。明らかに「しまった」という顔をしている。ややあつてから、ジインもあつと声を上げた。

「なんで傷のこと、知って……いつ見たんだ」

「見てません。なんつにも見てません」

「うわー嘘くさ！え、でも本当に、いつどこで？……うっ！まさか、透視っ？！」

あまりにも視力が良過ぎて繊維の間からもものが見えるように？

「できるわけないじゃん、そんなこと」

冷静につっこまれ、顔が熱くなる。一瞬本気で考えてしまった自分が恥ずかしい。

「ごまかすように、ジインはソラを睨んだ。

「じゃあ、いつどこで見たんだよっ」

「あー、ええと、ほら、着がえの時にちらっと見えたんだよ」

「おまえの前では着がえてない」

「あ、あれ？そうだった？じゃあ寝てる時に服の隙間から見えたのかな？」

ソラの視線が泳ぐ。ものすごくあやしい。

じつと疑いの眼差しを向けると、ソラは頬を赤らめた。

「い、いつ見えたかななんてどうでもいいじゃん！それよりジインの傷こそ、いつどこでやられたんだよ？」

問われて押し黙る。言えない。

言えるわけがなかった。

だから見られないように気をつけていたのに。

「……体術の訓練で出来た傷だよ」

ぼそりと呟くと、ソラが眉をひそめた。

「腕とか脚には傷がないの？」

「おっおまえほんとにどこまで見たんだ！」

「どどどどこも見てません！」

「すっごいあやしい！なに隠してんだ白状しろ！」

ソラの両手首を掴んで頭の上まで引き上げる。

「わああっ！なににも隠してないってば！」

「嘘つけ怒らないから言ってみろ！」

「もう怒ってるじゃん！」

大声に驚いたネズミが逃げ去っていく。そちらに一瞬視線を向けたソラが、ジインの腕を見てびたりと止めた。

「あ……止まった？」

言われて自分の両腕を見る。震えはいつの間にか治まっていた。

呼吸も鼓動もいつもどおりだ。

密かに胸を撫で下ろし、ほっと安堵のため息をつく。

「ね……本当にさ、何があったの？」

まだ心配そうなソラの腕を下ろして、微笑む。今度は上手く笑えた。

「何もないよ。訓練の時にちょっとハマしただけだ。大したことじゃない。考え過ぎだよ」

「……本当に？」

空色の瞳がじっと見つめてくる。

昔から、どれほど遠く小さなものでも、どれほど深い闇であつても、ソラの目に見えないものはなかった。

そしてこんな時は、心まで見透かされそうな気がして、少し怖い。「考え過ぎだつて言ってるだろ。しつこいぞ」

軽く睨んで、その頬を痛くない程度につねる。驚くほど温かい。

ちょっと熱すぎるくらいだ。冷えきった指先がじんとしびれる。普通なら熱でもあるのかと疑うところだが、風邪ひとつひいたことのないソラに限ってそんな心配は無用だった。おそらくは、低い気温に合わせて無意識に体温を上げている、そんなところだろう。

「相変わらず便利だな……」

「へ？」

ソラがきよとんと首を傾げる。

「なんでもないよ」

小さく笑って、ジインはソラの頭をくしゃりと撫でた。陽の光を繕ったような金色の髪。

指の間をすり抜けていくこのくすぐったい手触りが、ジインはとても好きだった。

赤ん坊の頃から変わらないこの金色を、何度こうして撫でたことだろう。

気づかないはずがなかった。

ソラの体が、自分やヒトとは違うこと。

ソラが、“ヒトガタ”かもしれないこと。

気づかないはずがない。

だってソラは、自分が育てたのだ。

この手でミルクを飲ませ、この手でおむつを替え、この手で慈しんできた。同じベッドで眠り、笑い、パンを分け、おしゃべりをして、手を繋ぎ、髪を撫で、時には叱って……。

そうかもしれないと思った。そうでなければいいと、思った。

たとえそうであってもかまわない。“ヒトガタ”だろうが何だろうがそんなことはどうでもいい。

ソラは、ソラだ。

そう思っていたし、今でもそう思っている。

けれど。

ねえ。本当は、わかっているんだろう？。

わかっている。本当は。

いつかソラが、ソラではなくなるかもしれない、と。

知っている。わかっている。

「それでも、おれは……」

一分一秒でも永く。

「この瞳を、温もりを、守るためなら。」

「……なんでも、するよ」

たとえその先に。

思い描いた明日が、なかったとしても。

私は、彼の何を知っていたのだろう。

「ね、黒瀬くんの誕生日はいつ？」

昼食後の休憩時間。薄く雲の溶けた空はやわらかな水色だ。そこに流れているはずの秋の空気は、高圧ガラスのドームで隔たれたここには届かない。

空の色が季節によって変わることを小雪は最近になって知った。青々と茂る木々にどこか違和感を覚えるのは、きっと空が秋の色をしているからだろう。

徹底管理された中庭は、今日もわざとらしいほどの緑に溢れていた。人工の風に揺れる葉が、膝の上にやわらかい影を落とす。

「誕生日……なんで？」

路音はいつものように向かいのベンチで寝転んでいた。まぶたを閉じてはいるが、彼が本当に眠っているところを一度も見たことがない。

「占い。誕生日と性別から算出したバイオリズムで相性の数値がでるの。ね、誕生日は？」

薄いまぶたがゆっくりと開かれる。

「四月九日」

「四月九日？私、三月十日なの。なんだか似てるね」

四と三。九と十。少しこじつけっぽいけど、路音との繋がりならどんな些細なことでも嬉しかった。

「……か、十九日」

路音がぼつりと呟き、小雪はきよとんと首を傾げた。

「……どっちなの？」

「わからない。忘れた」

「自分の誕生日なの？」

「自分の誕生日なのに」

路音が呆れたように言う。

まるで他人事のような言い方がおかしくて、小雪はくすくすと笑った。

「じゃあ両方でやってみるね。まずは九日のほうから」

手元の端末に必要な情報を入力していく。結果はすぐに出た。

「97点!」

「100点満点で?」

「そう、すごい高数値だよ」

「へえ……じゃあ相性いいんだな、おれたち」

路音がやわらかく微笑んだ。透きとおるような笑顔だ。額にかか
る前髪が、はらりとこめかみに落ちる。どきりとした。

男の子なのに、なんでこんなに色っぽいんだろう。

「……小雪?」

はっと我に返り、小雪は慌てて下を向いた。

「じゃ、じゃあ今度は十九日ね!」

確実に赤くなっているであろう頬を隠すようにして、端末をのぞき込む。

この占いはいま一部の女の子の間で流行っていて、恋人はもちろ
ん、少し気になる相手や友達、家族など、自分に関わる人間との相
性を手当たり次第に占っては、みんなできゃあきゃあと盛り上がっ
ていた。97点は今まで見た中で一番高い数値だ。実のところこの
数値に科学的根拠はないのだが、そうとわかっていても顔がほころ
んでしまう。

しかし次の瞬間、画面に表示された結果を見て小雪は愕然とした。
「……6点」

これは低い。低すぎる。今まで見た中で一番低い数値だ。

科学的根拠はないとわかっていても、へこんでしまう。

九日でやめておけばよかった。九日なら、相性抜群なのに。

「九日だよ」

顔を上げる。路音は再び仰向けに目を閉じていた。

「誕生日。たぶん九日だから」

心に灯りが灯ったように、胸がほっこりと温かくなる。

路音のこういうところがとても好きだ。

少しぶつきらぼうなところもあるけれど、その言葉が冷たいと感じたことは一度もない。曖昧に濁したりすることがない分、逆に心地いいくらいだ。それでいてさりげない気づかひや優しさも、路音はちゃんと持っていた。今だって、そんな占い当たらないよと頭から否定したりせずに、ちゃんと付き合ってくれた。魔法院の人間の大半は、占いと聞くだけであからさまに見下した態度をとったりするのだ。科学的根拠もない占いなど、何の価値もないと思っているのだろう。ちょっととした遊び心すら、無駄なものだと思っているのかも知れない。

成績と家柄。この人たちの関心があるのは、その二つだけだ。隙あらば周りを蹴落とし、自分より下位の者は見下して、上位の者には上手く取り入ろうとする。

所属と評価に翻弄される魔法院の人たちの中で、路音の存在は異質だった。

国立魔法院第二研究所で英才教育を受けた者がほぼ全員を占める魔法院に、突然現れた天然の魔法使い。

外国人だとか、東の出身者だとか、実はどこかの財閥の私設研究室生まれで天然の魔法使いではない、なんて噂まであるけれど、どれも本当かどうかはわからないし、どれも小雪にとっては重要ではなかった。

だって、見ればわかる。

纏う空気が違うのだ。

特別な人。

路音のような人は他にいない。

この中庭に通うようになってから、世界は色彩豊かで美しく、日々輝きを増しているように思えた。

けれど、時々。

ふと不安に思うことがある。

「……あっ！」

ふいに目の前をよぎった影を見上げて、小雪は目を丸くした。交互に煌めく黒と青。

「チヨウチヨ？」

はっとするほど鮮やかな青い蝶が、ひらひらと優雅に宙を舞っている。

「すごい……あんなにきれいな蝶、初めて見たわ」

光沢のある青色は、まるで美しい宝石のようだ。蝶はどんどん空のほうへ遠ざかっていく。はっとして、小雪は手元の端末を操作した。

「……何してるんだ？」

「調べるの。ここには観賞用の蝶が放してあるけど、あんな色のは見たことがないわ。もしかしたら研究施設から逃げ出したのかも……」

中庭の環境情報へアクセスする。温度や湿度はもちろん、魔法に影響する空気中のピアナクロセイド濃度、酸素濃度や土壌のPH数値まで、ありとあらゆる情報を画面上で確認することができる。小雪は“動植物”のコンテンツから、飼育されている昆虫の種類を検索しようとした。

「放っておいてやれよ」

「えっ？」

驚いて指を止める。路音が体を起こした。

「せっかく気持ち良さそうに飛んでるんだ、わざわざ捕まえなくてもいいだろ？」

「でも、ここじゃ生きていけないわ。ドームの中は温度も湿度も管理されてるけど、飼育槽とは環境が違うし、餌だって……」

「飼育槽に戻したとしても、生きられるのは二週間かそこらだろ。それに、永く生きることが必ずしも幸せとは限らないよ」

永く生きることが、幸せとは限らない？

「それは、どういうこと？」

「もちろん、幸せに永く生きられるのならそれにこしたことはないけど、ただ種の保存のためだけに生かされて、狭い飼育槽で飛ぶことも許されず一生を終えるくらいなら、たとえ短い間でも自由に空を飛び回るほうが、蝶にとっては幸せかもしれないだろ」

蝶にとっての幸せ。そんなこと、考えてもみなかった。

永く生きることよりも、自由であることが、蝶にとっては幸せなのだろうか。

「でも……お腹が減って死んじゃうのはかわいそうじゃない？」

「お腹が減って？」

路音が小さく笑った。

「優しいんだな、小雪は」

かあつと頬が熱くなる。驚いたり舞い上がったりと、息をつく暇がない。

路音のささいな一挙一動に、心が震える。

「確かに、蝶の本当の気持ちなんてわからないよ。実際は、“腹減った、飼育槽帰りにえ”とか思ってるかも知れないし。でもおれだつたら、少なくとも人間の都合で生かされたくはないな」

路音が静かに空を見つめる。黒に近い濃紺の瞳が、光の加減でいつもより青く見えた。

蝶の青より、深く透明な青。

「何にせよ、羽を持って生まれたものを地上に留めておくことはできないよ」

蝶はもうずっと高いところにいた。けれど、その先は高压ガラスのドームだ。いくら空を目指しても、厚いガラスに隔られたそこへたどり着くことはできない。

それを知っているはずなのに、まぶしそうに空を見上げる路音の横顔は、まるで蝶がガラスを突き抜けて空へ飛び出せると信じているかのようだ。

時折見せるその表情は、どこまでも透明で美しく、同時にひどく儂い感じがした。

まるで、そのまま消えてしまいそうな。

胸の奥をぎゅ、と掴まれる。

路音のことが好きだ。

ずっとこうして一緒にいたい。

けれど、こんな時は言いようのない不安が募る。

いつか路音が、手の届かないところへ行ってしまうのではないかと。

そして今、不安は現実のものとなりつつあった。

「笹原、起きているか？」

インターフォンから北見聡太の遠慮がちな声が聞こえ、小雪はまぶたを開けた。

「起きてるわ、入って」

第四区にある監視塔の仮眠室。固いベッドから起き上がって、小雪は軽く髪を撫でつけた。深いため息を吐く。

少しも眠れなかった。

次から次へと思い起こされる記憶が、考えることを止めさせてくれない。

音もなく扉が横滑りし、聡太が部屋へ入ってきた。

「通報があつた。『彩色飴街』の東十四楼三十層だ」

聡太は興奮した様子で早口にそう告げた。いつの間に着替えたのか、院の制服ではなく地味な色の服を着ている。

「見つかったの？」

「まだこちらで直接確認できたわけじゃないけど、本人なのは間違いないらしい。今から東へ向かう。制服は目立つから、これを」

服を手渡される。聡太が着ているものと同じような地味な色合いだ。確かに制服を着ていては、大声で自分の居場所を教えているの

と同じだった。せつかく彼に近づいても、気づかれたら逃げたり隠れたりされてしまうだろう。

逃げたり、隠れたり。

されてしまうだろうか、やっぱり。

顔を合わせた時、路音はどういう反応をするだろう。

それを考えるたびに、胃のあたりがぎゅっとなる。

聡太が眉をひそめた。

「顔が悪い。笹原はここで待ってたほうがいいんじゃないか？」

「いいえ、行くわ」

受け取った服を強く握りしめる。

それでも、行かなければ。

「……準備ができたら来てくれ。外で待ってる」

ため息を吐きながら、聡太は部屋を出て行った。

扉が閉まるのを待って、素早く制服を脱ぐ。

袖を通した服はシンプルで動きやすく、意外と可愛かった。備え付けられた洗面台の小さな鏡をのぞきながら、一体誰が選んだのだろうとどうでもいいことを考える。若い女の人かしら。いずれにせよ、変な服じゃなくてよかった。どんな状況であれ、路音に会うのに可愛くない格好は嫌だった。そういえば路音の私服もこんな風にシンプルで細身だったなと思出し、ボタンを留める手をふと止めた。

路音の私服姿など数えるほどしか見たことがない。会っていたのはいつも制服。講義の合間の休憩時間、中庭の奥にある円弧型のあのベンチだ。

記憶に残っているのは、寝転んで空を見上げる横顔ばかり。

その瞳が、何を見つめていたのか。誰を想っていたのか。

少しも知らなかった。

それでも自分は、彼の一番近いところにいると思っていた。

中庭で、あの透きとおるような笑顔を見る度に。

真夜中のように静かな声を聞く度に。

自分だけが特別で。

自分だけが、路音の素顔に触れている。
そう思っていた。

それなのに。

彼は行ってしまった。

なにも告げず。なにも語らず。私を置いて、行ってしまった。
どうして？

どうして何も言ってくれなかったの。

どうしてひとりで行ってしまったの。

ああ、違った。“ひとり”ではないのだ。

彼はいま、“ヒトガタ”と一緒にいる。

どうして？

『ハコ』から“ヒトガタ”を連れ出すなんて。

その“ヒトガタ”は、あなたの何？

あなたの心に居たのは、私じゃなかったの？

私は、いなかったの？

それなら、どうして。

じゃあさ、付き合う？おれたちも。

あの中庭で、いたずらっぽく笑ったりしたの。

どうして？

どうして。

わからない。

わからないから、会いに行く。

会って、そして確かめたかった。

私は、あなたの何？

その瞳に、私はちゃんと映っていたの？

会って、ちゃんと答えて欲しい。

だから、どうか。

「……逃げないで」
鏡に向かって呟きながら、小雪は頼りなく揺れる自分の瞳を見つめた。

013 追跡者 / metamorphose

人、ひと、ヒトの波。

ぼろを纏い、嗅いだことのない臭いを漂わせながら、人々が路地を流れていく。

また肩がぶつかった。これで何度目だろう。背後で悪態が聞こえたが、もう謝る気にもなれない。

人と物と音がぶつかり合い、ひしめき合い、混ざり合う。ひどい場所だ。

色彩も臭いも得体が知れないものばかり。魔法院中のゴミ箱を一度にひっくり返したとしても、こうはならないだろう。

本当にひどい場所。けれど、と瑞彦は思う。

初めて足を踏み入れた『彩色飴街』で、最初に瑞彦の胸にわき上がったのは嫌悪感でも憐憫でもない。畏敬の念だった。

この街の人々は生きている。自らの足で立ち、自らの力で歩んでいる。

その時、瑞彦は初めて自分たち 魔法院で生まれ、魔法院で育ってきた魔法士たちが “生きている” のではなく “生かされている” のだと気がついた。

自分たちは生まれた瞬間から いや、この世に生まれ落ちる以前から、魔法士となるべく管理育成されてきた。魔法院で必要な教育を施され、能力あるいは家格によって選別された後に、それぞれの役職へ配置される。まるでベルトコンベアに乗せられた工業製品のように、誕生から臨終まで用意された一本道を進むだけだ。

魔法院での暮らしを不満に思ったことはない。疑念を抱いたことも、ない。決められた人生を、与えられるがままに、ただ、生きてきた。

“生きてきた”、つもりだった。

すれ違う人々に目をやる。

安寧とはほど遠い生活を、興味深い、などと言ってもは失礼になるだろう。ゴミと見間違えるほどボロボロにやつれ果て、道ばたにうずくまる人間を何人も見た。なかには、子どもらしき姿もあった。目を背けたくなくなるような悲惨な現実。こんな世界、少しも知らなかった。

あなたはなにも知らない。
。 本当にその通りだ。

貧困、犯罪、暴力、飢餓、疫病、汚染。そして、死も。

人間が生きる上で発生しうるすべての負の現象を、自分は知らずに生きてきた。

それはとても幸運なことだと思う。恵まれたことだと、思う。けれど、“生きている”という感触も、自分は知らない。

子どもたちとすれ違う。痩せた体に、すり切れた服。髪も頬も薄汚れ、見るからに貧しい身なりだ。けれどその瞳に宿しているのは、絶望や悲壮ではない。生きることに対する、貪欲なまでの意志だ。

よく似た瞳を、自分は知っている。

その姿を一瞬だけ目で追って、瑞彦はすぐに視線を前へと戻した。うごめく人波の先。

そこに、黒瀬がいた。

そのかたわらには、“ヒトガタ”。

溢れ返る雑踏のなか、油断すればすぐ見失ってしまいそうな後ろ姿を、瑞彦は必死で追っていた。

二人を見つけることができたのは、ほとんど奇跡と言ってもいい。昨夜、瑞彦たちは桐生導師のあやしげな“伝手”経由で「それらしき二人組」の目撃情報を得たものの、結局その周辺で「それらしき二人組」を見つけることはできなかった。

新たな情報が入るまでの間の搜索は、人が集まりやすい橋の周辺を中心に、聞き込みと人の目に頼ったものとなった。あまりに原始的な方法だ。通常、犯罪者の搜索は街のいたるところに設置されて

いる監視カメラと顔認証システムの役目だが、その設置が第三区の外壁までだということを瑞彦は初めて知った。そこから外側、つまり東側の第四区と『彩色飴街』に、公的な監視カメラは設置されていない。

搜索のために院から与えられた人員はさほど多くない。院に知られずに黒瀬と接触するには好都合と言えば好都合だったが、黒瀬を見つけられなければ元も子もなかった。

橋から橋へと移動しながら、瑞彦は必死で二人の姿を探した。そんな瑞彦をあざ笑うかのように、何千何万という人間がひっきりなしに路地を行き交う。『彩色飴街』は想像をはるかに越える広さと密度を有していた。この街でたった二人の人間を、確かな当てもなく見つけ出すのはあまりにも無謀だ。

それでも、瑞彦は走り続けた。足が棒になるまで駆け回り、焦りと疲労がピークに達した頃、端末に連絡が入った。

“東十三楼三十一層”

情報源はよくわからない。おそらく桐生導師の“伝手”だろう。地図を確認すると、今いるところからそう遠くなかった。

今日中に探し出さなければ、黒瀬と接触できる機会は限りなくゼロに近くなる。

一縷の望みを胸に瑞彦は路地を駆けた。そして目的の場所へ着くより早く、奇跡に近いことが起こった。

路地に流れる人波が途切れた一瞬、そこを横切った人影。目深にフードを被り、ゴーグルで顔を隠してはいたけれど、彼の独特な雰囲気はそう簡単に隠せるものではない。あるいは、院で共に過ごした時間が長い自分だからこそ、気づくことができたのかも知れない。見知ったその横顔に、心臓が跳ね上がる。

「黒……！」

思わず声を上げそうになって、瑞彦は慌てて自分を諷めた。

慎重にならなければ。肝心なのはここからだ。

小雪と北見には連絡をした。他の連中にはまだ知られていない。

好都合だった。これなら、何とかなるかもしれない。

二人のあとをつけながら、瑞彦は必死で思考をめぐらせていた。どうやって声をかけようか。できれば、人気のないところがいい。問題は“ヒトガタ”……いや、それより黒瀬がどう出るか。

暗色のフードを見据えながら、幼い黒瀬のまなざしを思い出す。鮮烈な意志を宿した、あの双眸。

そして次に思い浮かぶのは、まだあどけない空色の瞳だ。

鉛でも呑み込んだように、ずしりと臓腑が落ち込む。

おそらく黒瀬は、これから自分がしようとしていることを許しはしないだろう。

それでも……。

ふいに目の前が真っ暗になった。人の流れが止まり、辺りが騒然となる。

「くそ、またかよ！」

近くにいた男が忌々しげに舌打ちする。天井を見上げ、瑞彦は目を細めた。

「停電、か？」

地上から遠く離れたこの路地に、太陽光は届かない。電灯が消えてしまうと、辺りは夜より深い闇に閉ざされた。

急いで暗視機能のついたゴーグルを取り出す。魔法士が装備する高性能のゴーグルは『彩色飴街』では目立つからと、外していたのだ。

すばやく装着しスイッチを入れると、目の前に緑色の世界が広がった。

「すみません、通して」

暗闇の中で立ち往生する人々を押し退ける。視線の先に、さつきまでであったはずの姿がない。

「まずい、見失ったか？」

背中を冷や汗が流れる。鼓動が高鳴った。

くそ、ここまできて……。

思わず舌打ちしそうになったその時、すぐ目の前で暗色のフードが振り返った。ゴーグルを外して顔を上げ、辺りを見回すその顔は……。

黒瀬だ。

息を呑み、瑞彦はぎくりと足を止めた。

手を伸ばせば届きそうな場所に、黒瀬が立っている。

気づかれただろうか？

心臓が早鐘を打つ。

暗闇だからと安心しているのだろうか、黒瀬はフードをすべて上げて、隠していた顔を大胆に曝している。背後の様子をうかがうようにしばらく目を凝らしていたが、そのまなざしは瑞彦をとらえることなく、黒瀬は再び“ヒトガタ”をうながして手探りで路地を歩き始めた。

ほつと胸を撫で下ろす。よかった。この暗闇のおかげだ。

背後で悲鳴と罵声が上がった。思わず目を向けると、人にぶつかりながら誰かが走り去っていく。

「泥棒！だれか、誰か捕まえておくれ！！」

女の金切り声が虚しく響く。

暗闇に乗じて、あちらこちらで同じようなことが起こり始めている。

「本当にひどいな……」

思わず呟きながら、瑞彦は再び黒瀬の後を追った。

停電は市場の一部だけらしく、しばらく行くと灯りのある路地に出た。市場の喧噪を離れるにつれて、次第に人どおりが少なくなる。思い切って声をかけるべきか迷ううちに辺りはますます寂しくなり、路地にはついに三人の姿しかなくなってしまった。

コンクリートの壁に、こつこつと靴音が響く。

なにか、おかしい。

これは、もしかして……。

転落防止用の柵の前で黒瀬が立ち止まる。そこは『彩色飴街』の

大峽谷に面した、小さな広場だった。壁や床、天井にまで絵やら文字やらが描きなぐられている。切れかけた電灯は耳障りなノイズとともに不規則に明滅を繰り返し、正面には遠く西側の灯りが星のように瞬いていた。

「もういいぞ」

黒瀬の手が、ぼん、となりのフードを叩く。フードに隠された髪が露になった。

「！」

薄茶色の髪。小麦色の肌。見知らぬ顔だ。

“ソラ”ではない。

「脅すようなマネして悪かったな」

黒瀬が紙幣を差し出すと、薄汚れた少年の顔が途端に輝いた。

「もう行っていいぞ。ありがとな、助かったよ」

こくんとうなずき、着ていた上着を黒瀬に手渡すと、少年は逃げるように瑞彦の横をすり抜けていった。

啞然とする瑞彦を、夜色の瞳が振り返る。

「あいかかわらず尾行が下手ですね」

ゆつたりと柵に寄りかかり、黒瀬は艶やかに微笑んだ。

「ソラ、振り向かないで聞け」

雑踏でジインがささやく。その声は唇から出た途端に市場の喧噪にかき消されてしまったけれど、ソラの聴力はそのかすかな息づかいまで鮮明にとらえていた。

「うん……なに？」

少し距離を詰めて、その横顔を見上げる。視線を前に向けたまま、ジインは言った。

「尾行されてる」

「ええっ！」

心臓が跳ね上がる。思わず振り返りそうになったところを、ジインの腕に止められた。

「振り向かない」

「あっ、ごめん。でも、どうしよう……どうするの？」

「うん……どうしようかな」

わずかに頭を傾げて、首筋を撫でる。ジインが考え込む時の仕草だ。

ソラは声をひそめた。

「まいたりできないの？」

「うーん、できなくはないんだけど……」

めずらしく歯切れの悪い返事だ。何か問題でもあるのだろうか。

しばし思索してから、ジインはソラを振り返った。

「おまえ、さっきの靴屋覚えてる？」

「靴屋？……ああ、お店の人が崩れてきた靴に埋まって騒いでたところ？」

「そう。何樓の何層？」

「ええと、となりの樓の二層下だから……十二樓の三十層？」

「当たり前。で、その通りの端っこに骨董品屋があったの、覚えてるか？」

「骨董品屋？」

「ほら、飛空船の模型が売ってた」

記憶をさらう。十二樓三十層の小さな商店街は、屋台や天幕が並ぶ市場と違って、店がちゃんと建物になっていた。道幅が狭くて薄暗く、人通りが少なく、市場よりも歩きやすくはあるが、何だか寂れた感じだった。小さな靴屋の扉のない入口から突然、ガタガタという大きな音とともに靴と箱がなだれ出てきて、下敷きになった親父がもがいているうちに何人かが靴をかつぱらっていった。ひどいなあと思いつつ前を通り過ぎた、その先。珍しくガラスのはまつたウィンドウに、古びた飛空船の模型がぶら下がっていた店。

「……うん。あった。けど、その店がどうしたの？」

「その骨董品屋の裏手に小さな格子扉がある。入ってすぐの梯子を下がると、昨日寝たところみたいなデッドスペースに出るから……そこまで一人で行けるか？」

「えっ？ぼく一人で？」

思わず足が止まる。後ろから人にぶつかられ、二、三步よろめいた。

ジンと別れて、一人で骨董品屋の裏へ。

「行けるか？おまえ一人で」

突然のことに困惑しつつも、ソラはうなずいた。

「う、うん。たぶん、大丈夫。だけど、なんでぼく一人？ジンはどうするの？」

「ちよつと試したいことがあるんだ」

「試したいこと？」

「うん。本当はなるべくおまえと離れない方がいいんだけど……まあ、すぐ済むからさ。少しそこで待っててくれ」

うなずいたものの、胸の中では不安が疼く。

ジンと離れるなんて、思ってもみなかった。

案ずるのは、不慣れな街で単独行動する自分のことが、それとも傷を抱えたジンのことが。

きつと両方だ。

もし離れている間に、どちらかの前に追手が現れたら ……？

「そうだ、尾行は？つけてきてる追手は、どうするの？」

動揺を押し隠し、なるべく冷静に聞こえるようにソラは訊ねた。

「それはこつちで引き受ける。おまえは気づかれないように横道に入って……」

「それじゃ、ジンが危ないじゃないか！もしかして、一人で追手と戦うつもりなの？……それならばくも戦う！」

思わず袖を掴む。自分ではたいして役には立たないかもしれないが、ジンの背中を守るくらいはできるはずだ。

振り返ったゴーグルの奥で夜色の瞳が笑った。

「戦わないよ。戦わないための“仕掛け”を、試しに行くんだ」
「しかけ？」

ジンがちらりと背後をうかがう。

「詳しくは後で説明するよ。とにかく、おれの心配はしなくていい。どちらかというと、おれはおまえのほうが心配だな……」

言いながらこちらを見た横顔に、揶揄の色がにじんだ。

「お菓子くれるって言われても、知らないオジサンについて行ったりしちやダメだぞ」

「は？何それ」

「あと、迷子になって泣きべそかいたりするなよ？」

「か、かかないよ！骨董品屋の裏へ行けばいいだけでしょ？道もちやんと覚えてる。迷子になんてならない。全然大丈夫だよ。小さい子じゃないんだから、ぼくの心配はしなくていいよ」

掴んでいた袖を放し、ソラは思わず声をとがらせた。わずかな反抗心と、与えられた課題を完璧にこなしてみせてやるというやる気が、不安を押し退けて頭をもたげる。

ジンが小さく笑った。

ああ、わざとだな、と思う。わざとからかって、不安を払ってくれたのだ。まるでコントロールされているみたいだ。それでも、悪い気はしなかった。

離れたくないな。

そんな単純な感情が、不安とは無関係のところまでぴかぴかと光った。

ジンがフードを被った頭をポンポンと叩く。

「じゃあ、今からおれが灯りを消すから、そしたら上着を脱いで横道に入れ」

「え、これ脱ぐの？なんで？」

ジンがにやりと笑う。

「尾行対策だよ。べつに寒くはないだろ？中に着てるパーカーのフードは被ったままでな。緊急用端末の使い方は昨日説明したな？」

「うん、大丈夫」

お腹のあたりを押さえる。服の下には廃工場の鍵と一緒に小指大の小型端末がぶら下がっていた。会話しかできない簡素な代物だが、もしもの時の連絡用にと、ジインが用意してくれたものだ。

「なにかあったら、それですぐに連絡を」

「わかった」

離れていても繋がる手段があるのは、とても心強い。

「よし。じゃあザックを手に持って。いいか。3、2、1……」

ジインの瞳の夜色が、すうっと深くなる。

ジジジッ、とノイズを發して、市場の天井にぶら下がっていた電灯が一斉に消えた。

「……行け！」

上着を脱ぎ、ソラはすばやく横道へと駆け込んだ。この暗闇ではほとんど前が見えないのだろう、人々は戸惑い、あらぬ方向へと目を向けている。けれどソラには困惑する人々の表情まではつきりと見えていた。

立ち往生している人々の間をすり抜けて、路地の先へ。

「なあ、ちよつと頼まれてくれないか……」

振り返ると、ジインが見知らぬ少年に声をかけていた。

ジインの“試したいこと”というのはいったいどんなことだろう。追手が来るというのに、本当に一人で大丈夫だろうか。

おれのことには心配しなくていい。

そつだ。少なくとも今は、ジインより自分の心配をすべきだろう。いま自分がやるべきことは、骨董品屋まで無事にたどり着くこと。道や階段の詳しい在処はわからないけれど、目指す場所のだいたいの方向はわかっていた。どうやら方向感覚も“ずば抜けた身体能力”のうちのひとつらしい。音、におい、空気の流れ。それらも、方向を知るのに重要な指針となる。

一応ちらちらと背後を確かめつつ、フードを深く被って路地を急ぐ。一人で行動するなんて、『ハコ』を出てから初めてだ。やる気

と不安で胸が高鳴る。今はまだ、やる気のほうが少し多い。

少し大きな通りに出た。右に行けば東の岩壁側に突き当たり、左に行けば西の街を臨む巨大な谷があるはずだ。まっすぐ進めば十楼へたどり着く。今いるところは東十一楼二十八層だから、骨董品屋のある東十二楼三十層へ行くには、もと来た方向へ戻り、階段がエレベーターを使って二層下へ降りなければならぬ。

追手がいるのなら、もと来た道は避けるべきだろう。
さあ、どうするか。

谷と岩壁方向の路地には行き止まりが多い。
。 。
ジインの言葉を思い出す。

最悪、谷なら下層へ飛び降りることができるとは、逃げる時は楼から楼へ向かう路地を使うのが鉄則だな。一楼から三十二楼まで、ほとんどの路地が繋がっているから。
。 。
路地を左へ曲がり、ソラは谷を目指した。方角は、空気の流れと音でわかる。

もし下層に降りたいのに階段も梯子もエレベーターも見つからない時は。
。 。

「谷側に行けば、壁伝いに降りられる」
狭い路地を抜ける。音が拡散した。空気が変わる。
視界いっぱい広がる巨大な星空。否、本物の空ではない。

広がっているのは、西と東を隔てる『彩色飴街』の奈落の闇だ。
無数に瞬くのは、西側の『彩色飴街』の灯り。闇に浮かぶ光の列は、西と東を繋ぐ細い吊り橋だ。見上げると、遙か遠くに亀裂のような空が光っている。谷がゆるいカーブを描いているので、左右の果ては見えない。

地上四階、地下四十九層。北端から南端まで約40km続く街を三十二の区域に分けて、それぞれの区域を“楼”と呼ぶんだ。
。

ここは東十一楼二十八層だから、街の真ん中よりやや北あたりと
いうことになる。

「広いなあ……」

広大な闇を見回して、ソラは改めて感嘆した。

地上は遙か遠い。地底も、点々と蠢く光がそうなのだろうが、かなり下のほうだ。一步でも踏み外せば、そのまま地獄へまっしぐら……いや、でこぼこと突き出した建物の角にぶつかって、粉々になるのが先か。ものすごく痛そうだ。どちらにせよ、自分の人生はそこで終わりということになる。

きゅ、と気を引き締める。

着地点をよく見定めて、ソラは跳んだ。膝を上手く使って、なるべく音を立てないように着地する。

谷側へ来ることを選んだのは、階段を探して路地をうろろろするよりも、こちらの方が安全だと思ったからだ。もしも追手に見つかって追われるようなことがあっても、自分の体力と跳躍力なら自在に層を行き来できる。迷路のような路地や人通りの多い市場を逃げるよりは、ずっと逃げやすい。

それに、もしジインに何かあったとしても、吹き抜けにいればすぐに駆けつけられる気がした。

上層を見上げ、聞こえない声に耳をすましてみる。

ジインは、大丈夫だろうか。

……。

「あ……」

また、あの音だ。

昨日も街で聞いた、澄みきった美しい響き。

鈴の音によく似た、もつと柔らかで透明な音色。

それは昨日と同じように、頭のすぐ上から降ってくるようだった。始めは一つだった音が、次第に増え、重なりあっていく。美しい旋律。

ああ、なんて心地いいんだろう。

「おい、院からの指示はまだか」

「！」

ふいに聞こえた声に、ソラはぱっと目を開いた。

かなり遠い。下層からの声だ。全神経を耳に集中する。

「まったく、いつまで待機させておくつもりなんだ」

不機嫌そうに男が言う。

「軽く見られてるのさ。落ちこぼれの東部巡視隊なんざ、待たせるだけ待たせておけばいいってな」

「はっ、こっちは西部のやつらほど暇じゃないんだがな」

「まったく、院の連中はいつたい誰のおかげでのんびり研究していられると思ってるんだか。おれたちがせっせと素体を回収してるからだろう？これで西部のほうが優遇されるんだから、やってられんな。こっちは竜の発生率が天と地ほど違うつてのに……」

「しかし院の人間までわざわざ出てくるなんて、その黒瀬ってやつはいつたい何をやらかしたんだ？」

息を呑む。目を見開き、ソラは体を強張らせた。

「さあな。『ハコ』に侵入したとかなんとか……まだ十五歳の院生らしいが」

「ああ、聞いたことがあるぞ。“天然”なんだよ、そいつ」

「へえ、生まれつきか。めずらしいな。おれが院生の時はひとりもいなかったぞ。もしかしたら、笹原長老以来じゃないのか」

「黒瀬……聞いたことのない氏だな。もしかして第三区民以下か？」

「さあな。あの桐生が後見だとかなんとか……」

「相当な『裏懸賞金』がかかったって話だぞ」

「ああ、それならおれたちが動かなくても、この街の連中が血眼になつて探し出してくれるだろう」

「小さな酒場にまで噂が広まってる。いぶり出されるのも時間の問題だ」

「それより、本部から特別編成部隊が派遣されたっていうのは本当か？」

「ああ。どうやら院は何がなんでもそいつを捕まえたらしいな」
「だからって院生一人に一部隊を？……上層部の考えることはよくわからないな」

「まあ、本部まで出てくるのなら、おれたちが動く必要もないだろう」

「そうそう。落ちこぼれは落ちこぼれらしく、こつやってすみっこでサボってればいいのさ」

男たちが笑い声を上げる。

気がつくのと、白くなるほど手を強く握り込んでいた。くるりと踵を返すと、ソラは跳躍し、もと来た層を目指して建物の側壁を登り始めた。

ジンに、知らせなくちゃ。

壁を登る作業は、降りる時より時間がかかる。ソラは懸命に手足を動かしながら、おそらく魔法士である男たちの会話を頭の中で反芻した。

自分たちに高額な『裏懸賞金』がかかったこと。小さな酒場にまで噂が広まっていること。“本部”というところから何だかすごいな部隊が派遣されたこと。

そして、魔法院は何がなんでもジンを捕まえたいらしいということ。

先ほどの尾行は、『裏懸賞金』目当ての賞金稼ぎだろうか。あるいは本部から来た部隊か、それとも魔法院の……？

また、鈴の音が聞こえる。

本当は、言われた場所で大人しく待っているべきなのだろう。もし行き違いにでもなれば面倒だし、自分がそばにいてことでジンの邪魔になる可能性だってある。

けれど、もしジンが捕まってしまったら……！

そう思うと、居ても立ってもいられなかった。

「あ……そうだ」

小さな屋根の上で立ち止まり、ソラは慌てて襟首を探った。

銀色の小さな端末を服の中から引っぱり出す。

この緊急用端末で、ジインに連絡を……………。

ふいに鈴の音が近くなった。本当にきれいな音だ。

けれど、いまは少しうるさい。

心地よい旋律が頭の中に入り込み、思考の邪魔をする。

うつとりとまぶたが落ちかかり、ソラは慌ててかぶりを振った。

とにかく、早くジインのところへ。ああ、違う。その前に、端末で連絡を。

それにしても、本当に、なんて美しいんだろう。

どこからともなく降る澄んだ音の連なりに、心が、体が、軽くなる。

「……………あれ？」

けれど、おかしい。

ずいぶん移動したというのに、音はまだ頭のすぐ上で鳴っているようだった。

時々、耳元で囁くほどに近くなる。

この音はいったい何なのだろう。

耳をすますと、幾重にも重なる響きが急に大きくなった。

「う、わ……………！」

頭の中が音でいっぱいになる。まるで脳みそ全体が揺れるようだ。とっさに耳を塞いだが、音は少しも弱まらない。

ソラはようやく気がついた。

この音は、降ってくるのではない。

音は、自分の頭の中から響いていた。

「……………っ……！」

ぞわりと悪寒が走り、とっさに体を押さえた。

なんだ？

鳴り響く音に細胞が震え、全身が熱くなる。

地面が揺れ、体が傾ぐ。平衡感覚を失って、足元がふらついた。なんだ、これは。

自分の意志では制御できない何かに、ソラは戦慄した。体の一番深いところから、何かが変わっていく。止まらない。止められない。

意識がふいに遠のく。自分ではない何かが、脳を支配していく。引き出され、溢れ出る何かが、ソラを内側から急速に侵していた。言いようのない恐怖に悲鳴を上げる。

押し出される。消えてしまふ。意識、記憶、理性、感情。ソラをソラとして留めるものが、すべて。消えてしまふ。

そして恐ろしいことに、心のどこかでそれを望んでいる自分がいた。

待ち望んでいた解放に、全身が狂喜する。

このまま、身を委ねて。

すべてを解き放つてしまえば ……。

「……っ！！」

違う。だめだ。やめてくれ。

必死で意識をたぐり寄せるが、それは雲を掴むようにすると指をすり抜けていくばかりだ。

いやだ。助けて。誰か。

ジン。

虚空に伸ばした腕から、めき、と嫌な音がした。

腕が、顔が、体が形を変えていく。

悲鳴が咆哮へと変わる。

失われていく、“ソラ”という形。

止まらない。止められない。

ああ、ダメだ。

「…… ジ、イン」

ジンが、待っているのに。

遠のく意識の端で、ソラはジインを強く想った。

ジーン。
いま、そこへ行くから。

「なんだ、一人ですか？挟み撃ちでもされるかと思ったのに。こんなことなら、変に勘ぐらないで市場でまけばよかったな」

わずかに首を傾げて、ジインは唇だけで微笑んでみせた。寄りかかった手すりがぎしりと軋む。背後は奈落の闇だ。切れかかった電灯が視界の端でちかちかと点滅する。

沢木瑞彦は、まだ広場の入口に突っ立っていた。地味な服を着ている。『彩色飴街』にも溶け込む、少しくたびれた雰囲気だ。普段はシワひとつない制服をかつちり着込んでいるというのに。

「わざわざこんなところまで追ってくるなんて、まったく苦勞性ですわね」

「……よくしゃべるんだな」

言いながら、沢木がゆつくりと歩み出す。

「普段はこつちが質問したことにすら答えなくせに」

「……そうですか？」

「そつだよ」

広場の中程で足音が止まる。しばし沈黙した後、沢木は苦笑いを浮かべた。

「……なんだか、久しぶりに会ったみたいだな」

「一緒に昼飯食べてから、まだ三日しか経ってませんが」

「まだ三日か……もう遠い昔のような気がする」

確かに、とジインは思った。『ハコ』へ侵入してソラを助け出し、『彩色飴街』へ逃げ延びて、明日はついに空の上だ。つい数日前まで、魔法院でいつ終わるとも知れない悶々とした日々を過ごしていたことが信じられないくらい、状況は劇的に変化した。

長い長い三日間。

深いため息を吐いて、沢木が顔を上げた。

「院がおまえを捜している。港にはすでに手配が回っていて、無理

に国外へ出ようとすれば……その場で処断される可能性もある。軍はまだ表立っては動いていないが、強固な検問が敷かれるのも時間の問題だ」

「たかが脱走者の捕縛に、ずいぶん大掛かりですね」

「たかが脱走者じゃない。おまえは『ハコ』を襲撃して“ヒトガタ”を連れ出した、立派な犯罪者だ。しかも貴重な天然の魔法使いで――

「身よりも後ろ盾もない、東の出身者。だから背反者として捕まえれば、堂々と研究所送りにできる。格好の研究材料だ。今までにかとおれを擁護してくれた笹原長老も、さすがに今回ばかりは庇いきれないでしょうね」

他人事のような物言いに、沢木が眉をひそめた。

「それがわかっていながら、どうしてこんなことを……あの“ヒトガタ”が、そんなに大切か？」

答えるかわりに、ジインは薄く微笑んでみせた。

こちらを見つめる濃灰色の瞳が、すっと細められる。

「……“ヒトガタ”をどこへやった？」

「さあ、どこでしょう」

「ふざけるな。“ヒトガタ”を放っておけばどうなるか、知らないわけじゃないだろう」

「おれにとっではどうでもいいことです」

「どうでもいいだと？一緒にいれば真つ先に襲われるのはおまえなんだぞ！」

鋭い声が広場にこだまする。沢木が苦しげに顔を歪めた。

「考えたんだ、おれなりに。おまえにとって何が最善の道なのか。すべてを丸く収めて院に戻すべきか、それとも院を欺いてどこかへ逃がすべきか。それを実現させるにはどうすればいいの。おれにできることは何か。ずっと、ずっと考えてる。何が正しいの。か。おれに、そんなことはわからない。それでも、たとえおまえがどんな道を選んだとしても、おれはおまえを手助けしたいと思ってる。それ

が院の意志に反したとしてもだ。……だがな、黒瀬」

一呼吸置いて、沢木の眼光が鋭くなった。

「……“ヒトガタ”をそばに置くことだけは、許せない」

「は……“許せない”？ 沢木さん、あんたいつからおれの保護者になつたんだ？」

「何とでも言え。おれはただ、おまえを死なせたくないんだ」

ぱきんと涼やかな音が響く。沢木の手は無色透明の結晶が現れた。『支柱晶』だ。

「おまえはあの“ヒトガタ”を家族だと思っっているのかもしれない。いや、おそらく大切な家族なんだろう。でも奴は“ヒトガタ”だ。

どんなに大切に想っても、いつか必ず正体を現す。そうなれば

……」

言いよどみ、沢木は口を引き結んだ。十分な長さとなつた『支柱晶』を一振りする。りん、と空気が震えた。

「おまえが惨たらしく殺されるのを黙って見過ごすわけにはいかない。そうなるまえに、あの“ヒトガタ”は……おれが捕縛する」視線がぶつかる。いつになく剣呑な光を帯びた双眸を睨み返して、ジインは不敵な笑みを浮かべた。

こんな展開を予想していたわけではないけれど、やはりソラを遠ざけておいたのは正解だった。

こんな話を聞かせるわけにはいかない。

だって、ソラはまだ気づいていない。

いつか自分がたどることになるかもしれない末路を、まだ。

できればこのまま、気づかないで欲しい。

「……希望は、まだ、ある」

口の中で呟いて、ジインはさりげなく足元へ目をやった。鉄板を敷き詰めただけの粗雑な床。そこを埋め尽くすラクガキに、紛れるように描かれた大きな図形。ぐるりと広場の中心を囲むその内側に、沢木は立っている。

位置はまずまずだ。

「さあ、上手くいくか……？」

「もう一度聞く……“ヒトガタ”はどこだ」

沢木が、じり、と間合いを詰める。

すつつと息を吸い込んだ、その時。

「彦ちゃん！」

聞き覚えのある声が張りつめた空気を震わせた。路地のほうからばたばたと慌ただしい足音が近づいてくる。

「……小雪？」

広場の入口に現れた人影に、ジインは目を疑った。

笹原小雪。北見聡太も一緒だ。

こちらを見とめた小雪の顔が、喜びと安堵に輝く。けれどそれは一瞬のことで、小雪はすぐにまなじりを吊り上げると、カツカツと靴音を鳴らして一直線にこちらへ向かってきた。

「ちよつ、おい、笹原っ?!」

制止する北見の腕が虚しく空を切る。次の瞬間、ぱん、と乾いた音が耳元で弾けた。

驚いて、ジインは目の前の少女をまじまじと見つめた。叩かれた頬がじんと痛む。

「説明して」

小雪の大きな瞳に、みるみる涙がたまっていく。袖を掴むと、小雪は力任せにジインを揺さぶった。

「説明してよ！ いったいこれはどういうこと？ どうして……どうして、こんなことに」

「小雪」

「あの“ヒトガタ”はあなたの何？ 弟が“ヒトガタ”だったの？ だからって『ハコ』から連れ出すなんて、これからどうするつもりなのよ……!」

「おい、落ち着けよ」

「落ち着けるわけないでしょう! どうしてあなたは落ち着いていられるのよ!」

悲鳴に近い叫びが広場に反響し、奈落の闇へと吸い込まれていく。言つべき言葉が見つからず、ジインはただ黙って突っ立っていた。まさか、小雪までこんなところへ来るとは思っていなかった。入り込む余地を見出せず、沢木と北見はただ成り行きを見守っている。

細く息を吐き、やや落ち着きを取り戻した小雪が、悲しげに眉を歪めた。

「……『貧困街』の出身だつて聞いた。きっと弟さんは何かの手違いで、生まれてすぐの検診を受けなかったのね。それで、“ヒトガタ”だと気づかれずに人間として育てられてしまった。あなたの弟として」

温もりが手に触れた。小雪の手が、ジインの両手を強く握り込む。「もし私の大切な人が“ヒトガタ”だったらつて、考えてみた。すごく……すごく辛いことだと思う。それでも、“ヒトガタ”と暮らすことなんてできない。無理なのよ」

小雪が顔を上げる。潤んだ灰緑色の瞳が、すぐるようにこちらを見上げた。

「路音、一緒に来て。ちゃんと許してもらえよう、私、伯父さんにお願ひする。だから」

「小雪」

諭すようにその名を呼んだ。揺れる瞳をまっすぐに見据える。

「できないんだ」

言いながら、ジインは小雪の指からそつと手を引き抜いた。

「もう院には戻れない。あいつを『ハコ』に閉じ込めて見殺しにするなんて、おれにはできない」

「でも……!!」

「理屈じゃないんだ。まともじゃないつて、わかっている。それでもおれは、あいつを失いたくない」

「……自分の命を危険に曝してもか？」

沢木が固い声で問う。

「黒瀬。どんなに大切に想っても、“ヒトガタ”は“ヒトガタ”だ。今はヒトの形をしていても、いつかは」

「ヒトの姿のまま、一生を終える奴もいます」

「たった1ケース、しかも三十年以上前のデータだろう」

「それでも、可能性はゼロじゃない」

「黒瀬、気持ちはわかるが……」

「わかるわけないだろう」

すつと心が冷える。同時に、熱い怒りがわき上がった。

“気持ちはわかる”だと？

「なにも知らないくせに、あんたにいったい何がわかるって言うんだ……！」

すべてが雪に埋もれた、あの夜。

その絶望が頭をかすめて、ジインは固く目を閉じた。

「あんたたちにはわからない……絶対に、わからない」

何度も、何度も奪われた。

その度に、魂まで引き剥がされるようで。

空っぽの手には、温もりさえ残らない。

だから、決めたのだ。

すべてを失い、ソラを拾ったあの日に。

これで、最後にしよう。

「あいつがいるから、おれは生きていられる。先がなくてもかまわない。あいつを失うくらいなら、こんな世界……おれはいらない」

どんなに強く抱きしめても、何ひとつ、この手に残らないのなら

……。

「あいつと離れるくらいなら、いつそ噛み殺されたほうがマシだ」

「黒瀬……！」

そう、誰にもわからない。わかってもらおうとも、思わない。

「だからおれは、あいつを守るためなら」

立ち尽くす小雪の肩を、とんと押しした。

「なんでも、できるんだ」

ぱちつと火花が爆ぜた。床に光の線が走り、三人を囲んで円形の図が浮かび上がる。

「っ！逃げる小雪！！」

沢木が叫ぶ。しかし、もう遅い。

「きゃ……っ！！」

「えっ？う、わー！！」

閃光に驚いた小雪と北見が尻餅をつく。けれどその両足は床にぴたり貼り付いたまま、ぴくりとも動かない。

「な、なに？！」

「足が、動かない！……なんだよ、これ？！」

「気をつけるよ北見。無理に動くと骨が折れるかも」

「な、なんだって？！」

「これは……式術か」

足の下で淡いグリーンに発光する図形をまじまじと眺め、沢木が呟いた。北見が驚きに目を見張る。

「式術？！嘘だろ、こんな……ピアナ濃度の低い場所？」

「既存の術式に、結晶化の式を組み込んだ。意外とうまくいったな」
呟いて、ジインは術式の前にしゃがみ込んだ。発光する線の表面には、ピアナクロセイドの細かな結晶がキラキラときらめいている。
「こつという仕掛けをいたるところに仕込んである。式術は手間がかかるし効率が悪いから軍では実用化されていないけど、こんなふう
に一人で複数人の魔法士を相手にするなら、なかなか有効だ」

立体地図に記してある無数の赤い点。それらはすべて、対魔法士用に仕掛けたトラップだった。そのほとんどが、古い資料をかき集め、研究と改良を重ねて編み出した独自の式術だ。基礎的な術式同士を組み合わせて、ピアナクロセイド粒子をさらに複雑に反応させていく。要はドミノ倒しの原理だ。空気中のピアナクロセイド濃度が足りないせいで大規模なものは作れないが、このくらいの子ども騙し程度のもので十分な足止めになる。

「痛みはないですね？」

「ああ、痛くはない……けど、膝から下がまったく動かない。すごいな、これ……」

沢木の呟きは、状況にまったくそぐわない感嘆を含んでいた。こんな時でさえ、知識欲がかき立てられるらしい。本当に呆れるほどの勤勉さだ。

「思う存分観察して下さい。たぶん、十分前後で自然に解けますから」

どうぞごゆっくり、と皮肉まじりに言って、ジインは立ち上がった。

腕の端末を確かめる。ずいぶんと時間を食ってしまった。

早く戻らなくては。

「あっ、おい、待てよ黒瀬……！」

慌てて腕を伸ばす北見には目もくれずに、まっすぐ広場の出口へ向かう。

ソラは無事にデッドスペースまでたどり着けただろうか。

広場から出たら、端末で連絡を試みよう。

「待てよ……待てたら、……っ！」

がん、と床が揺れた。

「おまえ、本当にこれでいいのかよ……！」

北見の声が背中にぶつかる。床に叩き付けた拳を強く握り込んで、北見は叫んだ。

「自分がやってること、本当にわかってるのか?! 沢木教士も、笹原も、おまえのこととだけ心配したと思ってんだよ! おまえは生まれつき力があって、才能もあって、……それなのに、全部、こんなに簡単に捨てるのかよ。ふざけるな!」

北見の怒声が虚しく響く。

ふいに、ジインはかすかな罪悪感を覚えた。

それは、院に背き“ヒトガタ”を連れ出した自分の行いに対してではない。

“友人”と呼べるほどの時間を共に過ごした人たちを、式術にか

けたまま置き去りにすることに対してでも、ない。
すまないと思うのは、相手の言葉に、まなざしに、少しも動かさ
れない自分の心。

沢木の忠告も、北見の怒声も、小雪の涙でさえ、さらさらと乾い
た砂のようにどこへともなくこぼれ落ちて、少しも心に残らない。

何も感じない。何も思わない。

それを、少しだけ申し訳なく思った。

「……ひとつだけ聞かせて」

小さい、けれども有無を言わさぬ声音に、思わず足が止まる。

うつむいたまま、小雪は静かに言った。

「最初から……院に来た時から、“ヒトガタ”を連れてどこかへ逃
げるつもりだったのなら……どうしてあの時、あんなことを言った
の？」

じゃあさ、付き合う？おれたちも。

そう言ったのは、確かに自分だ。

いつからか、二人で過ごすようになった、あの中庭で。

いつものように、とりとめのない話をしながら。

他愛のないことで、少し笑って。

二人並んで、空を見上げた。

ささやかな、安息の時間。

「あれは、全部ウソだったの？」

振り返る。蛍色のやわらかな光が、三人をほのかに照らしていた。

栗色の髪に隠されて、小雪の表情はうかがえない。

全部ウソだった。

そう言えば、小雪は楽になるのだろうか。

愛情が憎しみに変わるほどの台詞を吐いて。

嫌われるように、仕向けるべきだろうか。

「……おれは」

口を開きかけた、その時。

どん、という衝撃が足元から突き上げてきた。

下層から悲鳴が上がる。配管が破裂でもしたのか、凄まじい水蒸気が立ち上った。

「な、なに……?」

ただならぬ雰囲気小雪が身をすくませる。

「何か……爆発したのか?」

沢木と北見も顔を見合わせた。

「おい黒瀬、これもおまえの仕業か?」

「違う……」

奈落からもうもうと立ちこめる水蒸気を見上げた瞬間、凄まじい咆哮が響き渡った。

「っ!!」

びりびりと空気が震える。

ジインは一瞬で『支柱晶』を出現させ、同時に床を蹴った。

「伏せる!!」

術式の前に飛び出し、ありつた力の力で防護壁を張る。途端、轟音とともに視界が赤く染まった。小雪と北見が悲鳴を上げる。電灯が砕け散る音がした。

「く……っ!!」

一面に広がる、紅蓮の炎。

防御壁でも防ぎきれないその熱が、ひりひりと頬を焼いた。

熱い。指先に火がつきそうだ。

この炎は ……!

炎が途切れたわずかな隙に、ジインは防護壁を崩して思いきり『支柱晶』を薙ぎ払った。空気が裂け、立ちこめる煙の向こうで咆哮が上がる。

『支柱晶』で術式の要を壊すと、ジインは叫んだ。

「逃げる!!」

座り込んだままの小雪を引き起こす。そこへ、鞭のような一撃が襲ってきた。

「っ!!」

間一髪直撃を避けて、小雪を抱いて床へ転がる。長い尾が壁と柵を破壊した。

「このの……っ！」

水蒸気の向こうに揺らぐ影めがけて、ジインは『支柱晶』を投げつけた。短い咆哮が上がる。“繋がった”。両足を強く踏みしめ、意識を手のひらに集中する。

「……ハッ！！」

『支柱晶』が描いた軌跡に向かって、ジインは思いきり手のひらを突き出した。水蒸気に穴が開く。じんと骨に響くほどの重い手ごたえの後に、大きな気配が咆哮とともに遠ざかった。下層に落ちたようだ。

止めていた息を吐き出し、その場に膝をつく。

「 笹原っ！」

「小雪、黒瀬！無事か?!」

沢木と北見が駆け寄ってくる。光源を失って、広場は薄暗闇に包まれていた。LEDライトを取り出して、軽く念じる。青白い光が、強張った顔をぼんやりと照らし出した。

へたり込んだまま、小雪が呆然と声を震わせる。

「いまのは……あれは、なに？」

炎と咆哮。長い尾。そして、あのシルエット。

あれは間違いなく。

「 竜だ」

水蒸気の向こうを見ながら、ぼそりと呟く。

巨大な翼で空を駆け、灼熱の炎を吹き、人々を脅かす異形の化物。

北見が息を呑んだ。

「それって、まさか……」

「違う」

北見が言おうとしたことを、ジインは真っ先に否定した。

まさか、そんなはずはない。

だって、さつき別れたばかりだ。

そんなはずは、ない。

「東では二十日に一度は出る。それほど珍しいことじゃない」

「そ、そんなに？」

「ああ。院の公式データには記録されないけどな。沢木さん、院から来ている人手は三人以外にいないんですか？」

「他にもいるが、ただの警備兵だ。魔法士じゃない」

「じゃあ、すぐに監視塔へ連絡して魔法士団を呼んで下さい。それから三人とも早く安全な場所に避難して……いや、できるだけ遠くへ逃げて下さい。できれば監視塔まで戻った方がいい。竜は魔法使いを狙うから、三人もかたまっていたら格好の的だ」

「格好の的って……」

北見の顔が青ざめる。小雪は身をすくませて、ジインの袖を掴んだ。目と目が合う。小雪は慌てて手を離し、決まりが悪そうにうつむいた。

端末で緊急信号を送りながら、沢木が水蒸気のほうへちらりと目をやる。

「魔法士団はどのくらいで到着するんだ？」

「確実に半日はかかります」

「半日も？最寄りの監視塔なら、一時間もあれば十分だろう。どうしてそんなに……」

「さあ。シャワーでも浴びてから来るんじゃないですか？早くて半日、遅い場合は三日経っても来ません」

「まさか、冗談だろう？」

「二年前におれが襲われた時は、通報から二日経ってました」

沢木が言葉を失う。奈落のほうへ注意を向けながら、ジインは口早に続けた。

「今回はあんたたちがいる。大事な院生を助けるために一目散で駆けつけてくると思うけど、どちらにせよあと一時間はかかりません。だから早く逃げないと……」

「魔法士団を待つ間、街の人たちはどうするんだ？」

「もちろん、逃げますよ」

「安全な避難場所があるのか？」

「そんなものはありません。各自バラバラに逃げるだけです」

「それじゃあ、相当な被害が出るんじゃないのか？」

「いいから、早く逃げて下さい。今は人の心配をしてる場合じゃない」

「でも、竜をこのまま放っておけば……」

「沢木さん！」

声を荒げて、ジインは沢木の腕を掴んだ。

「無茶なことはやめて下さい。無理ですよ。これは訓練とは違う……薬で弱らせた竜を叩きのめすのとはわけが違うんだ。院と違って、ここはピアナ濃度も低い。何人かの院生が力を合わせたところで、竜を倒すことは不可能です」

「しかし……」

「安易な正義感で命を無駄にするなど言ってるんだ！」

苛立たしげに言い放ち、ジインは沢木を出口のほうへと押しやっ
た。

「いいから、早く逃げろ！ここであんたたちにできることは、何も……」

その場にいる全員が、はっと奈落のほうへ目をやった。

水蒸気の向こう、下層のほうから、ごうごうと大きな羽ばたきが
近づいてくる。

「……逃げようにも、そうさせてくれないみたいだぞ」

小雪を後ろへ庇って、沢木が後じさる。

「こ、こっちへ来る……?!」

「クソッ……！」

舌打ちして、ジインは再び『支柱晶』を出現させた。

「おれが足止めます。その間に三人とも早く逃げて下さい」

「黒瀬?!」

北見が驚きに目を見張り、小雪が息を呑む。

「そんなことできるわけないだろう」

無然とする沢木を、ジインは振り返りざまに怒鳴りつけた。

「あんたたちが逃げなきゃ、おれも逃げられないんだよ！」

目と目が合う。言ってしまったから後悔した。顔が熱くなる。

「黒瀬……」

こちらを見つめるまなざしから、ジインは顔を背けた。

「……あんたたちにここで死なれたら、おれのせいみたいで寝覚めが悪い。いいから、さっさと逃げてくれ。おれはこの街に慣れてる。あんたたちの倍の速さで逃げられるんだ」

「でも……！」

小雪が悲痛な声を上げる。わずかに思案して、沢木が口を開いた。

「……四人なら、何とかなるんじゃないのか」

「沢木さん」

「今から逃げても、黒瀬が倒れば背中を襲われるだけだ。仕留めることは無理でも深手を負わせることができれば、その間に逃げられる。黒瀬一人に足止めを任せるよりはいいだろう。院生とはいえ、こつちには天然の魔法士がいる。勝算はある」

「ですが、教士……」

うろたえる北見の肩を、沢木が叩いた。

「大丈夫だ、訓練通りに動けばいい……小雪、おまえは大丈夫か？」

「ええ、大丈夫」

青ざめた顔で、けれどしつかりと小雪は頷いた。

「そういうわけだ、黒瀬」

深いため息を吐く。竜の気配は、すぐそこまで迫っていた。もう考えている暇はない。

「……北見と沢木さんで動きを封じて下さい。その隙に、おれが竜を仕留めます」

「黒瀬、おまえ大丈夫なのか？」

北見が心配そうなまなざしを向けてくる。

「……攻撃はおれがやる」

沢木の提案に、ジインは首を振った。

「この中じゃ、おれのコントロールが一番いい……大丈夫です」

『支柱晶』を握り込んで、ジインは水蒸気の向こうを見据えた。

大丈夫。相手は、“ただの”竜だ。

自分とは何の関係もない、ただの竜……。

「おれと北見の力じゃ、数秒が限界だぞ」

「わかってます。小雪は、万が一に備えて後方から防護を」

「わかったわ」

『支柱晶』を出現させながら、小雪が頷く。

チャンスは一撃。

さっさと終わらせて、早くここから離れなければ。

駆けつけた魔法士に囲まれてもしたら、洒落にならない。

それより、竜にやられてここで死んだら本当にバカみたいだ。

「つたく、どうしてこんなことに……」

ちよつと式術を試してみるつもりが、とんだ回り道になってしま

った。

ソラは、大丈夫だろうか。

先ほどの悲鳴といい、爆発といい、下層では騒ぎが広がっている

に違いない。

きつと心配しているだろうな。

とにかく、早く戻らなくちゃ ……。

羽ばたきが、水蒸気のすぐ向こうに迫る。

焦燥を胸の隅に追いやって、ジインは意識を集中した。

「来るぞ！」

突風で水蒸気が吹き飛んだ。視界が開ける。

真っ先に目に飛び込んできたのは、夕日のように輝く金色。

その瞬間、すべてが止まった。

「え……？」

金色。

だって。

そんな。

まさか。

「黒瀬、今だ！」

うそだ。まさか、そんなこと。

そんなこと、あり得ない。

だって、さつき別れたばかりだ。

違う。絶対に、違う。

これはきつと、なにかの間違い。

首のあたりで、きらりと何かが光った。

「っ！！」

悲鳴が声にならない。全身の血が引いていくのがわかった。

そんな。そんな。そんな。

嘘、だ。

「おい、黒」

からん、と澄んだ音を立てて、ジインの手から『支柱晶』が滑り

落ちた。

結合していた粒子が粉々に砕け散り、かすかな光を放って霧散する。

「路音?!」

金色に輝く翼。

その首に揺れる、鈍色の鍵。

きらりと光る双眸は。

鮮やかな…………。

「…………ソラ」

悲鳴に似た咆哮が、奈落の闇をつんざいた。

015 狂気の沙汰

「ソラ……」

その眩きに、瑞彦を始めその場の全員が凍りついた。

これが、“ソラ”？

目の前の竜を凝視する。金色の鱗。空色の光彩。確かに残留色素特徴は“ソラ”と一致する。

でも、まさか。

確かに、“ヒトガタ”が竜化する時期に規則性は無い。三日後か、はたまた三十年後か。“その時”がいつ来るのかは、誰にもわからないのだ。

でもそれが、よりによって今この時だなんて。

黒瀬の横顔を見る。血の気の失せた頬が、見開かれた双眸が、それがまぎれもない事実であることを示していた。

……なんてことだ。

ふつと辺りが暗くなる。黒瀬が魔法で光らせていたLEDライトが消えかかり、瑞彦は慌てて黒瀬の手からそれをひったくった。電源を入れると、青白い光が黒瀬の横顔をさらに青白く照らし出した。動きを抑えられていた竜が、ぐ、と首をもたげる。その喉がぶくつと膨れ上がった。

「小雪！！」

はつと我に返った小雪が『支柱晶』を掲げるが、間に合わない。

「だめだ、避ける！」

とっさに黒瀬を抱えて横へ転がる。灼熱の炎が床を焦がした。

「う、うわあああっ！！」

かろうじて避けた北見が尻もちをついたまま後じさる。すぐ目の前で、竜が牙を剥いた。飛び出した小雪が『支柱晶』を水平に掲げ、防護壁を張る。寸でのところで、竜のひと噛みは見えない壁に弾かれた。

瑞彦はすばやく床の術式に目を走らせた。黒瀬が壊した箇所を探す。

「北見、小雪、術式から出る!!」

二人が転げるように術式の上から出たと同時に、一か八か、欠壊した式を繋げる。術式が光り、竜の手足が凍りついたように動かなくなつた。

「今だ、退け！」

放心したままの黒瀬を引きずるようにして、瑞彦は狭い通路へと駆け込んだ。頼みの魔法士がこんな状態では、どうすることもできない。竜の咆哮に背中を押されるように、四人は走つた。苦しげな息切れと慌ただしい靴音が、暗闇の中に響く。

「ソラ、が……」

弱々しく呟いて、黒瀬が背後を振り返る。その足が次第に重くなり、止まつた。

「黒瀬?!」

「放してくれ……ソラが……戻らなくちゃ……!!」

広場へ戻ろうと黒瀬が身をよじる。

「いい加減にしろ!!」

瑞彦は黒瀬の胸ぐらを掴むと、そのまま壁に背中を押しつけた。

夜色の双眸は、広場のほうへ向けられたままだ。

この期に及んで、まだ“ソラ”のことを。

「彦ちゃん、やめて!!」

小雪が腕を押さえる。それでも手を緩めずに、瑞彦は黒瀬の横顔を睨みつけた。

「いい加減に目を覚ませ、あの竜を見ただろう?! “ヒトガタ”は竜の第二形態……胎児を食い殺してすり替わる、人の形を真似た化け物だ! 第三形態に竜化した“ヒトガタ”はもう元には戻らない、おまえの“ソラ”はもう消えたんだ!!」

びくりと黒瀬の肩が震える。その唇がゆっくりと動いた。

「消……えた?」

「そつだ、消えたんだ。“ソラ”はもういない。あの竜の“ソラ”という人格は、もう消えてしまったんだ。……とにかく逃げよう。先のことを考えるのはそれからだ」

遠い竜の咆哮が、闇の向こうから小さく聞こえる。

行くぞ、と二の腕を掴んで強く引いた。けれど、黒瀬の足は鉛のように動かない。

「……てない」

「なに？」

「まだ、消えてない」

広場へ向けられていたまなざしが、すうつとこちらを向いた。息を呑む。

まるでガラス玉のように、ただ静かに澄みきった瞳。

その双眸に映っているのは、絶望でも悲しみでもない。

一片の曇りもないその瞳が映すのは、ただひとり。

「あいつは、まだ消えてない」

闇の中で鮮やかさを増した夜色が、ゆっくりと瞬く。

「絶対に離れないと、約束した。おれには、まだやるべきことがある。あいつのために、できることがあるから」

「恐ろしいほどにまっすぐな、その眼差し。」

どこまでも底のない一途さは、狂気にも似て。

もう、この手には負えない。

「だから、手を放してくれ」

まるで暗示にかかったように、腕から力が抜ける。

ふい、と顔を背け、黒瀬は身を翻した。

小雪も北見も、その場から動かない。動けない。

闇の向こうに、黒瀬の背中が消える。

温もりだけが残された拳を、瑞彦は痛いほど握りしめた。

もと来た道を戻らずに、ジインは途中で角を曲がった。建物と建物の狭間、一人がやっと通れる隙間を抜けて、配管の上を跳ぶ。たどり着いたのは、広場に近い奈落へとせり出した鉄筋の上。ここなら、少し奥まったところにある広場の様子がよく見える。

金色の竜は、まだ式術に捕われてもがいていた。一度壊したにもかかわらず、竜の足止めまでできるとは、術式は予想以上の出来だったようだ。それでも、保ってあと数分ということだろうか。

「……まずいな」

独り言つ。状況に関してではない。

まずいと思うのは、自分自身の精神状態だ。

自分は今、あまりにも落ち着きすぎている。

先ほどまでの動揺は消え失せ、胸の中は驚くほどに静かだ。

こんな状況なのに冷静でいられるのは、自分が現実を受け入れられていない証拠。

一番恐れていた事態が、いま目の前で起こっている。

いつかはこうなると、知ってはいた。

けれど、わかってはいなかった。

もしかしたら、こんな日は来ないかも知れない、などと淡い期待まで抱いていて。

そんな自分に、覚悟なんてあるはずもない。

“ヒトガタ”の竜化は不可逆だ。竜になったソラは、もう人の姿に戻ることはない。

もう、会えない。

空色の瞳に。弾けるような笑顔に。

もう二度と、会えないなんて。

ぐにやりと世界が歪んだ。ずぶ、と足が闇へと沈みかけ、視界が暗くなる。

「だめだ」

唇を強く噛んで、ジインはその場に踏みとどまった。信じるな。今は、まだ。

まだ、気がつくな。

失ってしまったことに、気がつかないフリを。そうしないと、この場に立っていることすらできなかった。

金色の竜が吠える。暴れる長い尾で、広場が破壊されていく。

そう、今はあの竜を逃がすことだけを考えるんだ。

がこん、と足場が揺れた。すぐ近くに着地した沢木を、ジインは横目で見る。

「……どうして、ついて来たんですか？」

「連れ戻しに来たわけじゃないから安心しろ。“まともじゃない”

おまえを説き伏せるのが不可能だつてことは、よくわかったから」

揺れがおさまるのを待って、沢木がそっと立ち上がる。その視線が、ちらりと眼下の奈落へ向けられた。

「じゃあ、どうして……」

「さあ、どうしてだろうな」

自嘲の滲む声音で、沢木が苦笑いする。

「自分でも、どうしてここにいるのかわからない。おまえは何を言っても聞きやしないし、もう本気で監視塔へ引き返そうとしたんだが……」

肩を落とし、溜め息を吐く。

「だけどな、どうしても放っておけない。自分勝手に気まぐれで、他人のことなんかまるで眼中にない、友達甲斐のない酷い奴だつてわかってるのに 見捨てられない。これはもう病気だな。きつとおまえの“まともじゃない”のが伝染つたんだ」

頭一つ高い位置にある横顔をジインは見つめた。何かを諦めたようなその表情は、晴れやかとまではいかないまでも、暗く沈んではいなかった。

春先に暖かい雨をもたらす低い雲を思わせる濃灰色の瞳がこちらを見る。

「それで、あの竜をどうするつもりだ」

硬い声で問われる。深呼吸をひとつして、ジインは奈落を見上げ

た。遙か頭上で、細長い空が白く輝く。

「飛空を使って上層へおびき寄せて、空へ逃がします」

「自分が囿になるつもりか？ そんなの、すぐに追いつかれるぞ。空に出るまえに食われるのがオチだ」

「仕掛けてある術式を使います。距離が縮まったらそれで注意を逸らして……」

「空に出た後は？」

「最上階に竜避けのピアナ砲があるはずです。それを使って、さらに上空へ追い払う」

「おれにできることは？」

沢木を見る。濃灰色の瞳に、苦笑いがにじんだ。

「ここまで来ておいて、ただ見ているだけじゃ間抜けだろう。正直に言えば、やはりあの竜を処分することが事態を丸く治める一番の方法だと思う。竜の飛行速度を考えるとおまえの言う方法で竜を逃がすのはかなり無謀だし、無事に空へ逃がしたとしても人間を狙って戻ってくる可能性が高い。……と、言ったところでおまえを止めることができないのはよくわかったから、それなら少しでも成功率を上げるために手を貸すのが最善の道だろう」

「でも……」

危険だ、という言葉が喉まで出かかって、止まった。

沢木だって、そんなことは百も承知のはずだ。

「……沢木さん」

「なんだ」

「いい人ですね」

「気づくのが遅すぎるな」

どちらからともなく、二人は笑った。穏やかな、心地よい笑いだ。二人でこんなふうに笑い合ったのは、初めてかも知れない。

竜の立つ広場の床が、嫌な音を立て始める。

「追いつかれて、おれが食われそうになったら援護して下さい。あと、最上階のピアナ砲を……」

「ピアノ砲はあの二人に任せる。おれは竜の進行に合わせて上へ」
「それと、非常用のピアノ槽を開放するよう監視塔に連絡を。ピアノ濃度をもう少し上げられれば……」

ぎざぎざ、と重い金属音が響く。術式の描かれた鉄板が竜の脚とともにめくり上がり、淡緑色の光が消えた。羽を揺らして、竜が奈落のほうへと顔を向ける。

「竜にあまり近づきすぎないで下さい。食われますよ」

「言われなくてもわかってる。……言っておくが、こんなことその場しのぎだぞ」

竜の姿を遠く見つめて、沢木の声が暗く沈む。

「空へ逃がして、そのまま戻ってこなければそれはそれでいいが、もし戻ってきたら……その時はどうするつもりだ」

竜は人間を、とくに魔法使いを狙って、襲う。

もし竜が、人の多いこの街を離れようとしなければ。

「その時は、飛空でそのまま旧市街の廃ビル群へおびき寄せます。あそこなら誰もいない。人的被害は最小限で済むはずです」

「おびき寄せて、その後は？」

「その後は……」

自分が囿になって、竜を廃墟のビル群へ。

そして。

「その後はどうするんだ」

「その後、は……」

「どうするんだ。答えろ、黒瀬！」

竜化は不可逆だ。

もう、ソラは戻らない。

ソラのいない世界なんて。

「そこでおしまい、です」

「……どういう意味だ」

沢木が青ざめる。ジインは『支柱晶』を出現させた。

「おい！」

「行きます」

魔法で足場を作り、上層へ跳躍する。
ふと思いついて、沢木を振り返った。

ありがとう、とか。さようなら、とか。

何か言っべきか迷ったが、どれも白々しい気がした。

だから、微笑む。

沢木は、色々なものを与えようとしてくれた。手を、差し伸べてくれた。

けれど自分は、何一つ返すことができない。

だからせめて、心からの笑顔を。

わずかに驚いた後、沢木は苦しげに顔を歪めた。

「……バカ野郎!!!」

沢木の怒鳴り声を背に、あとは脇目も振らずに広場の近くまで跳んで行く。

下層からの炎が広場を照らしていた。白く煙る闇がほのかに赤く染まり、どこか妖しく幻想的だ。点在する灯りが、まるで散らばる星のようで。

赤い炎に照らされて、竜が黄金に輝く。

金のうろこ。金の背びれ。強靱な力の詰まった四肢に、無駄のない流線型の体。不思議な光沢のある薄い羽が、船の帆のようにばさりへと広がる。

美しい生き物だ。

最新設備の大型飛空船でも到達不可能な『神ノ庭』に唯一入ることを許された、“空と神に愛された獣”。

空を駆け、炎を吐き、人を喰らう異形の化け物。

この世でもっとも速く、もっとも獰猛で、もっとも謎に満ちた生命体だ。

拳ほどもありそうな眼球が、こちらを捉える。

見覚えのある、鮮やかな空色。

その鋭い眼光に、背筋が震える。

「ごくり、と唾を呑んだ。

「……おいで、ソラ」

ゆっくりと『支柱晶』を構える。鎌のような爪が、きしきしと広場の端を掴んだ。

「さあ、鬼ごっこのはじまりだ」

1ミリの余裕もない心とは裏腹に、精一杯の虚勢でジインは不敵に微笑んだ。

016 それでも、おまえを愛しているよ

ばさりと羽を広げて、竜が飛んだ。大きく風を孕んだ羽がすうつとすばまって、一瞬のうちに速度が上がる。

まっすぐにこちらへ突っ込んでくる竜を十分に引きつけてから、ジインは右へ跳んだ。魔法の力を借りて、奈落の側面を飛ぶように駆ける。

建物に衝突する直前で、竜は機敏に羽をひるがえして方向を変えた。

速い……！

恐ろしい速度で迫る気配を寸でのところかわし、くるりと回転して下へ逃げた。『支柱晶』に乗り竜の下をくぐり抜けて、奈落の闇を滑る。

持久戦を覚悟するなら、負担の大きい飛空は最小限に抑えなければならぬ。

竜の出現を聞いて皆避難したのだろう、人気のなくなった吊り橋へ着地すると、ジインは欄干を駆けた。追いついた竜の喉が、背後でぐるる、と不気味に唸る。

来る……！

建物の屋根めがけて跳躍しながら体を捻る。途端に襲ってきた炎を、防護壁で横へ受け流した。防ぎきれない熱がじりじりと肌を焼く。

思わず目を細めたジインの目の前に、突然竜の頭が現れた。

燃え盛る炎を突き破り、ずらりと並んだ鋭い牙が迫る。

「ク……ッ！」

とつさに構えた『支柱晶』が、甲高い音を立てて牙を食い止めた。生暖かい息が頬にかかる。獰猛な眼光が目の前だ。

奈落のような喉の奥に、緋い炎がちらりと見えた。

「ッ！」

どん、という衝撃とともに、竜がよろめいた。その隙に東側の足場へと着地して、素早く身構える。竜の注意が他へ向いているのを確認して、ジインは止めていた息を吐き出した。

助かった。今のは、おそらく沢木さんだろう。

ばくばくと心臓が鳴る。額に滲む嫌な汗を手の甲で拭った。

竜の動きが予想以上に速い。こんなペースでは半分も進まないうちこちらがへばってしまふ。それでなくても、魔法は長時間使い続けられる能力ではないのだ。

金色の羽を大きくはたかせて、竜が吠えた。血に飢えた獣の咆哮だ。見る影も無く変わり果てたその姿を見上げ、『支柱晶』を握りしめる。

「ソラ……」

本当に、空へ逃がすことができるだろうか。

「……！」

ふいに空気の質が変わった。

対竜戦用にピアナクロセイドを貯蔵してあるタンクが開放されたのだ。

いつどこで竜の出現があるかわからないため、街には消火用貯水槽と同じように非常用の貯蔵タンクが設置されている。監視塔からしか操作できないその栓を、沢木がその名を使って開放してくれたのだ。

魔法は大気中に存在するピアナクロセイド粒子を自在に操る能力だ。空気中の粒子濃度は、当然魔法の効果にも大きな影響を及ぼす。試しに軽く念じてみると、意志に合わせて大気が震えた。

これなら、いける。

長い首を振って竜がこちらへ向き直った。剥き出された牙が刃のようにぎらりと光る。雷鳴のような唸り声を上げて迫る竜をまっすぐに見据えて、ジインは身構えた。

「……炎なら、おれも得手だ」

右手の『支柱晶』が強靱な炎を纏う。

「ケンカでおれに勝とうなんざ、十年早いー!」

鮮烈な炎の軌跡を描いて、ジインは『支柱晶』を薙ぎ払った。鼻先を炎に巻かれて竜が高度を落とした隙に、あまり遠すぎない程度に上層へと跳ぶ。

「こつちだ、ソラ!」

着かず離れず、術式と飛空を上手く使って、ジインは奈落の闇を逃げまわった。闇を駆け、跳躍し、時にその鼻先をかすめるようにして竜を誘う。機敏に動き回るジインに導かれるまま、竜も次第に上層へと移動していった。

そう、この調子だ。

このまま、魔法士団が到着する前に、空へ逃がすことができれば……。

「っ、」

足を滑らせて床に手をつく。あご先から汗が滴った。いつの間にか汗だくだ。次第に跳躍力が弱くなり、一步一步がずしりと重くなる。

速度を上げて竜が迫ってきた。鉄筋の上を駆けて、大きなトタン板の壁を拳で思いきり叩く。円形の窓が発光した。対魔法士用に仕掛けておいた術式は、ピアナクロセイド濃度の影響で予想以上の炎と疾風を巻き起こし、竜を後退させた。

荒い呼吸を整えながら、奈落を見上げる。青い空がもつすぐそこだ。

「あと、少し……」

突然、竜が妙な動きをした。風に煽られたように、その体がふわりと傾ぐ。

視界の端で、きらりと赤い点が光った。

「!?!」

何かが肩をかすめる。避けた弾みで足を踏み外し、体がぐらりと傾いだ。

「ク……ッ!」

飛空を。

念じた途端、頭に鋭い痛みが走った。脳の奥をぎゅっと締めつけられるような痛み。魔法を使い過ぎた時の症状だ。集中力が途切れ、一瞬の隙に、『支柱晶』が霧散した。

支えを失った体が、真つ逆さまに空中へと落ちる。

数メートル下につき出した鉄筋が見えた。

『支柱晶』を作り直すには、短すぎる距離。

ぶつかる。

ふいに、見えない力がジインを捉えた。鉄筋の横をかすめ、引き寄せられるまま奈落に面した下層の路地に激突する。強かに背中を打ち、一瞬息が止まりそうになった。確実に開いたであろう脇腹の傷が、鼓動に合わせてずきずきと痛み出す。

「路音、大丈夫!？」

「……小雪、か」

「ごめんなさい! 墜落しそうなのを助けたつもりだったんだけど……」

北見と地上へ向かったはずの小雪が、『支柱晶』を手に駆け寄ってきた。

「どうしてここに……北見と一緒にじゃなかったのか？」

「ピアナ砲は北見くんに任せたの。私は、その……やっぱり二人が心配で。様子を見に来たら、ちょうど路音が……」

言いながら、張りつめた面持ちで小雪が奈落を見上げる。竜はまだ空中でおかしな動きをしていた。

「いったいどうしたのだろうか。」

「助かった、ありがとう。でもすぐにここを離れてくれ。ここは竜に近すぎる……」

脇腹を庇いながら立ち上がった、その時。

どん、と背中右肩あたりに衝撃を受け、ジインは数歩よろめいた。

「う……?」

からんと床に落ちたものに目をやる。人差し指ほどの薬筒だ。側面に印字がある。

『ACG-V4』

対人用新型捕縛銃。

じんと痺れた肩から、鈍い痛みが広がっていく。

ああ、そうか。あの赤い光は、捕縛銃のレーザーサイト。

「ク、ソ……ッ！」

肩を押さえる。

油断した。

いったい誰がこんなことを。

賞金稼ぎか？ いや、この銃は軍用だ。

ということは。

「路音？ どうしたの？」

異変に気づいた小雪が腕に触れる。直後、轟音とともに床が揺れた。

「竜が！」

吹き飛ばされた竜の巨体が、バラック小屋の薄い壁をいくつもなぎ倒して同じフロアに突っ込んできた。

竜を力で吹き飛ばすなんて、やはり。

「魔法士団」

陸軍竜獣駆逐隊 “魔法士団”。

魔法士だけで構成される、陸軍幕僚魔法士部直属の特殊部隊だ。思わず舌打ちした。到着が早すぎる。

ああ、そうか。おれたちを追っていた手勢が、そのままここへ……。

「路音！？」

ぐにやりと世界が揺れた。一瞬、天地がわからなくなり、その場に膝をつく。

「は……」

急速に知覚が侵され始めた。自分を中心に世界が回り、まるで渦

の中に放り込まれたようだ。

じんわりと痺れるように、動きが、思考が、すべての自由が奪われていく。

「どうしたの？ どこか怪我をしたの？」

小雪が慌てて顔をのぞき込んでくる。息がかかるほど近くで、灰緑色の瞳を見上げた。翠と銀色を混ぜた色。常春の中庭で見た、瑞々しい木々の葉の裏の色と同じだ。

あれは、全部ウソだったの？

「 じゃない」

「 え……？ 」

「 嘘じゃ、ない」

熱に浮かされるように、言葉がこぼれる。

「 おれは、小雪に嘘をついたことは、一度もないんだ」

自分はいったい何を言っているのだろう。どうしてこんな時にと
思っけれど、止まらない。

ああ、もしかしたらさっきの銃に、自白作用が ……。

「あの中庭で、小雪といると、少しだけ……呼吸が楽になる気が、
した。だから、」

舌がうまく回らない。

まぶたが重い。体が熱い。

とても、眠い ……。

「路音？ どうしたの、しっかりして！ 彦ちゃん、彦ちゃん

聞こえるっ！？ すぐに来て、路音の様子が……っ！」

泣きそうな声で端末に呼びかける小雪の肩に、ジインはすがった。

「おれは、いいんだ……」

おれはもう、どうなってもかまわないから。

だから。

「小雪、頼む……あいつを、ソラを逃がしてくれ。お願いだ……あ
いつは、おれの、大切な ……」

小雪の体が強張る。フロアの奥で竜が起き上がった。傷ついた箇

所から、しゅうしゅうと水蒸気が立ち上っている。脅威の再生能力で傷を修復しているのだ。

ただ傷つけるだけでは竜は殺せない。『核』と呼ばれる箇所を魔法で破壊しない限り、竜は死なないのだ。

再生能力が活着しているから、今の攻撃で致命傷は受けなかったよ。うだ。

けれど、このままではいずれ……………。

目を細め、こちらを窺う竜に向かって、ジインは叫んだ。

「逃げる、ソラ……………！」

このままでは、魔法士団に殺されてしまう。

頼むから、早くどこかへ。

「逃げる……………逃げてくれ、ソラ!!！」

竜の双眸が、ふいに横へ逸れた。その鼻が、何かを探るようになりと動く。直後に、甲高い悲鳴がフロアに響き渡った。

……………子どもの声？

「ダメだ！」

「路音！」

考える前に駆け出していた。

無惨に潰れたトタン小屋の隅。テーブルの下で縮こまる少女の姿が見えた。

自由が利かなくなり始めた足をむりやり動かして、転げるようにフロアを駆ける。

小雪が背後で何か叫んだ。

竜と子どもの距離が、あと数歩。

その間に滑り込み、両手を広げる。

大きく開かれた竜の牙が、目前で光った。

「……………ごめん、な」

結局、逃がしてやることもできなかった。

なにひとつしてやれずに、こうしておまえに殺されるんだ。

鮮やかな青が視界に飛び込む。

晴れ渡った空の色。

いつか二人で見上げた、果てしない希望の色だ。

おまえはもう、おれの知る“ソラ”ではなくなってしまったけれど。

それでもおれは、おまえを ……。

「…… てるよ」

ぶつり、と何かが途切れる音が聞こえた。

017 あの日、ぼくらが夢見たものは

ソラは走った。

息を切らし、膨らんだ上着のポケットを押さえながら、ただひたすら走る。

砂埃で足が滑り、危うくドラム缶に激突しそうになる。市場に近い裏路地には障害物が多く、いつもの半分もスピードが出ない。勢いよく角を曲がった直後、今度は何かにつまづいた。べしやりと転んだ拍子に、ポケットからバラバラと菓子がこぼれる。慌てて拾い上げ、ソラはぎくりと固まった。

顔を上げた視線の先。積み重ねた廃材で路地が塞がれている。行き止まりだ。

廃材に走りより、どこか抜け穴はないかと探す。ずさんに積み重ねたところどころ崩れた廃材の山には、ネズミは通れてもソラが通れるような隙間はなかった。

「や、やっと追いつめたぞ、クソガキめ！」

弾かれたように背後を振り返る。角棒を手にした大柄の男が、顔を真っ赤にしてこちらを睨みつけていた。

「この、盗人の、ノラ犬が……！」

ぜえぜえと肩で息をしながら、男が低く唸る。

黄色い歯をむき出してじりじりと迫る姿が、まるで絵本に出てくる怪物のようだ。

ばくばくと心臓が鳴り、嫌な汗が吹き出る。どこか逃げ道はないかと視線を走らせるも、しっかりと握られた角棒はこちらが少しでも動けばすぐさま打ち据えてやろうと狙いを定めているようだ。

もう、逃げられない。

路地裏の四角い空を覆うようにそびえる男を前に、ソラは路地の隅へと縮こまった。

「薄汚ねえ『ノラ』の分際で、商品に手を出しやがって……ぶつ殺

してやる！」

男の太い腕が角棒を振り上げる。頭を抱えて、ソラはぎゅっと目をつぶった。

「……っ！」

ふわりと、頭上を風がよぎる。

「ぐっ?!」

くぐもった悲鳴が聞こえ、男の気配が数歩遠ざかる。目の前に着地した何かが素早く跳ねた次の瞬間、どしん、と重いものが地面に倒れた。

「ソラ！」

呼ばれて目を開けると、腕を掴まれるのがほぼ同時。

「ジン……ッ！」

その姿を認めた瞬間、今までの恐怖がまるで嘘のように一瞬で溶けて消えた。

「行くぞ！」

引っぱられ、倒れた男を踏みつけて逃げる。ジンがわざと男の顔を踏んだのを、ソラは見逃さなかった。

ポケットから、また菓子をごぼれる。

「あつ、おかしが！」

「いいから、早く！」

強く腕を引かれる。低く呻きながら、男が体を起こした。落としたり角棒にその手が伸びるのを見た瞬間、後はもう一目散にソラは逃げた。

今日は風が少し冷たい。灰色の壁に切り取られた空は濃く、絵の具になって降ってきてさうなくらい鮮やかだ。真っ赤に錆び付いた鉄の階段が、足の下でかんかんと小気味よい音を立てる。上りきったところで視界は明るく広くなり、音が拡散した。強い風が髪と上着

を吹き上げる。この付近には他に高い建物はなく、ここから見える景色は半分が空だ。

使われなくなった屋上には、ドクロマークのついた怪しげなドラム缶だとか、黒と黄色のシマシマのロープだとか、曲がって使い物にならない鉄パイプだとか、そういうものがごろごろと転がっている。

それらの間を縫いながら、ソラとジインは中央にある四角いコンクリートの建物へ向かい、側面のひしゃげた梯子をよじ上った。錆び付いた給水タンクのせいで少し狭いが、地上からは死角となるその場所が二人の今のお気に入りだ。

「あー、疲れたあ！」

ごろりと仰向けになり、ジインが手足を投げ出す。

「おまえ、いきなり打ち合わせと逆方向に逃げるんだもん。すげーあせったよ」

「う、ごめんね」

「めちやくちや足速いくせに、道間違えてあっさり追いつかれるし」

「うん……ごめん」

「まあ、最終的には逃げ切れたからいいけどさ。今度から気をつけるよ？」

腕を枕にしたジインが、ちらりとこちらを見る。

「……で、収穫は？」

「あ、うん！」

ソラはポケットを裏返して、バラバラと色とりどりの菓子を落としました。

「おー、大獵じゃん！ええと、これはガムか。こっちは……あめ玉？マシユマロに……ラムネ……って、おまえなあ」

検分を終えたジインが、不満げに眉根をよせる。

「チヨコとかビスケットとか、もっとカロリーのあるもん盗って来ないとダメだろ！」

「えっ？カロリーってなに？」

「カロリーっていうのは……」
ジインの動きが止まる。

「……カロリーは、その……えーと……そう、栄養だよ、エーヨー！ほらここに、裏んところにk c a lって書いてあるだろ？これが高いほうが体にいいんだ。数字の読み方はこのまえ教えただろ？」

「高いって、数字が大きいつてこと？」

「そう」

「k c a lってとこの数字が大きいはうがいいの？」

「そうだよ」

「ラムネじゃ、だめだった？」

眉を八の字にしたソラが、しゅんと肩を落とす。ジインが慌てて手を振った。

「あ、いや……ダメじゃないけど。おれラムネ好きだし。でも今度はビスケットとか、チョコ多めでな。うん。まあ、初めての“仕事”にしては上出来だな」

うなだれた頭をくしゃりと撫でられる。顔を上げると、鮮やかな笑顔が目に見え込んだ。笑顔が目に飛び込んできた。

「一人でよくがんばったな」

「うん！」

笑顔が弾ける。嬉しかった。心が飛び跳ねて、ほつぺたの奥がきゅっとなる。

本当はものすごく怖くて、さっきまではもう二度とやりたくないと思っていたのに、ジインの笑顔を見たらあと百万回だってやつてもいいような気持ちになった。ジインがぱちんと手を叩く。

「じゃあ、お食事にしますか」

「お食事にしますか！」

本日の早めの晩ご飯となるであろう“収穫”を二人で分ける。

貧困街の市場で売られているものは、ほとんどが新市街からの流れものだ。目にも鮮やかな色とりどりのパッケージ。薄汚れた自分

たちよりも、新市街のお菓子のほうがずっと上等なものを着ている。あめ玉の包みを引っぱろうとして、ふと男の怒鳴り声が脳裏に蘇った。

「……あの人、すごく怒ってたね」

「そりゃ、怒るだろ。売りもん盗られたんだから」
転がる菓子に視線を落とす。

ジインはマシユマロの袋を破ると、そのひとつを黙り込んだソラの口に押し込んだ。

「気にするなよ。あいつ、おれたちが『ノラ』ってだけで何回水ぶっかけたか。しかも真冬にだぞ？ただ店のまえ通っただけでさ。ちよつと仕返しするくらい、バチは当たらないだろ？」

そう言いつつも、マシユマロを頬張るジインの顔に清々しさはない。

本当はジインもわかっているのだろう。
けれど。

「しかたないだろ。働きたくても『ノラ』なんてどこも雇ってくれないし。だからってこのまま飢え死にするわけにもいかないし。この街で『ノラ』が生きていくには、こんな方法しかないんだ。だから……」

ふつと辺りが暗くなる。空を見上げ、二人は同時に叫んだ。

「飛空船だ！」

中型の飛空船が、すぐ真上の空を悠々と横切っている。

「うわあ、すげー近い！」

給水タンクへよじ上る。船底の留め具の数を数えられるほどの低空飛行。手を伸ばせば届きそうな距離だ。風の音に混じって、かなかなエンジン音が降ってくる。

「近い！でかい！かつこいいい！」

「かつこいいー！」

地上で飛び跳ねる自分たちのことなど少しも知らないふりで、飛空船はただ静かに通り過ぎていく。

「　いいなあ」

ジンがぼつりと呟く。
いいなあと、ソラも心で呟いた。

怖いこととか、悲しいこととか、明日のご飯を心配する気持ちとか。

そういうものをぜんぶ忘れて。

何も無い空を、どこまでも飛んで行けたらいいのに。

次第に遠ざかっていく飛空船を見送りながら、ジンが両手を突き上げた。

「決めた！おれやっぱり飛空船の船長になる！飯屋も捨てがたいけど、やっぱり飛空船で空飛びたい！」

「じゃあ、ソラも！ソラも船長になって、ジンと飛空船にのる！」

「ええー？ひとつの飛空船に船長はひとりしか乗れないんだぞ」

ジンの言葉に、ソラは唇をとがらせた。

「やだっ！ぜったい一緒にのる！」

「うーん、じゃあおれが船長やるから、おまえ副船長な」

「フック船長？」

「違う、副船長！船長の次に偉い人だよ」

「じゃあソラ、フク船長になる！」

「よし、決まりだな。二人でさ、世界一周しようぜ！色んな国をまわりながら、浮浪島を探すんだ」

「フロウトウって？」

「まだ誰も知らない島のことだよ。どこの国のものでもないから、浮浪島は見つけた人間のものになるんだ。おまえ、めちやくちゃ目がいいだろ？耳と鼻もいいし、他の人より絶対見つけやすいと思うんだ。おれの魔法もさ、練習すれば、外側の故障を直したりとか、もっと便利なきことができるかも知れない。もし竜が襲ってきて魔法で撃退できれば最強だよな。船は小さめでさ。でもスピードはめちゃくちゃ速くて、燃料タンクは大型船と同じくらいでっかいやつに改造するんだ。おれとおまえの二人だけなら食料も長く保つし、

そしたら他の船より遠くまで飛べるだろ？世界中の空を飛び回って、浮浪島を見つけてさ、そこをおれたちの島にするんだ！名前をつけて、遊園地みたいな家を建ててさ。家の中にすべり台とかブランコをつけるんだ。きつと楽しいぞう」

目をキラキラさせて、ジインが拳を握る。

ソラはわくわくで胸がはち切れそうになった。

小さな飛空船に、吹き抜ける風。二人で声を掛け合い、大空へと出航する。ぷらぷらと空に足を投げ出しながらご飯を食べ、足の下にまで広がる星空の中で眠りにつく。目が覚めれば、そこは空しかない世界だ。船の故障を直しつつ、時には嵐に流されたりして。雷が直撃したらどうしよう。もしかしたら、大きな竜が襲ってくるかもしれない。でも大丈夫。ジインと二人で力を合わせれば、きつとどうにかなる。嵐を乗り切ったその後は、見渡す限りの雲の平原だ。虹の中を通ると、どんな感じがするんだろう。あめ玉みたいな甘い匂いがするのかな。そうだ、船から足を伸ばして、雲の上を歩けるか試してみなくちゃ……。

次から次へと膨らむ想像で頭の中がばんばんになる。

ああ、なんて楽しそうなんだろう！

もう素敵すぎて、そのことしか考えられないくらいだ。

ジインと二人で、果てしない冒険の旅へ。

そうだ、ここにずっと居る必要なんてないんだ。

冷たくて、汚くて、怖いことばかりのこんな街、さっさと捨てて。

「空へ出よう。飛空船を買ってさ。世界中を飛びまわって、だれも

知らない場所を探しに行こう　なあ、ソラ！」

ジインが振り返る。

「おれとおまえなら、なんだってできる気がしないか！」

そう言っつて、ジインが笑った。太陽をたくさん集めたみたいな笑顔だ。

その光をそっくりそのままはね返すように、ソラも笑った。

二人なら、なんだって出来そうだな気がした。

二人なら、なんだって掴めそうな気がした。
ぼくの上には、すばらしい未来が広がっていて。
どこまでも続く永遠に、ぼくたちは手を伸ばした。

手を伸ばした　　はずだった。

……　　なんだか、錆びた味がする。

胸のあたりから、ずりり、と何かが滑り落ちた。

やわらかく重みのあるものが、静かに足元に崩れ落ちる。

白い肌。黒い髪。暗色の上着の下から、黒い染みが広がっていく。

黒？いや、ちがう。これは赤だ。

限りなく黒に近い、紅。

ゆっくり、ゆっくりと広がっていくそれは　　……。

「　　血？」

血だまりの淵が足の指に触れた。温かい液体に、指先が赤く濡れる。

……足？

床に立つ二本の足を見つめる。五本の指。二対の脚。人間の足だ。少し動かしてみる。確かに自分の足だ。

ゆっくりと腕を上げる。五本指の手のひらが、二つ。人間の肌。人間の手だ。

……人間？

そっと顔に触れる。人間の頬。人間の鼻。人間の顔だ。口の周り

が濡れている。何だろう。拭ってみる。両手がべつとりと赤く染ま
った。

赤い赤い、錆びた匂いのするこれは ……。

どくん、と心臓が跳ねた。

血。血だ。だれの。自分の？ちがう。オレじゃない。オレの血じ
ゃ、ない。

じゃあ、誰の ……？

足元を見る。見てしまう。見てはいけないと、心が叫んだ。けれ
ど、吸い寄せられるように、ソラは見た。

「あ……」

白い横顔。散らばる黒髪。虚ろな瞳はどこか遠くを見たままだ。

胸が上下する度に、薄く開いた唇から、ひゅっ、と苦しげな呼
吸が漏れる。

「あ…… ああ……っ！」

長いまつ毛が震えた。ゆっくりときこちない動きで、こちらを見
た双眸は。

どこまでも澄んだ、夜色の ……。

「ソ……、ッ」

血の気の失せた唇から、掠れた声がこぼれ出る。

次の瞬間、真っ白な喉がごぼりと嫌な音を立てて。

赤が、溢れた。

ほとばしる悲鳴は、駆けつけた少女のものか、それとも自分の喉
から出たものか。

ソラには、それすらわからなかった。

どうして世界は、ぼくからみんな奪っていくのだろう。

「ほら、路音。土産だぞお」

そう言っ手渡されたのは、飛空船型の容器に入った小さなラムネ菓子だった。

甲高いヒールの音が耳に痛い。

手を引かれながら、ジインは薄暗い廊下を歩いていた。とても急いでいるらしい母親に遅れないよう、ほとんど走るように足を動かす。壁に並ぶ扉はどれも同じ形で、それぞれに番号がついていた。

その中のひとつの前に立ち止まる。扉は音もなく横へスライドした。狭く小さな部屋には、ぼんやりした灯りがひとつと、キャスター付きの台がひとつ。台の上に誰か横たわっている。白い布で覆われて顔は見えなかったが、くしゃりとした耳の形には見覚えがあった。布の隙間から見えた腕は、こんな陰気な場所には不釣り合いなほどたくましく日に焼けている。いつも必ず付けている金色の腕時計をはめていないことが、なんだかとても不思議に思えて。

冷たく湿った手が、痛いほど強く握りしめてくる。
「ご確認を」

天井のスピーカーから、無機質な声が聞こえた。

「路音は、大丈夫よね」

かさかさに乾いた手のひらが、ひやりと頬に触れた。鼻に通されたチューブから目を逸らす。乱れた髪、痩せた首筋。薄汚れた病室は、薬品と排泄物の匂いがした。

「後のことは、　　さんに頼んであるから」

なんとという名前だったろう。結局その人は、母が託したなげなしの全財産と共に姿を消した。それはこれから起こることで、母さんが知ることはない。

教えることはできないし、教えるつもりもなかった。

過ぎてしまった時間に、触れることはできない。

そう、これは記憶だ。

ぼんやりした意識の中で、ジインはそう思った。

「ひとりにして、ごめんね」

窓の外にはすぐ隣の建物の壁がそびえており、心の晴れる景色など欠片も見せてくれない。

ああ、なんて寂しいところなんだろう。

「だいじょうぶだよ」

心とは反対の言葉を口にして、幼い自分は母親の手を強く握り返した。

「今日からこの家で暮らすことになった黒瀬路音くんよ」

先生がぼんと肩を叩く。その手は小さくずんぐりしていて、母さんのそれとはずいぶん違ったけれど、親しみのある温かさがあった。

「お兄さんの智博と、お姉さんの知里、弟になる裕太よ」

トモ兄は少しそっけなく、チサ姉はにこやかに、ユータは興味津々に瞳を輝かせてジインを迎えてくれた。

「わからないことがあったら何でも聞きなさい。みんなも、家のことを色々教えてあげること！」

「やだ路音。ぶかぶかじゃない、それ」

肩が出そうなほど襟ぐりの伸びきったシャツをチサ姉がつまむ。

そのサイズは細いジインの体にまったく合っておらず、袖は肘まで、裾は膝の少し上を隠すほどだ。

「トモ兄がくれた」

「トモくんが？あつ、しかも破れてる！……ちょっとトモくん！繕うの面倒だからって、穴の開いた服を路音に押しつけないでよ」

手元の雑誌から顔を上げると、トモ兄は悪びれもせず片眉を跳ね上げた。

「いいだろ、まだ着れるんだし。ダメージ加工ってやつだよ。かっこいいだろ？なっ！路音」

「じゃあ、あなたが着ればいいでしょ！もう、貸して路音。私が繕ってあげるわ」

「ありがとう、チサ姉」

「アリガトウ、チサ姉！ついでにこれもお願いしまっス」

「トモくんは自分でやりなさい！」

「ちえっ……ケチサト」

「なんですって?!」

チサ姉がまなじりをつり上げる。

「わーっ！ウソウソ、冗談だつてば！」

「何が冗談よ、待ちなさい！」

逃げ回るトモ兄を見て、きゃっきゃとユータが笑い転げる。

ぶかぶかのシャツを着たまま、ジインも一緒になって笑った。

廊下の先から先生の悲鳴が近づいてくる。となりで震え出したユ

「夕の耳を、チサ姉がふさいだ。
もつと奥へ。」

チサ姉の視線に促され、ジインはベッドの下を這った。三人で無理やり重なりあうようにして、壁際へちぢこまる。ベッドの下は埃だらけで、息を吸う度に大きな綿ぼこりが鼻にくっついた。ひっくり返って丸まった小さなクモの死骸が目の前に落ちていた。

「ごつごつした靴と先生の足が、廊下に倒れたトモ兄の体を跨いだ。
「やめて……やめなさい、ジエン!!」」

泣き声混じりの荒い息づかいと、争うような衣擦れの音。先生の足がもつれ、がたと戸棚が揺れる。ぱん、と乾いた音がして、先生の声が途絶えた。なにか重いものが床に落ちる音がしたけれど、それが何かを見るのが怖くてジインは固く目をつぶった。

硬い靴音があちこちへ移動して、戸棚や机を引っかき回す。

「ジインは息を殺して、悪いことが通り過ぎるのをただひたすら待った。」

「その子に触らないで!!」

チサ姉が悲鳴に近い声を上げる。馬乗りになった警官がその頬を張った。

「チサ姉っ!!」

「駆けよろうとするのを乱暴に突き飛ばされ、ジインは床に転がった。すぐ横のベッドの上では、冷たくなった先生とトモ兄が無言のままシートにくるまっている。」

「ほらチビ、おまえはこっちだ」

「太い腕に襟首を掴まれる。廊下のトイレからは、閉じ込められ泣きじゃくるユータの声が聞こえた。」

「自分たちの身にいったい何が起きているのか、幼いジインにはわからなかった。けれどそれが、とてつもなくひどいことだという」

ことだけはわかった。

警官たちが笑う。おぞましい笑い声だ。世界中の悪いことをいっぺんに集めたような声だ。

全身を恐怖が貫いた。

「チサ姉！チサ姉ええっ！！」

床の隙間に必死でしがみつく。襟が首に食い込んで苦しい。警官の下でもがくチサ姉はこちらを見る余裕もない。

「チサねえ！チサねえっ……やだアアアッ！！」

まるで首輪を引かれる犬のように、ジインははずると引きずられていった。

「合図をしたら、ユータを連れて逃げなさい」

青白い横顔がぼそりと呟く。たった数日で痩せこけたその頬を、ひしめき合う電飾が代わる代わるに照らした。

街の明りがうるさすぎて、晴れているはずの夜空には一粒の星も見えない。

深く巨大な谷を越えて連れて来られた見知らぬ街は、禍々しい光に溢れていた。

「いい？絶対に振り返らずに走るのよ」

できるだけ唇を動かさずにチサ姉が囁く。すぐそばに立つ警官は受け取った札束を数えるのに夢中だ。目の前には、夜より暗い地下へ続く裏口が一つ。足を踏み入れたら最後、二度と出ては来れないだろうと思わせるほどに、その闇は深かった。

ジインはユータの手を握る右手に力を込めた。きよるきよると電飾を眺めていた瞳が、不思議そうにこちらを見上げる。

まるで亡霊のように立ち尽くしていたチサ姉が、突然動いた。警官の腰にぶら下がっていた拳銃をもぎ取って、男たちに構える。

「走って！！」

鋭い声を合図にジインは駆け出した。途端に体のあちこちが鋭く痛んだが、歯を食いしばり、ユータの手をしっかりと握ったまま、流れる人の合間を走り抜けていく。

ぱん、と乾いた音が響いた。ぎくりと足を止め、振り返る。

人影の隙間から、地面に倒れるチサ姉の背中が見えた。

まるで氷水を流し込まれたように、体の奥が急激に冷えていく。

「チサ姉っ!!!」

警官の目がこちらへ向けられた。恐ろしい眼差しに射竦められ、体が凍りつく。

走って!!

「っ!!」

地面に貼り付いていた足を無理矢理引き剥がし、ジインはユータを引きずるようにして路地を駆け出した。人にぶつかり、転びながらも、めちやくちやに足を動かす。

走って。走って。走って。

その一言に背中を押されるまま、ジインはただひたすらに夜の街を走り続けた。

「おい、おまえら」

びくりと体を震わせ、振り返る。

「ここはオレらのシマだぞ」

見知らぬ少年に睨まれ、ジインはゴミ箱に突っ込んでいた手を慌てて引っ込めた。一つ二つ年上だろうか。頬に大きな傷を刻んだ少年は、慣れた足取りでこちらへと近づいてきた。

ユータを背に庇いながら、よろよると二、三步後じさる。内臓がぎりりと軋んだ。ここ数日まともなものを口にしていない。もう立っているのもやっとだ。ユータは足元をぼんやり見つめるばかりで、話しかけてもまともに返事が返ってこない。

ポケットに両手を突っ込んだまま、少年は二人のまわりをぐるりと一周した。

「見かけない顔だな。どこの群だ？」

「む、むれ……？」

「なんだ、もしかして捨て子か？親はどうした」

日に焼けた父親の腕、母親の儂げな微笑み、そして先生の温かな眼差しが順に脳裏をよぎる。

「……もう、いない」

「ふうん。それじゃ、オレらと同じ『ノラ』だな」

「『ノラ』……？」

「親も家もない、自分たちの力だけで生きてる子どものことさ」

少年がにやりと笑う。涙みが消え、薄い唇の向こうから大きめの前歯が覗いた。

「新入りか。いいぜ、ついてこいよ。オレらの群に入れてやる。チビすけ二人なんかでうるちよろしてつと、人売りにとつ捕まるかアル中のオツサンにケツ掘られるぞ」

言いながら少年が歩き出す。戸惑うジインを振り返ると、少年はおどけた様子で両手を広げてみせた。

「ようこそ、『貧困街』へ！」

「おいジイン、おまえ今どうやって火いつけたんだ？」

頭の上から突然降ってきた問いに、ジインは顔を上げた。

「え？どうやってっ？」

「だってライター持ってないだろ？」

渡しそびれたらしいライターを手に、透也が首を傾げる。使い古しの一斗缶の中では、すでに橙色の炎がちらちらと燃え始めていた。「そんなのなくても、ちよっとさわって燃えろー！って思えば燃えるよ」

古びた角材の端に触れて、意識を集中した。ほどなく触れた部分から黒い染みがじわりと広がり、ゆらゆらと細い煙が上がり始める。仕上げにふうつと息を吹きかければ、焦げの中心で小さな赤い火の粒がきらりと光った。

ぼかんと口を開けたままそれを見つめていた透也が、はっと我に返る。

「ちょ、ちょっと待て……今のそれって、もしかして、いやもしかなくてもマホウってやつだよな？……ってことはジインまさかおまえ魔法使いなの？！」

「マホウツカイ？」

きよとんと首を傾げる。透也はきよるきよると視線を彷徨わせ、フケだらけの髪をガリガリと掻きむしった。

「待て待て待て、落ち着けオレ。いくら何でも魔法使いがこんなにフツーにいるはずねえし。いや、でも、じゃあ今のは……なあジイン、今のもう一回できるか？」

「うん」

言われるまま、もう一度同じことを繰り返す。少しコツが掴めてきて、今度はもっと早く火を起こすことができた。ジインの手の動きに合わせて炎が揺らぐ様を、透也はまばたきも忘れたように凝視している。

「魔法　だよなあコレはどう見ても。夢じゃないよな。間違いないよな。冗談抜きで、本当に、本物の、魔法使い……　ジイン！　おまえすげえな！！」

興奮した面持ちで、透也はジインの頭をぐしゃぐしゃと撫で回した。

「魔法使い、ってことは魔法士になれるってことだよな！　ってことはおまえ、『ノラ』から第二区民の超エリートにスキップってこと？　うっわ、マジかよ！」

そこら中を歩き回り、頬の傷をさすりながら、透也はにやりと笑った。

「むしろさ、金儲けできんじゃねえの？……おまえの力でさ。もしかしたら魔法士になるよつかいいかもしんないぜ?! なあ、魔法でさ、他になんかできないのか?」

「えっ? えーっと……わ、わかんない」

「魔法で竜が退治できるんだからさ。練習とかすれば、用心棒や人売りの奴らをぶつとばすとかできんじゃねえの?」

「で、できないよそんなこと!」

太い腕に捕まりそうになった時のことを思い出して、ジインは身震いした。あんなに大きくて恐ろしい、怪物みたいな奴らをぶつ飛ばすなんて、とても出来る気がしない。

うーん、と透也が腕を組む。

「でも火を起こせるくらいじゃなあ、手品とか見世物くらいにしか

……」

「ミセモノって?」

ジインの問いに、透也の足が止まった。双眸のキラキラした光が消え、代わりに眉間に皺がよる。とつぜん硬くなった表情を、ジインは不安げに見上げた。

「どうしたの?」

「いや。やっぱさ、他の奴らには内緒にしといたほうがいいのか
もしれない」

「他の奴らって?」

「大人とか、他の群の連中とか……あと群のみんなにも、さ」

「え? みんなにも? マホウのことを?……どうして?」

難しい顔をしたまま、透也が黙り込む。しばらくの沈黙を置いて、透也は一言一言噛み砕くように言った。

「……ジインはさ、みんなのこと好きだろ?」

「みんなって、群のみんなのこと?」

「そう」

「うん」

少し考えてから、ジインはくしゃりと笑った。

「好きだよ。ユータも、香月も、イルテも、ユーシイも、ギヴァも、瑞花も、レニイも、あつ、もちろん透也も。……ザザは、ちよつといじわるだけど……」

でも、と付け加えて、ジインははにかんだ。

一人一人クセはあるけれど、悪い人間ではない。

みんな、『貧困街』で手に入れた大事な家族だ。

「ジインの“それ”が他の人間に見つかったら、オレたち……一緒に居られなくなるかもしれない」

「えっ？」

驚いて立ち上がる。考え込む透也の顔を、ジインはまじまじと見上げた。

一緒に居られなくなるかもしれない？

「ど、どうして？一緒にいられないって、どういうこと？」

「うん……なんつーか、いろいろさ。ホラ、欲の皮の張った奴らに知られたら面倒なことになりそうだし。……人間なんて、欲に目がくらむとなにすっかわかんねえしな」

透也が曖昧に笑う。透也には似合わない、どこかくたびれたような微笑みだ。

「とにかく、さ。このことはオレとおまえだけの秘密だ。とくに大人とか他の群の奴らには、絶対に知られちゃダメ。わかったか？」

「うん」

ざわざわと騒ぎ出した胸を押さえて、こくりと頷く。

みんなと一緒に居られない。それはつまり。

また、ひとりになるということ。

路音は、大丈夫よね。

そんな声が、ひやりと首筋を撫でた。

大丈夫　なんかじゃ、ない。

ひとりは怖い。ひとりは苦しい。

ユータや透也と離れて、ひとりぼっちになるなんて。

群のみんなと会えなくなるなんて。

絶対に、絶対にいやだった。

「みんなの前でマホウは使わない。だれにも、ぜったい内緒にする」

ついさつき炎を起こした右手を、胸の前で固く握る。ほっとした様子で、透也が頭をぽんと叩いた。

「よし……じゃっ、みんなを呼んでこい。夕飯にしよう。今日はなんとチーズがあるんだぜ！」

「えっ！ほんと？」

「しかもビスケット付きだ！すごいだろ？」

「すごいすごい！やったあ！！」

ぴよんと跳ね上がり、ジインは拳を突き上げた。

見上げる空はやわらかな薄紅に染まり始めていて、風も穏やかだ。相変わらず腹は空いているけれど、今夜は大好きなチーズが食べられる。

もしかしたら明日も明後日もその次も、食べる物が見つからないかも知れない。そんな不安が常に頭を過るけれど、みんながいれば何とかなる気がした。

たとえば今、願いごとが叶うなら。

カギ付きの扉と窓のある暖かい家が欲しいとか。毎日ごはんをお腹いっぱい食べたいとか。雨水のしめない靴が欲しいとか。大きなふかふかのベッドで眠りたいとか。恐ろしい人売りがみんないなくなっただけで欲しいとか。

願いたいことはたくさんあるけれど、本当に叶えてもらいたいの
はただ一つだ。

何もかも、このままでかまわないから。

みんなとずっと一緒にいられますように。

耳を、塞ぎたくなる。

固くまぶたを閉ざし、ジインは顔を背けた。

ちっぽけな自分が祈る、幼気でささやかな願い。

けれど、自分は知っている。

その願いが、叶わないことを。

だってこれは、おれの記憶なのだから。

父の記憶は古すぎて曖昧だ。はっきり覚えているのは、膝の上に座って小さな赤いテレビを一緒に観たことと、いつも仕事帰りにラムネ菓子を買ってきてくれたこと。患っていたという記憶はないから、その死は事故か何か突発的なものだったと思う。新市街第三区で今までどおりの生活を続けるには相応の額の納税が必要で、もともとあまり丈夫でなく世渡り下手だった母は昼夜を通しての外働きの無理がたたつてあっけなくこの世を去った。もしかしたら、夜の街で悪い病気をうつされたのかもしれない。母が家財の一切を託した知り合いは失踪。親類縁者のいなかつたおれは第四区にある小さな孤児院に預けられた。本当に小さな孤児院で、普通の民家と変わらない手狭な家に、先生、トモ兄、チサ姉、ユータの四人が暮らしていた。気さくな優しい人たちで、おれはそこでの生活にすぐに溶け込んだ。貧しいけれど穏やかな日々はある日突然、一人の男によって粉々に破壊された。家を訪ねてきたその男は先生と顔見知りのようだったが、その会話はすぐに言い争いへと変わり、結局男は金の物と先生の命、そして仲裁に入ったトモ兄の命までも奪って行方をくらませた。通報から数日後に現れた警官たちは、話を聞くのもそこそこに突然チサ姉を押し倒した。おれとチサ姉は数日に渡って暴行を受けたが、その時の記憶は霧がかかっているように思えない。何日続いたのだろうか、地獄のような監禁状態が解かれたおれとチサ姉とユータは、『彩色飴街』を越えて東へと連れていかれた。『裏』界隈のいかかわしい店に売り飛ばされる寸前、チサ姉はその身を犠牲にしておれとユータを逃がしてくれた。二人きりになったおれたちは見知らぬ街を点々と彷徨った末に『貧困街』へと流れ着き、餓死寸前のところを透也に拾われその群に入れてもらえることになった。『ノラ』としての生活は、西とは比べ物にならないほど過酷なものだった。飲み水、食料、雨風の凌げる寝床と毛布。

第四区では最低限保証されていたものが、ここでは手に入らない。それらの確保と調達に朝から晩まで走り回る日々。強い群に食料を横取りされることもあった。酔っぱらった大人に手酷く殴られることもあった。それでも、おれは一人ではなかった。初めは西の出身者に冷たかった『ノラ』の仲間たちとも次第に打ち解け、おれたちは家族のように暮らしていた。

これで最後にしたかった。失うのは、もうたくさんだ。

大切な人。大切な場所。愛しいものを失う度におれの魂は深く鋭くひび割れて、後はもう、ほんの一息で完全に壊れてしまっだろう。これ以上は耐えられない。

だから、これで最後。

この人たちと一緒に日々を過ごし、歳を重ね、ここに骨を埋める。また失って、新しい抛り所を探すなんて。

ましてや、ひとりぼっちになるなんて。

耐えられない。

そう思っていたのに。

凍てついた空気が剥き出しの頬に爪を立てる。冷えきった鼻先はその存在すら消え去ってしまったかのような。体に巻き付けていたボロ布を鼻の上まで引き上げて、ジインは視界に入る景色をぼんやりと眺めた。

がらんどうの廃墟に満ちる、青い闇。扉のない出入り口からは、白い光とともに雪がちらちらと舞い込んでいる。

聞こえる音は、自分の呼吸だけ。とても静かだ。

肩に寄りかかるユータが重い。硬くて冷たくて、とても重い。

「ユータ……」

となりで眠る少年を呼ぶ。返事はない。

「……ユータ、重いよ……」

身じろぎをする。ゆっくりと傾いだユータが、ごとりと硬い音を立てて床へ転がった。不自然なその音に、ぎくりと心が強張る。そつと振り返り、ジインは恐る恐るユータの横顔を見つめた。穏やかに下がった眉と、ぼかんと開いた唇。いつものユータの寝顔だ。けれど、どこかおかしい。いつもと違う。何かが、違う……。

身を寄せあう群れの仲間を見回す。手の届く場所に、傷のある類があつた。まぶたを開けているのに、その眼差しはここではないどこかへ向けられていて。

「透、也……？」

手を伸ばす。指先が触れた瞬間、ジインは弾かれたように手を引つ込めた。かじかんだ指でもそうとわかる。それはもう、人間の感触ではなかつた。

「ザザ……香月……イルテ……？」

一人一人名前を呼んでいく。誰一人、返事をする者はいない。鼓動がせわしなく胸を打ちはじめる。

「……透也……ねえ、透也、起きてよ……!!」

肩を揺さぶる。どこか遠くを見つめたまま、透也の眼差しはぴくりとも動かない。揺さぶる腕を止めると、辺りは一層しんと静まり返つた。

自分の吐く白い息だけが、視界を過つていく。

「あ……そんな……」

まさか、そんな。

こんなことつて。

仲間たちの青白い顔が闇の中でぼんやり光る。それはまるで、薄気味悪い絵画のよう。

「……うそ、だ」

嘘だ、嘘だ、こんなこと。そうだ、これはきつと夢だ。お腹が空き過ぎて、悪い夢でも見ているんだ。

こんなもの、現実であるはずがない。

「火……たき火、は……」

かき集めた廃材でおこした火は、とうに冷たくなっていた。なにか燃やすものさえあれば、火がおこせる。

そうだ、火にあたって暖まれば、きつとみんな元気になる。

だから、大丈夫。まだ、間に合う……。

「待ってて……今、なにか探してくるから」

よろよると立ち上がる。足がもつれて透世の上に倒れ込んだ。押される形で何人が床へ倒れたが、誰ひとり目を覚ますこと無く、窮屈そうな体勢のまま、ただ静かに眠り続けている。

「……っ、」

後じさりながら、だいじょうぶと呪文のように唱え続ける。

大丈夫。大丈夫。大丈夫。

「まだ、間に合う……」

無言の仲間たちをその場に残し、ジインはひとり廃墟を後にした。街は恐ろしいほどに静まり返っていた。雪が止めどなく視界を過るけれど、それらは虫の足音ほどの音も立てずただ静かに降り積もっていく。音を立てるものと言えば、雪を踏みしめる自分の足と吐き出した途端に白く濁る吐息だけだ。

路地はどこもかしこも雪で覆われ、いつもと様子がすっかり変わっていた。雪が積もっていないのは、頭上の空くらいだ。今歩いているのがなじみの道なのか、あるいは見知らぬ路地なのか、白に隠された街ではそれすら判断がおぼつかない。

こんもりと積もった雪の山を見つけて、ジインはそれを掘った。下に何か埋まっている。ただの不燃物だろうか、それとも……。

「……うっ」

思わず飛び退く。人だ。人の髪の毛が、雪から生えている。行き倒れた人だろうか。見れば、路地には同じような雪の塊が点々と続

いていた。

白く清らかだった路地が、急におぞましく不穏な気配に満ちる。疑わしい雪の塊は避けつつ、焚き火用のドラム缶と思しき円柱状の雪のオブジェを選んで掘り返す。どれもこれも、厚い雪の下に燃え滓が残っているだけだった。それでなくても、最近燃やせる廃材が激減していた。全資源の再利用と還元のために開発されたという新素材の廃棄物は、燃えないように出来ているのだ。固形燃料を買うお金を持たない『ノラ』たちは、大量の古着を着込むか、少しでも温かなねぐらを求めて縄張り争いを繰り返していた。

さんざ彷徨い歩いても、燃やせる廃材は一向に見つからない。

「早く……早く、たき火を」

もう手当り次第に雪を掘る。真っ赤になった指先に、雪の冷たさがナイフのように突き刺さる。かじかんでうまく動かなくなった指をぶつけるようにして、ジインはがむしゃらに雪を掻いた。

「早く……」

早く見つけなくちゃ。

何でもいいから、何か燃やせるものを。

雪の中に、なにか赤いものが見えた。血だ。両手を見下ろす。擦りむいた手指に、血が滲んでいた。

「痛い」

もうほとんど感覚のない、けれど痛々しい両手を握り込む。手が、痛い。

ゆらゆらと視界が滲み、両目から涙がこぼれ落ちた。

気づいてる。本当は。

これは、夢なんかじゃない。

これは、まぎれも無い現実。

「……み、んな」

ごめん。ごめん。ごめんなさい。

だめなんだ。もう間に合わない。

間に合わないんだ。

喉の奥から嗚咽が込み上げる。溢れ出そうになるそれを無理やり呑み込んで、ジインは空を仰いだ。冷たく濁った夜空から舞い落ちる、何千何万という雪の欠片。止めどなく降り注ぐそれを頬に受けながら、震える呼吸をどうにか静めて、深呼吸を一つした。

「……帰ろう」

みんなのところへ帰ろう。

もう何もかも遅いけれど。

もうなにもしてあげられないけれど。

せめて最後まで、みんなと一緒に。

もと来た道を戻ろうと振り返り、ジインは啞然と立ち尽くした。

真っ白な十字路はどの道も見分けがつかず、東西はおるか、もと来た道さえわからない。雪の上に残っていたはずの自分の足跡も、新たな雪に覆われてきれいさっぱり消えている。

「みんな……どこ……？」

雪と夜とに惑わされるまま、見知らぬ路地を彷徨い歩く。どこもかしこも、在るのは雪だけだ。

ただ白くて寒いだけの世界。

まるで、この世のすべてが消え去ってしまったかのような。

ああ、そうか。

もう、誰もいないんだ。

そう気づいた瞬間、足が止まった。

「……みんな……」

透也。ユータ。群のみんな。チサ姉。トモ兄。先生。母さん。父さん。

みんな、いなくなってしまった。

体中の力が抜け、その場に膝をつく。両膝が深く雪に埋まった。うなだれた頭に、肩に、雪が容赦なく降り積もっていく。

もう、このまま。

ここで、終わってしまおうか。

だってもう、自分にはなにもない。

頭も体も、もう空っぽだ。
行くあても。帰る場所も。

もう一度立ち上がる気力も、体力も。
これ以上歩く理由も。
無い。

「……、」

まぶたを開ける。なにか聞こえた。人の声だ。

誰かがどこかで、なにか叫んでいる？

今にも雪に吸い込まれそうなほどかすかな声だというのに、音も色も匂いもない静寂の中でそれはひどく鮮明に響くようだった。

真っ白な世界に、ただ一点紛れ込んだ異物。

細い細い針先でわずかに肌を突くように、その声は消え入りそうだったジインの意識を現実へと引き戻した。

「だ、れ……？」

足に力を入れる。途端に背中が軋んだ。最後に何かを食べたのはいつだったろうか。見えない手で上から押さえつけられているかのように体が重い。それでも、空っぽの体の隅々から集められるだけの力をかき集めて、ジインはもう一度立ち上がった。

一步一步、まるで引き寄せられるように、声のする方へと足を運ぶ。

ゆっくりと近づくと、そうと気がつく。これは赤ん坊の泣き声だ。

降りしきる雪の中、道の真ん中に人影が見えた。石像？いや違う、人だ。膝をついた状態で、凍りついた女の人。泣き声は、その腕か

ら聞こえていた。抱かれたボロ布の雪を払い、そつと開く。途端に、大声が頬にぶつかった。

赤らんだ顔。小さな手指。くしゃくしゃの細い髪。本物の生きた赤ん坊だ。

小さな口をいっぱいに広げて、赤ん坊はぎゃあぎゃああと泣きわめいていた。

ものすごいエネルギーだ。

この小さな体に夏の太陽がまるごと詰まっているのではないかと
思わせるくらい、赤ん坊は凄まじい熱気を放っていた。元気があ
るとか威勢がいいとか、そんな言葉では収まりきらない。触れたら火
傷をするのではないかと危ぶむくらい、赤ん坊からは目に見えない
力がみなぎっていた。

生命力、というやつだろうか。

ふつくらした頬を、そつとつついてみる。やわらかい。そして、
温かい。

凍りついた腕から恐る恐る赤ん坊を抱き上げ、上着の中に抱き込
んだ。

胸から体中へ、じんわりと温かさが広がる。

まるで日なたを抱きかかえたみたいだ。

赤ん坊は、とても温かかった。

とてもとても、温かかった。

ふわりと水面に浮き上がるように、ジインは目を覚ました。

まっくらで、音がない。まるで影法師の中にぼちゃんと頭まで浸
かってしまったかのようだ。上下左右、体をまるごと包むように、

ぶよぶよしたものや、ごつごつしたものや、がさがさしたものがひしめき合っている。かすかな腐臭を含んだ埃っぽい空気が充満していて、何だかとても息苦しい。

ここは、どこだろう。

胸の上でもぞりと何かが動いた。赤ん坊の声だ。あーとかうーとか、赤ん坊特有の意味不明な言葉を発しながら、両手両足をもぞもぞと動かしている。

ややあつて、ジインはここがコンテナの中らしいことに気がついた。『貧困街』の住民が売ることにも燃やすことも出来ない本当の“不要物”を好き勝手に投棄している大きなコンテナだ。不要物といつても他の人間にとつては“要物”であることも少なくないため、コンテナは無人の物々交換場のような役目を果たしていた。路地に沿って並ぶこのコンテナの一つには、裏側に子どもひとりごとと通れるくらいの穴が開いており、透也たちとよく訪れては、中に潜り込んでなにか使えるものはないかと物色していた。

どうやってここまで辿り着いたのだろう。赤ん坊を抱いて路地を彷徨ったような覚えはあるけれど、記憶は曖昧だった。

今は何時だろう。外は、どうなったのだろうか。

入ってきた穴を手探りで探す。足元の方にひやりと濡れた壁があった。まわりの鉄の部分とは感触が違う。これは雪だ。どうやら積もった雪が穴を完全に塞いでいるらしい。

途端に息苦しさが増したように感じ、ジインはゴミの中から硬そうなものを選び急いで雪を削った。ほどなく闇に白い光が滲み始め、雪に小さな穴が開いた。新鮮な空気の気配に、ほっと息を吐く。外は明るく風も穏やかで、雪は止んだようだ。自分一人がぎりぎり通れるほどに穴を広げると、ジインは赤ん坊を抱いてコンテナから這い出した。

まぶしい。そして、とても静かだ。

あれほど降り続いた雪はぴたりと止んで、見上げる空は抜けるような青色だ。降り注ぐ日差しはまだ雪を溶かすほどの温かさはない

けれど、敷き詰められた純白に反射して空気までも光らせている。静かだ。本当に、本当に静かだ。

当てもなく通りを彷徨ってみて、ジインは音が無い理由に気がついた。

人が、いない。

生き延びて喜び合う声も、誰かを失って嘆く声も、何一つ聞こえない。

まるで、世界から人という人が消え去ってしまったかのようなのだ。みんな、どこへ行ってしまったのだろう。

雪でコーティングされた階段を、足を滑らせないように注意深く登っていく。透也たちとよく来た場所だ。ここからなら、街の全景が見渡せる。いつもの何倍もの時間をかけてたどり着いた屋上も、真っ白な雪に覆われていた。凍りついた雪の上を足元を確かめながら慎重に横切る。

その間中、赤ん坊は小さな両目をしっかりと開いてジインの顔をまじまじと見上げていた。とても鮮やかな空色の瞳だ。足を止めて見つめ返すと、きれいな瞳が不思議そうに二、三度瞬いた。

薄桃色のやわらかな頬に、ピカピカのガラスの瞳。くしゃくしゃの金髪は、ケーキの上ののったふわふわの飴細工を思い起こさせた。よだれで光る小さな唇は可愛らしいピンク色で、つやつやの果実のようにぷくつと膨らんでいる。

何だか、クリームかなにかで出来てるみたいなきき物だ。

落つことしたりしたら、赤ん坊はぺしゃんこに潰れてしまつかもしれない。

足を滑らせないよう細心の注意を払って、ジインは歩いた。かすかな風が頬を撫でる。屋上の端へ近づいたところで、ジインは初めて顔を上げた。

「……！」

見渡す限りの、白と青。

世界は、たった二色になっていた。

陸地はすべて輝くばかりの白に染まり、横暴なほどに青い空には雲ひとつ見当たらない。

「すじい」

圧倒的な光景に、言葉を失う。

たった二色の、新世界。

そこには、生き物の気配が少しも感じられなかった。

あるのは、見渡す限りの白と青。そして、自分と赤ん坊。それだけだ。

何もかもが、強制的にリセットされた世界。

それはいつそ、清々しいほどで。

「は……ははっ」

思わず笑い出していた。少しもおかしくないのに、顔が歪んでいびつな笑みになる。

「はははっ！ おい見ろよ、みんな埋まった！」

その景色を見せつけるように、赤ん坊を前に突き出す。

「みーんな埋まった！ 腹黒い人売りも、底意地の悪い雑貨屋のオヤジも、ねぐらを横取りした群の奴らも、西も、東も、みいんな……」

声が詰まる。両目の奥がぎりぎり熱くなった。食いしばった歯の奥から、低い呻きが漏れる。

みんな埋まった。

みんな、いなくなってしまうた。

父さん。母さん。先生。トモ兄。チサ姉。ユータ。透也。群のみんな。

いなくなった……いや、違う。

奪われたんだ。

この、世界に！

どんなに深く愛しても。どんなに強く抱きしめても。奪われる。もぎ取られる。引き剥がされる。

こんな世界。

「もう、いい」

こんな世界なんて。

「もう、いらぬ!!!」

いらぬ。いらぬ。もうたくさんだ。

だってこんなの、ひどすぎる。

おれがいつたい何をしたというんだ。

ただ生きることが、どうして、こんなに。

「……くるしい」

苦しい。苦しい。もうたくさんだ。息ができない。不規則な呼吸を繰り返す。まるで肺が呼吸することを拒んでいるかのようだ。

体が、心が、もう生きたくないと叫んでいる。

腕の中から声が上がる。澄みきった瞳と目が合った。きれいな目だ。ぴかぴかの宝石みたいだ。

赤ん坊を抱いていた腕をゆっくりと伸ばす。路地は遙か下だ。

「なあ、おまえ、生きたいか？こんな世界で」

何をどうしたって、世界はすべてを奪っていく。

理不尽で、傲慢で、非情な世界。

「こんな世界で、おまえ、本当に……」

足をばたつかせながら、赤ん坊が笑った。いや、もしかしたら光ったのかもしれない。一瞬、赤ん坊が輝いたように見えた。まぶしさで目がくらみ、まぶたを閉じる。次の瞬間、視界に飛び込んできたのは、太陽のような満面の笑顔だった。

陽の光を弾き返して、その瞳がきらきらと輝く。見上げる空をそのまま映し込んだような、驚くほど鮮やかな青だ。

希望というものに色があったら、きつとこんな色をしているに違いない。

「おまえもいつか、持っていられるのかな……この世界に」

こんなにもきれいな瞳を。無垢な笑顔を。

奪うのか。奪えるのか。何もしないまま、奪われてもいいのか。

いいのか？

体の奥底、魂の奥深くに、熱く輝く灯がともる。

「なあ、ごうしよう」

赤ん坊を高々と空に掲げた。きゃらきゃらと明るい笑い声が頼に降る。

「今からおれは、おまえを全力で守る。何がどうなっただってかまわない。ただおまえを生かすためだけに、おれのすべてを尽くす」

体のすべてを使って。

魂のすべてを賭して。

どんなことをしてでも、おまえを守ると誓おう。

「それでも、おまえを奪われたら……その時は」

おれのすべてを尽くしても、なにひとつこの手に残らないのなら。

その時は。

「おれも、この世界をやめる」

こんな世界、捨ててしまっ

おまえと一緒に、消えてしまおう。

そうだ、それがいい。

「おまえを失う時が、おれの最後。……そう、これが最後だ。おまえが、おれの最後の……」

おれをこの世に繋ぎ止める、最後の一人。

たったひとつ残された、魂の楔だ。

白い。真っ白だ。

空気が発光しているかのように、光が溢れている。

「……値は423dt。一般的な竜創の3.7倍です」

一定の間隔を刻む耳障りな電子音。耳元で響く風のような音が、どうやら自分の呼吸らしいということにジインはようやく気がついた。体がぴくりとも動かない。まるで首から下を切り離されてしまったかのようだ。

これは夢の続きだろうか。それとも……？

霧のかかった意識の中で、ジインはゆっくりと視線を巡らせた。

「DTの影響による各部機能の低下はまだ確認できませんが、時間の問題でしょう。いくらNBだからといって、この数値ではやはり……」

真っ白な壁の前に立つ、白衣と制服。

だれ、だ。

見覚えのある制服の背中が、ゆっくりとこちらを振り向いて笑った。

「おや、気がついたのかな？」

その声を聞いた途端に、背筋に冷たいものが走った。

桐生導師。

ピピピ、と電子音の間隔が乱れる。

こつこつと近づく靴音が、まるで心臓を直接小突くようだ。

逃げ出したいのに、シーツの上に横たわった体はほんの1ミリも動かない。

いやだ、いやだ、こつちへ来るな。

「ぼくの声がちゃんと聞こえる？ぼくのがわかるかな？」

撫でるように囁く、ねっとりとした声音。幼子に問いかけるような口調なのに、まるで喉元に刃物を突きつけられているようだ。

そのおぞましさに、全身が栗立った。

なぜ、どうして桐生がここに。

ここは……ここはどこだ。

一礼し、白衣の看護師が部屋を出る。音もなくスライドしたドアからちらりと見えた廊下も、室内と同じように白い光に溢れている。整った環境設備に、最高水準の医療機器。

ここは西の医療施設？

おれは、どうしてこんなところに。

「いやあ、きみは本当におもしろいね。まさかとは思ってたけど、本当にあの“ヒトガタ”に噛まれるなんて」

くくく、と桐生が喉で笑う。

そうだ、おれはあの時ソラに ……。

「！」

ソラ。

最後に見た、あの姿。

あの、人の姿は。

あれは、夢……？

「飼い犬に手を噛まれると言うけれど、ふふっ……飼い竜に噛まれたんじゃあ洒落にもならない。それで、どうかな？命よりも大事な弟くんにこんな仕打ちを受けた心境は」

恩を仇で返すとはまさにこういうことを言うんだろうねえ、と感心するような口調で桐生が眼鏡をくいと上げる。

「けれど弟くんも、愛するお兄さんを噛み殺しかけて相当ショックを受けたようだねえ。聞いた話によると、きみを襲った直後に第三形態から第二形態に戻ったらしいじゃないか。竜化は不可逆のはずなのに、ね。逆行が精神的ショックによるものかどうかはわからないけれど、とにかく初めてのケースだ。実に興味深いよ」

研究のしがいがありそうだ、と呟く唇が意地の悪い笑みに広がる。

夢、なんかじゃない。

ソラが“ヒトガタ”に、人に戻った。

もう二度と会えないと思っていたあの笑顔に、あの瞳に。

もう一度、会える？

「ヒトガタ”のままどこかへ逃げたようだけど、大丈夫。弟くんの行方はいま魔法院が全力を挙げて追っているからね。無事に捕まえたなら、きみたちのシャーレは隣同士にしてあげよう。ああ、何なら解剖に回す前に一度会わせてあげてもいい……ふふっ、別れを惜しんで泣き叫ぶきみの姿が今から楽しみだよ」

楽しげに笑う桐生の顔を、ジインはありったけの憎しみを込めて睨みつけた。おぞましい笑顔に爪を立ててはずたはずたにしてやりたいと強く思う。

憎悪が刃になって、こいつの薄笑いを今すぐ切り裂いてしまえばいいのに。

差し貫くような眼差しを受けて、灰色の双眸がすうつと細められた。

「まあそれも、きみの体がそれまで持ちこたえればの話だけだね」

ぎくりと心が強張る。

ひやりとした指先が、右肩の上をそつとなぞった。

「この傷……急所はうまく外れていたけれど、きみの体には弟くんの竜毒がたっぷり入っている。毒牙の刺さり具合がよほどよかつたんだろうねえ、DT値は通常の3.7倍だそう。竜創患者の最長存命記録は四十一日だけど、こんなに華奢なきみの体だ。弟くんを捕らえるまで、耐えられるかどうか……。ぼくとしては、きみが生きているうちに何とか会わせてあげたいと思うんだけどね。そうすれば、ほら……竜毒で悶え苦しむきみの姿を、弟くんにじっくり見せてあげられるだろう？」

滴るほどに毒を含む言葉が、耳から流れ込んでくる。

その手触りさえあるかのような悪意に侵されて、体の芯が急激に冷えていった。

ああ、そうだ。そうだった。

おれはソラに……竜に噛まれたんだ。

竜毒を受けた者は、必ず。

必ず……。

見る間に色を失ったであろう双眸をのぞき込んで、桐生が悪魔のような笑みをますます深めた。

「そう、その瞳だ……。とても、いい」

息がかかるほど間近で、灰色の双眸が冷たく光る。

「本当にきみは絶望がよく似合う。そうやってひとつひとつ失いながら、じわじわと壊れていけばいい。完膚なきまでに打ちのめされたきみの姿を想像するだけで、体の奥がぞくぞくするよ……！きつとどんな凄惨な場面にも勝るくらい、凄艶だろうねえ」

肩から胸、胴体へと、桐生の指先がゆっくりと体をなぞっていく。おぞましい感触は、脇腹あたりでひたと止まった。

「そして後に残ったきみの体は、『神ノ庭』進出のためにぼくが有意義に使わせてもらおう……臓物から何から、細胞のひとつに至るまで、残らずすべて……ぼろぼろになるまで、ね」

耳を塞ぐ代わりに、固くまぶたを閉ざす。

いくら視界を遮断しても、目の前の現実が消えてくれない。

最低最悪の、信じがたい現実。

悪意に満ちた気配は忍び笑いとともにつっくりとベッドを離れ、部屋から消えた。

たった一人残されたあとも、注ぎ込まれた言葉の毒はじわじわと臓腑を焼き、心を弱らせていった。

絶望しろ。

そう囁きながら、黒く冷たいものがひたひたと胸を満たしていく。自分はもう、生きてこの部屋を出ることはできないのだろう。

たとえここから逃げ出すことが叶ったとしても、この体は、もう……。

細い涙がゆっくりとこめかみを伝う。それを拭うことはおろか、隠すことさえ今の自分にはできない。

もつ、なにもできないんだ。
なにも。

…… ジイン ツー！

蘇る悲痛な叫びに、はつとしてまぶたを開く。

意識を失う寸前に見た、あの瞳。

あの、悲鳴。

たとえば、ソラが同じぐらいの強さで自分を想っていてくれたと
して。

たとえば、そんな相手を己の手で傷つけてしまったとしたら。
その心に受ける傷は、痛みは、どれほどのものだろうか。
きつと、どこかで泣いている。

行かなくちゃ。

黒く冷たいもので満ちた胸の奥底に、白く小さな光が宿る。
そうだ、行かなくちゃ。

自分にはまだ、やるべきことがある。

扉がスライドする。誰かが部屋へ入ってきた。

引きずるような足取りで静かに枕元に立ったのは。

「 黒瀬」

深く疲労を刻んだ顔で、沢木がこちらを見下ろす。ひどい顔だ。
糊の利いた清潔な制服に着替えてはいるけれど、その顔はまるで何
キロもの道のりを寝ずに歩いてきたようだった。

こんな顔をさせているのは、他ならぬ自分なのだろう。

申し訳ないと、いま初めてそう思う。

思いやりとか優しさとか、そういうものを遠ざけて。

差し伸べられた手を振り払って。

本当に、ひどいことをした。

それでも、おれは……。

腕に力を入れる。ぴくりとも動かない右腕の代わりに、左腕を持ち上げた。驚いた沢木が膝をつき、手をとってくれる。

「どうした？」

唇を動かすけれど、声が出ない。弱々しい吐息が虚しく喉を過ぎるだけだ。

肺に大きく息を吸い込む。

「ッ、ッ」

声を出そうとした瞬間、杭を突き刺されたような激痛が体を貫いた。

「黒瀬！」

焼けつく痛みの塊が、右肩の中でじわりと広がる。

悲鳴とも呻きともつかない声が、食いしばった歯の合間から漏れた。

額に脂汗が滲み、耳障りな電子音が心拍数の乱れを知らせる。

いけない。この部屋のすべては監視室でモニタリングされている。生体情報が基準値を超えれば、すぐに看護師が駆けつけてくるだろう。

落ち着け。動悸を静めるんだ。

まぶたを閉じ、出来るだけ体の力を抜いた。震える息をゆっくりと吐き出し、治まり始めた右肩の痛みから気をそらす。

ずくんずくと、動悸に合わせて脈を打つ、痛みの余韻。

痛い。から、大丈夫。

自分はまだ、生きている。

人を呼ぼうと立ち上がりかけた沢木の手を強く握る。声にならぬ言葉が少しでも伝わるように、濃灰色の瞳をまっすぐ見据えた。

「さ、」

沢木さん。

さんざん振り回しておいて、今更こんなことを頼める筋合いじゃないけれど。

お願いだ、手を貸してくれ。

ここで終わるわけにはいかないんだ。

あれから、どのくらい時間が経ったのだろう。

立ち上がれる程に傷が塞がるまで、あとどれだけかかるだろうか。それよりも、竜毒の進行が始まるのは。

この体に残された時間は。

急がなくなっちゃ。

一刻も早くソラを探し出して。

おまえは少しも悪くないんだと、この腕で抱きしめてやらなくちゃ。

そう、おれが最後にやるべきことは。

「ソラ、の……っ、と、ころ……へ……！」

ソラ、いまそこへ行くよ。

この体が、だめになってしまつまえに。

どうして、こんなことになってしまったのだろう。
ぼくたちは、いったい何を間違えたんだろうか。

「ソラ？」

開いた扉に手をかけたまま、ジインが振り返る。その腰に抱きついて、ソラは小さく呟いた。

「いかないで」

空には鈍色の雲が厚くたれ込めて、まだ昼前だというのに夕暮れのように薄暗い。歪んで閉まらない窓の隙間から忍び込む雨風は、まるで誰かのすすり泣きのようで。

どうしてだろう。こんな日は、嫌な予感に胸が騒ぐ。

「いかないで。いっちゃん、いやだ」

顔を押しつける。昨日洗ったばかりの上着からは、石けんのいい匂いがした。

「なーに言ってるんだ」

笑いを含んだ台詞が頭の上から降ってくる。

「おれが“仕事”に行かないと、ご飯が食べれないだろ？」

「いらぬもん」

ジインの上着に顔を埋めたまま、くぐもった声で呟く。

「ごはんも服も、なんにもいらぬ。だからここにいて。いっちゃん、いやだ」

「無茶言つなよ」

呆れ声で言いながら、ジインの手がくしゃりと頭を撫でた。

こごった心がほわりとほどけるような、その感触。

「なるべく早く帰ってくるよ。いい子でお留守番してたら、お土産

買ってきてやるからさ。ほら、もう放してくれ」

その優しい声に抗うように、ソラは腕に力を込めた。行かせてはいけない気がした。

手を離してはいけない気がした。

いま、手放せば。

もう二度と、触れられないような気がして。

「こーら、放せつてば、もう」

ぼんぼんと背中を叩かれる。それでも頑なに手を解かずにいると、今度は短いため息が聞こえた。

「だめだよ、ソラ。おれはもう行かなくちゃいけないんだ……だつて」

強く抱きしめていたはずの体が、ふいに消える。

「ジン？」

闇の中でほの光る、白い首筋。

「だって、おまえがおれをこんなふうにしたんだから。そう言って微笑んだ唇から。」

溢れ出す、赤い。

赤い……、

「……ッ!」

びくりと体を震わせ、ソラは顔を上げた。

ひび割れた灰色の壁。錆び付いた計器。ガラスの抜け落ちた窓からは、陰気な雨音が入り込んでくる。

闇に沈んだ小さな部屋に自分以外の気配はない。

「ゆ、め」

いつの間にか眠っていたらしい。

汗の滲んだ額に手をやると、ざらつく手指から錆びた鉄の臭いがした。

夢、じゃない。

暗闇に手をかざす。乾いてくすんだその色の鮮やかさが、脳裏に生々しく蘇る。

散らばる髪。虚ろな瞳。広がっていく赤い染み。

夢なんかじゃ、ない。

ぼくは、ジインを。

「……………どうして」

どうして、こんなことになってしまったのだろうか。

ぼくたちは、いったい何を間違えたんだろうか。

何度問いかけてみても、闇の向こうから返ってくるのは冷たい雨の音だけだ。

闇にかざす手が震え出す。

守りたいと心から願った人の血が、今この手を染めている。

「……………どうして……………っ！」

なぜ、どうしてこんなことに。

ぼくたちは、いったい何を間違えて。

ぼくたちは。

ぼくは、

あなたと、

ただ、一緒にいたかった。

それだけなのに。

「 だいじょうぶ」

大丈夫。心配いらない。

きつとあの人が、ジインを助けてくれる。

あの時、倒れたジインに駆け寄って来た栗色の髪の少女は、ジインをよく知っているようだった。きつと魔法院での知り合いか何かだろう。泣きそうな顔で何度もジインを呼んでいた。もしかしたら、とても親しかったのかもしれない。あの人がジインを病院に運んでくれたはずだ。東にはまともな病院がないけれど、応急処置くらいはできるだろう。その後すぐに西の医療施設へ運べば、最先端の医療器具も腕のいい医者もいる。薬もいっぱいあるはずだ。追われる身とはいえ、ジインは貴重な天然の魔法使いだから、魔法院も何とか助けようと手を尽くすはずだ。

そう、だから大丈夫。

ジインが、 はずない。

ぬ、なんて、そんなことは。

絶対に。

「 ……あるはず、ない」

ガラスの抜け落ちた窓に目をやる。外は紺青の闇だ。いつからか降り出した雨はいつこうに止む気配がなく、この部屋を外界から遮断するように降り続けている。

あれからどれぐらいの時間が経ったのだろう。すでに数日経ったのかもしれないし、もしかしたら数時間しか経っていないのかもしれないなかった。身じろぎをすると、体中が音を立てて軋んだ。あの日から食べ物はおろか、水さえ口にしていない。普通ならば、とつくに脱水症状を起こして死んでいるところだろう。

普通の……人間ならば。

ゆつくりと部屋を見回す。わずかな明りもない暗闇の中でも、“普通じゃない”自分の両目はその向こうにあるものを鮮明に捉えることができた。

錆び付いた計器と操作板。割れた窓ガラスに、剥がれ落ちたコン

クリート。壁に貼り付けてあった色とりどりのお菓子の袋は、ほとんどが床に散らばっていた。足元に転がる不揃いの食器は、ジンと二人で旧市街の空き家から拾い集めた物だ。薄汚れたテーブルの上にあるビスケットの箱は、あの朝に開いたままの状態が残っている。

住処にしていた、廃工場の制御室。

『貧困街』外れの無人街一帯を見下ろすその小さな部屋に、ソラはいた。

行つて、早く！。

あの時、少女の叫び声に突き飛ばされるように、その場から駆け出した。

迷い込んだ悪夢の出口を探すように、ただ闇雲にひた走つて。気がついたら、ここに辿り着いていた。

もしお互いの居場所がわからなくなった時は、廃工場で待ち合わせしよう。

そんな台詞を思い出したのは、鍵のかかった扉の前で立ち尽くしていた時だった。

「……鍵、」

首から下げたままの鍵を握りしめる。衣類も靴もすべて失った体に、唯一残された物だ。ジンと揃いのそれを鍵穴へ差し入れると、固く閉ざされていたドアはその時を待ちわびていたかのようにソラを迎え入れてくれた。

まるで、両腕を広げて子どもを迎える母親のように。

なにも訊かずに、ただ温かく。

お帰り、ソラ。

闇の先に思い浮かべたのは、黒髪と夜色の瞳を持つ少年の笑顔。母親というのがどういふものかを自分は知らない。けれど、迎えてくれる人がいる温かさは、ちゃんと知っていた。

ひとかけらのビスケットを分け合う一体感も。

凍てつく夜に寄せ合う体温の心地よさも。

揃いの鍵を握りしめる安心感も。

ケンカのあと、ふいに視線が合った時の照れくささも。

遅い帰りを待つ心細さも。

その足音を聞きつけた時の安堵感も。

頬を寄せて抱きしめ合う幸せな気持ちも。

ちゃんと知っている。全部、ジインが教えてくれた。

ジインがぼくの父親で、母親だった。

仲のいい兄弟であり、気の合う友達であり、運命を共にする仲間だった。

人と繋がること、愛すること。

そういうものすべてを、ここでジインに教わった。

この、廃工場で。

立ち上がる。素足の下でコンクリートの破片がからからと綺麗な音を立てた。ボロボロのマットレスをめくると、ベッド代わりに敷き詰めてある不揃いのプラスチックケースが出てくる。その一つを開けると、二年前の衣類がそのままの状態で見えた。

一番上にあつたシャツを手に取り、全裸のままだった体に羽織る。途端に、懐かしさが鼻孔を占めた。

ジインの匂いだ。

何かが膨らんで、胸がはち切れそうになる。漏れそうになる嗚咽を、寸でのところで呑み込んだ。

「ジイン」

ジイン。ジイン。無事だろうか。ちゃんと生きているだろうか。いまだどこにいるのだろうか。ちゃんと治療を受けられているだろうか。痛がっていないだろうか。苦しんでいないだろうか。なにか酷いことは、されていないだろうか。

「ひどい、こと……」

白い肌に刻まれた無数の傷が脳裏をよぎる。

魔法院は、ジインをどうするつもりだろう。

あの時、あのまま置き去りにして、本当によかったのだろうか。

でも、あの場でオレにできることなんて……。逃げたな。

冷たい声が、ひやりと心臓を撫でた。

死にそうなジインを置いて、ひとりで逃げた。

「違う……！」

思わず首を振る。

違う、逃げたんじゃない。

あそこにもいても、オレにできることなんか何もなかった。だから……。

だから、逃げた？

「違う！」

ちがうちがう、そうじゃない。

ジインを置いて逃げるなんて、そんなこと。

「そんな、こと……」

するわけない？

本当に？

「……オレ、は……」

まるで水銀を流し込んだように、臓腑が重く冷えていく。

ああ、そうだ。

オレは、逃げたんだ。

ジインを傷つけたという現実から。

自分が、竜だという事実から。

目の前のすべてから。

目を逸らして、逃げ出した。

そんなことをしても、逃げ切れるはずがないのに。

思い出すことをためらって、自分の記憶からさえ逃げていたんだ。

そうだ。とつくに気がついてはいたはずだ。

自分が普通と違うこと。

自分が、竜だということ。

だって、気づかないはずないじゃないか。

たった三年でこんなに成長したとか。どんな傷でもすぐに治るとか。並み外れた五感とか。筋力とか。体力とか。明らかに人と違う、ジンと違う、自分の体。

気がつかない、はずがないのに。

ずっと、気づかないふりをしていたんだ。

ジンと、一緒にいたかったから。

自分でも気づかないうちに、自分を騙し続けていたんだ。だって。

ぼくは、ジンが。

ジンのことが。

「ごめんなさい」

好きなんだ。大好きなんだ。

愛して、るんだ。

やわらかな黒髪も、心地よい声も、まぶしいほど白い首筋も。

子どもっぽい笑顔も、時折見せる鋭いまなざしも、愁いを帯びた横顔も。

大輪の花がほころぶような微笑みも、怒った時の冷たい無表情も。

寝起きが最悪なところも、意外と押しに弱いところも。

さり気ない優しさも、意志の強さも、その裏に隠した脆さも。

透明な涙も、震えるまつげも、時に惑うその瞳も。

人より低い体温も、細い寝息も、静かに脈打つその鼓動も。

夜空を映した瞳の色も、何もかも。

その細胞の一つに至るまで。

ジンという、存在のすべてを。

言葉なんかでは言い表せないくらい。

本当に、深く、深く。

それなのに。

「ごめんなさい……っ！」
なぜ、どうしてこんなことに。
ぼくたちは、いったい何を間違えて。
ぼくたちは。

ぼくは、
あなたと、
ただ一緒にいたかった。

そのささやかな願いこそが。
ぼくの、大きな過ちだったんだ。

ああ、まただ。

瞼を開け、そこが相変わらず薄暗い制御室なのを確認して、ソラは重い息を吐いた。

離ればなれになってから、もう何日過ぎたのだろう。背中合わせで眠りについた夜のことなど、遠い昔のことのようだ。

あの日以来厚い雲に覆われたままの空からは、今は礫のような雨が降り注いでいる。

世界の終わりを告げるような空模様は、まるで自分の心を映したように。

ソラ。

その雨に混じって自分を呼ぶのは、ここにはいない人の声だ。

部屋の隅で膝を抱えたまま、ソラはただ呼吸を繰り返していた。

まるで手負いの獣のように暗がりから一步も動けないまま、息を吸い、息を吐き、時々思い出したように瞬きをして、ぼんやりと窓の外に目を向ける。その繰り返しだ。

そうしてうつらうつらと夢みては、ありもしない姿を見、聞こえない声聞く。

ソラ。

誰もいない闇の向こうに、もう何度その声を聞いただろう。遠く優しい呼び声を耳にするたびに、夢だとわかっていてもまぶたを開けてその姿を探さずにはいられない。

無事だろうか。

苦しんだり、痛がったりしていないだろうか。

何か酷いことはされていないだろうか。

生きて、いるだろうか。

おびただしい血の色が頭をかすめ、ソラは思わず目をつむった。散らばる髪。虚ろな瞳。広がっていく赤い染み。

「……ッ、」

息が止まりそうになる。

網膜に焼きついた凄惨な光景はふとした隙を見計らって残酷なほど鮮やかによりみがえり、繰り返しソラを襲った。

呼吸が喉にからまる。鼓動が乱れて、額に脂汗が滲んだ。

まるで同じところを何度も斬りつけられているようだ。

刃となるのは、愛する人の血で染まった最低最悪のおぞましい光景。

けれどそれを引き起こしたのは、まぎれもない自分だ。

鉄臭さの消えない手で膝を抱え、強く額を押しつける。

ジインを、傷つけた。

深く深く肩をえぐって。

あんなにたくさん血を流させた。

オレが、ジインを……！

痛いほど唇を噛み締める。固く小さく縮こまる体がみしりと音を立てた。

のしかかる罪の重さに肺が潰れ、背骨が軋む。

ああ、これが自分に与えられた罰なのだろうか。

冷たい雨の檻に籠められ、重い闇の枷に捕われて。

飢えでも病でも死ぬことのない体で、いつ終わるとも知れない時を生かされながら。

自分の犯した罪の記憶に苛まれ続けるのだろうか。

このまま、ずっと。

ひとりぼっちで。

「……それでもいい」

これがジインを傷つけた事への報いだというのなら、喜んでこの身を差し出そう。

会いたいと願うことさえ罪だというのなら、その望みもすべて捨てよう。

一生会えなくてもかまわない。

夢も希望も温もりも、何一つこの手に残らなくていいから。
だから、どうか。

「無事でいて……」
他にはなにも望まないから。

どんな姿でもいい、どんな形でもいいから、どうかどうか生きていて。

心の底から、ただそれだけを願った。

ソラ。

ああ、まただ。また、ジインの声が聞こえる。

今はもう懐かしいとさえ感じるその声が、夢の淵で自分を呼んでいる。

何一つ望むまい、欲すまいと誓った矢先から、心が、体が、魂が、その存在を求めてしまう。

不在の空白に、こんな幻を作り出すほどに。

ソラ。

いつにも増して遠く儂げなその声に、意識が吸い寄せられていく。どこか苦しげな呼び声は、降り続く雨音に埋もれて今にも消え入りそうな

「……」

飛び起きる。息を止めて、じっと耳をすました。

夜空から落ちてくる幾千幾万の水滴。

その合間をすり抜けて届く、かすかな ……。

「……っ！」

窓へ飛びつくようにして、闇の先に目を凝らす。

息を呑んだ。

まさか。

部屋を飛び出す。階段を駆け下り、ガラスの抜けた窓をすり抜けて、裸足のまま二階から飛び降りた。途端に強烈な雨つぶてが全身を叩く。視界を遮るほどの雨も構わずに、ソラは目を見開いた。

豪雨に煙る闇の向こう。降りしきる雨に打たれて輪郭の形に飛沫

を散らす人影が二つ。

まさか、そんな。

「ジイン!？」

駆け寄って体を支える。深く被ったフードとゴーグルで顔はよく見えないけれど、懐かしい匂いは確かにジインのものだ。細い肩を抱き、確かな重みを両腕に受け止めながらも、ソラは目の前で起きていることが信じられずにいた。

ジイン……ジインだ。本当に？

いや、自分はまた夢を見ているのかもしれない。

まぶたを開いたら、ここは薄暗い制御室で……。

「ソラ……」

声が聞こえた。弱々しい、かすかな声音。けれどそれは、雨の粒子が混じる空気を震わせて確かにソラの鼓膜に伝わり、電流のように全身を駆け巡った。

胸に立ち込めていた黒い霧が一瞬にして吹き飛ぶ。

現実だ。

夢なんかじゃない。幻なんかじゃない。

ジインがいる。ジインが生きて、ここにいる。

ああ、神さま！

「早く中へ」

固い声がそう告げる。ああそうだ、そうだった。

「こつちへ」

裏口から工場内へ移動して一階の隅へジインを運び込む。元は作業場だったらしい広い空間には、打ち捨てられ錆び付いた機器の残骸が点在している。

ビニルカバーで覆われたその中の一つにジインを寄りかからせ、震える手でフードを払いゴーグルを外す。

頬に貼り付く漆黒の髪。陶器のような白い肌。薄いまぶたの下から現れた夜色の瞳は記憶にあるよりもずっと深く澄んで鮮やかだ。

こんなに美しい瞳の人間は他にいない。

ああ、本当にジインだ。ジインが、ちゃんと生きている。

「ソラ……やっぱり、ここにいたんだな……」

絶え絶えに呟く唇が、安堵の笑みを浮かべた。濡れた指先が頬に触れ、夜色の瞳がゆっくりと瞬く。

「よかった……会えて……」

ああ、本当にジインなんだ。

冷たい手のひらに頬を押しつける。濡れそぼった肌の奥にかすかな温もりを感じた。

生きている、命の感触。

恋しくて恋しくてたまらなかった、ジインの温もりだ。

ああ、生きていた。

生きていてくれた。

「ジイン……無事でよかった……本当に、よかった……っ！」

声が詰まり、目の奥が熱くなる。喉がぎゅっと締めつけられる感じがして、視界がゆらゆらと歪んだ。

「泣くなよ、ばか」

呆れたようにジインが笑った。

「泣いてないよ……全っ然、泣いてない」

目に涙を溜めたまま、無理やり口角を上げる。おそらくおかしな顔になったのだろう、こちらを見てふわりと微笑むと、ジインは深く息を吐き静かにまぶたを閉じた。

頬に触れていた手から力が抜ける。

「ジイン……？」

ぐったりとうつつむくその顔を凝視する。よく見ると、蒼白の額には雨ではない雫が浮かんでいた。震える体。苦しげな呼吸。唇は暗闇でもそうとわかるほどに真っ青だ。

それにこの、かすかに鼻を突く錆びた匂いは……。

「一体いつまでそうしているつもりだ」

声を見上げる。長身の少年が冷たくこちらを見下ろしていた。

ジンより二、三歳年上だろうか。少年と呼ぶには大人びた、けれど青年と呼ぶには少し幼いその人は、濡れたフードを外しながら工場内を素早く観察した。

「もつと暖かい場所はないのか？ 何か暖房機器は」

「あ……ストーブなら、上の部屋に」

「燃料は？」

「え？ ええと、確か二年前の固形燃料が残っているはずですよ」

「ベッドは？」

「一応あります。けど、使えるかどうか」

錆びたスプリングが飛び出た埃だらけのマットレスを思い浮かべて、ソラは首を傾げた。

「寝袋も持って来るべきだったか」

ため息まじりに独りごちて、少年が背負っていたビニルバッグを下ろす。

「着替えが入っている。早く着替えさせて、暖かいところに寝かせてやれ」

「は、はい」

「これが水と食料だ。七日分ある。こっちはライトとブランケット」
水は固形濃縮形、ライトは手動発電式、などと説明を加えながら、少年が手際よくバッグの中身を改めていく。

「これが医療品。このケースが薬だ。鎮痛剤、抗生物質、炎症止め、解熱剤、催眠剤、消毒液、一通り揃っている。薬の打ち方は？」

わかるかと問われて首を振る。苛立たしげに短く息を吐くと、少年はペンに似た筒を取り出して見せた。

「このシリンジに薬の入ったカプセルをセットして打つ。薬によって打つ箇所が違ったり、次に打つまで空ける時間の間隔が違ったり、注意書をよく読むように」

「わかりました。ありがとうございます」

医療品のバッグを受け取りながら礼を言う。視線が重なった。暗視ゴーグルの奥からじつとこちらを見据える鋭い眼差しは、まるで

眼球を突き抜けて心の奥底を探ろうとしているかのようだ。

思い出すのは、『彩色飴街』で向けられた冷たい視線。けれど違う。

少年の眼差しには“ヒトガタ”に対する恐怖がないかわりに、もっと違う何かが含まれているようだった。

「あの、」

何か言おうと口を開いた途端、視線がついと逸れる。唇を固く引き結びしばし何かを思いためらった後、少年は胸のポケットから銀色のケースを取り出した。

「あとは、これを」

手渡されたケースを開く。中には先ほどの注射器と似たもの一本だけ入っていた。きつちりとパッキングされ、大きな赤い印字の施されたそれは他の薬とどこか雰囲気異なっている。

「静脈に打てば、数秒で楽になれる」

「え？」

思わず聞き返す。楽になれるとはどういうことだろう。効果の強い痛み止めか何かだろうか。

「どうしても苦しんで……どうにもならない時が来たら、使え」

「……え？」

どうしても苦しんで。

どうにもならない時？

「ちよ、ちよっと待って下さい。“楽になれる”ってどういう意味ですか？……まさか、」

視線が重なる。まるで鉛の粒子でも含んでいるかのような重く硬質なその眼差しで、ソラは自分の想像が正しいことを悟った。

楽になれるというのは、つまり。

「っ！」

弾かれたように手を放す。床に落ちたケースが、かしゅんと耳障りな音を立てた。

「なんで……要りませんこんな物！ どうしてこんな、」

「黒瀬の希望だ」

緩慢な動きで少年がケースを拾い上げる。ソラは耳を疑った。
ジインの、希望？

「な……んで……どうして、ジインがこんなもの、」

「どうしてこれが必要になるのかは」
腕を掴まれる。

「自分の目で確かめるんだな」

引き寄せられ、叩き付けるようにケースを胸に押しつけられた。
暗視ゴーグルの奥の瞳がぎらりと光る。

抜き身のナイフに似た眼光が突きつけるのは、ほとんど憎しみに
近い怒りの感情だ。

どうしても苦しんで、どうにもならない時？

不穏な動悸が胸を打ち始める。一度は消えたはずの黒い不安が、
胸の奥底から再び染み出す心配がした。

“苦しむ”って、いったいなに。

“どうにもならない”とは、いったいどうということ。

胸に抱える銀色のケースがずしりと重みを増す。

命を絶つ薬。

なぜ、どうしてジインがこんなものを。

差し貫くような視線の残滓を網膜に残したまま、少年は目を逸ら
した。

「黒瀬」

暗視ゴーグルを外し、少年がジインに呼びかける。薄いまぶたが
かすかに震え、ややあってから夜色の瞳が覗いた。

「もう行くよ。荷物と薬類は彼に渡しておいたから、なにかあれば
すぐに言うように」

ゆっくりと噛み砕くように少年が言う。先ほどとは打って変わっ
た柔らかな口調だ。

うなずく代わりに、ジインはゆっくりと一度瞬いた。

「ありがとうございます……小雪と北見にも、礼を……」

「伝えておく。……他に何かして欲しいことはあるか？」

「もう十分ですよ」

言いながら、ふいにジインが笑った。

「沢木さん……本当にいい人ですね」

「……気づくのが遅すぎるな」

痛みを堪えるような顔つきで、沢木も笑う。

ぎゅっと胸が締めつけられる感じがして、ソラは沢木の笑顔から目を逸らした。

泣いている。

瞳も頬も少しも濡れていない。でも、わかる。

この人は今、心で涙を流している。

一目でそうとわかるほど、沢木の笑顔は悲しく、そして痛々しかった。

「ありがとう、沢木さん」

ジインの笑顔が変わる。可笑しそうに笑っていたさっきまでの笑顔とは違う、もっとやわらかで優しい微笑みだ。

それはまるで、心の奥底からふわりと湧き上がり、辺り一帯を美しく透明なもので満たすような。

ソラにすら滅多に見せないその表情に、沢木の笑顔が崩れる。本物の泣き顔へと歪みかけた顔を隠すようにして、沢木は立ち上がった。

暗視ゴーグルをかけ、深呼吸を一つする。

その背中に向けて、ジインがゆっくりと腕を上げた。

「さようなら、沢木教士」

胸の前に水平に腕を上げ拳を作る動作は、魔法士同士の敬礼の仕事だ。

「……さようなら、黒瀬錬士」

ジインの敬礼に、沢木も敬礼で応える。そのままジインから目を離さずにゆっくりと二、三步後じさり、沢木はようやく背を向けた。鉛の枷を引きずるように重々しく歩き出した靴音は、一歩一歩何

かを断ち切るように闇に響き、次第に速度を増しながら戸口へと遠ざかっていく。

「あ……まって、待って下さい！」

はっとして、ソラは慌てて沢木の後を追った。

まだ聞きたいことを聞いていないのだ。

“苦しむ”って、いったいなに。

“どうにもならない”とは、いったいどうということ。

不穏な言葉の意味を図りかねて、疑問符だけが増えていく。

疑念は思考のごく浅いところで滞って渦を巻き、まるでその先の結論へ到達することを恐れているようだった。

扉の外れた戸口を出たところで沢木の腕を掴み、行手を遮るようにしてその顔を見上げる。

ゆっくりと向けられた重く悲しげな眼差しは、まるで誰かを亡くしたような……。

ぶるりと頭を振る。不安を煽るその眼差しをはね返すようにまっすぐ見つめ、ソラは訊ねた。

「苦しんでどうにもならない時”って何ですか？ どうしてジインがこんなもの……こんな薬がどうして必要なんですか？」

手に持ったままのケースを強く握り込む。背筋を冷たい汗が流れた。

「教えて下さい……ジインはどうなるんです？ 傷の具合はそんなに悪いんですか？ あんな状態でこんなところに連れて来て大丈夫なんでしょうか？ あんなに震えて、青ざめて……本当はまだ病院で治療を続けなきゃいけないんじゃないんですか！？」

思わず語気が荒くなる。

胸の中で逆巻く不安が、言葉と鼓動を急かすようだ。

震える体。苦しげな呼吸。ぐったりと青ざめたあの横顔。

まさか、まさかジインは……。

問いに一つも答ええないまま、沢木はただじっとソラを見つめていた。

押し黙っているものの、暗く沈んでいた双眸が次第に鋭さを増していく。

一触即発の気配を感じながらも、鼓動に急かされるままソラは問いを重ねた。

「黙ってないで答えて下さい！ “苦しむ” って、“どうにもならない” ってなんですか！？ “自分の目で確かめる” ってどういうことですか！？ この辺りにはまともな病院がないんです、もしジインに何かあったら、」

「もう無理なんだよ！！」

胸ぐらを掴まれ、踵が浮く。壁に背中がぶつかった。

暗視ゴーグルの奥、怒りにたぎる双眸がすぐ目の前だ。

沢木の全身から立ち上る怒りの感情が、まるで肌を刺すよう。

そっだ、この人は会った時から自分を憎んでいるようだった。

なぜ？ どうして？ オレが“ヒトガタ” だから？

それとも……………。

「おまえが……………おまえさえいなければ、黒瀬は……………っ！」

憤怒に顔を歪ませて、沢木が低く唸る。

「あいつがどうなるかだと？ どうにもならないんだよ、もう。

院の最新技術でも竜毒は消せない……………進行を止めることすらできないんだ！」

「」

「リュウドク？」

リュウドク。りゅうどく。

竜の、毒？

「毒って、何ですか……………？」

声が掠れる。鼓動がうるさくて耳がよく聞こえない。

溢れ出す嫌な予感が喉に詰まって、息が止まってしまいそうだ。

「“竜毒” って何ですか…………… “どうにもならない” って、どうい

うことですか……………？ 無理って、“もう無理” って、いったい何が

無理なんです！？ 教えて下さい…………… 答えて下さい！ どうし

てジインは……………！！」

「竜毒を受けた者は！」

雨の音が大きくなる。

お互いの息づかいや雫のしたたり、泥の匂いやなんか、沈黙の中でやけにくつきりと感覚を占めて。

ふいに思い出す、ジンからした錆びたようなあの匂い。

ああ、そうだ。あれは血の匂いだ。

あの時、あの恐ろしい光景に満ちていた、赤い、赤い。

まるで永遠のような間を置いて、沢木の唇がゆっくりと動いた。

「竜の牙で負傷した人間は、傷口から竜毒が広がって ……」

足の下に、ぼっかりと穴が開いた気がした。

023 闇惑う

竜ノ牙デ負傷シタ人間ハ、傷口カラ竜毒ガ広ガツテ ……。

「……え、？」
なに？

この人は、今なんて？
告げられたたった二文字の言葉がうまく脳に届かない。
理解できない。

竜の牙で負傷した人間は。
ジインが、何だつて？

ジインが、 しぬ？

足元で砕けた雨粒が小さな雫を散らす。素足に凍みるコンクリートの冷たさが、骨を打ち臓腑まで響くよう。闇の向こうで降り続く雨は弱まる気配もなく、ノイズに似た雨音で世界を満たしている。目の前には、凍てつく眼差しの中に燃える怒りをたぎらせた鋼色の双眸。

背に当たるトタン壁の向こう側、廃工場の片隅には、遠くかすかなジインの気配。

取りまく景色は数秒前となにも変わらない。けれど、決定的な何かが変わった気がした。

視界の端の暗闇がずしりと重みを増したような。

あるいは、世界のどこかが欠け落ちたような。

言葉にならない吐息が白く散らばっては、二人の間を過って消えていく。

「 竜毒による細胞の浸食が始まれば早くも数時間。もって二週間が限度だ。黒瀬にはまだ浸食活動の症状が出ていないが、もう時間の問題だろう。竜毒の進行はかなりの苦痛を伴う。ほとんどの場合その激痛に耐えきれずに、」

「うそだ……」

掠れた声で言葉を遮る。

“ 竜毒 ” “ 浸食 ” “ もって二週間 ” “ 時間の問題 ” “ 苦痛 ” 。

受け入れ難い言葉たちは思考の表面をかすめるだけで、理解されないまま通り過ぎていく。

ほとんど麻痺したような頭を無理矢理動かして絞り出した結論は、

「嘘だ……嘘ですよ？ そんなの。ジーンが、まさか……」

そうだ、そんなの嘘に決まっている。

でなければ、何かの間違いだ。

ああ、こんな時に悪い冗談はやめてくれ。

頼むから、どうか嘘だと言って。

縋るように見上げた先の鋼色の眼差しは、重く沈みきっているけれど強くまっすぐで、嘘を吐いている人間のそれではない。

ひたひたと恐怖が胸を満たしていく。

「 ち、治療は、」

声が震えた。舌先が強張ってうまく言葉が出ない。

「治療法はないんですか？ 薬とか手術とか……何かあるでしょう！？」

濡れた上着に取りすがる。そうだ、きっと何か方法があるはずだ。竜に関する研究を何十年も続けている魔法院が治療法を知らないはずがない。

きつと何か方法が……。

「そうだ……オレが負わせた毒なら、オレの体を調べれば薬が作れるんじゃないですか!？」

竜と“ヒトガタ”、体の仕組みの違いはわからない。けれどもしこの体のどこかにジインを冒した毒が隠れていて、自分がその影響を受けていないのなら……。

「オレを、オレを使って下さい！ オレの体を調べてジインに薬を作ればいい……お願いします、オレを魔法院へ連れて行って下さい！」

細い細い希望の糸に取りすぎるように、目の前の少年を仰ぐ。

暗視ゴーグルの奥の双眸が、すっと細められた。

「……院に戻れば、もう二度と生きては出られないぞ」

「かまいません！」

考えるより先に答えていた。

そうだ、オレなんかどうなったっていい。

解剖でバラバラにされても、人体実験にかけられて命を落としてもかまわないから。

この得体の知れない体を隅々まで調べて。

そしてどうか、ジインに薬を……。

何かを見定めるようにじっとこちらを凝視していた視線が、静かに伏せられる。

「……そんなことができるなら、とっくにおまえを捕縛して院に引き渡している」

“そんなことができるなら”。

それは、つまり……。

力なく肩を落とした沢木が、重い溜め息を吐いた。

「世界最高峰と謳われるこの国の最新医療技術でも、人体から竜毒を取り除くことは不可能だ。“毒”という名称がついてはいるが、竜毒は毒虫や毒蛇が持つ一般的な毒素とはまったく違う。細胞そのものを変質させて浸食していく、むしろ悪性腫瘍や病素に近い存在

だ。浸食部分を摘出して、すぐにまた別の箇所でも浸食が始まる。薬でも手術でもその進行を止めることはできない。症状の進行速度に多少の個人差はあるにせよ、記録にある限り、竜毒を受けた者は百パーセントの確率で、

「続く言葉を呑み込んで、沢木が固く目を閉じる。」

「だからたとえおまえを院に連れて行っても、黒瀬を助けることはできない。もし仮に、おまえを院に差し出すことで黒瀬を助けることができたとしても……あいつは絶対にそれを許さないだろうしな」

掴まれたままだった胸ぐらが解放される。

だらりと腕を下げたまま、独り言つように沢木は言った。

「ソラに会いたい」……それが黒瀬の最後の願いだ。どうしてもソラに会いたい、傷が悪化してもかまわないから、と。けれど苦しむ姿は見せられないからと……それを

眼差しで銀色のケースを示した沢木の口元に苦笑いが浮かぶ。

「本当にあいつは、最後の最後までおまえのことしか頭にないんだな」

「ソラに会いたい」。

それがジインの、「最後の願い」。

最後。

最後？

最後つて、なに。

最後、だなんて。

「……うそだ……」

ゆらゆらと視線が彷徨う。無意識にゆるく首を振っていた。呼吸の感覚が乱れ、まっすぐに前が見れない。

だって、ジインが　ぬ、なんて。

死ぬなんて、そんなこと。

信じられるはずがないじゃないか。

こんなこと、何かの間違いに違いない。

そつだ、きつとオレはまた悪い夢を見ているんだ。

ほら、目を覚ませば、ここは薄暗い制御室で…………。

「目を逸らすな」

頭を両手で掴まれる。眼球を貫くような強烈な視線が双眸をのぞき込んできた。

強靱なナイフの切っ先を思わせる色の瞳に、視線が捕われる。

感情を必死に抑えた声音で、一言一言刻み込むように沢木が言う。「これから起こることから絶対に目を逸らすな。いいか、これはおまえの咎だ！ おまえのせいで黒瀬は、死ぬ。傷から毒が回って……苦しみながら」

「うそだ…………」

「嘘じゃない！ これはもう動かしようのない事実だ、現実だ！ ちゃんと見る、しっかり認める！ いいか、絶対に目を逸らさずに……最後まであいつの傍にいる。それだけが、おまえが黒瀬にしてやれる唯一の、」

「嘘だ、嘘だ、嘘だ…………ッ！」

歯を食いしばり、無理やり首を振る。すべてを拒絶するように硬く目を閉じ、両手で耳を塞いだ。

もういい。もう止めてくれ。

そんなこと、信じられるはずがない。

オレのせいでジインが死ぬなんて。

毒で苦しみながら死ぬなんて。

そんなの、悪夢だとしてもあまりに惨すぎるじゃないか。

もういい。もうたくさんだ。

これ以上は耐えられない。

だから、どうか消えてくれ。

もう現実でも幻でもどっちでもいい。

何でもいいから、どうか目の前から早く消えて。

「…………どうしても信じたくないとつものなら、それでもいい」

信じたくない気持ちもよくわかるから、と呟く溜め息まじりの言

葉が、うつむく頭に静かに落ちる。

「でも、いいか。絶対に逃げるな。どんなに辛い、惨たらしい結末が訪れようと……どうか最後まで、あいつのそばに」

どうか、と懇願するような響きの声音に、ソラは思わず顔を上げた。酷く悲しげな、けれどどこか諦めたような顔で、ほんのわずかに微笑みながら沢木は言った。

「おれにはできなかった……おまえじゃなきゃだめなんだよ、“ソラ”」

足元で、じり、と砂利が鳴る。一足ごとに砂利を踏みしめながら、沢木はゆっくりと後じさっていった。

そして、

「……黒瀬を頼む」

静かな呟きが、白い吐息とともに闇に溶ける。

目深にフードを被り踵を返すと、沢木はそのまま闇の中へと消えていった。

遠ざかっていく足音と白い吐息とが完全に消え去り、世界が闇と雨だけになる。

闇に走る細い雨筋。吐き出されては消えていく白い吐息。水たまりで跳ねる雫。

黒い上着の背中が消えていった方角を呆然と眺めながら、ソラはしばらくその場に立ち尽くした。

手に残された銀色のケースは一息ごとに重みを増して、闇の底へと心を引きずり込んでいく。

凍りついた思考の中から焼き印のように黒々と浮かび上がるのは、

黒瀬八死又。

「うそだ……」

オマエノセイデ、黒瀬八。

「嘘だ……！」

傷カラ毒ガ回ッテ。

「嘘だ、嘘だ、嘘だ……！」

苦シミナガラ！

「嘘だ …… ツー！」

両手で顔を覆う。足元に落ちた銀色のケースがかしゃんと甲高い音を立て、途端にぐらりと世界が揺れた。

凄まじい目眩に襲われ、その場に膝をつく。酷い吐き気が込み上げ、激しくえずいた。何日も空っぽのままの体には吐きだせる物など無く、ただ臓腑が引きつるように軋むだけだ。それでも呑み下し難いなにかを拒絶するように、ソラは何度も嘔吐した。

唇が震える。涙がにじんだ。耳障りな鼓動が警鐘のようにがんと頭を打つ。心臓が破裂しそうだ。うまく息ができない。世界がゆらゆらとまわり、どちらが上か下かもわからなくなる。

強く地面にしがみつくと、凍てついた砂利が手のひらを傷つけた。鋭い痛みがちくりと脳を刺し、感覚がゆっくりと天地を取り戻す。震える手のひらに滲む赤色を見て、唐突に理解した。

ああ、これは夢じゃない。幻じゃ、ない。

これは、まぎれもない現実。

ジンが、死ぬ。

オレのせいで、ジンが。

傷から毒が広がって。

……苦しみながら。

こんなことになるなんて。

引きずるような足取りで工場内へ戻る。静かに眠るジインのそばへ、懺悔のようにひざまずいた。暗闇の中でほの光る白い顔を見つめる。青い闇に染まる横顔はどこか現実離れしていて、よくできた石像かなにかのようだ。

こんな時だというのに、思わず見とれてしまう。

離ればなれになってから、寝ても覚めても思い続けてきた顔だ。

そっと手を伸ばす。触れた頬は冷えきっていて、まるで氷のようだ。

ああ、そうだ、早く着替えさせなくちゃ。

上の制御室へ運んで、安静にしないと。

ストープはちゃんと動くだろうか。

部屋を暖かくして、それで。

それで。

……それで？

その後は……？

ゆっくりと辺りを見回す。

深く青い闇の中に点々と置かれた機器は、まるで墓地に立つ墓標のようだ。

そこここに口を開ける空虚な暗闇は、呑み込む死人を待つ墓穴を思い起こさせた。

ぞくりと背筋が寒くなる。

ここはダメだ。

立ち上がり、震える手で黒いバッグを漁る。薄いアルミでできた防寒用ブランケットを広げ、震えるジインの体を包み込んだ。

「ソ、ラ……？」

気づいたジインがうつすらと目を開ける。

「少しだけ我慢して」

バッグを肩にかけ、朦朧としたままのジインの体を慎重に背負う。

ここにはダメだ。ここに居てはいけない。

このまま、ここに留まれば。

このまま、何もできないまま、すべてが終わってしまう。
そんな気がした。

なにか恐ろしいものに追われるように驟雨の中へと足を踏み出す。
途端に強烈な雨つぶてが全身を叩いた。うつむく目に、口に、冷たい雨水が入り込む。

凍てついた砂利は素足を突き刺し、一足ごとに傷ついていく両足が悲鳴に似た声音で問うてくる。

どこへ行くつもりだ。

わからない。

何をするつもりだ。

わからない。

見上げる先は明り一つない漆黒の闇だ。

足元を照らす光はおるか、宛てもしるべも何もない。

まるで地獄の底へと続く黄泉の道を下っているかのようだ。

それでも、進むしかなかった。

ここにはダメだ。ここに居てはいけない。

このままここで死を待つなんて。

なにもせず、ただ見ているだけなんて。

そんなことできない。できるはずがない。

きつとなにか、ジインを救う方法があるはずだ。

最新医療技術でも人体から竜毒を取り除くことは。

蘇る言葉に首を振る。

魔法院が治せなくても、他に治せる医者がいるかもしれない。

広く知られていない民間療法とか。

秘境の奥地に自生する、万病に効く薬草とか。

飲むだけで寿命が延びるといふ泉の水とか。

この国にはなくても、世界中を探せば、きつとなにか方法があるはずだ。

でも、いったいどうすれば？

限られた時間の中で外国へ渡り、治療法を発見するなんて。

パスポートは？ 『身分証』は？ 船の手配は、お金はどうする？
どこへ行けばいい？ 何をすればいい？

どうすれば、ジインを助けることができる？

わからない。思いつかない。何一つ。

こんな時にどうすればいいのかを、何一つ自分は知らない。

今までは、ジインがいてくれた。

どんな時も、前に行くジインの背中が進む道を示してくれた。

けれど、今は……。

背中にジインの震えが伝わる。体温が遠い。頼りない吐息は雨音
で今にもかき消されてしまいそうだ。

支える腕が恐怖で震え出す。歯の根が合わない。

早く。

この闇を抜けて、早くどこかへ。

でも、いつたいどこへ……。

おぼつかない足をぬかるみにとられ、膝をついた拍子にジインの
手が垂れ下がる。傷口が開いたのだろうか、白い指先から薄紅に色
づいた水滴が滴り落ちた。

「あ……」

こぼれていく。

ジインの、命が。

「だ……だめだよ！」

思わず手で受け止める。水滴は、指の間を虚しくすり抜けていっ
た。

止められない。救えない。

流れ出る命を留める術も力も、自分は持っていない。

失ってしまうのか。

このまま、何もできないまま。

ただ黙って見ているしかないのか。

ジインが苦しむ姿を。

腕の中で冷たくなっていくのを。

なにもできずに、ただ見ているしかないのか。

目を逸らすな。

「……ッ、」

恐怖が突き抜ける。悲鳴に似た呻きが喉元まで出かかった。

いやだ。だめだ。そんなこと。

そんなこと、とても耐えられない。

ああ、なぜ、どうしてこんなことに。

こんなこと……。

これはおまえの咎だ。

「……オレの、咎」

ジインを傷つけたことが、オレの罪。

それに対する報いが、ジインを失うことだというのか。

もしこれが、自分に与えられた罰だというのなら。

空を見上げる。雨粒が容赦なく頬を打った。

神さま。

そこにいるならどうか。

ジインを、助けて下さい。

これが報いというのなら、他のどんな罰でも受けます。

地獄の炎で焼かれてもいい。

体中を切り刻まれたってかまわない。

でもジインは。

ジインだけは、どうか。

「け、て」

天使でも悪魔でも、誰でもいい。

もう死神だつてかまわないから。

どうか、この命と引き換えに。

だれか、どうかジインを。

「誰か……だれか、助けてええエツ!!」

身を切るような叫びは、虚しく雨に紛れて消えた。

砂利を踏みしめる音がする。

地面に落としたままの視界に現れる、黒い靴先。

ゆっくりと顔を上げる。

「……しに、がみ……?」

影が、見下ろしていた。

「路音は大丈夫かしら」

患者のいないベッドに腰かけ、小雪は本日何度目かになる台詞をぼんやりと呟いた。

「沢木教士がついているから、きっと大丈夫だよ」

同じく何度目かになる答えを呟く北見の腕には、路音から引き継いだ生体情報をモニタリングするセンサーが装着されている。外界の音が遮断された室内に淡々と響く電子音は北見の心拍数だ。

主の消えた病室で、二人は何をするわけでもなくぼんやりと時間を持て余していた。

二人に与えられた役目は、“ここにいる”こと。

「それにしても、病室のセキュリティがこんなに甘いなんて」

言いながら、小雪は真つ白に磨かれた天井を見上げた。そこに埋め込まれている監視カメラのレンズは粘着テープでしっかりと塞いである。本来なら何も映らないはずの監視室のモニターには今、重篤の友人を見舞う小雪とベッドに横たわった路音の姿が映し出されているはずだ。

「上階の研究室や情報系エリアのセキュリティは別系統になっていてもっと厳重みたいだけど、黒瀬が言ったとおり重症患者が病室を抜け出すなんて誰も思わないんだろうね」

確かにそうだと小雪は思った。あれほどの深手を負い、安易に動かすことさえためらわれるほどの患者が、まさか自分の足で病室を抜け出すなんて想定外のことだろう。だからこそ、路音はここを脱出することができたのだ。

一目でいいから、どうしても路音に会いたい。上層部にそう懇願し特例として認められた小雪は、瑞彦と北見に付き添われ見舞いと称してここへやって来た。病室を訪れて、もうすぐ二時間。専属の看護士には笹原の名を最大限に利用し、可能なかぎり路音と二人き

りにして欲しいと言いおいてある。

けれどそれも、そろそろ限界。

「もうすぐ診察の時間ね」

小雪は腕の端末を見やると、次いでフラットなドアに視線を移した。スライド式の電動ドアはプログラム操作のロックに加えて特殊な粘着剤で内側からがっちり固められており、外側からはもちろん内側からも簡単には開きそうにない。

ドアが開かなければ、当然騒ぎになるだろう。監視カメラの映像も、少し調べればすぐに差し替えだと気づくはずだ。カメラのレンズを直接塞いだのは、映像の差し替えがバレた後もできる限り時間を稼ぐため。

あまりに拙く、なり振りかまわぬやり方に、思わず苦笑いする。

お世辞にもよく出来たと言い難い、まるで子どものいたずらのような計画だ。

けれどでかした事の重大さは、とても笑って済ませられるレベルではない。

「やっぱり、降格処分かな」

誰にともなく呟いた北見に、小雪は小さく頭を下げた。

「……ごめんなさい」

「どうして笹原が謝るんだ」

困ったように北見が言う。確かに小雪が北見に詫びなければならぬ理由はひとつもない。路音をここから逃がす計画に北見が加わったのは、小雪が誘い入れたわけではなく北見自ら進んで加担したことだ。

それでも申し訳ないと思ってしまうのは、今後二人に与えられる処分の重さに明確な差が出るであろうからだ。

小雪の属する笹原家は魔法院の中でもっとも歴史が古く、名門中の名門と呼ばれる家柄だ。幅広い人脈と膨大な資産を有し、その影響力は沢木家に次ぐと言われている。その力を示すかのように、院のすべてをとり仕切る長老会九名のうち二名は常に笹原家の人間が

務めることになっている。

瑞彦、北見、そして小雪の今回の行動は院に対する背反行為と見なされ、当然各家にも何らかの沙汰があるだろう。けれど院は沢木家や笹原家に対して声高に責任を追究することを避けたがるはずだ。当然ながら家のほうも事を荒立てたくはない。身内の不祥事の揉み消しを図るか、あるいは早急に解決するべく手を尽くすに違いない。前例がないのではつきりとはわからないが、うまくすれば背反審問会に召喚されることもなく、「嚴重注意の上、自宅謹慎」程度で済むかも知れない。

瑞彦は沢木家の長子という立場上、後継者問題がらみでいくらか面倒なことになるかも知れないが、院ではめずらしく小雪はそういった類いの争いから疎遠な立場にあった。父親には嘆きまじりに叱られ、母親からはねちねちとした小言を数時間ほど聞かされ、親戚連中からはこの先何年か顔を合わせる度に遠回しな嫌味を言われるかもしれないが、実害があるとしてもその程度だ。

けれど、北見は。

「笹原が謝ることなんてないさ。俺は俺がやりたいようにやっただけだし、それで家を潰されたとしても覚悟の上だ。まあ、潰されるってのは大げさだけどね。現実的に考えるなら、そうだな……二等錬士への降格、家長を召喚しての口頭及び書面での嚴重注意、数週間間の謹慎、受講料減額対象からの除外、ってところかな。あとは財政界で親父の立場が悪くなるぐらいだろう。まあ、あの父親のことだからいざ危うしとなったら俺を勘当でもして、自分は知らぬ存ぜぬで飄々とやっていくだろうさ」

「勘当……」

眉を八の時に曲げる小雪に、北見が慌てて手を振る。

「冗談だよ！ ……いや、まあ、あながち冗談でもないか、うん。はは。あつてもそんなに心配しないでくれ。もともと北見は新参者で、俺や兄貴の一人や二人ががんばったところでそれほど家に利があるわけでもないんだ。魔法士を輩出するのは成り上がり者の挟持

みたいなもんさ。北見家二人目の魔法士として一家の期待を背負って生まれてきたはいいけど、俺には教士に昇級できるほどの才能もコネもないし、どうせ一等魔法兵として東の片隅にでも配属されるのが関の山だったんだ。今さらそれが片隅のさらに片隅のトイレ掃除係になつたとしても大した差はないさ」

ベッドにごろりと横になると、北見は心配そうに小雪を見上げた。「笹原こそ大丈夫なのか？」

「え？」

「本当にこれでよかったのか？ いや、家のことや処罰云々は抜きにして、さ。あいつをあのまま行かせて、笹原はよかったのか？」

本当にこれでいいのだろうか。

それはこの数日間、小雪自身何度も繰り返してきた問いだった。すでに路音はここを脱出し、今頃はもう第三区あたりまで進んでいるだろう。

それはもう起こってしまったことで、今さら何を思い悩んでも無意味だ。

けれど、やはり考えてしまう。

いくら本人が望んだからといって、あんな状態の路音を外へ出して本当によかったのだろうか。

しかも路音が探し出そうとしているのは、その傷を負わせた張本人の竜だ。奇跡的に“ヒトガタ”に戻ったとはいえ、魔法士の路音に会えば再び竜と化して牙を剥くかもしれない。そうなれば、待ち受けているのは想像するだにおぞましい凄惨な結果だ。同行している瑞彦の身も危険にさらされる。

路音を“ヒトガタ”のもとへ送り出すことが正しい選択かどうか、小雪にはわからなかった。

けれど。

「だって、他に何ができたというの」「
彼のために、他に何が？」

否、なにもできはしない。

いま彼のために自分ができることは、ただ一つ。
その歩みを、遮らないこと。
ただ、それだけだった。

「3、2、1 切り替わったぞ」

瑞彦の合図で薄いまぶたが開く。瑞彦の手を借りながら、路音はゆっくりと体を起こした。

「何分ある？」

点滴針を自ら引き抜いた路音が、挨拶も抜きにして短く問う。

「あと六分五十二秒」

監視室のモニターには今、横たわったまま動かない路音を沈痛な面持ちで囲む三人の姿が映し出されているはずだ。偽造した映像内の瑞彦と北見は、あと六分五十二秒後に小雪を残して退室する。実際はその北見になりすました路音が瑞彦とともに脱出する手筈だ。

「言われたとおりAR-esを持って来たが」

副作用が、と言いかけた瑞彦を遮って、受け取った簡易注射器のシリンジを路音はためらいなく自分の腕に押し当てた。

AR-esは身動きのとれなくなった負傷者の身体能力を一時的に回復させる薬だ。脳内で - エンドルフィンを分泌させ、痛覚を著しく鈍らせる。結果、個人差はあるものの投与から数十分の間は重傷を負っていてもある程度の行動が可能になる。主に戦場で身動きのとれなくなった負傷者が退避する際などに使用される薬だが、強い副作用があるために軍でも非常時しか使用が認められていない。

「北見、服を」

「あ、ああ」

襟元のボタンに手をかけた北見から慌てて目を逸らし、小雪はくると背を向けた。路音の院内着と北見の制服を取り替えるのだ。しばしの間、衣擦れの音と心拍数を図る電子音だけが部屋に響く。

「悪い、小雪。手伝ってくれ」

「あつ、はい！」

路音の声に振り向いて、小雪は思わず息を呑んだ。

露なままの路音の上半身。右肩はガーゼと包帯に覆われ、傷口はきれいに隠されている。

その包帯に覆われていない部分。なめらかな白い肌に散らばる、無数の傷跡。

「一人じゃうまく着れないんだ」

「う、うん。手伝うね」

路音の右腕をシャツの袖に通すことに意識を集中しながらも、小雪は傷跡から視線を引き剥がせずにした。

まるで戦場の最前線に送り込まれ、命からがら帰還した兵士のような体だ。すでに塞がっているにも関わらずそれはどれも痛々しく、粗野な香りのしない路音の体にどうみても似つかわしくないものだった。

どうして、こんなに傷が？

困惑しているのは小雪だけではないらしく、院内着を着終えた北見も生体情報モニターのセンサーを腕に装着しながら横目で傷跡に見入っている。

以前から知っていたのだろうか、瑞彦に動じた様子はない。

「ありがとう」

「う、うん」

苦痛に顔を歪めながら、路音が左腕を無理やりシャツに通す。傷跡はシャツに隠されて見えなくなった。

立ち上がった路音との身長差に、北見が眉をひそめる。

「これ、本当にバレませんか？ 俺と黒瀬じゃ顔立ちどころか背丈も体つきも違うのに」

「さあな。俺もずいぶん乱暴な計画だと思うが」

不安げな北見の問いに、今度は瑞彦が肩をすくめる。

確かに北見の言うとおり、路音と北見は体つきが違い過ぎる。い

くら制帽で顔を隠しても、骨格の違いはそう簡単にごまかせるものではない。

こんな方法で、本当に外へ出られるのだろうか。

「このセキュリティはおおかたを監視カメラに頼ってるんだらう？」

路音の問いに、瑞彦がうなづく。

「ああ。一応セキュリティポイントには守衛兵が駐屯しているが」「監視カメラとシステムに頼っているから、相手をじろじろ見て確認したりはしない。監視カメラのアンゲルなら体格の違いはあまり目立たないし、病室の外にいる守衛もまさか重度の竜創患者がすたすた歩いて病室を出ていくなんて考えもしないだろう」

「でも入口の生体認証はどうするの？」

各フロアの入口と外へ続く全出入口に設置されたセキュリティポイントでは、通過の際に『身分証』提示と生体認証が必要なはずだ。

「入所時は生体認証が必要だけど、退出時は『身分証』の提示だけで済む。沢木さんが老師に昇格したら一番最初にセキュリティを見直したほうがいい」

入ってきた人間と出ていく人間が同じとは限らないからと皮肉っぽく呟きながら、路音が制服の上着を羽織る。発熱のせいでもまだ少し朦朧としているのだろうか、考えたことを片端から口に出しているようで、いつもよりよほど饒舌だ。

長身の北見の制服は細身の路音には少し大きめで、襟から覗く首筋がやけに頼りなく見えた。

「外部の人間が外から入るのは難しいけど、中から外へ出る分にはこのセキュリティは甘い。こっそり逃げ出す必要がある人間なんてここにはいないからな。しかも同行しているのは沢木家の長子だ。まさか間違いが起こると思わないだろう。このフロアさえ無事に出られれば、あとはどうにでもなる」

ボタンを留め終え、路音が深いため息をつく。青白い額には脂汗

が滲んでいた。薬がまだ完全に効いていないのだろう。些細な動作にも眉をひそめ、呼吸さえ辛そうだ。

苦しい息づかいに、こちらまで息苦しくなる。

小雪は思わず胸を押さえた。

もし無理に体を動かしたことが原因で、竜毒の浸食が始まってしまったら……？

体の芯がぞくりと冷える。

「あと三十秒」

本当にこのまま行かせていいのだろうか。

たとえ望みが薄くとも、やはりここに留めて治療させるべきではないのか。

治せなくてもいい、せめて苦痛を和らげるだけでも……。

そう思い始めたその時、

「二十秒」

「小雪、北見」

苦しい呼吸の合間に、路音が言う。

「巻き込んですまない」

まぶたを閉じたままの横顔が、かすかに微笑んだ。

「ありがとう」

深く息を吸い込むと、路音はまぶたを開いた。

顔を上げ、荒い呼吸を押し殺し、凜と背筋を伸ばす。

前だけを見据えた鋭利な横顔に、視線が釘付けになる。

余裕というものがすべて削げ落ちた眼差しは、ひたすらただ一人に向けられていて。

できない。

この人の歩みを、眼差しを、遮ることは誰にもできない。

私たちができることは、ただ一つ。

「十秒。二人とも、後は頼んだぞ」

わずかに緊張した面持ちで瑞彦が扉へ向かう。制帽を目深にかぶり、瑞彦の後ろを確かな足取りで歩いていく背中を見送りながら、

小雪は思った。

ああ、さよならだ。

一度も振り向かず、何一つ答えをもたらしないうまま、この人は去っていく。

まるで、見る者の視線をひらりと奪ったまま飛び去っていく蝶のよう。

たとえその先に、空はないとわかっていても。

「羽を持って生まれたものを、地上に留めておくことはできないの」

自分に言い聞かせるように、小雪はそつと呟いた。

「もう一つ聞いていいかな」

天井を見上げたまま、北見が静かに言う。

「笹原はどうしてあの時……あの“ヒトガタ”を逃がしたんだ？」

問われて思い出すのは、呆然と見開かれた少年の瞳だ。

行つて！

血まみれの路音を抱えながら、放心状態の少年に夢中でそう叫んでいた。

行つて！ 早く……ここから逃げて！

その声は端末を通じて瑞彦や北見にも聞こえていたのだろう。

小雪、頼む。あいつを、ソラを逃がしてくれ。

路音にそう頼まれていたのは事実だ。

けれど、それを思い出すよりも早く口を突いて言葉が出たのは。

「泣いてたから」

目の前で竜から人に戻った少年。

その見開かれた双眸から、涙はこぼれていなかったけれど。

「あの子……泣いてた」

初めて目にする、生きた“ヒトガタ”。

その正体は、妊婦に取り憑き胎児を食い殺してすり変わる人外の“化け物”だ。

ヒトの形をしていて、非なるモノ。

相容れることなど決してあり得ない、駆逐すべき対象である。

そう教わってきたし、そう信じてきた。

けれど。

ジンン！！。

心臓を掴むような悲痛な叫び。深く傷ついた瞳は、声にならない慟哭に満ちていた。

これは何？

目の前の、この生き物は？

青い顔で愕然としているこの少年は。

“ヒトの形をしていて、非なるモノ”

“相容れることなど決してあり得ない、駆逐すべき対象”

本当に？

彼は確かに人間ではない。

路音に死の傷を負わせた、正真正銘の化け物だ。

けれど。

「ヒトガタ”に戻った彼には、ちゃんと心があった。感情があった。路音のことも覚えていて、自分がしたことにはひどく傷ついているみたいだった。それでね、ああ、おんなじだって思ったの。私たちと同じように感じて、考えて、悲しむ……」

たとえそれがすべて、人の目を欺くためのまやかしであったとしても。

「この子がこのまま殺されるのは嫌だなんて思った。だから……逃げた」

シヨック状態のまま走り去った少年は、今どこで何をしているのだろうか。

果たして路音はあの子を探し出すことができるのだろうか。

もしあの子を見つけることができたら、路音はまず何と声をかけるだろう。

その時少年は、一体どんな顔をするのだろうか。

それぞれの選択が、どんな結末を生み出すのかはまだわからないけれど。

「……どうか、無事で」

願わくば、彼の望むまま。

誰の手も届かない場所で、安らかなひとときを過ごせませすように。白く輝く天井を見上げながら、小雪は心からそう祈った。

あなたのために、ぼくは何ができるだろう。

手を握る。白くほっそりした手だ。均整のとれたまっすぐな指に、貝殻のような爪。女の人ほどやわらかではないけれど、男のように骨張ってはいない。よくできた彫像のように美しい手はどこか中性的で、ジーンその人をよく表しているように思う。

乳白の肌に透ける青い血管を、親指の先でそっとなぞる。そこに流れているはずの熱は指先を温めるには不十分なようで、白い手指はひんやりと冷たいままだ。

シーツの上に力なく横たわるその手を少しでも温めたくて、ソラは指先をそっと両手で包み込んだ。点滴針の差し込まれた細い腕をあまり動かさないように気をつけながら、重ねた手に額を押しつける。

ひざまずき頭を垂れる己の姿は、まるで祭壇で許しを請う哀れな懺悔者のようだ。

どれほど悔やみ、祈りを捧げても、この罪が許されることはないけれど。

そうだそうだと同調するように、剥き出しの配管が頭の上でごうごうと唸る。その度に滴る雫が、鉄板を重ねただけの床に黒い染みを作っていく。

古びたトタンと薄汚れた布、配管が這う低い天井とに囲われた小さな一角。陽の光の届かない、複雑に入り組んだ『彩色飴街』の奥の奥に二人はいた。

橙色の小さな灯が生み出す影は、深い奈落をそのまま写し取ったように濃い。

何重にも蓋をされ、あらゆるものから隠されるように設えられた小さな空間だ。時計も窓も何も無い。今が昼か夜かさえわからない。時間とともに移ろう街の喧噪も、ソラの超人的な聴力でようやく遙か遠くに気配を感じるだけで、この部屋で時を知る術は何もなかった。

ここにいと、世界の何もかもから切り離され、時間からも取り残されたような気分になる。

このまま、止めどない時間の流れからジインを隠し通すことができたらしいのに。

叶はずもない幻想を抱いては、自分の愚かしさに嫌気が差す。どんなに逃げ隠れようと、時間は圧倒的な力をもって無慈悲にすべてを押し流していくのだ。

時から逃げる術はない。

今この瞬間にも、時間はじわじわと、そして確実に、ジインの命を蝕んでいっているのだ。

ぎりりと歯を食いしばる。きつくまぶたを閉じて、握る手に力を込めた。

時の流れは止められない。

それなら、いったいどうすればいい？

あなたのために、オレは何ができる？

「……、」

手の中の指がぴくりと動く。呼吸の音がかすかに変わった。

薄いまぶたが小さく震えて、うつすらと開く。

「ジイン……！」

立ち上がり、顔をのぞき込む。虚ろに天井を彷徨った眼差しが、ゆっくりとソラを捉えた。

「気がついた？ オレがわかる？」

ぼんやりとこちらを見る双眸が、応えるようにゆっくりと一度まばたきした。

「どこか痛む？ 苦しくはない？ 水は、喉は渴いてる？」

用意してあった器の水をガーゼに浸して口元に運ぶ。そつと唇を湿らしてやると、白い首がこくと上下した。

ぼんやりしていた眼差しが、わずかに鮮明さを取り戻す。

「……ソラ……」

掠れた声がこぼれる。久々に聞くジインの声だ。

廃工場を出てからずっと、ジインはほぼ昏睡に近い状態にあった。時折目を覚ましはするけれど意識は常に朦朧としていて、言葉を交わすこともままならなかったのだ。

こんなに意識がはつきりしているのは、ここへ来てから初めてのことだ。

「具合はどう？ 食事……お腹は、空いてない？ もしなにか食べられるなら、スープとか持ってくるよ」

まだ食事をとれるような状態でないことはわかっていたが、こころしくはらくジインは点滴でしか栄養を摂っていない。もし何か口にできるならと、望みを込める気持ちでソラは訊ねた。

昏睡から覚めたばかりで思考が動き出すのに時間がかかるのだろう、しばし考える素振りを見せてから、ジインはほんのわずかに首を振った。

「大丈夫……おまえこそ、ちゃんと……食べてる、のか？」

何だかやつれてるぞ、と切れ切れに言いながら、小さくジインが笑う。

「だめだろう……おれがいなくても、ちゃんと、食べなくちゃ」

ああ、この人は。

こんな体になってまで、どうしてオレのことなんか気遣ってくれるのだろうか。

こんな体にした張本人は、オレだというのに。

黒々とくまの浮かんだその顔を見ることに耐えきれず、ソラは視線を手元へ落とした。

「……」

「ごめんなさいという言葉が喉まで出かかって、止まる。

謝ることなんてできない。

許しを請うなんて、そんなこと。

できるわけがない。

それでも。

「ごめん、なさい」

塞がりかけた喉を裂くようにして、痛みとともに言葉を絞り出す。

「ごめん……ごめんなさい……オレのせいで、こんな……っ！」

ぎりぎり締めつける胸の奥から、次から次へと押し出される。

一度栓の外れた感情は後から後から止めどなく溢れ出して、喉を

詰まらせた。

伝えたい想いは山ほどあるのに、言葉になるのは謝罪の念だけだ。

「ごめんなさい……っ！」

それすらも、こんな言葉では表しきれないけれど。

「大丈夫……」

冷たい手にわずかだが力がこもる。無理に微笑んで、ジインは言った。

「心配するな……こんな傷、すぐに治るから」

「っ、」

どこまでも優しく、悲しい嘘。

そんな嘘、ついてくれなくていいのに。

唇を噛み黙り込むソラを見て、ジインの視線が天井へと逸れた。

「なんだ……もう知ってるのか」

深く息を吐き、目を閉じる。

「それならなおさら、そんな顔しないでくれ。おまえにそんな顔を

させるために……ここまで来たわけじゃ、ないんだ」

「……ごめんなさい」

「謝るなよ……おまえは何も悪くない」

“おまえは何も悪くない”？

「悪いに決まってるじゃないか……っ！」

爪が食い込むほどに両手を握りしめる。行き場のない感情が滞っ

て、顔が歪んだ。

「オレがやったんだ。オレがジインをこんなふうにした。オレがこの手で……こんなに酷いことを！」

見下ろす拳が震える。食い込む爪先に赤い色が滲んだ。

「一緒にいちゃいけなかったんだ。オレなんか、ジインのそばにいちゃいけなかった。オレみたいな、化け物が……！」

「ソラ、」

「オレが……オレさえいなければ、ジインは……っ！」

「六年前に、とつくに死んでただろうな」

何でもないことのようにさらりと言うと、ジインは体を起こそうとした。

痛みに顔を歪めるジインを慌てて手伝い、壁と背の間に枕を立ててやる。

上体を起こして一息吐くと、ジインはまっすぐにソラを見据えた。

「前に一度話したろ？ 六年前の雪の夜、おまえを拾わなければおれは確実に死んでた。“ヒトガタ”のおまえが体温調節してくれたから、おれは凍死せずに済んだんだ。おまえに出会えなければ、おれは今ここにいなかった」

「でも、それは」

「おれは気づいてたんだ。おまえが“ヒトガタ”だったこと。いつかおまえが竜になって、人を襲うかも知れないってことを。知っていて、それでも一緒にいた。本当なら監視塔に通報して引き渡さなくちゃいけないのに、それをしなかった。だからこれは、おれの自業自得なんだ」

苦笑いしながら、ジインは右肩にそつと触れた。

「だからさ、この傷に関しておまえが苦しむ必要は一つもないんだ。おまえは何も悪くない。おまえは何も知らずに生まれて育っただけだ。命あるものがその生をまっとうするのに、何の罪がある？」

「でも、」

「いいからさ、もう止めよう。正直、おまえに負い目を感じさせる

のが一番辛いんだ。誰が悪いとか悪くないとか、そんなことはどうでもいいだろう？」

「でも、ジインはオレのせいで……っ！」

「だからいいんだよ、もう。自分の意志でどうにもならないことを、おまえが気に病む必要はないんだ」

「でも……っ！」

「あと一回謝ったら、もう一生許さない」

「……………」

思わず黙り込んだソラに、ジインが笑いかける。

「笑えよ。せつかくもう一度会えたんだ。おまえの笑顔、ちゃんと覚えておきたい」

こんな状況で笑うなんて。

しかも、さよならのために笑うなんて。

「笑えないよ……」

「いいから、笑えっ。記憶、戻ったんだろ？ 昔はよくくだらないことで大笑いしただろ。ああ、ほら。屋上にシーソーを作ったさ、プラスおまえのジャンプ力でもものすごい高さまで跳んで、飛んでる鳥に噛みついて捕れないかっていうおまえの発案におれが大笑いして、三日間笑いが抜けなかったこととかあったよな」

バカだよなあ、と笑うジインの顔を、ソラはまじまじと見つめた。

「どうして……」

「え？」

「どうして、記憶が戻ったってわかったの？」

きょとんと目を瞬いて、ジインが首を傾げる。

「どうしてと言われるても……まあ、ただ何となく？ 話し方が違っし、自分のこと“オレ”って呼んでるし」

言葉を失う。代わりに、別の何かが胸の奥から溢れ出した。

こんな状況で、そんな小さなことに気がつくなんて。

「うわ、何。なんで急に泣くんだよ」

そんなこと、どうだっていい。
オレのことなんて、もうどうでもいいから。
いかないで。

ジインの手を握りしめる。その上にばたばたと透明な雫が落ちた。
行かないで。そばにいて。

どうかこのまま、この手の届く場所で笑っていてよ。

口にすれば困らせてしまうであろう想いが、願いが、両の目から溢れて落ちる。

「ああ、ほら鼻水。もう、仕方のない奴だな」

とりあえずこれで拭いとけ、とかけてある毛布を無理矢理引っぱって差し出すジインに、ソラは思わず泣きながら吹き出した。

「こんな毛布じゃ、拭けないよ」

ああ、笑ってる。

一筋の希望も見えないようなどうしようもない状況だというのに、自分はいま心から笑えている。

こんな状況でも、人は笑えるんだ。

ああ、違う。

ジインが、笑わせてくれているのだ。

「けばけばで分厚いし、水なんか吸わないよ、これ」

「だよな。でも他に何もなし……」

ふと気がつく顔になり、ジインは不思議そうに辺りを見回した。

「そういえば、ここは……?」

壁から壁まで数歩の距離もない手狭な空間を、ジインの視線がゆっくりとなぞる。調度品などは何もなし。簡易ベッドと電気ランプ、あとは物を置くテーブル代わりの丸椅子が置かれているだけだ。通路と部屋を仕切るのは薄汚れたポロ布で、よくよく見れば壁もトタンを立てかけただけのような頼りない造りになっている。奥まった場所にあるためすきま風は入ってこないけれど、部屋と呼ぶにはあまりにお粗末な空間だ。

「廃工場じゃないよな。どこだ? ここ」

「ああ、うん。実は」

袖口で「しごとと顔を拭いながらソラが言いかけたその時、

「おい、入るぞ」

入口の仕切り布が揺れ、現れた人影にジインがあつと声を上げた。

「残！？」

ジンが驚きに目を見張る。長身を屈めて入口をくぐると、残^{ザン}は低い天井すれすれのところからジンを見下ろした。

「久しぶりだな」

褐色の肌に短い黒髪。こちらを見下ろす小さな双眸は鋭く無愛想だが、そこに冷たさはない。いかつい見た目と長身のせいで気性が荒いと思われがちだが、外見に反して思慮深く和を好む性格の持ち主であることはソラも知っていた。

朱世の兄代わりであり、かつて小さな群のリーダーを務めていた残は、『貧困街』で特定の群に属していなかったソラとジンにとつて“友人”と呼べる数少ない『ソラ』仲間だ。

二年と少し前、一頭の竜が『貧困街』を襲った。大市が開催される繁多な時期だったことや、東部巡視隊の到着が遅れたことなど悪条件が重なり、犠牲者が七十人以上にも及ぶという最悪の被害を出した竜災だ。ソラもジンとともに襲われ、常人であれば命を落とすような重傷を負った。そこへ現れた東部巡視隊によってソラが“ヒトガタ”であることが発覚し、同じく“魔法使い”であることが露見したジンとともに魔法院へと連れ去られたのだ。

その時の竜災で、残の群はほんの数名を残して壊滅した。ずっと『ハコ』に捕われていたソラはそれ以降の経緯を知らなかったが、それはジンも同じらしい。

理由はわからないが唯一の肉親である朱世とは意図的に連絡を絶っているらしく、『彩色飴街』で会った朱世が音信不通の兄の身を案じていたのをソラは覚えていた。

消息の知れなかった昔なじみとの予期せぬ邂逅に、ジンが目を丸くする。

「どうしておまえがここに？」

「助けてくれたんだ。“ここ”に匿って、医者に診せてくれた」
降りしきる雨の中から突然現れた影は、大きな上着を二人の上からかぶせると、

ついて来い。

一言そう言っつて、くるりと背を向けた。

廃工場の前でジインを抱え、茫然自失のまま座り込んでいたソラは、目の前に垂らされた蜘蛛の糸にすがるようにその背を追った。黒いフードをすっぽりとかぶり、闇を纏った死神のような姿のその人がかつての『ノラ』仲間だと気づいたのは、オンボロのモーターサイクルに取り付けられた荷車の上に収まってからだつた。

「医者を呼んだのか？」

不安げに眉をひそめたジインに、残が言う。

「信頼できる医者だ。心配しなくていい」

「でもおれたちには裏懸賞金がかかつてる。それも高額の」

「知っている」

すべてを心得ているように残が小さくうなづく。

余計な言葉を省いた低く静かな声音には、細かな説明なしでも相手を安心させるだけの深みがあつた。

落ち着き払つた残の態度に、ジインもひとまず安堵した様子で、
「そうか……ならいいけど。いや、でも驚いた。本当に久しぶりだな。元気そうで良かった。ああ、朱世が心配してたぞ。今までどこで何してたんだ」

突然のことに戸惑いを残しつつも、ジインはあまり見せることのない人懐っこい笑みを浮かべた。屈託のない心からの笑顔を向けられ、残はほとんど表情を動かさないまま、何かまぶしいものを見るようにほんのわずかに目をすがめた。

「ここはどこなんだ？ 造りからして、地上の建物じゃないような……もしかして『彩色飴街』か？ 残、おまえ今ここに住んでいるのか？」

「いつたいここはどこなのだ。」

どうしておれたちをこんなところに？

不思議そうに訊ねるジインの目をまっすぐに見つめて、残は静かに言った。

「ここは『神の左手』のアジトだ」

「『神の左手』……？」

ジインの顔が見る見るうちに強張る。

それを予見していたように、残はため息を吐いた。

「まずは話を聞いてくれ。俺たちは」

「ソラ、行くぞ」

残の言葉を遮ってジインが毛布を蹴立てる。裸足のまま床に降り立つと、左手につけられた点滴の針を動かせない右手の代わりに口でくわえて引き抜いた。

「ちよっ、ジイン！？」

「今すぐここを出る」

「出るって……え、ちよっと！」

踏み出した途端によるめいたジインを慌てて支えながら、ソラは困惑の表情を浮かべた。

「なに、急にどうしたの？ 無理だよ、こんな体で外へ出るなんて」

「無理でも何でもいい。とにかくここを出る」

「え、え？ なに言って……ちよっと、ジイン！」

壁を支えに、おぼつかない足取りで無理やり入口へ向かおうとするジインの行手を、残の長い腕が遮った。

「ここを出て、どこへ行くつもりだ」

「どこでもいい。吹きさらしの路地裏だってここよりはマシだろう」

「すぐに捕まるぞ」

低く冷静な声音で言うと、残は溜め息を吐いた。

「お前たちのことはもう町中に知れ渡っている。重傷を負った『オリエントル』の魔法士と金髪の“ヒトガタ”が院に追われているってな。『裏懸賞金』もかなりの額だ。容姿の画像も出回っているし、何よりおまえは目立つ。ここを一步でも出れば、夜が明ける前に賞

金稼ぎに捕まって終わりだ」

事実を淡々と告げる残を睨みつけると、ジインは一步後じさった。「いったい何が目的だ？ 顔見知りの『ノラ』仲間を親切心だけで助けたわけじゃないんだろう」

口を開きかけた残を、ジインの手振りが遮る。

「いや、いい。やつぱり言うな。どんな目的があつたとしても、それはおれたちに関わり合いのないことだ」

「少し話を聞いてくれ、俺は……」

「言うな！」

鋭い声が低い天井にはね返る。つい今しがたまで人なつこい笑みを浮かべていた夜色の双眸が、抜き身の刃のようにぎらりと光った。「聞きたくない。知りたくない。テロリストと関わり合うなんて、まっぴらごめんだ！」

「テロリスト？」

「もつともらしい大義名分を掲げて大量虐殺を正当化する、人殺しの集団さ」

聞き慣れない言葉に首を傾げたソラに、刺々しくジインが吐き捨てる。

人殺しの集団？

不穏な言葉に、ソラは思わず残を見た。

残がとある組織に属しているという話は、ここに連れて来られてすぐ聞かされていた。その組織が反政府活動を行っていること、ここがその組織のアジトであること、それ故にこの場所がソラたちにとって“安全”であり、“ある条件”を受け入れさえすれば追手を遠ざけるために協力してくれることも、残を通して聞かされていた。残の話を聞いた段階では、ソラには彼らが危険だとは思えなかった。政府にとっては危険な存在かもしれないが、少なくともソラたちの敵にはなり得ない。敵の敵は味方、そう判断したのだ。

けれどジインの声音には、魔法院に対するのと同じくらいの敵意が満ちている。

低すぎる天井から吊るされた橙色の灯より高い位置にある残の表情は、暗がりの中で苦々しさを通り越してどこか苦しげにさえ見え
た。

「とにかく話を聞いてくれ。俺は、」

「聞きたくないって言ってるだろう！」

さらに一歩後じさり、ジインは激しく首を振った。

「聞きたくない、知りたくない……何一つ関わり合いたくない！」

「ジイン……」

困惑して、ソラは残とジインを交互に見つめた。

こんなに拒絶を剥き出しにしたジインを見るのは初めてだ。

ジインが頭ごなしに何かを否定したり拒絶することはあまりない。頑固で意志が強く、一度決めたことは最後まで貫き通す気概の持ち主ではあるけれど、同時に人の意見や言い分を受け入れる柔軟さもジインは持ち合わせていた。

なのに今は、残の話を聞こうともせず、全身で拒絶している。

『神の左手』と関わることをジインがそこまで頑なに拒む理由が、ソラにはわからなかった。

「人殺しの集団って、どういう意味？」

「そのままの意味だよ。奴らは自分たちの主張を宣伝するためにパフォーマンスとして人を殺す。人の命を何とも思っちゃいない、下衆の集まりだ」

「でも、そんなふうには見えなかったよ」

「連中と会ったのか？」

ジインのまなじりが吊り上がる。ソラの肩をぐいと掴んで、ジインは詰め寄った。

「何を話した？ 何を訊かれた？ まさか勧誘でもされたんじゃないだろうな……！ いいか、連中とは関わるな！ 何があっても、絶対に……っ！」

言葉が途切れる。顔をわずかに歪ませて、ジインが右肩を押さえた。呼吸が荒い。とっさに頬に触れると、さっきよりも熱が上がっ

ていた。

「ジン、熱が……一度ベッドに戻ったほうがいい」

「だめだ。今すぐここを出る。こんなところ、一秒でもいたくない」
頬に添えられたソラの手を掴むと、ジンは戸口へ引っぱって行く
こうとした。

「ジン、無理だつて……！」

「騒々しいな、何事だ」

廊下と部屋とを隔てる仕切り布の向こうから涼やかな女の声が響く。
凜とよく通る、銀の刃のような声だ。

「レインネイン」

現れた人物に場所を譲つて、残が壁際へと控えた。数人の靴音とともに、
安定の悪い床の鉄板ががたがたと揺れる。

「目が覚めたのか、魔法士」

すらりと背高い体躯を暗色の服で包み、その細身に似あわぬ大ぶりの銃を太ももに履いた女が、数名の若者を従えて部屋の入口に立
つていた。

纏う空気が、鋭く研いだ刃のよう。耳にも額にもかからないほど
に短く切られた髪は、燃えるような赤だ。見る者の動きを射止める
ような眼光と、人を使役することに手慣れた態度とが、彼女がただ
者ではないことを窺わせた。

双眸に剣呑な光をたたえて後ろに控える男たちの手には黒い銃が
握られている。

その不穏な空気にソラは眉をひそめた。

「おまえが、レインネイン……」

「ジン、知ってるの？」

「名前だけは。まさか『神の左手』の若き指導者がこんな美女だと
は思わなかったけど」

「その顔で世辞を言われても、嫌みにしか聞こえんな」

きつく吊った眼を細め、レインネインはまるで値踏みするように
ジンを頭からつま先まで眺めた。

「なるほど、さすが観月屋に目をかけられていただけのことはある。『裏』に連れて行けば『裏懸賞金』以上の額がつきそうだ」

「は……売り飛ばして活動資金でも稼ぐつもりか？」

「それもいい案だが」

本気とも冗談ともつかないやり取りにぎよつとしたソラの目前で、二人の視線がぶつかる。

相手の腹を探り合うような睨み合いの後、レインネインが口を開いた。

「おまえは我々にとって大変価値のあるものを持っている。希少な『オリエンタル』を売り飛ばして手に入る大金よりも、遥かに貴重なものを」

「情報か」

「察しがいいな。話が早くて助かる」

双眸の鋭さはそのままに、レインネインは唇の片端だけを上げて形だけの笑みを作った。

「単刀直入に言おう。我々は院の内部情報が欲しい。とくに『ハコ』のセキュリティに関してだ。我々が望む情報を提供してくれるのなら、おまえたちの身の安全は保障しよう。院の追手から匿い、賞金稼ぎからも守ってやる。食事の世話はもちろん、必要ならば医師も手配しよう。どうだ、互いに十分な利益を得られる取引だと思っ
が」

「断る」

うるさい虫でも払うように、ジインは申し出を即座に撥ね付けた。
「ほう？」

取りつく島もないその態度に、レインネインが片眉を跳ね上げる。剣呑さを増す男たちの横で残の表情はますます苦いものとなり、ソラは驚いてジインの横顔を見つめた。

身の安全は保障する。その代わりに、院の内部情報を渡して欲しい。
い。

その申し出は、ここに連れてこられてすぐにソラも残から聞かさ

れていた。

決して悪くない話だ。

ジンなら、二つ返事で受けると思っていたのだ。けれど。

「テロリストには協力できない。何があるつと、絶対にだ」

予想に反して、ジンは首を縦に振らなかった。

「意外だな。今さら院に義理立てするつもりか？」

「そんな気はさらさらない」

「ならば何故断る？」

レインネインの問いにジンは顔を上げ、挑むようにその瞳を見返した。

「あんたたちのやっていることは虐殺だ。自分たちの主張を通すために大量に人を殺す。決して許されることじゃない。どんな理由があろうと、人殺しに手を貸すことはできない。行くぞ、ソラ」

これ以上の話は無駄だとも言いたげに、ジインが視線を逸らす。熱のある体を引きずるようにして、ジインはレインネインの横をすり抜けた。

「点滴代とホテル代は支払うよ。世話になったな」

「一度内部に入れた人間を簡単に外へ出すわけにはいかない」
部屋を出ようとしたジインの前に、男たちが立ちはだかる。それまで黙って控えていた男たちが、慣れた手つきで一斉に銃のスライドを引き撃鉄を上げた。

「どうしても出たいと言うのなら、二度と口がきけないようにさせてもらうが」

ここを出るのなら、冷たい死体となってもらうしかない。

そんな言外の言葉とともに銃口が向けられる。庇って前に出ようとしたソラを、ジインの腕が遮った。

「撃てばいい」

「な……っ！」

驚愕してソラはジインを見た。硬い眼差しは、銃口ではなく男た

ちの目を見据えている。

「おれはどうせ長くないし、こいつは撃たれたぐらいじゃ死なない。撃てばいい」

「なに言ってるんだよ、ジン！」

細い体を押し退けて、ソラはジンを無理矢理背に庇い込んだ。

「レインネイン、この話はもう少しあとにしてもらえませんか？

ジンはいま目が覚めたばかりで、体調も万全じゃない……少し時間を置いてから、」

「いくら時間が経っても同じだ。おれはこいつらに協力するつもりはない」

「いいからジンも落ち着いてよ！ 熱が上がってきてる。呼吸も辛そうだよ。とにかく一度ベッドに戻って、話はまた後で」

「話なんかしても無駄だ！」

声を荒げて、ジンがソラを睨みつける。

「何を言われても、院の情報は渡せない。ソラ、どうしておまえまでそんなことを？ こいつらにいったい何を吹き込まれた？」

鋭く尖った刃のような視線が両目に突き刺さる。ついさっきまで優しく微笑んでくれていたことが、まるで遠い夢のようだ。

本気の怒りが滲む眼差し。

この瞳に、下手なごまかしはきかない。

「……吹き込まれてなんかない。オレはただ、ジンを助けたいだけだ」

「“助ける”？」

「いったいどういうことだ、と怪訝な顔をするジンに向き直り、その眼差しをソラは真正面から見据えた。まだ言うつもりはなかったのだが、ジンがこんな状態では仕方がない。

「オレが『ハコ』に捕まっていた時の生体データは、まだ『ハコ』にあるんだよね？」

「……いきなり何の話だ」

「それを手に入れてどこかの研究施設に持ち込めば、きっとジン

を治す手がかりになる」

それはこの数日、横たわるジインの傍らで繰り返して考えていたことだった。

「オレは竜から“ヒトガタ”に戻れた。これって普通と違うことだよね？ きつとオレには、普通の竜となにか違うところがあるんだ。もしかしたら、今までの研究はオレに当てはまらないかもしれない」

竜毒は消せない。竜創患者は治らない。竜毒に冒された人間は、確実に死に至る。

それが、長年に渡り竜の研究をしてきた魔法院が下した診断であり、実際に多くの竜創患者がたどってきた末路だ。

けれど、その魔法院のデータに自分は含まれていない。

もし自分に今までの竜と違うところがあるのなら。

その“末路”を、覆せるかもしれない。

「魔法院は、竜から“ヒトガタ”に戻った後のオレのデータは持っていない。竜になる前と後のデータ……この二つをどこかの、たとえば外国の研究施設に持っていけば」

「無駄だ」

重い鉄の斧を振り下ろすように話を断ち切ると、ジインはゆるく首を振った。

「おまえが今どうであれ、おれの体はもう竜毒に侵されている。一度体内に入った竜毒を消すことはできない……不可能なんだ。竜の研究と医療、どちらにおいてもこの国の技術は他国より格段に進んでいる。魔法院が無理というのなら、他の国でも同じことだ」

「そんなの、やってみないとわからないだろ」

「受け入れてくれる研究施設があるかどうかもわからない。おれたちは魔法院に追われてるんだぞ？ たとえ協力してくれる研究施設を見つけれられたとしても、国外へ渡って治療法の開発を待っているような時間はもう……おれにはない」

右肩をそっと押さえると、疲れたような面持ちでジインは言葉を続けた。

「そもそも『ハコ』の管理下にある情報を外部から引き出すこと自体が不可能だ。研究所のデータベースはネットワークに繋がっていない。アクセスには研究室内の端末を使うしか」

「『神の左手』と一緒にオレが『ハコ』を襲撃する」

「何だと？」

「『ハコ』を襲撃して、捕まっている竜と“ヒトガタ”を解放する計画があるんだ。その計画に加わって直接データを盗み出せば」
「貴様、なぜ計画のことを！？」

レインネインの後ろに控えていた若い男が鋭い声とともに銃口を向ける。

「残、おまえがしゃべったのか」

残に疑いの目が向けられたのを見て、ソラは素早く言った。

「聞こえたんだよ。聞き耳を立てなくても普通にね。“ヒトガタ”

は耳がいつて知らなかった？ 今度から秘密の話をする時は、も

っと声をひそめたほうがいい」

「この……！」

化け物めと小さく吐き捨て、若い男が苛立たしげに顔を歪める。

そうとは知らないまま極秘計画を部外者に漏らしてしまったことに憤慨しているらしい。

レインネインは少しも動じることなく、ソラを見る目を興味深げにすめただけで、黙ったままだ。

「ハコ」を襲撃して竜と“ヒトガタ”を解放する。

その極秘計画を耳にした時から、ソラはそれを利用するしかないと考えていた。

ジインを治すためには、竜の研究データが不可欠だ。

けれど「ハコ」のセキュリティは固く強大で、ソラ一人ではとても太刀打ちできない。

『神の左手』の計画は、天が恵んでくれた大きなチャンスだ。

その計画を一刻も早く実行に移すためにも、ジインが持つ院の内部情報が必要だった。

「竜と“ヒトガタ”を……解放するだと？」

めまいを堪えるように、ジインは額を押さえて目を閉じた。

「それは……それはどう考えてもテロ行為だよな。つまりおまえは、テロに便乗して『ハコ』のデータを盗み出すと言っているのか？」

「それがテロかどうかなんて、オレにはわからないよ。だけどジインだつてオレを助けるために『ハコ』に侵入しただろ？ オレだつて、ジインを治すためなら」

「そんなことをしたらどうなるか、おまえわかっているのか？」

ジインが深いため息を吐く。表情にありありと疲労の色が浮かんでいた。うつむき気味の瘦身は、今にもその場に崩れ落ちてしまいうさだ。

それでも傾ぐ体を立て直し、聞き分けのない幼子に辛抱強く言い聞かすように、眼差しを強くしてジインは言った。

「いいか、『ハコ』には二百数十体の竜と“ヒトガタ”がいる。それが一度に解放されたらどうなる？ すぐに竜化しない“ヒトガタ”もいるだろうが、それでも百体を越える竜が一齐に解放されることになる。計画の狙いは竜に西の人間を襲わせることだろうが、第一区の重要な中枢機関は防護ドームの中だ。第二区や第三区内の主要な建物には忌避音波装置がついている。『ハコ』から解放された竜たちはすぐに西地区を追われて、人のひしめき合う『彩色館街』や東地区に押し寄せる。結局、犠牲になるのは東の人間だ。竜が大量に出現すれば、軍や魔法士団は西の防護に徹するだろう。取り残された東部巡視隊は壊滅するかもしれないが、そうなれば東地区で竜を止める者は誰もいなくなる。東は地獄になるぞ」

「第二区の忌避音波装置の制御システムを掌握できると言ったら？」
それまで黙って二人のやり取りを傍観していたレインネインが、涼やかな声を響かせた。

「防護ドームが整備されているのはごく一部の中枢機関だ。その他の施設や建物に設置されている忌避音波装置は、監視塔からの緊急信号を受けて作動するシステムになっている。もし緊急信号が発信

されず、忌避音波装置が作動しなければ……さて、どうなるかな」
「……装置は設置された建物内から直接作動させることもできる」
「ぬるま湯のような暮らしの中でふやけきった西区民どもが緊急信号なしで竜の急襲に気がつくには、果たしてどれだけの時間がかかるだろうな？ 血に飢えた竜の群がビルの窓を突き破る前に気づく」といいが

ジンが何かを言いかけて、口をつぐむ。その表情をどこか満足げに見下ろして、レインネインは唇の笑みを広げた。

「そんなことをしても人が大勢死ぬだけだ。都市機能が麻痺して、今よりさらに国が荒れる。取り返しのつかないことになるぞ」

「我々の活動についておまえと是非を論じるつもりはない」

ぴしゃりと言って、レインネインが冷たく見下ろす。

「我々がおまえに望んでいるのはただ一つ、院の情報だけだ。言っておくが、おまえが協力を拒んだとしても計画は遂行される。おまえが口を割らないのなら他の人間に訊ねればいい。少し手間はかかるだろうが、計画に支障はない。ただおまえが素直に情報を渡せば、我々の手間が多少省けて、何人かの人間が命拾いする。それだけだ」
わずかに声を和らげて、レインネインは続けた。

「そう深く考えることはない。おまえはただ院の情報を渡してくれさえすればいいのだ。簡単なことだろう？ そして残された時間をここで弟と静かに過ごせばいい。いったい何を迷うことがある？」

優しい響きの裏に有無を言わさぬ強さを滲ませて、レインネインは一步ジンに近づいた。

「さあ、我々に情報を」

全員の視線がジンに注がれる。

眉根を寄せ、唇を噛み、ジンは床に視線を落とした。

壁際の暗がりには頼りなく佇むその姿は、まるで狼の群に追いつめられた兎のようだ。

重苦しい沈黙の中で頭上の配管がごぼりと鳴り、ぼたぼたと雫が滴る。

「できない」

掠れた、けれどはつきりとした声が、静まり返った部屋に響く。

「人殺しの片棒を担がされるくらいなら」

ジンが顔を上げる。夜色の双眸が、暗がりの中できらりと光った。

「いつそ殺されたほうがマシだ」

「ジン！！」

何を言い出すんだ、と伸ばしたソラの腕を、

「やめてくれ！」

激しく振り払い、ジンは一歩後じさった。

「もうやめてくれ……どうしておまえまで、そんなことを！」

ゆるく頭を振りながら壁際まで後じさる。悲しげな眼差しに、ソラの胸がずきんと痛んだ。

「こんなこと望んでない……おれはこんな目に遭うために、院から逃げてきたんじゃない！」

ジンの声が震える。

「もうたくさんだ……いったいどうしてこんなことに？ おれたちはただ静かに生きたいだけだ。なのに、どうして放っておいてくれない？ 何で、どうしておれたちにかまうんだ！ おれにはもう時間がない……それなのに、最期を静かに過ごすことすら許されないのか！」

「情報さえ渡せば、それが実現できる」

「できないと言っているだろう！」

声を荒げて、ジンは苦しげに顔を歪ませた。荒く不規則な呼吸に細い肩が上下して、額に汗が浮かぶ。顔色が橙色の灯りの中でもそうとわかるほどに青白い。

「自由を奪い、力で押さえつけて、屈服させる。汚いやり方……おまえらも、院と同じ」

不自然に言葉が途切れる。ジンの顔がすうっと白くなり、その体が傾いだ。

「危ない！」

倒れかけた体を、寸でのところでソラの腕が受け止めた。

おそらく貧血だろう。血の気が失せてぐったりとしたジインを抱きかかえ、ソラは胸が苦しくなった。

「まだ血が足りてないんだ……無理したら、」

「さわるな」

囁かれた言葉に、ぎくりと顔が強張る。思わず固まった腕に、ジインの手がとりすがった。

「触るな……構うな……もうおれたちを、放っておいてくれ」

うわ言のように呟きながら、ジインは意識を失った。

「期待外れだったな」

二人を見下ろし、興ざめたようにレインネインは言った。

「単身『ハコ』に乗り込んだと聞いてもっと骨のある奴だと思っていたのだが。やはり死病を患うと心も弱るものか」

「やめて下さい」

露骨な言い回しに、意識のないジインを抱きかかえたままソラはレインネインを睨んだ。

「どうします？ このまま処理しますか」

双眸に侮蔑の色を滲ませながら、部下の一人が銃を構え直した。

遮るように残が前に出る。

「待って下さい。このまま殺してしまうのはあまりにも性急すぎる。もう少し時間をかけて聞き出せば……」

「相手は魔法士だ。得体の知れない妙な力を使う。油断ならない。手負いのうちはまだいいが、持ち直して攻撃でもされたらどう対処する？ 放っておいてもどうせ死ぬだろうが、計画の前に騒ぎでも起こされたら面倒だ。殺すなら早いほうが……」

「ジインに手を出すな」

低く冷たい声が響いて、部屋の空気が固まる。

それが自分の口から発せられたものだど気がつくのに、数秒かかった。

聞いたことのない声音。本気の殺意を含んだ、獣の声だ。

「ジンに手を出したら、ただじゃおかない」

自分の意志とは遠い場所から発せられる、どこまでも本能に近いその声を、ソラは出すままに任せた。

思わず動きを止めていた部下が、短く息を吐いて忌々しげに毒づく。

「ちっ、化け物め。だから“ヒトガタ”なんて入れなきゃよかったんだ……まったく厄介な奴を連れてきやがって」

おまえの責任だぞ、と銃先で胸を押され、残は澁面をさらに深くした。

先ほどよりも敵意の増した視線を背中に感じながら、ソラは意識のない瘦身をぐっと抱きしめた。

「……お願いがあります」

双眸を爛々と光らせて、ソラはレインネインを見上げた。

「ねえ、ちゃんと食べてよ。お願いだから」

琥珀色のスープをすくって口元に差し出す。触れるほど近づけても一文字に引き結ばれた唇は頑なに閉ざされたままで、手元に落ちた視線さえぴくりとも動かない。

食事も水も一切受け付けようとせず、拒絶という名の籠城を決め込むジンに、ソラはもう何度目かわからない深いため息を吐いた。

「点滴もだめ。水分もとらない。このままじゃ体が弱っちゃうよ。変な意地張らないで、お願いだから食べて」

「……ここを出よう、ソラ」

またか、とソラは半ばうんざりして手元のカップにスプーンを戻した。もう何度聞いたかわからない台詞に、こちらは何度目になるかわからない台詞を返す。

「だからそれは無理だって何回も言ってるだろ？ 残と一緒に外を見てきたけど、本当に賞金稼ぎがうようよしてるんだ。ろくに歩けないそんな体で外に出ても、残が言うとおりすぐに捕まっちゃうよ」

言いながら、ソラはすでに冷めてしまったスープを手持ち無沙汰にぐるぐるとかき混ぜた。具の入っていない簡素なスープだ。ぼつぼつと表面に浮かぶ油分の粒が、ひしゃげた銀色のカップの中で輪を描きながらきらきらと光る。

「ねえ……どうしても協力できないの？」

手元を見つめたまま動かない人形のような横顔に、そつと言葉をかける。

「『ハコ』にいる竜や“ヒトガタ”を解放したら、確かに大勢の人が犠牲になるかもしれない……でも今のオレたちには他に選択肢がないんだ。賞金稼ぎも検問もどんどん増える。『ノラ』の中には昔のオレたちのことを知ってる奴もいるから、いま廃工場に戻るの

は危険だよ。オレたちには行くあてがないんだ。でも、ここなら……このアジトなら院にも賞金稼ぎにも絶対に見つからない。専属の医者もいるし、薬もある。電気も水も通ってるし、もしもの時には武器を持って戦うこともできる。二人で廃工場にいるよりずっと安全だよ」

『彩色飴街』の奥深く、決して人目につくことのないデッドスペースを蟻の巣のように繋げて作られたこのアジトは、実際身を隠すにはこの上ない場所だった。

念入りに隠された出入り口には常に見張りが立ち、砲撃にも耐え得る分厚い鉄の扉で固く閉ざされている。迷路のように入り組んだ通路は薄暗く凹凸だらけで、初めて踏み込んだ者を容赦なく惑わせる。行き慣れた者でさえ時折闇に足をとられて、足早に進むことは難しいという。

音も気配も、何層にもなる鉄板で遮断され外界には届かない。

万が一の時には、いくつもある抜け道から逃げることもできる。

確かにジインの言うとおりテロリストは信頼できる相手ではないかもしれないが、二人にとってこのアジトが廃工場よりずっと安全な場所であることは間違いなかった。

ただ、ジインが条件を受け入れさえすれば。

「『神の左手』は『ハコ』の情報さえ渡せば匿ってくれと言ってもいい。でもそれは逆に、取引を拒否をすれば命の保証はないってことだ。この時点で選択肢は一つしかないじゃないか」

『神の左手』が要求しているのは、ジインの持つ『ハコ』のセキユリティー情報。

魔法院第二研究所、通称『ハコ』にジインはたった一人で侵入し、ソラを助け出した。その際に使ったセキユリティー情報を渡すことが、二人を匿う引き換えに『神の左手』が提示した条件だ。

無反応な横顔に、ソラはさらに訴えた。

「テロに手を貸したくないって気持ちにはわかるよ。オレだって誰かの命を奪ったり、無闇に傷つけたりしたくない。でも今はジインの

命がかかっている。なり振りかまってる場合じゃないんだ」

わかるだろ？ と訴えかけるように、端正な横顔を見つめる。

橙の灯りに照らされた白い頬は、昨日から笑顔を失ったままだ。頑なに引き結ばれていた唇が、ゆっくりと動いた。

「……踏み越えてはいけない一線ってものがある」

起伏のない、静かな声音。けれどそこに恐ろしいほど固い意思が潜んでいるのを、ソラはありありと感じた。

「モラルもルールもないこの街で、おれたちがどうにか守ってきた一線だ。一度越えてしまったら、もう元には戻れない。ただでさえ希薄な秩序が、今度こそ本当になくなってしまおう」

「この街の秩序なんて、もともと無いようなもんだろ」

「この街の秩序じゃない。“おれたちの”秩序がなくなる」

夜色の瞳がこちらを向く。昔から少しも変わらない、凜とした声音と眼差し。

「飢えをしのぐ為に金を盗む。身を守る為に相手を傷つける。必要悪だなんて言い訳はしないけど、そういう悪いことはたくさんしてきたよ。でもな、ソラ。自分の都合で大勢の人間を死に至らしめるような行為をおれは一度もしたことがないし、これからもするつもりはない。だからどんな取引を持ちかけられてもテロに加担することとはできない。何があっても、絶対にだ」

きっぱりと言い切るジインに気圧されて、ソラは押し黙った。

幼い頃から懂れて止まなかったその思慮深さと潔癖さが、今は二人を隔てる厚い刃のよう。

吸い込まれそうなほどに深い夜色の瞳には、わずかな迷いも感じられない。

まるで鉱物の結晶が、自らの“美しく正しい形”を永遠に崩さないように。

ああ、そうだ。そうだった。

どんなに言葉を尽くそうと。たとえ拳を振るおうと。

ジインの言葉を、眼差しを、外から曲げることは不可能なのだ。

「……わかったよ」

溜め息を吐く。かすかな期待に輝いたジインの瞳を見据えて、ソラは言った。

「ジインは何もしなくていい。それで『神の左手』が納得するかわからないけど、情報を渡さなくてもこのまま匿ってくれるよう頼んでみるよ。その代わり」

「眼差しを強くする。」

「その代わり、オレはテロに加わる。ジインを匿ってもらうのと引き換えに、残たちを手助けするよ。そしてテロに便乗して『ハコ』からオレの生体データを盗んでくる。だからその間ジインはここで安静に」

「ダメだ!!!」

鋭い声天井ではね返る。薄暗い灯りの下で、ジインの双眸がきらりと光った。

「テロに加わるなんて絶対にダメだ。そんなこと、許さないからな!!!」

「でもこのままじゃジインが、」

「おれはどうでもいいんだよ!」

簡易ベッドがぎしりと軋む。シーツを掴んで身を乗り出し、今にも飛びかかりそうな勢いでジインは言った。

「おれのことなんかどうでもいい。どうせもう長くないんだ。竜毒は消せない、竜創患者は治らない! 長年の研究でも見つけれない治療法を、数日の間におれたちが探し出せるわけがないだろう?」

だから『ハコ』のデータを盗んでも無駄だと、何度言わせたら気が済むんだ。もういい加減に現実を受け入れてくれ!」

「受け入れてるよ!」

声を荒げて立ち上がる。手の中で金属製のカップがぱきりと音を立てた。

竜の牙で負傷した人間は、傷口から竜毒が広がって死に至る。

あの雨の夜に沢木の口から告げられた受け入れ難い現実は、以来

ソラを絶え間なく打ちのめし、焼き焦がし、苛み続けてきた。じくりと疼く胸の痛みを押し殺して、ソラは静かに言った。

「……現実なんて、とっくに受け入れてる。ただオレは、現実を受け入れたままのジインと違ってその先に進もうとしてるだけだ」

「……“その先”なんて、無いんだ」

苦々しく呟いて、ジインは右肩をそつと押さえた。

「ソラ、おれにはもう時間がない。竜創患者の最長存命記録は四十一日だけど、それは特異な例だ。大体の人間は、竜創を受けてから数日の間に毒の進行が始まる。天然の魔法使いだからか、おれの場合だいぶ遅れているけれど、進行はもういつ始まってもおかしくないんだ。竜毒の進行が始まれば、もって二週間が限度。たとえ治療法が見つかる可能性があるとしても……『ハコ』からデータを盗み出してどこかの研究施設へ持ち込み、さらにその結果を待つなんて……とても間に合わない」

語尾がかすかに震える。忍び寄る終わりの気配を振り払うようにぱつと顔を上げると、ジインは声を和らげ、無理矢理に微笑みでみせた。

「なあ、ソラ。おれはおまえと静かに過ごせればそれだけで十分なんだ。それ以上は何も望まない。だからこんなところはさっさと逃げ出して、おれたちの廃工場へ帰ろう。おまえが協力してくれればきつとうまく逃げ出せる。院にも賞金稼ぎにも捕まったりしないさ。廃工場が危険だと言うのなら他の場所でもいい。誰かに何かを強要されるようなところじゃなければどこだっていいよ」

どこか誰も知らない場所で、残された時間を楽しく過ごそう。

だから『ハコ』を襲撃するなんて無謀なことは止めてくれ。

「頼むよ、ソラ……!!」

お願いだからと、喘ぐようにジインが言う。

すぐる眼差しとかき口説く声音に、心が揺れた。

けれど。

「……できないよ」

掠れた声でささやいて、目を伏せる。

「何もせず、傍にいただけなんて……黙って見ているなんて、できない」

「ソラ、」

「オレはあきらめないよ」

まぶたを開く。夜色の瞳を強く見つめた。

可能性はゼロじゃない。

自分には、まだできることがある。

「テロリストなんてどうでもいい。他の何を犠牲にしてもかまわない。オレはただジインを助きたい、それだけだ！ そのために利用できるものは何でも利用する。それがたとえ……テロであっても」

「やめてくれ……」

ぐぐもった声を上げ、ジインは頭を抱えた。

「テロに加担するなんて、そんなこと……頼むから止めてくれ。おれはおまえをテロリストにしたくない。それだけは本当に、絶対に嫌なんだ。人を傷つけることを生業とするなんて……そんな人間にするためにおれはおまえを育ててきたんじゃない！」

悲しげな目で、ジインはさらに訴えた。

「テロリストになれば国際指名手配されるどころか、道行く人からも憎まれる存在になってしまう。それこそ、一生負われ続ける身だ。おまえがそんな人間になるなんて、とても耐えられない。おれのためだというなら、なおさらだ。おまえには日の当たる道を歩いて欲しい。まっとうな、明るい人生を歩んで欲しいんだ……おれの、分まで」

お願いだ、どうか、と訴える瞳に耐えきれず、ソラは目を逸らした。

悲痛な落胆の気配が、ひしひしと肌を刺す。

ぎゅう、と喉の奥が締めつけられ、うまく息ができなかった。

できるなら、今すぐこの場から逃げ出してしまいたい。

ジインが自分に失望する様は、何より堪え難かった。

それでも、オレは……。

「こんなこと……おれは望んでない」

絞り出すように呟かれた言葉がぐさりと突き刺さる。

鼓動とともに脈打つ胸の痛みに、ソラは思わずまぶたを閉ざした。助かる見込みのない自分のために、何かを犠牲にしたいくないというジン。

ほんのわずかでも可能性があるのなら、何を犠牲にしても手に入れたいと願うソラ。

二人の想いは完全な平行線だった。

「おい、入るぞ」

仕切り布を揺らして残が姿を現す。ジインの纏う空気が、途端に刺々しいものに変わった。その存在を拒絶するようにふいと視線を逸らし、眉間に深くしわを刻む。

あからさまなジインの態度をちらりと見、次いで量の減っていないスープに気づいて残は眉をひそめた。

「なんだ、食わないのか？」

「そうなんだ。朝から一口も」

固く口を引き結んだままのジインの代わりにソラが答え、残は呆れたように言った。

「いったい何のつもりだ？　こんなことをしてもおまえの体が弱るだけだぞ」

ソラの傍らに立ち、残が腰に手を当てる。そのすぐ下には、当然のように黒い銃が光っている。

「計画を知られた以上、事が済むまではおまえたちを解放できない。自分の命を質に取っているつもりなら、言っておくが、おまえがこのまま飢え死にしても『神の左手』は困らない。単におまえが口を割れば手っ取り早いというだけで、『ハコ』の情報を手に入れる方法は他にもあるからな。これ以上交渉が長引くのなら、問題を起こされる前にさっさと始末した方がいいという意見もあるくらいだ」

「だったら、殺せばいいだろう」

投げやりな台詞に、残の眼差しがすうつと冷える。

「……本気で言ってるのか」

天井をこするほどの長身が灯りを遮って反り立ち、ぎろりとジインをねめつける。太い腕が盛り上がり、残の姿がぐつと大きくなつた気がした。

「おまえの意識がない間、ソラがどうしてたか知っているのか？

汗を拭い、水を含ませ、どんな小さな変化も見逃さないようつきつきりで看病してたんだぞ。脈を測り、呼吸を何度も確かめて……何日も何日も、目の前でおまえが息絶えるかもしれない恐怖で震えながら、一睡もせず、飲まず食わずでだ！ 吐くものもないだろうに、便所で嘔吐しているのを何度も聞いたぞ。普通の人間だったらとつくにぶつ倒れてるところだ」

むしろそのほうが楽だったかもな、という残の言葉に、そっぽを向いたままのジインの眼差しがわずかに揺れた。

「それを何だ。殺せばいい、だと？ 散々心配かけておいて、ふざけるのもいい加減にしろ」

残の大きな手がソラから銀色のマグカップをひったくる。ジインの腕を掴むと、その手にカップをぐいと押しつけた。

「食べ。この先おまえがどうなるうと知ったこっちゃないが、ソラの前で生きること放棄するような真似は許さない。これ以上くだらない駄々をこねるなら、手足を縛り付けて無理矢理口に流し込んでやる……食べ！」

凄みの利いた低い声がジインにぶつかる。カップの中で揺れるスーパをちらりと見て、ジインは黙り込んだ。

長い長い沈黙の後、深い溜め息をひとつして、ジインはのろのろとカップを持ち上げた。

やっと食べてくれる気になったようだ。

ほっとして、ソラは胸を撫で下ろした。

「あ。飲みにくいよね、それ」

口を付けて飲むには邪魔になるスプーンを取り除いてやる。

「ゆっくりでいいからね」

しゃがみ込み、自分でもそうとわかるくらい期待に満ちた目でジインを見上げる。居心地悪そうに眉をひそめながら、ジインはほんの少しだけカップに口を付けた。

シャツからのぞく白い喉が、こくと小さく動く。

「どう？ 飲めそう？」

「……めちやくちゃ味が薄い。ただの色水みたいだ」

「院の贅沢な食事に慣れた舌には粗末すぎる代物だろうな」
からかうような残の言葉に、ジインの顔が曇る。

「おれだつて好きで院に行つたわけじゃない」

「知っている。だからこそ、ここへ連れて来たんだ」

言いながら、残はベッドの端に腰かけた。ジインとは比べ物にならないがっしりした体躯に、頼りない簡易ベッドがぎしりと傾ぐ。

「おまえから院の情報を聞き出せるかも知れないと提案したのは俺なんだ。傍受した軍の通信でおまえが院の医療施設から逃げ出したと知って、もしかしたらと思って廃工場を調べに行った。予想は見事的中して、ちょうど廃工場から出てきたおまえとソラを見つけたというわけだ」

残が肩をすくめる。

「でも、そこから先は誤算だったな。院に恨みを持つてるおまえなら二つ返事で快諾すると思つたんだが……なあ、本当に協力する気はないのか」

残の問いかけに、ジインが鋭い視線を返す。その無言の拒絶に、残は顔をしかめた。

「話が穏便に済むうちに条件を呑んだほうが身のためだぞ。あの人は怖い。目的のためには手段を選ばない人だ」

「ジインに何かしたら、オレが許さない」

すかさず言うソラに、残が切り返す。

「いくら不死身でも、頭を吹っ飛ばされたらしばらくは動けないだろう」

思わず黙り込むソラに、残は続けて言った。

「確かに“ヒトガタ”は強力な抑止力だ。怪力で不死身の“ヒトガタ”が暴れたらどれだけの被害が出るのか見当もつかないし、計画を控えた今の時期に騒ぎを起こされても面倒だ。おまえがいるおかげで、強硬派の連中がジインに手出しできずにいるのも事実だよ。

けれど、完全に方法がないわけじゃない。おまえを殺すことは魔法士にしかできなくても、動きを封じるくらいなら武器があればおれたちでもできる。不意打ちでおまえを行動不能にして、回復する間を与えないよう攻撃し続ける。その間に、ジインを痛めつけて情報を吐かせればいい。簡単ではないが、不可能でもない」

「……ほらみる。だからこんなところさっさと出ようと言ったんだ」
うんざりと言いながら、ジインがちびちびとスープをすすする。

確かに、ここにいることでジインに害が及ぶのならばそれは本末転倒だ。

連中がジインに何らかの危害を加えるつもりならば、ここに留まるわけにはいかない。

けれど、外は追手で溢れ返っている。まだ体の自由が利かないジインを、自分一人で守りきれるかどうか。

そして何より、ここを出てしまったら『ハコ』へ侵入する術がなくなってしまう。

それはそのまま、ジインを救う手だてを失うことだった。

ようやく空になったカップをソラに手渡しながら、ジインがこの上なく不機嫌な声でぼやく。

「ここに留まってもいいことなんか一つもない。利用されるだけ利用されて、都合が悪くなれば切り捨てられるだけだ。まったくはじめからそう言ってるのに」

「『ハコ』の情報さえ渡せば、危害は加えない。そもそも、すべてはおまえが口を割りさえすればいい話なんだがな。駄々をこねて話をややこしくしているのはおまえだぞ」

「まだ言わせる気か？」

ジインがまなじりを吊り上げる。

「テロリストに協力はできないと、何度言わせたら気が済むんだ。もういつそタワーでも彫ってやるつか？」

訊かれるたびにシャツをまくって見せてやるよ、と嘲るような笑みを滲ませるジインをじつと見つめ、残が低く呟く。

「……両目をえぐられても、しゃべらないと言い切れるか？」

ジインの嘲笑が消える。

大きな弦楽器を思わせる重低音の音が、氷のような冷たさを纏った。

「爪を剥がれ、手足を砕かれ、体を焼き焦がされても、口を割らないと言い切れるか？ その自信がないのなら、四の五の言わずにさつさと情報を渡したほうが賢明だ。さもなければ……無駄な傷が増えることになるぞ」

あからさまな残の脅しに、場の空気が重く冷える。

黙り込んでいたジインが、ふいに口を開いた。

「残……おまえ、大丈夫か？」

嫌悪に顔を歪めながらも、憤りではなくむしろ憐れみに近い色を瞳に滲ませたジインに、今度は残が怪訝な顔をした。

「どういう意味だ」

「辛くないか？」

残の動きが止まる。ジインはわずかに首を傾げると、残の小さな漆黒の瞳をのぞき込むように目をすがめた。

「おれだって別におまえのことを一から十まで知っているわけじゃない。でも、おまえが平然と人の爪を剥がせるような人間じゃないことは知っている。それでもこんなところにいる以上、組織の一員として、上からやれと言われたらやらざるを得ない時もあるんだろ？ 人を脅したり、傷つけたり……あるいはそれ以上のことも」

心の奥まで見通すようなまっすぐな眼差しを避けて、漆黒の双眸がついとそれる。黙り込んだ褐色の横顔に、ジインがわずかに身を乗り出した。

「なあ、残。おまえどうしてこんなところにいるんだ。こんなことをしても世の中は何も変わらない。やり方が間違ってるんだ。東でいくら犠牲者を出したって、西の中枢は痛くも痒くもない。その証拠に、院の中ではテロの話なんかひとつも聞こえてこなかった。第四区あたりが少し吹き飛ばされたくらいじゃ話題にも上らないんだ」

「……だから今回は中枢を叩く」

「そんなにうまくいくとは思えない。どうせ今までだって似たようなことを何度も計画してきたんだろ？ でも、一度も成功しなかった。第二区のセキュリティが強固だからだ。おれが『ハコ』へ入れたのは、おれが内部の人間でなおかつ魔法士だったから。たとえおれが使ったセキュリティデータを手に入れたとしても、魔法が使えなければ『ハコ』へ侵入するのは不可能だよ。万に一つ『ハコ』への侵入が成功しても、魔法士団が駆けつけたらそこで終わりだ。対竜戦用に備えて『ハコ』にはピアナクロセイドが充満している。常人では魔法士に太刀打ちできないぞ。その時はおまえの命だった」

「それでも、何かしなくちゃいけない」

残の固い声がジインを遮る。

「ジイン、俺とおまえは違う。おまえには魔法士の力がある。人を動かす才能も能力も、人を惹きつける容姿もある。おまえみたいな人間ならうまく世の中を動かすことができるかもしれない。だが俺みたいになちつぽけな人間が世の中を動かそうとしたら、大きな力に頼るしかない」

「それが『神の左手』だと？」

「そうだ。右手が織り上げた宿命をねじ曲げ、奇跡を起こす“神の左手”……」

「朱世と二葉はどうなる？」

ジインの言葉に、ぴくりと残の頬が動く。

「あの二人に、自分がやっていることを胸を張って言えるのか？」

「……胸を張って言う必要なんて、無い」

苦々しく絞り出すように残が言う。

「この手が血で汚れようと、テロリストだ人殺しだと後ろ指をさされようと、俺はかまわない。ただ、あの二人が……二葉が大人になる頃には、世界が今より少しでもましになってくれれば」

「ましになるどころか、テロがまかり通るようになれば世の中はますます荒れる一方だ」

「それでも、何もしいよりましだろう」

「テロリズムに傾倒するぐらいなら何もしいほうがましだ！」

鋭い言葉に二人の視線がぶつかる。重苦しい睨み合いがしばし続いた後、残が先に沈黙を破った。

「おまえだって、俺のことをとやかく言える立場じゃないだろう」

「どういう意味だ」

「ソラを、逃がした」

ジインの顔が強張るのを見て、残は嘲るような薄ら笑いを浮かべた。

「おまえはソラが“ヒトガタ”だと知った上で、『ハコ』から連れ出した。いや……ソラが『ハコ』へ収容される前からもう気づいていたんだろう？ それなのにそばに置いていた。いつか竜に化けるとわかっていたのに」

「そ、れは……」

「竜化したらどうするつもりだったんだ？ 周りの人間を囿にして、自分はさっさと逃げるつもりだったのか？」

「そんなこと、するわけないだろう」

「じゃあ自分の手でソラを始末するつもりだったのか？ できないよな、おまえにそんなこと」

見ず知らずの人間を傷つけることすらできないんだからと、残がせせら嗤う。

答えに詰まるジインを、追い込むように残は言った。

「おまえの考えを当ててやるう。“魔法士の自分はどうせ真っ先に

殺される。だから自分が死んだ後のことなんか知ったこっちゃない。

”……そう思っていたんじゃないのか？”

夜色の瞳がわずかに揺らぐ。残はさらに言葉を続けた。

「自分の都合のために他人を犠牲にする。おまえがやったことと、『神の左手』がやるうとしてしていること。そのどこが違うんだ？」

「おれを、テロリストと一緒にするな……！」

シートを掴み、ジインが言葉を絞り出す。

「おれは誰かを犠牲にするためにソラを連れ出したんじゃない。ただ、ソラを……助けたくて」

「結果は同じことだろう。ソラが暴れた一件で、一人も犠牲者が出なかったと思っっているのか？」

「ちよつと待つてよ、それはオレの問題だろ！？」

思わず声を上げ、ソラは一歩進み出た。

「あれはオレが引き起こしたことだ。ジインはひとつも悪くない」

「いつか爆発するとわかっていて持ち歩いていた爆弾が人ごみで爆発した時、悪いのは爆弾か？ それとも持ち歩いていた奴か？」

「……爆発した爆弾が悪いに決まってる」

「違うな。爆弾に意思はない。そうと知っていながら持ち歩いていた奴にこそ、すべての責があるんだよ」

「でも……、」

食い下がるうとするソラを凄みのこもった一瞥で黙らせて、残はジインに向き直った。

「ソラのため、自分のために他人を犠牲にした。おまえの手はとつくと汚れてるんだよ。今さらお綺麗な顔したって無駄なんだ。だからテロは嫌だの何だのと駄々をこねずに協力しろ」

刃のような残の言葉に、唇を噛み、苦しげな顔でジインがうつむく。

その頼りない瘦身を見下ろしながら、ソラはひどい罪悪感に苛まれていた。

これではまるで、寄ってたかつてジインを虐めているようだ。

無理強いをするつもりはない。苦痛を与えるなんてもつてのほかだ。こんな顔だって、できることならさせたくなかった。

けれど確かに残の言うとおり、ジインが取引を受け入れてくれさえすれば、すべてがスムーズに運ぶのだ。

話がさらにこじれる前に、少し強引ではあるけれど残の説得をジインがこのまま受け入れてくれないだろうか。

そう期待しつつも、もういい、もうやめようと、両手を広げてジインを庇い込みたくなる衝動にかられる。

ジインを助けたい、守りたいと心から願っているのに、どうしても傷つけてしまうのだろう。

「それでも……」

ジインの呟きが沈黙を破る。

ゆっくりと顔を上げ、ジインは囁くように言った。

「それでも、おれはしゃべらないよ」

夜色の瞳が残を見つめる。その眼差しに今までのような鋭さはない。

悲しげで頼りない、幼い子どものような眼差しだ。

けれどそこには、迷いもためらいもない。

ただただ、透き通るような意志があるだけだ。

それはまるで、混じり気のない透明な蒸留水のような。

あるいは、真冬の夜の澄んだ空気のような。

どんなに力を加えても変えられない、そこどころか、触れることすら叶わない透明な何か、そこにはあった。

「テロリストと同族だと言われてもいい。誰かを傷つけた責任があるというのなら認めるよ。おれは自分の為に誰かを犠牲にするような、身勝手でどうしようもない、最低な人間だ。けれど、残。一人殺すのと二人殺すのは、全然違う。それこそ天と地ほどの差だ。どちらの罪が軽いか重いかの話じゃない。人ひとりの命とその未来を奪うことがどれほどのことか、おまえならわかるだろう？」

余計なものをすべて削ぎ落とした眼差しで、ジインは残を見つめ

た。

「だからおれはしゃべらない。何を言われようと、何をされようと

……絶対に」

残が強く拳を握り込む。

「……もう勝手にしろ」

吐き捨てるように言うと、残は簡易ベッドを揺らして立ち上がった。くるりと背を向ける直前に見えた横顔は、苦々しげに歪んでいた。

ジインの心には、誰も触れられない領域がある。

時折垣間みる“それ”に触れることは、一番近い存在であるソラでさえ不可能だった。

ジインが触れさせないのではない。透明すぎて、誰も触れられないのだ。

その形を変えよう、なにか色を染めよう、痕を残そうと試みても、それは澄んだ空気を相手にしているようなもの。

だから残がどんなに言葉を尽くそうと、たとえ拳を振るおうと、孤高の場所で燦然と輝くジインの清廉さが揺らぐことは決してないだろう。

どんなに手を伸ばしても、空に輝く星には手が届かないように。

出入り口の仕切り布を手荒に払った残は、そこで思い出したように立ち止まりソラを振り返った。

「ソラ、ちよつと一緒に来い」

何気なさを装ったその声音と視線に、はっとする。

“呼ばれた”。

「どこへ連れて行く気だ」

顔色を変えて訊ねるジインを、残が面倒そうに一瞥する。

「少し借りるだけだ。すぐ返す」

「だめだ、行くな！ 連中とは関わるな、ここにいろ」

鋭く言って、ジインがソラの腕を掴む。苛立ちを露にした顔で、残は言った。

「でかい鉄板が倒れて通路を半分塞いでる。ちょっとこいつの怪力を借りたいだけだ」

「どんな些細なことでもテロリストの手伝いはさせない」

「鉄板を起こすくらい、いいだろう？」

「だめだ！！」

「いい加減にしるよ」

残がまなじりを吊り上げる。数歩でぐいと歩みよると、残はソラの腕からジインを手荒に引き剥がした。

「いやだ」、「だめだ」、「それはできない」。そんなわがままがすべてまかり通るとでも思っているのか？」

掴んだ手首を締め上げると、残はもう片方の手でジインの首を掴んだ。

褐色の手のひらは大きく、細いジインの喉を容易く覆い尽くす。

「っ、」

「残！」

「うるさい、おまえは黙ってる！」

止めようとしたソラを、残は怒号一つで退けた。

右腕の上がないジインは、左腕を封じられると抵抗ができない。急所を捕われ、為す術もないまま、ジインは残を睨み上げた。

「あまり調子に乗るなよ。どうせ簡単には手出しできないだろうと高をくくっているんだろうが、あの人の指示が一言でもあれば俺はためらいなくおまえを殺す」

双眸をぎらつかせて、残がジインに迫る。

「いいか、これが最後の忠告だ。取引に応じないのなら、おまえにもソラにも消えてもらう。これ以上駄々をこねるなら、もう面倒だ。二人まとめて院に送り返してやる……このことをしゃべらないように、口を聞けないような状態にしてからな」

褐色の指がわずかに締まる。白い喉が、ひゅつと鳴った。

「残」

太い腕を掴み、その双眸を睨む。

これ以上は、許さない。

その意志を込めて掴む腕に力を込めると、残がわずかに顔をしかめた。

褐色の手指が離れる。喉を押さえて枕にもたれると、ジインは大きく息を吐いた。

「大丈夫？」

枕に沈み込むジインの代わりに残が答える。

「それほど強くは絞めてない。まったく、手も首も無駄に細いな…」

力加減を間違えたらうつかりへし折りそうだと、自分の手を見下ろしながらひとりごちる残を横目に、ソラはジインに言った。

「ジイン、オレちょっと行ってくるよ」

「ソラ……!!」

「少しくらいむこうの言うことも聞かないと、本当に殺されちゃうよ。大丈夫、ちょっと鉄板を起こすだけだって。すぐ戻ってくるから、心配しないで待ってて」

口を開きかけたジインにくるりと背を向けると、ソラは残を押すようにして仕切り布の向こうへと追いやった。

まだ何か言いたげなジインを振り返り、強く微笑んでみせる。

「大丈夫。すぐ戻ってくるよ」

わざとらしいくらいに明るい声でもう一度告げると、ソラは残と連れ立って部屋を後にした。

「あいつから目を離すなよ」

廊下の途中で残が言う。鉄板を継ぎ接ぎした廊下は一足ごとに悲鳴のような軋みを立てて、それをさらに壁や天井がはね返して廊下全体が一つの楽器のようだ。

「あいつはおまえをどうしても俺たちに関わらせたくないらしい。」

放っておくと、何をしでかすかわからないぞ」
「わかつてる」

赤く錆び付いた廊下を歩きながら、ソラはジインの言葉を反芻した。

踏み越えてはいけない一線つてもものがある。

“その先”なんて、無いんだ。

おれはこんなこと、望んでいない。

悲痛な声が胸を締めつける。

それでも、オレは……。

前に行く残が足を止める。屈強な見張りに守られた重厚な鉄のドアの前だ。見張りに目配せをして、残が鉄のドアを軽く叩いた。

「連れて来ました」

残がそう告げると、入れ、と短い返答が扉の向こうから聞こえた。重い扉が開く。さほど広くはない部屋の四角いテーブルいっばいに、解体された銃の部品が広げられていた。それらは天井から吊るされた冷たい灯りに照らされて、得体の知れない生き物の臓器のように不気味に光っている。

ブーツの足を組み、簡素な椅子にもたれたレインネインが手元から視線を上げる。

「来たか、“ヒトガタ”」

野生の獣に似た鋭い瞳に胸が騒ぐ。部屋へ踏み込む足がわずかにすくみ、ソラは自分を叱咤した。

しっかりしろ。前を向け。

言葉に、動作に、全神経を集中するんだ。

この戦いに、負けるわけにはいかないのだから。

強大な魔物に戦いを挑む戦士のように、ソラは深く息を吸い込んだ。

毛布を除けてそつと床に降りる。

鉄板の冷たさが、まるで素足に刺さるよう。

両脚に体重を預けた途端、かくんと膝が折れ、危うく転倒しそうになる。

萎えて震える両脚をどうにか動かし、息をひそめて仕切り布の向こうを窺うと、廊下には見張りらしき気配があった。

少し体を傾けただけで右肩の傷が引きつる。ベッドから入口へのたった数歩の距離を往復しただけで、うっすらと汗をかいていた。傷つき萎えた体では、気配を殺して足を忍ばせるだけでも重労働のようだ。

落胆の吐息を吐いて、ジインはベッドに腰かけた。

こんな体で見張りをかわし、入り組んだ通路を抜けて外へ出るのはやはり困難だ。

けれどこのままここには、ソラが……。

ふらりと吸い寄せられるように、床に置かれたデイバッグへ向かう。おそらくソラがそうしたのだろう、底板の後ろに隠すようにしまわれていた“それ”を手に取った。

銀色の小さなケースが、橙の灯りをはね返す。

再びベッドに腰かけると、ジインはそれを膝に置き目を閉じた。

「……おれは、間違っていたのか」

あのまま、魔法院に捕われたまま、大人しく死を待つべきだったのだろうか。

そうすれば、こんなことに巻き込まれずに済んだのに。

オレはただジインを助けたい、それだけだ。

「無理、なんだよ……」

右肩にそつと触れる。

この傷のせいで、ソラを変な連中と関わらせてしまった。

自分さえいなければ、ソラがここに留まる理由などないのだ。

ソラひとりなら、ここから抜け出すことはそう難しいことではない。

足を引つ張っているのは自分。ソラの足枷になっているのは、この自分だ。

自分さえいなければ、ソラは自由になれる。

ならば、いつそ。

潔くここで消えてしまったほうが……？

「……ダメだ」

頭を振る。そんなことはできない。

まだ生きられる命を自ら断つなんて、そんなこと。

この薬を使うのは、竜毒の苦痛に耐えかねた時。正気を失うほどの苦しみから解放されたい、楽になりたいと、心から願うその時だけだ。

「……正気を失うほどの、苦しみ……」

その真つただ中にいる竜創患者を見たことがある。まだ魔法院に連れて行かれたばかりの頃だ。正確に言えば、桐生によつて無理やり見せられたのだ。

白い部屋に隔離され、治療台に拘束されたその人は、この世のものとは思えないほどの酷い形相で泣き叫び、狂つたように暴れていた。

耳をつんざく恐ろしい悲鳴を思い出して、ぞくりと背筋が冷える。

……来るのだろうか、本当に。

近いうちにおれも、あの人のようになるのだろうか。

どんなふうになるのだろうか。痛みは突然やってくるのだろうか。なにか予兆はあるのだろうか。それとも、心臓発作のように不意に襲いかかってくるのだろうか。

右肩には傷の痛みがあるだけで、他の症状は感じられない。

まだふらつきは残るものの、A R - e s の副作用もあらかた引いた。

もしかしたら、このまま。

傷が塞がり、体力も回復して、元どおりに暮らしていけるのではないか。

死が迫っているという実感のなさに、そんな幻想を抱いてしまいたいそうになる。

「そんなはずは、ない」

甘い夢をかき消すように首を振る。

期待を持つても、裏切られた時に辛いだけだ。

現実から目を逸らしてはいけない。

“その時”は来るのだ。

いつか必ず。

その前に、どうしてもソラをここから連れ出さなくてはいけない。

「早く、ここから逃げないと……」

戸口の布が破けそうなほど手荒に払われ、三人の若者が断りもなく踏み込んできた。

レインネインの後ろに侍っていた連中だ。

「何だ、おまえら」

言い終わる前に腕を掴まれる。ずきんと痛んだ右肩を庇って、動きが遅れた。

後ろ髪をぐつと掴まれ、鼻と口に布が押し当てられた。

「う……っ」

甘い匂いが鼻先をかすめ、とつさに息を止める。銀色のケースが床に落ち、かしゃんと音を立てた。腕を振り払おうともがくも、無理な体勢で手足を拘束され、自分の体を支えるのがやっとだ。

傷が痛い。息が苦しい。酸素を求めて肺が動きそうになるのを必死で堪えるが、抵抗すればするほど息苦しさは増していった。

魔法を。

意識を集中しようと試みるも、息苦しさと肩の痛みがそれを邪魔する。

ばくばくと心臓が暴れ、脳が膨張する。

苦しい。くるしい。もう、息、が。

耐えきれず、ジインはついに息を吸い込んだ。

肺と鼻腔に重く甘い香りが充満する。

髪を引かれて仰け反り、さらに深くまで香りを吸い込む。

じわりじわりと、脳に、肺に、痺れるような甘さが広がっていく。喉が熱い。肺が、熱い……。

ずるりと腕が落ちた。肩からぶら下がるそれは、自分のものではないように重く垂れ下がり、ぴくりとも動かない。次いで膝から力が抜け、がくりと首が仰け反る。芯を抜かれた人形のように、ジインの体はその場に崩れ落ちた。

思考が、うまく働かない。

腕に、足に、力が入らない。

「ソ………」

声を上げようと唇を開いても、出るのは虚しい吐息だけだ。

すぐ目の前に蓋の開いた銀色のケースが落ちている。パツキングされた簡易注射器とともに床に転がっているのは、見覚えのある鈍色の鍵。ソラと揃いの、廃工場の鍵だ。

院に没収されたかと思っていたのに、どうしてそんなところに。

沢木さんが隠しておいてくれたのだろうか。

ああ、でもよかった。

この鍵があれば、あの部屋へ帰れる。おれたちの廃工場へ。なあ、ソラ………。

意思に逆らってまぶたが落ち、意識が遠くなる。

ああ、ダメだ。

「ソ………ラ………」

甘い香りに引きずられるようにして、ジインの意識は闇へと沈んでいった。

「では、おまえが作戦に協力すると？」

紅を差さずとも十分に赤い唇が、にいつと大きな笑みを作る。笑みを浮かべていても決して鋭さを失わない双眸を見据えて、ソラは言った。

「その代わり、ジインをこのままここで匿って下さい」

電灯の下を細かな埃が過つては消える。明りの届かない部屋の隅には剣呑な薄暗がりか腰を据えている。

無言のまま、レインネインは手元の銃に視線を戻した。かしゅん、かしゅんと小気味いい音を立てながら驚くような速さで銃が組み上がっていく様子は、まるで魔法のようだ。

鮮やかな手さばきで組み立て終えた銃を、レインネインは優雅な動作で構えてみせた。

「あまりいい案とは思えんな」

銃身に顔を寄せその出来を確かめながら、レインネインが呟く。

「そもそもおまえに何ができる？ 『ハコ』の情報の代わりと言うのなら、それなりに役に立ってもらわねば割が合わない」

壁を向いていた銃口がつい、と逸れる。銃口とともに向けられた視線が、ソラのつま先から頭までゆっくりと舐め上げて、

「見たところ、あまり役に立ちそうには見えないが」

顔の中心に照準が定まるのを感じながら、ソラは臙脂色の瞳をまっすぐに見据えて言った。

「オレは死にません。ケガをしてもすぐに治るし、目も耳も鼻もいい。あまりそう見えないかもしれないけど、力も強い」

テーブルの端を掴むと、ソラは片手でひょいと持ち上げてみせた。並べられた複雑な形の部品類を一つも揺らすことなく、きれいに水平を保ったまま浮き上がったテーブルを見て、レインネインが片眉を跳ね上げる。

「なるほど」

「匂いをたどって追跡したり、遠くの会話を盗み聞くこともできます。先頭に立てば敵の気配をいち早く察知して回避できるし、弾丸が飛び交う中だって恐れずに進めます。戦い方さえ教えてもらえば、どんな相手にも負けません。“ヒトガタ”の身体能力は本当に普通の人間と比べ物にならないんです。何日も寝ずに過ごせるし、飲まず食わずでも平気です。三日三晩休みなしでも動けます。絶対に役に立つ。どんな危険な役でも何でもします、だからオレを使つて下さい」

その代わり、と間を置いて、眼差しを強くする。

「その代わり、ジインをこのままここで匿って下さい。情報提供を強要したりせず、ただ安静に」

「魔法士を匿う対価を、“院の情報”ではなく“おまえ自身”にしろと？」

「そうです。何をどうしようかと、ジインは絶対にしゃべらない。だから代わりにオレが対価を」

「兄を助けるために『ハコ』のデータが欲しいと言っていたな」

射抜くような眼差しが、すうつと細められる。

「院の情報は渡さないまま兄を匿わせ、その対価と称して作戦に参加しデータも手に入れる。ずいぶん都合のいい話だと思わないか？」

ほっそりとした指先が引き金にかかる。

「我々が欲しいのは『ハコ』のセキュリティデータで、“ヒトガタ”ではない」

銃身の先にぼっかりと空いた黒い穴が、こちらを凝視する。

弾が入っていないと分かっているにも、臓腑のあたりがぎゅっと縮こまる。

かすかな怖じ気を押し殺して、ソラはわざとゆっくり言葉を紡いだ。

「セキュリティデータはジイン以外の人間からでも手に入れられ

ると言っていましたよね？ だったらそちらのルートで入手すればいい。でもテロに手を貸すなんて申し出る“ヒトガタ”は国中を探してもオレしかいません」

「目の前のセキュリティデータよりも、自分の方が貴重だと？」
「そうです」

赤い大きな唇が声も無く笑う。

「人を撃つたことは？」

「ありません」

「人を殺したことは？」

「……竜化していた時には、もしかしたら」

「人の姿で人を殺したことは？」

「……ありません。でも……」

言葉を切り、息を吸い込む。

覚悟を、示さなければいけない。

「殺せと言うのなら、殺します」

眼差しをまつすぐに保ったまま、良心の悲鳴を悟られぬようはつきりとソラは言った。

自分の言葉がずしりと臓腑にのしかかる。

人を殺す。命を奪う。

絶対に許されるはずのない行為。

その重みが、体を、心を、奈落の底へと引きずり込もうとする。

この手を誰かの血で染めたら。

闇に堕ちた自分を、ジインは決して許してはくれないだろう。

「竜化する可能性は？」

「え？」

「作戦中に突然竜になられても困るだろう。まあ、それはそれで攻撃手段の一つとして使えそうだが……もう一度竜化する可能性はあるのか？」

もう一度竜になる可能性。

その危険について、考えないわけではなかった。

けれど。

「たぶん……その可能性はほとんど無いと思います」

自分の体の隅々までに意識を向けてみて、ソラは慎重に言った。

「人の形から竜の姿になることは、何というか……簡単なことではないんです。体中の細胞が一度バラバラになって、まったく別の生き物に再構築される。うまく言えないけれど、肉体が一度死んで、もう一度蘇るような感覚です。そうそう起こることじゃない」

あれ以来、あの“鈴の音”も聞こえない。

時折、似たような音を聞きつけてびくりとする時があるけれど、それは大抵、金属同士がぶつかり合った音だとか、何かを落としたりした時の音で、頭の中で鳴り響くあの音とはまったく別物だった。

数年先のことまでははっきりと断言はできないが、少なくとも数日のうちに再び竜化する可能性はないように思えた。

「兄はどうする？ あの様子では、おまえが作戦に参加するなどとても承諾しそうにないが」

「ジインには言いません。これはすべて、オレが一人で勝手にすることです」

一人で、という箇所を強調する。

何も知らないジインに非はない。

これから生まれる罪は、すべて自分が負うべきものだ。

「オレはジインさえ助かれればそれでいい」

そう、どこの誰がどうなるうと。

この命が尽き果てようと。

ただジインさえ助かれれば、それでいい。

「いい目だな」

赤い唇がにっと笑う。

「狂気に片足を突っ込んだ人間の目だ」

「狂気……」

誰かが扉を小さく叩く。続いて男の声が控えめに時を告げた。面談はこれで終わりだ。

退出を促すように扉が開かれ、銃を置いたレインネインが立ち上がる。

「待って下さい」

まだ返事を聞いていない、と眼差しで訴えるソラに、否とも応とも言わないまま、レインネインはただ笑みを深めて部屋を後にした。

「どうだった？」

角を曲がり、二人きりになった通路で残が訊ねる。

「わからないけど……感触は悪くないと思う」

「そうか」

残の横顔に安堵が滲む。

「ありがとう、レインネインに掛け合ってくれて」

「いや、俺は繋ぎを付けただけだ」

「色々とごめんね」

「……こちらこそ悪かったな」

歩きながら、ぶつきらぼうに残が言う。

「おまえたちを苦しめるつもりはなかったんだ。むしろ助けるつもりで連れて来たのに、これほど話がこじれるとはな。まさかあいつがあんなに拒むとは思わなかったから」

「ここ最近習癖になってしまったため息を吐いて、残は吐き捨てるように言った。

「まったく、あれほど俺が脅しても聞きやしない。何なんだ、あいつは」

「うん。ジインは昔からすごい頑固だから」

「頑固にも程があるだろう。いつからあんなつたんだ？ 透夜の群にいた頃は素直で可愛い奴だったぞ。でっかい目をきらきらさせながら透夜の後ろにくっついて歩いて……ああ、でもそういえば、俺の群に誘った時も頑なに断ってたな。あの頑固さは生まれつきか？」

「え、ジインを群に誘ったの？」

初めて聞く話に、ソラはくるりと目を丸くした。

「ああ。透夜の群があいつを残して全滅したすぐ後にな。俺の群もあの大寒波でリーダーが死んで、俺が代わりに群をまとめることになつて……赤ん坊を抱いて一人きりだったあいつを一緒に来ないかつて誘つたんだ」

「それで、ジインは？」

「きっぱり断つたよ。“おれはひとりしか守れない”……そう言われてな。あんなチビに守ってもらおうなんて考えもしなかったから、ものすごく驚いた記憶がある。その後も、赤ん坊を抱えて一人で生きようとするあいつが何だか放っておけない気がしてな。何度か誘つてみたんだが全部断られた。そのうちに、死にもものぐるいで“仕事”をするあいつと縄張り云々で何度か衝突して、疎遠になつて……。でも今考えると、あいつの言っていたことは正しかったのかもな」

通路の先をまっすぐに見据えながら、残が言う。

「仲間になれば情が移る。情が移れば、失いたくないと思う。失いたくないから、守ろうとする。守るべきものが多ければ多いほど身動きがとれなくなつて、結局多くを失うことになりかねない。失うつてのは本当に辛い。それをわかっているからこそ、他のことをすべて切り捨ててもただ一人だけを守ろうと決めただろう」

寂しさの過る横顔に、そつと問いかける。

「朱世には連絡しないの？」

「……もう関われない」

ぼそりと残が言う。

足の下でぎち、と金属音が鳴った。

壁と壁に狭間に横たわる奈落に梯子を渡しただけの小さな橋だ。

光の届かない奈落の底は、ソラの視力でも観えない見ることはできない。

こんな隙間が、このアジトには数えきれないくらいある。

かんかんと甲高く響いていた靴音が突然鈍くなる。トタンや鉄板、様々な素材を寄せ集めて作られた廊下は、一足ごとに足音が変わった。

一番遠い部屋から部屋までは数キロもあるというアジトは南北に長く伸びており、その構造は蟻の巣のように複雑で難解だ。

すぐ上に部屋があるとわかってても、そこへたどり着く道順がすぐには見つからない。

隙間から入り込む風が匂いを押し流し、音や声も複雑な構造に跳ね返り響き合うため、どちらも道標としては使いにくかった。

いくつもの角を曲がり、数えきれない小さな橋と段差を越えてようやく戻った部屋の手前で、ソラはふと違和感を覚えた。

いつもと何かが違う気がする。

部屋の前でいつもだらだらと暇を持て余している見張りがいないのだ。

おかしいなと思いつつ、

「……ジン？ 入るよ」

寝ているかもしれないと思い控えめに声をかけてから、そっと仕切り布の向こうをのぞく。

簡易ベッドは、空っぽだった。

「あれ……？」

「どうした？」

「ジンがいない」

お手洗いかなと言いかけて、ソラは視線を止めた。

床に何かが落ちてている。

「あれは……」

どくとんと心臓が跳ねる。

銀色のケースとパツキングされた注射器。

例の薬だ。

とっさに拾い上げ、封が切られていないことに安堵する。

でも、どうしてこんなところに？

「あ……」

足元で何か光った。

鈍色の鍵。ジインと揃いの、廃工場の鍵だ。

胸に手をやる。自分の鍵は、服の下にぶら下がっている。

簡易ベッドの下、手洗い場まで立ち歩く用にと借りた壊れかけの

サンダルは床に転がったままだ。

ざわり、と胸が騒ぐ。

通路に飛び出すと、ソラは目を閉じて感覚を広げた。

音。匂い。振動。空気の流れ。

ジインの声は。匂いは。

ジインは、どじ。

……

「……」

感覚の端に何かが引っかかる。

途端に、電流のようなものが体を駆け抜けた。

「おい、ソラ!？」

残をその場に残し、ソラは駆け出していた。

「おい、起きろ」

頬を叩かれ、ジインは目を覚ました。

覚醒はしたけれど、まぶたが開かない。粘着テープのようなもの

が両目を覆って貼り付き、視界を遮っている。

座らされている椅子は背もたれがあり堅く頑丈で、部屋に置いてあったものとは別物だ。そこにベルトか何かで体を固定されていて、

少しも身動きが取れない。

まだぼんやりと痺れたままの頭で、ジインは状況を把握しようとした。

「……いったい何の真似だ」

声を出してみる。その響きで、ここが元いた部屋ではないことがわかった。もつと広く、壁や天井がしつかりした空間だ。

周りを取り囲む気配は、少なくとも三人かそれ以上。

「質問は一つだ」

すぐ横に立つ気配が言葉を発する。聞き覚えのある声だ。

これは確か、レインネインの後ろで一番敵意を剥き出しにしていた……。

「端末のパスワードを言え」

「端末……？」

「おまえの携帯端末だ」

携帯端末のパスワード。

ジインは一瞬で状況を理解した。

いったいどこでその存在を知ったのか。おそらくはソラのいない間、自分が眠っていた隙にでも荷物を物色したのだろう。

院に没収される前に沢木が隠しておいてくれたジインの携帯端末。この連中は、そこに保存されているであろう『ハコ』の内部情報を狙っているのだ。

背に冷たい汗が流れる。

「何を勘違いしているのか知らないが、おれの端末は院に没収されたまま……っ！！」

全身が激痛に呑み込まれた。筋という筋が硬直し、全身が激しく痙攣する。

悲鳴は出ない。出せない。肺が針で縫い止められて、息すらできなかった。

幾千幾万という切っ先が、外から内から体中をめった刺しにしているようだ。

痛い。苦しい。誰か ……。

「が……は、っ」

ふいに激痛の呪縛から解放され、ジインはがっくりと頭を足れた筋の硬直は解けたが、痛み之余韻は全身に滞り、体を細かく震わせている。

「傷つけるなど言われている。だから、“傷”はつけない」

素足のままの両親指に、何かを取り付けられている。おそらくそれが電極で、そこから電流が……。

「ぐ……っ!!」

呼吸を整える間も与えられないまま、再び電流を送り込まれる。全身に火をつけられたような激痛に、頭が仰け反った。

痛い。苦しい。止めて、やめてくれ ……。

再び痛みが止む。

肩で息をしながら力なく傾いだ頭のすぐ上で、男の声がした。

「もう一度訊く。端末のパスワードは？」

「は……、」

肩で息をしながら、ジインは必死で考えを廻らせた。

視界を塞がれた今の状態では、魔法はまともに使えない。

触れているものになら多少使うことはできるが、両手足を拘束しているベルトはおそらくカーボンファイバー製だ。焼き切ったり、断ち切ったりするには、かなりの時間がかかる。

それなら ……。

「ぐ、う……っ!」

三たびの激痛に、思考が吹き飛ぶ。

痛い。いたい。体が燃える。

やめて。もう止めてくれ ……。

「う……」

がっくりと頭を垂れる。

頭の中が真っ白だ。

何一つまともに考えられない。

ある程度の覚悟はしていたが、やはり苦痛は想像を遙かに超えていた。

次の痛みに対する恐怖だけが、ただ頭を占めていく。傍らで男が動く気配に、びくりと体が跳ねた。

「端末のパスワードを」

言ってしまえばいい。

恐怖に侵され始めた頭の中で、冷たい声が囁く。

どこの誰がどうなるうと、関係ない。

痛いのはもう嫌だ。

おれがこんな目に遭う謂れなどない。

言ってしまえ。

「……パス、ワード……は……」

栗色の髪をした少女の笑顔が脳裏をよぎる。

小雪。

唇が震えた。

「……e……」

掠れた声で、一息一息囁くようにジインは言った。

「……c、l……i……p、s……e、……」

eclipse。

告げたアルファベットの羅列を、端末に打ち込む気配がする。

ごくりと唾を呑み込むと、ジインは深くゆっくり息をしながら背もたれに頭を預け“その時”を待った。

しんと静まり返った部屋に、突如として耳障りな電子音が鳴り響く。

「データが……!!」

狼狽した声に、思わず口角を上げる。

それを見咎めたであろう男の声に怒りが滲む。

「貴様……何をした？」

「別に、なにも。言われたとおり、パスワードを言ったただけだ」

口元の笑みを広げて、ジインは見えない男を見上げた。

「端末内のデータを……すべて消去するパスワードを」
残念だったな、と嗤ってやる。

「もう少して、おまえらが欲しがっていた情報の……すべてが手に入ったのに」

憤怒の気配が滲む靴音が、こつ、と近づく。

胸ぐらを掴まれる。縛り付けられた椅子ごと、すぐ後ろの壁に叩き付けられた。

背中を強かに打ち、息が詰まる。

「それなら、直接おまえの口から聞き出すまでだ」

腕が離れる。ごほ、と咳き込みながら、ジインは意識を集中した。

「電圧を上げる！」

密かに繋げていた“道”へ向けて、強く念じる。

切れる。

ぱちん、と小さな音がした。

激痛の来襲に身構え強張った体に、痛みは襲って来ない。

「おい、何をしている!？」

「いや……導線が切れた」

「何だと？」

「わからんが、いきなり真つ二つに……」

傍らの男が舌打ちする。

「気味の悪い力を使いやがって」

しゃり、と金属が擦れる音がして、頬に冷たいものが触れる。

「傷はつけるなど言われているが……」

ナイフの切っ先が肌の上をなぞり、襟元へと滑り込む。悲鳴のよ
うな音を立ててシャツが裂けた。断ち切られた包帯がはらりと膝の
上へ落ち、右胸の傷口が露になる。

「な、にを」

「元々あった傷口が少し裂けるくらいなら、問題ないだろう」

傷口にナイフの切っ先が触れる。

ひやりとした感触にジインは戦慄した。

「や……やめる……！」

切っ先がゆつくりと押しつけられる。

感電の痛みにはべたら、少し傷が開くくらい大した苦痛ではないのかもしれない。

けれど一度塞がった傷口を無理矢理開くという残忍な行為が、事実以上に怖じ気を煽る。

塞がれた視界の向こうに、にたりと笑う顔を見た気がした。

眼鏡の奥の、決して笑わない双眸。

心と体に消えない傷を刻んでいった男の顔だ。

硬く閉ざしていた扉がわずかに開き、胸の奥深くに沈殿していた恐怖が漏れ出す。

塞がったはずの脇腹の傷が、じくりと痛んだ。

「や……やめ……っ！」

がん、と部屋が揺れる。

「ジン！　そこに居るの！？」

強い声が扉を突き抜ける。

「ソラ……！」

安堵が胸に広がった。

がん、と再び部屋が揺れ、天井が軋む。

「ソラ、ここだ！　気をつける、こいつらたぶん銃を……っ！」

布で口を塞がれる。

「黙ってる！　おい、外の連中はどうしたんだ！？」

三たび部屋が揺れ、今度はめきりと何かが剥がれる音がした。

「扉を押さえる！」

にわかに慌ただしくなった靴音の中で、角張った手が首を締めつける。

「う……」

血管と気道が狭まり、じわりと思考が鈍る。

「さっさと話せ、魔法士。見張りの人数、交代時間、監視カメラの位置と数、セキュリティの形態、各ポイントのパス！　知ってい

ることをすべて話せ、すべてだ！ あと十秒のうちに話し始めないと本当に肩を切り裂くぞ！」

扉の向こうで数発の銃声が響き、壁に何かがぶつかる。

「ソラ……！！！」

ぞくりと背筋が冷えた。

「あと七秒だ」

「この……放せ！！！」

がたがたと椅子を揺らし、腕を振り払おうともがく。窒息しない程度に首を締め上げられたままの状態で、ジインは可能な限り声を張った。

「ソラ……ソラッ！！ 大丈夫か、返事をしろ！！！」

「うるさい、黙れ！」

鋭い痛みとともに、切っ先が傷に数ミリ食い込む。

締め上げられた喉の奥から、掠れた悲鳴がこぼれた。

ばりばり、と何かが裂ける音がして、目の前からナイフと気配が消え失せる。

荒々しい靴音と怒号、数発の銃声、肉を打つ音があたりを飛び交う。

何か重いものがいくつか壁や床に激突し、

「ジイン！！！」

目の前に飛び込んできた気配が、拘束を解き始める。無事な声にジインは胸を撫で下ろした。

「ソラ、大丈夫か？ ケガはないのか？」

自由になった左手で顔に貼り付いた目隠しを苦勞して剥がす。粘着テープで痛んだ肌を摩りながらまぶたを開けると、ジインはそのままぎくりと凍りついた。

目の前にいる、金髪の少年。

それをソラだと認識するのに、数秒かかった。

一切の感情が消えた、冷たい双眸。

見たことのないその表情に、ざわりと胸が騒ぐ。

その視線が注がれている先に目をやる。
右肩の傷がわずかに開き、鮮やかな血が一筋流れ出している。
その赤を凝視するソラに、なぜか心臓がばくばくと鳴った。

「ソ……」

次の瞬間、ソラが消えた。

同時に響き渡る、悲鳴と咆哮。

わずかに遅れて視線を巡らせる。

倒れ込んだ男の手を掴んだソラが、ナイフを振りかざしていた。

「やめるー!!」

ジインが止めるより早く、ソラがナイフを振り下ろす。

「ぐあああつー!!」

濁った悲鳴が上がり、手のひらを差し貫かれた男が床をのたうち

回る。

「どれだ」

低く冷たい声が出た。

動いたのはソラの唇。けれどそれはまるで、見ず知らずの誰かの
声で。

「どの腕が、ジインに触った？」

ららんと光る双眸が、辺りをぐるりと見回す。

ばくばくと鼓動が暴れ、呼吸が早くなる。

これは、なに？

目の前の、この少年は。

「ああ、答えなくていい」

これは……誰。

「匂いで、わかるから」

ひゅ、とソラが動く。ナイフが振り下ろされる瞬間、思わず目を
閉じていた。

自ら閉ざした視界の向こうで、立て続けに悲鳴が上がる。

全身から嫌な汗が噴き出した。

目の前の現実から逃避しかけた意識を奮い起こしてまぶたを開く

と、血に染まったナイフを手にしたソラが別の男に顔を向けたところだった。

「ソラ、もういい。やめる!!」

震える声で思わず叫んだジインを、ゆっくりとソラが振り返る。全身の血が凍りつくのを感じた。

「もう、いい」……?」

鮮やかな空色の双眸が、ジインを見る。

「いいわけないだろ」

雲ひとつなく晴れ渡った空の青。

その色は、赤ん坊の頃から見守り続けてきた瞳と確かに同じなのに。

「許さない……絶対に」

人間じゃない。

残忍な獣のようにららんと光るこの瞳は。

これは、人を喰らう竜の……。

「ジインを傷つける奴は……ぜったいに許さない!!」

冷たい声。冷たい瞳。

これが、ソラだなんて。

「何だ、これは!」

部屋に駆け込んできた残が青ざめる。

「イーザウ、あんた、何をしている!?!」

壁際に座り込み、苦痛に顔を歪めながら腕を押さえていたイーザウが、にやりと笑った。

「別に。そこのお姫さまにちょっとイタズラしたら、番犬に噛みつかれた」

「魔法士には手を出すなと言われたはずだ!」

「“手を出すな”とは言われてない。“傷つけるな”とは言われたがな」

「屁理屈を……!」

「屁理屈だと? はっ、言葉の真意を汲み取ってこそ、有用な同志

と呼べるんじゃないのか？」

イーザウが忌々しげに唾を吐く。

「まったく、どいつもこいつもビビりやがって。放つといたってどうせ死ぬんだろう？ だったら、くたばっちまう前にさっさと情報を聞き出すべきだろう」

「その結果がこの様か」

「“ヒトガタ”の化け物度数が予想以上でな」

自嘲の笑みを浮かべながら、イーザウがソラを見る。

「おい“ヒトガタ”、どうやってここまでたどり着いた？ 犬みてえに床をクンクン這いつくばって、文字通り“嗅ぎ付けた”ってか？ さすが化け物だな」

イーザウが立ち上がる。骨をやられたらしい腕がおかしな方向にぶら下がっていた。

「言っておくが、その傷は元々の傷だぞ。てめえがトチ狂った時のな」

額に脂汗を滲ませながら、イーザウが嗤う。

「てめえで兄貴を死に追いやっておいて、“傷つけるな”？ ははっ、笑わせる」

「やめろ、挑発するな！」

思わず叫ぶ。ゆらりとソラが動いた。

殺意に満ちた双眸がイーザウを捉える。

このままでは殺してしまう ……。

「だめだ、ソ……ッ！」

止めようと立ち上がった瞬間、右胸に何かが突き刺さり、中途半端に言葉が途切れた。

撃たれた？

いや、銃声はしなかった。

「ぐ……ッ!？」

右胸で爆ぜた激痛に体が傾ぐ。

押さえた傷のあたりが燃えるように熱い。

声が出ない。息すら、できない。

「ジン……?」

異変に気づいたソラが振り返る。脳髄まで突き刺さる痛みの波は、次第に感覚を狭めていった。全身から汗が噴き出す。がくりと膝をつき、自分の体を強く抱いた。

どろどろに溶かした鉄を、胸に注ぎ込まれているようだ。

生きたまま肉が焼かれ、体が1ミリずつ抉られていく。

堪えようと身を屈めるも、食いしばる歯の奥から呻きが漏れた。

始まってしまった。

「ジン、どうしたの!？」

痛い。いたい。体が裂ける。

胸の皮膚を引き裂いて、なにか得体の知れないものが突き出ようとしている。

痛い。いたい。息が、できない。

こわい。

「ジン!!」

こわい。こわい。体が、裂ける。

なんて酷い死に方。

こんなふうに、終わるなんて。

ソラ、おれはまだ、おまえになにも

……!!

めり、と体が軋んだ。

喉の奥から悲鳴がほとばしる。

裂ける。裂けてしまう。体が。

いやだ。こわい。たすけて。

助けてくれ……ソラ。

「ああ、来たね」

スライドしたドアの向こうから現れた笑顔に、ジインはびたりと足を止めた。

真っ白な壁に、真っ白な天井。扉も床も何もかも、取りまくものはまぶしいほどに真っ白なのに、ただそこにたたずむ男の存在だけが闇だった。

夢や希望、誰かを想う幸せな気持ち。そんな温かな感情をすべて吸い上げ、奪い去り、心を凍てつかせる存在。

ジインにとって男は、まるで晴天にぼっかりと空いたブラックホールのようなだった。

「遅かったから心配したよ。途中で道に迷っているんじゃないかと思ってるね。ほら、きみはまだここに慣れていないから」

こつこつと近づく靴音に、心臓が小突かれるよう。

今すぐ踵を返してここから逃げ出したい衝動を、ジインは必死で抑えた。

呼吸が浅く、速くなる。うつすらと汗ばんでいるのに、手足の先はつめたく冷えきってまるで氷のようだ。

院生の制服に身を包んだジインは、桐生の目を直接見ないよう視線を落とした。

着慣れない制服は、体を縛る枷のよう。

未だ治りきらない体の傷が、シャツに擦れてひりひりと痛む。

「今日はきみに、おもしろいものを見せてあげようと思ってね」

さも親しげな顔で横に並んだ桐生の腕が、やんわりと背中を押す。思わずびくりと体を震わせると、頭上でくすりと笑う気配がした。

「大丈夫。痛いことはないから」

今日はね、と耳元を撫でる囁きに、ジインは目眩を覚えた。

先の知れない白い廊下は、煌煌と照らされているにも関わらずそ

ここに冷たい闇の気配がする。

この先にどんな恐ろしいことが待ち受けているのか、想像するだけで吐き気がした。

「さあ、おいで」

背中を押され、促されるままに、ジインはすくむ両足を無理やり動かした。

塵一つない真っ白な廊下を進み、いくつかのドアを通り抜けて、壁と同じように真っ白な扉の前で立ち止まる。

意味のわからない横文字が貼付けられたドアが音もなくスライドすると、正面に動くものが見えた。

人だ。

白い部屋の奥に置かれた台の上で、誰かが暴れている。

「竜創患者だよ。見るのは初めてだろう？ 昨日、第四区で竜が発生してね」

さも楽しげに言いながら、桐生が部屋へ足を踏み入れる。並べられたモニターの前に座っていた研究員らしき男女二人が音もなく席を立ち、無表情なまま桐生に会釈をした。

部屋はガラスの壁で大きく二つの空間に分かれていた。

入ってすぐの薄暗い空間には、何かを測定しているらしい電子機器とモニターが整然と並べられ、ロボットのよう無口で無表情な研究員が淡々と作業をしている。

一方、影も落ちないほどに煌煌と照らされた奥の空間には、太いパイプで床に固定された寝台が一つと、その上で暴れる男が一人。

幅の広いベルトで体を固定されているにも関わらず、男性は体がちぎれそうなほどに激しく暴れ、その顔はこの世のものとは思えないほどの形相に歪んでいる。防音ガラスに遮断され声は届かないが、口の開き方で何かをめちゃくちゃに叫んでいるのがわかる。

まるで生きたまま地獄の炎で焼かれる罪人のような有様だ。

「もう竜毒については教えたね？」

暗に促され、ジインは覚えたばかりの知識を口にした。

「竜毒は竜の持つ固有の毒物質で、人の体内に入ると数時間あるいは数日の潜伏期間を経て細胞組織を染食し始める。皮膚に花形染食性黒斑を生じさせながら胴体部へと広がって内臓に達し、その後数日かけて細胞組織を硬化させ多臓器不全等を引き起こす」

「ここ数日で叩き込まれた知識の中から該当するものを探し出して並べ立て、抑揚なく読み上げていく。」

「竜毒自体に即効性はないがその毒性は極めて強く、体内に入った量がたとえ微量であっても確実に発症して患者を死に至らしめる」

院内着から突き出た腕、顔や首筋。照明の下に曝された肌を覆うように、黒い模様が広がっていた。

竜毒の進行とともに現れる花形染食性黒斑……“花斑”だ。

可憐な花のように見えるその模様は腕に巻かれた包帯の下から這い出すように広がり、今や男の顔の半分を覆うほどまで広がっている。

皮膚から先に広がる染食が、体の表面を食い飽きて内臓に到達するのも時間の問題だろう。

そう、この男はもう助からないのだ。

「死因の多くは多臓器不全だが、細胞染食は大変な苦痛が伴うため、内臓に達する以前に患者が衰弱死するケースもある。一般的な動物性自然毒と違い抗体による治療が不可能であり、有効な治療法が未だ発見されていないため、現在の竜創患者の致死率は100パーセントである」

「よくできました。飲み込みが早いね、さすが『オリエンタル』だ」
肩に置かれた手に力がこもる。悪意の滴る囁きがそと耳を撫でた。

「ご褒美として、今日は特別にもっと近くで見せてあげよう」

桐生の指示でガラスのドアが左右に開く。

途端に、恐ろしい叫び声が部屋中に響き渡った。

断末魔の叫びだ。

全身から汗が噴き出し、ばくばくと心臓が鳴った。

ただの悲鳴ならば、今までも幾度となく耳にしてきた。必死で助けを求める叫びも、死に際の人間の哀れな慟哭も、治安の悪い『貧困街』ではさして珍しいことではなかった。

でも、これは違う。

これほどの苦痛が、この世に存在するなんて。

「さあ、もつと近くへ」

背中を押されて、無理やり奥へと押しやられる。

男の暴れる振動が、床から伝わってきた。

体を仰け反らせ、唾を散らし、獣のような咆哮を上げながら、男はもがき苦しんでいた。

半分を黒い斑で覆われた顔はすでに正気を失い、血走った目は在らぬほうを彷徨い続けている。

まるで見えない誰かを必死で探しているようだ。

そう、たとえば、苦痛を終わらせてくれる死神の姿を。

その壮絶な様に、ジインは思わず目を逸らした。

喉が裂け、声が枯れても止まらないその叫びは、立ちすくんだジインの体をまるで冷たい濁流のように呑み込み、体温までも奪っていくようだった。

たまらずに耳を塞ごうとした腕を、背後から掴まれる。

「よく見て、よく聞いておきなさい。竜毒に冒された人間がどれほど苦しみ、どんな形相で死んでいくのかを」

ジインにしか聞こえない声音で、桐生が囁く。

どろりと流れ込む毒のようなその声は、部屋を満たす叫び声にもかき消されることなく、ジインの鼓膜を焼いた。

「そう……いつかきみだって、こうなるかもしれないのだから」「え……？」

瞬きの間に、男の姿が消える。

代わりに寝台に縛り付けられているのは……。

あれは おれ？

「っ！」

息を詰まらせて目を開ける。

くねくねと配管の這う天井が見えた。

「ジン……！」

目を腫らしたソラの顔が、見慣れない天井を遮る。

「ジン、オレだよ。わかる？ オレがわかる？」

突然の覚醒に思考が追いつかず、ジンは浅い呼吸を繰り返しながら呆然とソラを見上げた。

錆びた匂いの混じる空気。安物の毛布の重たい感触。薄暗い天井の隅にゴウゴウと流れる水音を聞いて、ここが魔法院ではないことを知る。

「痛みはある？ どこか苦しいところは？」

必死の問いかけに、わずかに間を置いて小さく首を振る。

ほつつと表情を崩すと、安堵の息を吐きながらソラはそのまま床にへたり込んだ。

「……よかった……もう、このまま……目を覚まさないかと……」

ソラの手が左手を強く掴む。とても心配していたようだ。酷く震えるその手を握りかえして、ジンはようやく意識を失う前のことを思い出した。

ああ、そうだ。

ここは『神の左手』のアジトで。

おれは奴らから拷問を受けて。

それから……。

「……！」

ぞくりと背筋が寒くなる。

そうだ。

突然のあの痛み。

体が真つ二つに裂けるような、あの激痛は ……。

「どうしたの？」

無理やり体を起こす。心配顔のソラをよそに、ジインは思うように動かない左手を必死に動かしてシャツのボタンを外した。

何重にも巻かれた右肩の包帯を、もどかしい気持ちで乱雑に解いていく。

緩んだ包帯の隙間から覗いた肌を見て、ぐつと胃が縮こまった。

花斑。

まるで肌の内側から墨を滲ませたような黒い痣が、傷口のまわりにくっつきりと浮き上がっている。

竜毒の進行の現れだ。

今は傷口がわずかに疼くだけで、肉を裂くあの痛みは跡形もなく消えている。

けれど、感じる。

自分の意志ではどうにもならない“何か”が、右胸の奥に潜んでいるのを。

「は……」

固くまぶたを閉じる。掴む毛布に爪が食い込んだ。

いつだ……いつ、“その時”が来る？

一度染食が始まれば、苦痛は途切れないはずだ。

では今のこの状態は？ あの激痛は単なる予兆なのだろうか。

いや、竜毒の進行中でも一時的に症状が弱まる場合があると資料で読んだ気がする。

おれが天然の魔法使だから、一般的な症例と少し違いがあるの
だろうか。

しかし今のこの状態が何にせよ、竜毒に冒された魔法士はNBも
含め例外なく命を落としている。
ナチュラルパース

数日後か、明日か、今日か。

竜毒は再び広がり始めるだろう。

もしかしたら今この瞬間にも、染食が始まって ……。

「ジン？」

吐く息が震える。

また、あの激痛に襲われるのか。

体を引き裂くような、あの恐ろしい痛みに、苦しみに。

命が尽きる瞬間まで、苛まれ続けるのか。

とても耐えられない。

黒く冷たい恐怖が、臓腑の奥にじわじわと広がっていく。

経験したことのない死よりも、全神経に焼きついた地獄のような

苦しみが心と体を震わせた。

強く体を抱く。守るように身を縮めても、襲い来る死神はこの身の内に潜んでいるのだ。

逃げられない。免れない。

あの苦しみを避ける術はないのだ。

正気を失った男の顔がまぶたの裏に蘇る。

骨を軋ませ、肌から血が滲むほどに暴れ。

突き上げた両手で空を掻きむしり、両脚で床を打ち鳴らし。

よだれを垂らしながら、喉が潰れるほどに叫び散らして。

ただひたすら、もがいて、もがいて、もがき苦しむ。

そう……いつかきみだって、こうなるかもしれないのだから。

おれも、あんなふうには……？

「ジン、どうしたの？」

肩を掴まれる。空色の瞳がのぞき込んできた。

その腕を引き寄せる。簡易ベッドがぎしりと傾いだ。

「危ない！」

落ちかけた体をソラの腕が抱きとめる。

傷が引きつるのもかまわずに、ジンは片腕で力一杯ソラを抱き寄せた。

助けて。

声にならない声で叫ぶ。

助けて。助けて。

怖いよ、ソラ。

決して声には出さないまま、心の中で泣き叫ぶ。

「どうしたの？ どこか苦しいの？」

戸惑う声に首を振る。

ソラには言えない。言えるわけがない。

助けて、なんて口にしてしまったら。

ソラは自分を犠牲にしても、必ずそれを叶えようとするだろう。

「……ッ！」

右胸に小さな痛みが走る。びくりと体が震えた。

途端にばくばくと心臓が暴れ、全身に嫌な汗が滲む。

「ジン……！？」

「何でもない」

そっだ、何でもない。今のはただ、傷口が痛んだだけだ。竜毒の

せいじゃない。

必死でそういい聞かせても、臓腑の奥からせり上がる恐怖は抑え

ようがなかった。

もしも。

もしもソラの言うとおり。

『ハコ』からデータを盗み出せたとしたら。

助かる見込みは、あるのだろうか……？

「……は、」

唇が自嘲に歪む。同時に、目の奥が熱くなった。

できるわけがない。

「ジ……イン……？」

涙の気配を感じたのだろう。戸惑うソラに見られぬよう、いっそ

う強く抱きしめる。

シャッ……の温もりがじんわりと肌広がる。

それは胸に深くしみ込んで、心までも温めてくれるよう。
ああ、命だ。

この手で拾い上げ、この手で育ててきた命だ。
おれの魂を救い、今日まで生かしてくれた命だ。
そして、おれの命を未来へ繋いでくれる命だ。

「ソラ……」

幼い時分によくそうしたように、苦しくないよう、けれど全身の力を込めて、心の限りに抱きしめる。

可愛い可愛い、おれのソラ。

何よりも大切な、おれの子ども。

おまえを『ハコ』へ近づけるなんて。

そんな危険なこと、とてもさせられない。

できるわけが、ない。

「……ここを出よう」

掠れた声で言う。何度も繰り返した言葉をもう一度、祈るような気持ちで口にする。

「ここを出よう、ソラ。ここはもう嫌だ。こんなところに閉じ込められたまま、終わりたくない」

体を離す。さり気なく涙を拭い、空色の瞳をのぞき込むようにして、懇願する。

「頼む、お願いだ……一生のお願いだ。おれにはもう時間がない。ちゃんと意識があるうちに、一分一秒でも早く自由になりたいんだ。頼むソラ……おれの最後の願いを聞いてくれ……二人で廃工場に戻ろう。おれたちの廃工場に」

こんなところに、ソラを置いてはおけない。

一日も早く、ここを離れてどこか遠くへ。

そう、おれがまだ、正気でいるうちに。

「それにここは……空が見えない」

ぼつりと言葉がこぼれる。まるで幼い子どものような言い分だ。けれどそれもまた、シンプルで偽りのない、心からの願いだった。

「青い空が見たい。目の前いっぱい広がる青空を。どこまでも続く空色を見上げながら、全身に風を感じて……」

帰り道やビルの屋上、廃工場の窓辺から、二人で幾度となく眺めた空を思い出す。

朝、昼、晩とその色を変えていく広大な空を見上げるたびに、その向こうに広がるものに思いを馳せた。

今では遠い夢のような未来画を、あの頃はまだ信じていられた。

遙か異国まで続く空は、そのまま未来へと通じているような気がした。

なあ、ソラ。おれとおまえなら、なんだってできる気がしないか。

あの時のような透きとおった気持ちで眠りにつけたなら、どんなに素晴らしいだろう。

「最後は……空の見えるところにいたい」

ソラがぐつと目を閉じる。何かを堪えるような長い沈黙の後、細く深く溜め息を吐くと、ソラは震えるように小さく頷いた。

「……わかったよ。ジインの言うとおりにする」

優しい、けれどどこか強張った微笑みを浮かべて、ソラはジインの頬に触れた。

「できるだけ早くここから逃げ出そう。残にもバレないよう、こっそり準備しておくよ。そしてどこへでも、ジインの行きたいところへ行こう。廃工場に戻ってもいいし、どこか人目につかない、眺めのいい場所を探してもいい。賞金稼ぎをやり過ぎるのは大変だろうけど、きっとオレが守ってみせるよ」

だから、とソラの顔が苦しげに歪む。

「だからお願いだ……オレをひとりにしないで」

死なないで。生きていて。どうか、置いていかないで。

「こんなこと、オレが言える立場じゃないってわかってる。でも、どうか……」

どうか、そばにいて。

一日でも、一時間でも、一分一秒でも長く。
どうかどうか、生きていて。

口に出さない想いが、繋ぐ温もりから伝わってくる。

「お願いだ……ここから無事に抜け出すまで。青空を見るまで……
どうか」

どうか、もう少しだけ持ちこたえて欲しい。

「……わかった」

震えるソラの嘆願に、ゆっくり頷く。

竜毒の本格的な進行は、もういつ始まってもおかしくはない。

自分に残された時間があと何日あるのか、それはジン自身にも
わからなかった。

明日を無事に迎えられる保証すら、今の自分にはない。
けれど。

「約束する。ここから出るまでは、どうにか耐えてみせるよ」

息をひそめて。鼓動を抑えて。

右胸で眠る死神を起こさないよう、ただ静かにひっそりと、どう
にか生き長らえてみせるから。

「だから、おまえも約束してくれ。これ以上『神の左手』とは関わ
らない、おれと一緒に一日も早くここを出る、と」

「約束するよ」

まっすぐにこちらを見つめて、ソラが言う。

安堵して、体中から力が抜けた。

よかった。これでソラを連中から引き離せる。

破滅への道を進ませることなく、明るい場所へ連れ出せるのだ。

気が抜けた途端、見えない何かに押しつぶられるように体が重く
なり、それに引きずられるように意識が沈み始める。

支えることが難しくなった体をベッドに横たえ、ジインは重いま
ぶたを閉じた。

体は眠ることを欲しているのに、心に刺さった不安という名の冷
たい棘が眠りに落ちるのを邪魔する。

もし眠っている間に染食が始まってしまったら……。

「……ここにいてくれ」

うわ言のように囁いて、ソラの手を握る。

冷えた指がじんと痛むほどに温かいその手が、募る不安を溶かして気持ちをしなやかにしてくれる。

あの日、真っ白な死の世界から救ってくれた温もりだ。

この手に触れていれば、きっと大丈夫。

「ごめん」

穏やかな寝息を聞きながら、ぽつりと呟く。

「ごめんね……ジン」

その約束は、守れない。

「できたわ」

ジインの携帯端末からコードを引き抜いて、朱世が振り返る。

「一部は壊れていたけど、データの七割はなんとか復元できたわ。たぶん『ハコ』の情報も無事だと思う」

「ありがとう」

礼を言いながら、ソラは稼働して温まった端末を受け取った。小さなタッチパネルに触れると、黒い画面がゆらりと霧散して、翡翠色に光る粒子がアルファベットを形作っていく。

ジインが全消去したはずのデータは、この小さな電子機器のどこかに引つかかっていたらしい。“復元”という作業がどの程度手間のかかるものなのかソラにはさっぱり分からなかったが、『神の左手』の連中の話によればかなり難度の高い技術のようだ。それを実行できるプログラマーはこの広大な『彩色飴街』でも一握りで、有能ゆえに多忙な彼らと接触するためには何重にも仲介を挟まなくてはいけない。接触までにかかる費用と時間を考えると、その希少な一握りにたった二年で上り詰めた朱世が顔なじみで本当によかったとソラは心から思った。

「ええと、それで、お金のことだけ……」

朱世によってデータを復元された端末を握りしめ、おずおずと口を開く。

「もう先払いでもらってるわ」

言うなり、朱世は柔らかな印象だった目元をきゅっと吊り上げた。「この前会った時に、どうも何かの手違いで余計な料金を受け取っていたようだから」

言葉の端に未だ冷めやらぬ怒りを感じ取って、ソラは肩をすくめた。

譲り受けたプログラム・チップの代金の代わりに安否の連絡をす

るといふ約束を、舌の根も乾かぬうちにこっそり代金を支払うことでジインが反古にしたのはつい二週間前のことだ。

「ごめんね。オレは止めただけだよ」

「いいのよ。少し……いえ、かなり頭に來たけど、ジインらしいと言えはジインらしいわ」

「でも、本当に払わなくていいの？ 求紅に怒られない？ と言っても、実は払えるお金がないんだけど」

「気にしないで。ジインには昔から助けられてばかりだし、少しでも恩返しをしたいの。……『ハコ』へ行くの？」

朱世の静かな問いに、ソラは曖昧に笑った。朱世には詳しいことを話していない。復元したデータの使い道も、ジインの今の状況も

「もし何か目的があつて『ハコ』へ行くのなら、私も手伝うわ」

「気持ちだけで十分だよ」

「でも、」

「朱世には二葉がいるだろ」

覚悟の滲む声音で言い、これから行う事の危うさを暗に伝える。

そう、守るべきものが他にある朱世を巻き込むわけにはいかない。

朱世もわかつているのだろう。辛そうな顔で短いため息を吐いた。

「……私に手伝えることがあつたら何でも言つて。できる限り力になるわ」

「ありがとう。でもこれで十分だよ。さっ、鳶広や他の人たちに見つかる前に行かないと」

鉢合わせしたら面倒だからと立ち上がるソラを、朱世が廊下まで見送る。

「何かあつたら、今日みたいに“アオムシ”で連絡を。……ジインを、よろしくね」

不安げな朱世を安心させるように、力強く頷いてみせる。

朱世に教えてもらった抜け道へと歩みかけ、ふと思いついたように振り返った。

「……残から連絡は？」

明りの少ない廊下に満ちる薄やみの向こうで、朱世がおどけたように肩をすくめる。

「相変わらず、なしのつぶてよ」

ちゃんと生きてるのかしら、と呆れたような声音とは裏腹に、朱世の瞳に寂しさが過る。

もう関われぬ。

目の前の少女とよく似た色の瞳と、寂しげな眩きを思い出して、わずかに心が揺れる。

しかし、

「……きつと、元気にやってると思うよ」

しばし逡巡した後、結局ソラはそれだけを口にしてその場を後にした。

本当に奴を生かしておくのですか？。

薄暗い通路の先から聞こえた不満げな声に、ソラは歩を速めた。

あんな化け物、信用できるはずがない。

静かに沸き立つ怒りと嫌悪を押し殺しながら、重い扉を押し開ける。ぱん、と何かを弾くような乾いた音が立て続けに鼓膜を揺さぶった。

頭をこすりそうなほどに低い天井の広間。鉄板の床に引かれた線に沿って四、五人の人間が一行に並び、銃を構えて的に狙いを付けては引き金を引いている。

『神の左手』のアジト内に設えられた射撃場は、大きな広間の片面に布張りの的を据えただけの貧相な造りだ。しかしそこに満ちる殺気の鋭さは粗雑な環境に不釣り合いなほど洗練され、集う者たちの意志の強さを表している。

横目で鋭い視線と殺気をぶつけてくる男たちの背後を何食わぬ顔で通り過ぎると、ソラはまっすぐに列の一番奥を目指した。今まさ

に引き金に指をかけている赤髪の女の前で立ち止まると、取り出した端末を突きつけて言った。

「『ハコ』のセキュリティ情報です」

五発の弾丸を続けざまに的の中央付近に命中させてから、臙脂色の瞳がちらりとこちらを見る。

「これでジインを安静に匿ってくれるんですよ？」

安静に、という箇所のことさら力を入れて、切れ長の双眸を挑むように見上げる。

しばしの沈黙の後、赤い唇の端がわずかに持ち上がった。

「……いいだろう」

「レインネイン！」

抗議の声を上げるイーザウを、レインネインは視線でいなした。

「元はこちらから持ちかけた取引だ。余計なことはせず大人しくしていると約束するのなら、魔法士はこのまま匿ってやる。その端末の中身と引き換えにな」

傍らに立つイーザウの顔が忌々しげに歪む。それを無視して、ソラはさらに言った。

「オレを作戦に加えてもらう件は検討してもらえましたか？」

「……得体の知れない化け物を作戦に加えるなんて危険過ぎます。考え直すべきです」

これ以上ないほど憎しみのこもった目でこちらを睨みつけながら、呻くようにイーザウが言う。

あと一歩でも近づけば、ナイフの一閃でも浴びさせられそうだ。

包帯がちがちに固められ肩から吊られた腕では、殴りかかることとはおろか、ソラに触れることさえ叶わないだろうが。

「イーザウ」

「はい」

「端末をソグバッグのところへ」

訴えを打ち切られたイーザウの顔が赤黒く歪む。怒りに拳を震わせて今にも殴りかかって来そうな眼差しを、ソラは平然と見返した。

当然の報いだ。“たたじゃおかない”という忠告を無視してジンに手を出した方が悪いのであって、腕が折れ曲がり作戦に加われなくなったことはこちらのせいではない。こめかみに青筋が浮かぶほど逆恨みされても、それはお門違いと言うものだ。

まあ、どちらに非があるかなど、どうでもいいけれど。

煮えたぎるような憎しみと、冷めきった侮蔑。温度差の激しい睨み合いをしばし続けた後、イーザウは無然とした様子で端末を引つたくと、荒々しい靴音を響かせて射撃場を後にした。

「……化け物だからこそ、できることもある」

扉の閉まる音を背で聞きながら独り言つように呟くと、ソラは『神の左手』の若きリーダーに一步迫った。

「お願いします。一刻も早く、『ハコ』へ行きたいんです。あなたたちの邪魔になるようなことはしない。絶対に役に立ってみせます。先鋒でもしんがりでも何でもいい、あなたの弾よけの盾でもかまわない。オレを『ハコ』へ連れて行って下さい」

「そう焦るな」

熱っぽいソラの訴えをそっけなく一蹴すると、レインネインは銃を構え直した。

乾いた銃声が響く中、ソラは齒噛みした。

焦るな、だつて？

焦るに決まっているじゃないか。

今こうしている間にも、ジインの体は竜毒に蝕まれているのだ。

一刻も早く、『ハコ』から自分の生体データを盗み出さなければならぬ。

可能なら、その他の竜毒に関するデータや、ジイン自身に関するデータも。

そしてそれを外国か反政府系の研究所に持ち込み、解析をする。時間は一瞬だつて無駄にできないのだ。

無茶苦茶な計画だと言うことは、ソラ自身よくわかっていた。

けれど、万に一つでも可能性が残っている限り、前に進むと決め

ただ。

進まなければ、走らなければ……前を見ていなければ、自分はきつと“壊れてしまう”。

だから、走る。

綱が切れて谷底へ落ち行く吊り橋を、ともに落下しながらも必死で駆け抜けるように。

走って、走って、走り抜いて。

必ず、向こう岸へたどり着いてみせる。

ふっと空気が動く。

何の前触れもなく、レインネインの銃口がこちらを向いた。

目の前の銃身を反射的に掴んで照準を逸らすのと、がち、と激鉄が鳴ったのが、ほぼ同時。

一秒にも満たない間の出来事だった。

「いい反応だな」

そんなに綺麗に避けるとわかっていたら一発分残しておいたのに、とどこか白けた様子でレインネインが言う。

「武器の扱いは？」

「昨日、残にひととおり教えてもらいました」

言うなり、ソラはレインネインの足元に置かれた数種類の銃の中から一つを拾い上げ、無造作にかまえて引き金を引いた。

片手で構えた銃から立て続けに発せられた弾丸は、的の中心に穴を一つだけ開けてすべてそこを通過する。

発射時の反動にもソラの腕は一ミリもぶれることなく、まっすぐに構えられたままだ。

これが、“ヒトガタ”。

人並みはずれた能力を見せつけられた男たちの空気が、ざわりと逆立つ。

化け物め。

そんな悪態が聞こえた気がした。

「お見事」

緩慢に手を打ち鳴らすレインネインに、ソラは皮肉を込めて言った。

「一刻も早く『ハコ』へ行かなければならないので」

真意の知れない臍脂の双眸をほとんど睨むように見上げる。レインネインの微笑みがわずかに深まった。

「おまえは運がいい」

「……？」

怪訝な顔のソラに、レインネインがにやりと笑う。

「近々『ハコ』でセキュリティシステムの更新と警備兵の大規模な配置換えがあるらしい。あの端末に保存されているデータを活用するなら、決行は当然システム更新前ということになる。配置換え直後の不慣れな警備兵相手なら隙を突きやすいし、そこにちょうど液体燃料の輸送日が重なれば、我々にとってこれほど都合のいいことはない」

作戦の日程が早まる。

思わぬ朗報に、ソラは拳を握りしめた。

「さらに幸運なことに、魔法士団の一部が砂珂国のクーデター鎮圧に派遣されることが今日決まった。こちらとしてはあまり急ぎたくはなかったのだが、偶然にもいい条件が重なっている。このままだと、本当におまえの望みどおり近日中の決行になりそうだ。……まるで神がおまえの後押しをしているようだな？」

幸運の女神か死神かは定かではないが、とからかうように言いながら、レインネインが足元の銃を手にとる。

「だが、これは我々にとってもまたとない好機だ。それでも勝算は三割以下だが」

的へ向けて標準を合わせる横顔から、ずっと表情が消えた。

「……我々の長年の悲願だ」

独り言のように言うレインネインの、あまり感情の表れない瞳の奥に、燃えるような憎悪が見え隠れする。

「これが最後の機会……たとえ命をいくつ使おうとも、今度こそ計

画を成功させる。あの肥えて腐りきった西の土手っ腹に、巨大な風穴を開けてやる……飛空船が通れるくらいいな」

パン、と的が撃ち抜かれ、間髪入れずにスライドが引かれる。

「おまえの作戦への参加を認めよう」

視線は的に向けたまま、レインネインは淡々と言った。

「作戦中の一時離脱も見逃してやる。愛しい兄を救うために我々の計画を利用すればいい。その代わりに、我々もおまえの“ヒトガタ”としての能力を最大限利用させてもらう。ただし……」

瞳だけを動かして、レインネインがこちらを見る。

底冷えするような眼光に、銃口を向けられた時よりも鼓動が早まった。

「おまえか、もしくはあの魔法士が、我々の邪魔をした時は……」

乾いた血の色の瞳が、一瞬にして鮮やかに燃え上がる。

「不死身のおまえの代わりに、あの魔法士をバラバラにして臓物をぶちまけてやるからそのつもりでいろ」

「どこへ行つてたんだ」

部屋へ戻るなり、ジインがどこか慌てた様子で歩みよってきた。

手洗い用のサンダルではなくブーツを履き、シャツの肩にコートを引っ掛けている。

何かあれば、そのまますぐ外へ飛び出せるような格好だ。

「どうしたの？ 何かあった？」

深く被っていたフードを脱ぎながらきょとんと訊ねるソラに、ジインが柳眉を逆立てる。

「それはこっちの台詞だよ！ 目が覚めたらもういなくて、待つても全然戻ってこないから……」

「ああ」

どうやら身を案じてくれていたらしいジインに、ソラはそれがま

るきり杞憂だともいうように無邪気な顔で笑った。

「ごめんね。心配した？」

「こんなに長い時間、いったいどこへ行ってたんだ？ 奴らと何かあったのか？」

問いつめるジインの視線をあまり意識しないよう注意しながら、

ソラは何気なさを装って答えた。

「少し外を見てきたんだ」

「外へ出れたのか？ 見張りなしで？」

「着替えを買いたいって言って、残に付き添ってもらった」

シャツと下着の入った合成紙の袋を部屋の隅に置きながら、ソラは半分だけ嘘を吐いた。外に出たのも着替えを買ってきたのも本当だが、見張りは付かず実際はソラ一人での外出だった。

嘘に適度な真実を混ぜると、驚くほど真実味が出るということをソラはここ数日で学んだ。

自分のいないところでジインが残に問いたただせばすぐバレしてしまう手薄な嘘だが、今までほとんど嘘をついたことのない自分をジインは疑ったりしないだろう。念のため残には後で裏口を合わせてもらうつもりだが。

「賞金稼ぎは大丈夫だったか？」

案の定、欠片も疑うことなくソラの言うことを鵜呑みにしたジインが心配そうに訊ねてくる。

「うん。ちゃんとゴーグル着けてフードも深く被ってたし、残がいてくれたからね。全然気づかれなかったよ。画像が出回ってるって言っても、そもそもオレぐらいの背格好の金髪はそこら中にいるからね。連中はむしろジインの方を目印にして探してるみたい」

実際は一人歩きの途中で賞金稼ぎらしき敵つい巨漢に疑いの眼差しをよこされる危うい場面が何度かあったのだが、余計な心配をさせることもないので伏せておく。

「おれが教えたデッドスペースは見てこれたか？」

仕切り布の向こうをちらりと伺いながらジインが声をひそめる。

それに合わせるように耳元に口をよせると、ソラは長年の秘密を吐露するかのようにならざとらしく声を落とした。

「残がいたからデッドスペースは無理だったけど、教えてもらったルートは服屋を探すフリをしていくつか確認してきたよ」

“確認した”と言うよりも、教えてもらった逃走用の裏道は賞金稼ぎたちを避けて朱世のところへ行くために“使わせてもらった”のだが。

「人通りも少ないし隠れ場所も多いけど……ジン、なんで立つてるの？」

ベッドに戻る気配のないジンを不思議に思っ て訊ねる。

四人も入れば埋まってしまうような手狭な部屋は、二人のうちどちらか一人が立っているだけでも動きが制限される。

壁際で所在なくたたずみながら、ジンは肩のコートを引き寄せた。

「ああ、少し体力つけようと思っ て。最近寝てばかりだったから、少しは体を慣らさない」と

「でも、あんまり体を動かさない方がいいんじゃないの？」

不安げなソラに、ジンが小さく笑う。

「立っ てくるくらいなら大丈夫だよ。脱出するまでに最低限歩いたり走ったりはできるようにしておかないと。たとえおれが万全の状態でも、たった二人でテロリストのアジトを抜け出して賞金稼ぎの大群をやり過ごすなんて簡単なことじゃないんだ。奥に入り組んでいるせいかここはピアナクロセイドの濃度が低いし、これ以上おまえの足を引っ張るわけにもいかない」

「でも……」

「ああ、ほら。右腕も少し動くようになったんだ」

言いながら肘上まで右腕を持ち上げる。指先を震わせながらも、ゆっくりと握ったり開いたりを繰り返して、ジンは笑ってみせた。

「大丈夫、無理はしないよ。本当は多少無理してでも早くここを出たいんだけど。……連中の動向はなにか掴めたか？」

「うん、そのことなんだけど」

一旦言葉を止めて息を吸い込む。

そうとは気づかれぬよう心を固くすると、わざとらしく声をひそめて、ソラは切り出した。

「近々、連中がまとめて出払う日があるみたいなんだ。脱出はその日を狙った方がいいと思う。さすがに全員がいなくなるわけじゃないと思うけど、半分になるだけでもかなり楽になるだろ？」

「日にちははっきりわかるのか？」

「それはまだ。でも近くなれば、もっと詳細がわかると思う。だからそれまでは……少しやつらに協力するフリをしようと思うんだ」

「……協力するフリ？」

夜色の目がわずかにすがめられ、ジインの纏う空気が強張る。内心冷や汗をかきながらも、ソラはやましいことなど何ひとつないような顔で夜色の瞳をまっすぐ見つめ続けた。

「あの連中がジインに手出したのはイーザウとかいう奴の独断で、『神の左手』の総意じゃなかった。ああいう血の気の多い奴らにはレインネインが釘を刺してくれたみたいだけど、敵か味方かはつきりしない中途半端な状態のオレたちをここに置いておくことに納得していない連中もいる。もちろん、オレがいる限りあんなことは二度とさせないけど、一応オレだけでも協力するフリをしておけば、奴らも手荒なマネはしてこないと思うんだ。脱出ルートの下見をするにも、見張りの付き添いなしで外へ出るには嘘でも協力するフリをするしか方法が」

「本当に“フリ”で済むのか？」

猜疑に満ちた声音が、ソラの言葉を遮る。

「まさかそのままなし崩的にテロに参加しようなんて考えてるんじゃないだろうな？」

心臓が喉元まで跳ね上がる。心の奥底まで探るような視線から目を逸らしたくなるのを必死で堪えながら、ソラは呆れたように言った。

「そんなことするわけないだろ」

「本当に？」

「本当に」

細いパイプでできた丸イスに腰かけると、ソラは『神の左手』への嫌悪感を露にした。

「ジインを傷つけた奴らなんかと手を組むわけないだろう？」

あからさまに顔をしかめ、わざと怒りのこもった口調を作りながらも、ソラは臓腑の奥でくすぶる残り火の気配が強くなるのを感じていた。

事実、ソラの怒りは治まっていなかった。

今でもありありと思い出せる、椅子に縛り付けられたジインを見た時のあの情動。

一瞬にして憤怒が体中を駆け巡った、あの感覚。

結局ソラは、廊下の見張り二名に軽傷を、部屋内部にいた六名全員に重傷を負わせたが、煮えたぎる怒りが落ち着いた今でも人を傷つけたという罪悪感は微塵もない。

大切な人を傷つけられた、その報いを与えただけだ。

そう、あんな奴らと手を組むなんてあり得ない。馴れ合うなんてもつてのほかだ。

ただ目的を果たすために、利用するだけ利用する。それだけだ。

「……本当に信じていいんだな？」

未だ怪訝な眼差しで、ジインが静かに問う。

「正直、今のおれは一人でここを出ることもできない。おまえの言葉を信じる以外に道がないんだ。……本当に、信じていいんだな？」

「約束は守るよ」

喉にも舌にも引っかかることなく、さらりと嘘が吐けた。

まるで自分自身でも、その言葉を真実だと信じきっているかのよう。

「わかったよ。もう疑わない」

ため息とともに吐き出して、ジインが念を押すように言う。

「いいか、本当にフリだけだぞ。深く関わったり、大掛かりなことに手を出したりはするな。人の道を外れるようなこともな。強要されたら上手くかわせよ?」

「わかつてる」

「フリをするのはここから逃げ出すまでの短い間だけ……アジト内と外を自由に行き来するためだけの“フリ”だからな?」

「しつこいなあ、わかつたつてば!」

思わず刺々しく言う。ジインの表情がふつと緩んだ。

「なに?」

「いや……本当にやつとわかつてくれたんだなと思って」

よかつた、と安堵するジインの微笑みに、胸がずきんと痛む。

嘘の上手さに反比例して、心を抉る罪悪感は深く大きくなるばかりだ。

胸の痛みを押し隠しながら、こっそりと己を嗤う。

ナイフで他人の手を差し貫くことを躊躇わない心が、ジインの些細な一挙一動でこんなにも揺らぐなんて。

「じゃあ、今日中に本格的な計画を立てないとな。まずはこのアジトの構造を把握して、潜伏先の選定とそこまでのルートを」

久々に見せる生き生きとした表情で、ジインが叶うはずのない脱出計画についてあれこれと思案し始める。

気取られぬよう、訝しがられぬよう、けれど可能な限りの時間を使ってソラはジインの横顔を見つめた。

見つめて、見つめて、網膜に焼き付ける。

こんなに明るい表情が自分に向けられることは、もうなくなるかも知れないから。

この手酷い裏切りを、ジインは決して許さないだろう。

「ね。髪を洗ってあげようか」

唐突にソラが言う。ひからびたパンとスープで簡素な食事を済ませた後のことだった。

「髪？」

「そう。手洗い場から少し先へ行ったところにお湯の出る洗面台があるんだ。出は悪いけど」

「髪を洗うって……そんなことしてる場合じゃないだろう？」

仕切り布の向こうをちらりとうかがって、ジインは声をひそめた。「このアジトを抜け出すって約束してからもう何日も経ってる。奴らの動きが読めないのはわかるけど、このままじゃいつまで経っても外になんか出られないぞ。おれたちには時間がないんだ。これ以上は待ってられない。もう計画を変更して、強攻突破でも」

「大丈夫、わかってるよ」

焦燥を露にするジインの言葉を遮って、ソラは声を落とした。

「連中がまとめて出払う日があるって言ったろ？ それをやっと決まっただ」

「！ いつなんだ？」

「明日か、遅くても明々後日。その時を狙って、ここを抜け出そう。だからその時までは気づかれないよう、大人しくしておいたほうがいい」

待ちわびた朗報に胸が高鳴る。ぴつと人差し指を立て、ソラが話を続けた。

「ここから抜け出したら、まずは計画どおり旧市街を目指すだろ？ 『彩色飴街』を抜けるのに二日、『貧困街』を抜けるのに一日かかるって話だったけど、賞金稼ぎの数からしてもつとかかる可能性が高いと思う」

「まだそんなにいるのか」

「最初の頃と比べればだいぶ少なくなっただけだね。それでも一つの路地に必ず一人はそれらしい奴がうろついているよ」

「一路地に一人？ ……この街に賞金稼ぎがそんなに大勢いたか？」
「さあね、最近起業したんじゃない？ まあ、隠れ場所になりそうなデッドスペースや路地なんかは多めに調べてあるから、慎重に進めば何とかなると思う。旧市街に着いたら食料や水の調達はオレがやる。少し落ち着いたら廃工場を見に行つて、もし戻れるようならなに？」

視線に気づいたソラが言葉を止める。不思議そうに見返してくるソラを前に、ジインも同じく不思議そうに首を傾げた。

「おまえ……なんか変わった？」

「え、そう？ どこがどんなふう？」

「いや……おれにもわからないけど」

どこことなく感じる違和感の元を探して、ジインはソラの顔をまじまじと見つめた。

晴れ渡った空と同じ色の瞳。傾きかけた西の陽を縫ったような金色の髪。

見たところ特に変わったところはないようだが、どうもここ数日で急に大人びたような気がする。

「まあ、そういうことだからさ。最終的な細かい打ち合わせは後でするとしても、今日明日はまだ動けないし、だったら体を拭くついでに髪も洗つたらどうかと思つて」

髪を洗う。その魅力的な提案を、ジインは胸の中で反芻した。

もう何週間も髪どころか体すら洗っていない。院の医療施設に収容された際は意識のない間に洗浄を受けたようだが、記憶にあるだけなら体と髪を洗つたのはおそらく、ソラを『ハコ』から連れ出したあの日が最後だ。

身寄りのない『ノラ』として『貧困街』で長く過ごしてきたが、ジインはもともと西の第三区の生まれだ。衛生的に整った環境で育つたせいも、あるいはきれい好きだった母親の影響かはわからない

が、ジインは自分が他人と比べて清潔を好む質であることを自覚していた。

今は状況が状況なだけに我慢せざるを得なかったが、院で生活していた時は日に一度欠かさずシャワーを浴びていたし、風呂の無い廃工場で暮らしていた時でも夏場は水を浴び冬はしっかりと体を拭いていた。汚れが酷い時にはなけなしの金を払ってまで銭湯にも行った。ジインが知る限り風呂に金を払うような『ノラ』は他にいなかったが、体を衛生的に保つことは病気の予防に効果的であることを知っていたジインはあえて衛生に金を使うことにしていた。

清潔であることは、ジインにとって重要な要素の一つだった。

意識した途端、急に匂いやべたつきが気になり始めた頭に手をやる。

「でも……」

この部屋を出ることはあまり好ましい行動とは言えなかった。ここを出れば、嫌でも連中と顔を合わせる羽目になる。『神の左手』の連中とこれ以上関わり合いたくない。できることなら今すぐにもここを離れ、連中との関係をきれいさっぱり断ち切りたい。この部屋を出ることで何かを目にし、何かを聞いてしまうことを、ジインは避けたいと思っていた。すでに十分と言えるほど関わってしまったけれど、さらにこれ以上深く踏み込むことは何としても回避しなければならない。

そのためにはできる限りこの部屋に籠る必要があった。ここにいれば連中と顔を合わせることもない。連中も利用価値のない魔法士を扱いかねているのだろう、あの拷問の一件以来、残とソラ以外の人間がこの部屋を訪れることはなかった。

それに少なくともこの部屋に居れば、“監禁されている側”と“している側”という体裁が保てる。このアジトから出られない以上この部屋に籠城を続けて“被害者”という立場を守ることだけが、ジインに許された精一杯の抵抗だった。

けれど言われてみれば、髪の毛の汚れは我慢の限界にまで達している

気がする。濡らしたタオルで拭いてはいるけれど、本当は顔だって石けんか何かできちんと洗いたいし、傷さえなければ熱いシャワーを思う存分浴びたいところだ。

不衛生であることは、肩の傷にも悪い影響を及ぼしかねない。

「カモフラージュにもなるし、体の調子が悪くなければ洗いに行こう。きつとさつぱりするよ」

清潔な水の感触と、石けんの少しつんとした匂いが脳裏をよぎる。旧市街に行けば、水道はない。清潔な水を使いたいだけ使える環境とは、あと二、三日でおさらばだ。

もしかしたらこれが、人生最後のチャンスかもしれない。

退け難い誘惑に負けて、ジインはこくりとうなずいた。

それを見てどこか安堵したように肩の力を抜くと、ソラはにっこりと笑った。

「よかった。実はもう用意してあるんだ」

「ちよつとそこの洗面台まで」

廊下に座り込む監視役の少年にそう告げて、ソラがジインを手招く。

ソラに導かれて、ジインは部屋を後にした。

鉄板に囲まれた、薄暗い廊下。ジインが歩いたことがあるのはすぐその手洗い場までで、そこから先は知らない。

前方から来た若者とすれ違う。鋭い視線を横目に感じたが、ジインはそれをきれいに無視した。

できれば誰とも顔を合わせたくない。手足を縛られているわけではないが、一応監禁されている側としている側なのだ。

無駄なことと思いつつも、ジインは頭半分背の低いソラの影に隠れるように身を屈めた。

「……あれ？」

わずかな違和感に首を傾げる。

「おまえ、背が伸びた？」

「ふふん、気がついた？」

得意げな顔でソラが振り返る。

「によきによき伸びてるよ。この調子だと、あと一ヶ月もしないうちにジインを追い越すね」

あと一ヶ月。

生きて、いられるだろうか。

胸の奥にじわりと広がる冷たい不安から、ジインは無理やり目を逸らした。

「まったく。本当にでたらめだよな、おまえの成長は」

「ジインはあんまり変わらないよね。昔から大人っぽいというか、子どもらしくないというか、老けてるといっつか」

「うるさいな」

目的の洗面台までは数分もかからなかった。改築か何かで取り残されたのだろうか。通路から枝分かれした狭く短い通路の先の、実に不自然なところに洗面台があった。黄ばんでひび割れた、本当に小さな洗面台だ。少し体重をかけたらずぐにぼろりと壁からもげ落ちてしまいそうなほどに頼りない。お湯どころか、ちゃんと水が出るのかも疑いたくなるくらいだ。

すでに用意していたとソラが言ったとおり、背もたれのある古びた椅子がぼつんと置かれ、そこにタオルがかかっている。

促されるまま椅子に座り、頭を洗面台に預ける。傷が引きつりわずかに痛んだが、顔に出さないよう努めた。

「ええと、シャンプーがないから石けんだけどいいいよね」

「汚れが落ちれば何でもいいよ」

捻る蛇口が悲鳴のような音を立て、洗面台全体がごぼごぼと小刻みに揺れる。数秒の間を置いてけたたましく吹き出した湯を、ソラの手がすくって髪へとかけた。

久々の湯の感触だ。

濡れた髪に潜り込む指先が、たどたどしい手つきでそれを梳く。

「お湯、熱くない？」

「大丈夫」

こんなふうには洗面台で人の髪を洗うなんて、ソラにとって初めてのことだろう。手のひらで泡立てた石けんをぎこちない手つきで髪に擦り込みながら、さらに泡立てていく。

拙いながらも懸命なその手つきに、ジインは思わず微笑んだ。

鼻先をかすめる、石けんの香り。頭皮をこする指の心地よさに、ふわりと心が軽くなる。

「こんな感じで大丈夫？ 首痛くない？」

「大丈夫、気持ちいいよ」

「そう、よかった」

閉じたまぶたの上に、安堵のため息が落ちてくる。

「昔はさ、よく洗いつこしたよね」

「ああ……廃工場のドラム缶に水ためてな。あと銭湯も」

「銭湯のおっちゃん、元気かなあ。オレたちが『ノラ』だって気づいてたはずなのに、よく入らせてくれたよね」

「まあ、店じまいした後の仕舞い湯だったけどな。蛇口磨きを手伝うって条件でさ。金はきちんと払ってたんだから、こっちは一応客なのに」

「でも『ノラ』を入れてくれるところなんて他にはどこもなかったよ。逆に貸し切りで楽しかったし」

「まあな」

蛇口が再び悲鳴を上げる。湯は温かかったり冷たかったりと温度が不安定な上、派手な音の割に出が悪かった。そんな湯を手のひらに溜めては、髪にかける。それを何度も繰り返し、ソラは根気よく泡を洗い流していった。

洗い残しがないか丁寧に確認し、湯を止める。

「はい、終わり。起きていいよ」

タオルを被りながら頭を起こす。圧迫していた首筋が解放された

途端、くらりと軽い目眩がした。

汚れが落ちたかわりにぎしぎしと指どおりの悪くなった髪をタオルでよく拭いた後、石けんを借りてついでに顔も洗う。久々の泡の感触に心が躍る。部屋近くの手洗い場の氷のような水では手が痛すぎて満足に洗えなかった分、ジインは温かな湯でこれでもかというほど顔を磨いた。

それほど汚れているわけでもなかったのに、髪と顔をすすいだだけでまるで気分が違う。

吸い込む空気まで清々しく感じながら、生き返った心地で部屋へと戻った。

ソラがどこからか小型の固形燃料ストーブを運んできて火を入れる。オレンジ色の温かな火がゆっくりと燃え上がり、天板に置かれた鍋の水面からうっすらと蒸気が立ち始める。

「手を出して」

「？」

タオルを新しい乾いたものに替え、それを頭から被ったまま、ジインはベッドに腰かけて言われるままに手を差し出した。

どこから借りてきたのかソラが爪切りを取り出したのを見て、

「そんなこと、自分でやるよ」

「いいから、じっとしてて」

引こうとしたジインの手を、ソラは半ば強引に引き留めた。

少し伸びすぎた爪をまじまじと見分して、慎重に刃を当てる。

ストーブの温かな蒸気が満ち始めた部屋に、ぱちん、ぱちん、と、小気味よい音が響く。

刃とヤスリを上手く使って、ソラはジインの爪をひとつひとつ丁寧に整えていった。

「はい。じゃあ次、足ね」

「え？ いいよ、足は」

「ついでだよ、ついで。せっかく爪切り借りたんだからさ。引っ掛けて剥がしたら大変だろ？ オレも後で自分の切るし」

「じゃあおれも自分で切るよ」

「肩、屈むと痛むんだろ。いいからほら、早く足出して」
何となく気圧される形で、ジインは渋々ソラに足を預けた。

膝をつき、顔近くまで足を掲げて慎重に爪を切るソラを見下ろすのは、まるで召使いにかしずかれていようやうで何とも居心地が悪い。両足の爪を整え終わると、ソラは鍋の湯を洗面器に移して水を足し、床に置いた。

「はい、じゃあこっちの椅子に座って」

少し高い位置にある簡易ベッドから壊れかけた丸椅子に移りながら訊ねる。

「今度は何？」

「足湯。ジインの足、冷たすぎるよ。少し温めない」と

ついでに洗ってあげるからと促され、裾を巻くつて洗面器に足を入れる。冷えきった足の指先が、湯の温かさでじんと痺れた。

湯に浸したタオルで膝下あたりまでを擦り、足先を湯の中で揉みほぐす。

その心地よさに、ジインは思わずため息を吐いた。

氷のようだった足先が、じわじわと温まっていく。

洗い終えた足の指を、ソラは乾いたタオルで一本一本丁寧に拭いていった。

「っ、」

タオルのこそばゆい感覚に、きゅ、と足の指が縮こまる。

「ごめん、くすぐったかった？」

「ん、少し」

「昔からくすぐられるの弱いよね、ジインは」

「おれが弱いんじゃないかって、おまえが鈍すぎるんだよ。どうして脇腹くすぐられて平然としていられるんだ、おかしいだろ」

「えー？ オレは普通だよ。ジインが敏感すぎるじゃない？」

「いや、おれの方が絶対普通だ。試しに今度残の脇腹くすぐってみるよ。絶対“うぎゃっ！”って言うから」

「残が“うぎゃっ！”なんて言うかなあ」

「言う言う。絶対言う。3センチぐらい飛び上がって“うぎゃっ！”って言う」

「残が3センチ飛び上がったら、天井に頭ぶつけるんじゃない？」
他愛ない笑いが部屋に満ちる。久々の穏やかな空気に、ここがテロリストのアジトだなんて忘れてしまいそうだ。

足を拭き終えたソラが、にっこりと笑いかける。

「はい、終わり。ついでに体も拭こう」

使い終えた湯をソラが捨てに行く間に、右肩を気づかいながら自力でシャツを脱ぐ。普段の動作にあまり不自由はなくなったものの、服の脱ぎ着には未だ手間取ることが多い。

入れ替えた湯で濡らしたタオルを固くしぼり、ソラが腕や首筋を力強く拭いていく。体は今までも何度か拭いてもらっているのだから、だいぶ手慣れてきたようだ。

「包帯、一度取るね」

「ああ」

体に巻かれた包帯を、ソラの手が慎重に解いていく。傷はちょうど右胸と右肩の中間あたりにあった。もしこれが左側だったら、心臓のすぐ上を貫かれて即死だったであろう。大きな血管や骨や臓器が傷つかなかつたのは不幸中の幸いだ。

あてがわれたガーゼをそっと取ると、ソラの動きがわずかに止まった。
「乾いた傷口を囲む、大輪の黒い花。」

透ける肌の内側から浮かび上がるその痣は、竜毒によって刻まれた死の刻印だ。

ソラの視線が数秒そこに注がれ、ついと逸れる。

傷を上手く避けながら、ソラは丁寧に体を拭いていった。

時々ソラの手がわずかに止まり、肌に視線を強く感じる。その度に、ジインはわずかに緊張した。

ジインの体には、桐生によって刻まれた傷痕がいたるところに散

らばっている。

手当を受ける時や体を拭く時はしかたなく肌を曝しているが、本当はあまり見せたくはなかった。

誰に何故つけられたのか。それをソラに知られるような事があつてはならない。

「はい、じゃあ立って」

「？」

立ち上がったジインのスラックスに手をかけると、ソラはそれを下着ごとするりと躊躇いなく引き下ろした。

「おわっ！？ ちよっ、なにすんだ！」

驚愕してソラの腕を掴む。ソラがきょとんとこちらを見上げた。

「なにつて、拭くんだけど」

「拭く！？ い、いいよそこは！」

「えー？ だつて下着も新しいのに替えるんだよ？ この先いつシヤワーを浴びれるかわからないし、ついでだから全部きれいにしておきなよ」

「じゃあ、拭くなら自分で拭くから、とにかく手を放してくれ」

うるたえながら、ジインはソラの手を引き剥がそうとした。

けれど、ソラは動かない。

「おい、ソラ？」

「オレが拭いたら、嫌？」

「……は？」

「嫌じゃないなら、このままオレにやらせて」

ソラとまつすぐに視線を合わせたまま、ジインはゆっくりと瞬きをひとつした。

「やらせてって……体、拭くの？」

「うん。嫌？」

「べ、別に嫌ってわけじゃない、けど……」

どうして、という言葉呑み込んで、ジインは黙り込んだ。

なぜソラが体を拭きたがっているのか、その理由がまったくわか

らない。

けれど、じつとこちらを見上げてくる眼差しはただまっすぐで、ひたすらに真摯だ。

その瞳はまるで、ジインの体を頭の天辺から足の爪先にいたるまで1ミリも拭き逃すことなくタオルで清めることが天から与えられた使命であると信じきっているかのようだ。

「いいよ、好きにしる」

観念して、ジインは手を放した。

どういう理屈かはわからないけれど、どうやら自分の体を拭くことがソラにとって何か特別な意味を持っているようだ。

依然頭の中は混乱しているけれど、特に拒む理由も見当たらない。

「あ、べつにジインの裸にコーフンしたりしないから安心して」

「っ、アホか」

あっけらかんと付け足された軽口に思わず吹き出して、金髪のを軽くはたく。少しだけ心が軽くなったところで、ジインは腹をくくって潔く下着から足を抜いた。

心臓がいつもより速く脈を打つ。少し緊張していた。当たり前だ。銭湯ならともかく、一糸まとわぬ姿などあまり人に見せるものではない。

それにいくらソラと言えど、普段人目にさらさないところに触れるなんて。

「体が冷えるといけないから、すぐに済ますね」

自分の肩に掴まらせると、ソラは温かなタオルでごしごしと肌を拭いていった。

変に意識しないよう、ジインはただ呼吸だけに集中した。

温かな灯りがソラの背中をぼんやりとオレンジ色に染めている。

ストーブと足湯のおかげか、あるいは緊張で顔が火照っているせいか、寒さはあまり感じない。

「ごめん、足ちよっと開いて」

「えっ？ あ、ああ」

ソラの肩に置く手に力がこもる。腰が引けそうになるのをどうにか堪えた。

何度もタオルをそそぎ、ソラはこれでもかというほど丁寧に肌を清めていく。

気恥ずかしさより、次第にすまない気持ち膨らんでいった。

「こんなところにも傷があるんだ」

ソラの呟きに、ぎくりと身を固くする。

傷跡のことなどすっかり忘れていた。いったいいつ、どんな状況で、誰から受けた傷なのか。下着で隠れるような場所に残る傷など、ソラでなくても疑問に思うのは当然だろう。

胸にある傷ならある程度の言い訳が利くが、こんなところの傷、同じ言い訳で通用するだろうか。

問いただされやしないか内心ひやひやしたが、ありがたいことにソラはそれ以上追及してこなかった。

一言呟いた後は黙り込んだまま、ソラは淡々とジインの体を拭いていった。

髪の毛一本から爪の先まで、あるべきものがあることを一つ一つ目で確かめるように。

色を、形を、傷跡を、すべて残らず記憶するように。

ソラはただ黙々と、ジインの体を清めていった。

「はい、おわり」

その一声で、いつの間にか止めていた息をほっと吐き出す。

用意してくれた新しい下着に足を通し、スラックスを履く。剥き出しだった傷に軽く消毒をして、清潔なガーゼを当てる。幅の広い包帯を巻いて、傷を再び丁寧に隠した。

洗い立てのシャツに腕を通している間に、ソラが枕とベッドのシートを新しいものに換えてくれる。

髪を洗い、体を拭き、新しい服に袖を通す。

たったそれだけのことで、閉ざされた空間で鬱屈していた心に新鮮な風を通したようだ。

竜毒に対する不安すら、わずかに薄れたような気がした。まるで体ごと新しいものに取り替えたような、晴れやかな心持ちだ。

「ああ、さっぱりした」

清々しい気分で寝台に横になる。かすかに香る洗剤の清潔な匂いにうっとり目を閉じると、全身が気だるく疲労していることがわかった。激しい運動をしたわけでもないのに、どうやら想像以上に体力が落ちていているらしい。少し眠る必要があるそうだ。

「どう？ さっぱりした？」

片付けを終えたらしいソラが、天井を遮って顔をのぞき込んでくる。

その顔に、ジインは久々に晴れやかな笑みを向けた。

「ああ。すごく気持ちよかった。ありがとな」

雲間からとつぜん差した光を見上げた時のように、ソラがまぶしそうに目を細める。

その瞳の奥に、ほんの一瞬かげりが見えた。

瞬きの間に消えたその影が、意識の端に引っかかる。

「……ジイン」

ひどく真剣な面持ちで、ソラが枕元に手をつく。重みで寝台がぎしりと軋んだ。

大人びた、静かな眼差し。

初めて見るようなその表情に、心が騒ぐ。

「……なに？」

すつと顔が近づく。驚いて反射的に目をつぶると、額と額が触れた。

温かな息が唇にかかる。

「ごめん」

え？

ぱしん、と小さな音がして、左腕に軽い痛みが走った。

まぶたを開いて、視線を巡らす。

ソラの手に、簡易注射器のシリンジが握られていた。
東では手に入らない高品質なそれは、沢木が用意してくれた薬類
の中の一つだ。

「な……！」
急いで起き上がろうとした肩を、ソラの手がやんわりと押しとど
める。

「少し眠ったほうがいい」
目と目が合う。有無を言わさぬ眼差しと肩を押さえる腕の強さに
愕然として、ジインはただソラを見つめた。

催眠剤。

「どうして……」
数秒前まで温かなもので満たされていたはずの胸に、悲しみと疑
念が広がる。

静まり返った水面に波紋が広がるように、ゆらゆらと心が波立っ
ていく。

「ど……うして……っ！」
「どうしても……」

「どうしても、あきらめられないんだ」

ソラの声が硬質なものに変わる。空色の双眸には、いつの間
に断固たる決意が満ち満ちていた。

どうして気づかなかったのか。

「どけ」

手を払いのけて無理やり起き上がろうとする。不意に抱きすくめ
られ、そのままベッドに押しつけられた。

「どけ、放せ！！」

服を掴み、引き剥がそうと必死でもがくも、自分より小柄なはずのソラの体はびくともしない。

「ここにおいて、少し眠っていて」

このまま、薬が効くまで押さえつけておくつもりか。

「う、の……！」

背中に爪を立てる。

たとえ渾身の力で抗っても、自分の筋力では“ヒトガタ”の怪力に叶うはずがない。

このままじゃだめだ。

上がる息を落ち着かせて、ジインは意識を集中した。

ここはピアノ濃度が低い。けれど、辺り一帯からかき集めれば。

何度目かの深呼吸の後に、息を止めまぶたを閉じる。

3、2、1 ……、

「ッー！」

体の重心をずらすと同時に、簡易ベッドに思いきり横殴りの衝撃を与えた。

ぐらりと体が傾ぎ、ベッドごと床に倒れる。けたたましい音とともにストープが揺れ、こぼれた湯がしゅっしゅと蒸発した。

「危な、っー！」

揺れるストープに気を取られたソラを押し退けて立ち上がると、ジインは裸足のまま通路へ飛び出した。

監視役の制止をすり抜けて、通路を駆ける。灯りの乏しい薄闇の中、氷るように冷たい鉄板の上を、かまわず素足でひた走る。

何人かの人間とすれ違いざまにぶつかる。怒号と制止の腕をふり切って、ジインはただ闇雲に駆けた。

「う……」

ぐにやりと足元が揺れた。足がもつれて転びそうになるのを、壁にすがって免れる。

酒を飲んだ時のような酩酊感がじわりと思考を滲ませて、世界がゆっくりと回り始める。

全身を取りまく目眩を堪えながら、壁に手をつけてジインはなお進んだ。

こんな状態で、いったいどこへ行こうというのか。

自分でもわからない。

頭の中は真っ白だ。

どうすればいい。どうしたら、いい？

わからない。知らない。

けれどとにかく、離れたかった。

あの場所から。

ソラから。

できるだけ遠く、一歩でも遠く、離れたかった。

だって、ソラが。

こんな。

どうして。

あんなソラ、おれは知らない……。

こまぎれの思考がぐるぐると頭を廻る。走ったせいで上がった脈拍が、薬の廻りを余計に速めているようだ。

闇の先に白く光る出口が見えた。その明りを目指して、必死で足を運ぶ。

次第に近づく光の中に見えてきたものに、歩みが止まった。

煌煌と照らされた大きな広間に、所狭しと並べられた武器。

その間を行き来する、武装した「神ノ左手」のメンバーたち。

皆一様に目を爛々と光らせて、出立の時を今か今かと待ち構えている。

その装備をざっと見回して、ジインは臓腑が落ち込むを感じた。

無理だ。

こんなもので、魔法士団に勝てるわけがない。

魔法士の真の恐ろしさは、一定のピアノ濃度の元、複数名の連係

によって発揮される。

手負いの魔法士をたった一人、こんなピアノ濃度の低いところに捕らえることに成功したからといって、魔法士を甘く見るのは間違いだ。

『ハコ』は彼らのテリトリー。ピアノクロセイドが充満する空間で、魔法士団に勝てるはずがない。

わざわざ殺されに行くようなものだ。

バカな事はやめる。命を無駄にするな。

こんな事をしたって、何の解決にもなりはしないのに……。

言いたい言葉が次から次へと浮かぶけれど、唇は虚しく開閉するだけで、声にならない。

メンバー達がこちらに気づく。その中の数人が、鋭い視線とともに銃を向けた。

こいつらも、死ぬのか。

むざむざ殺されに、あるいは誰かを殺しに、『ハコ』へ行くのか。誰かを、殺しに。

小雪。

沢木さん。

北見……。

「おい、貴様そこで何を」

音が滲む。滲んで、遠ざかる。

視界が、世界が回る。

驚いた顔の残が、こちらへ駆け寄ってくる。

その肩ごしの広間の奥に、赤い髪の女を見つけた。

そちらへ一歩踏み出しかけて、がくと膝が折れる。

床に突っ伏す寸前に、背後から伸びた腕に抱きとめられた。

ふわりと体が浮く。ゆらゆらと揺れながら、まぶたごしの白い光が遠ざかる。

横たえられる感触に重いまぶたを無理やりこじ開けると、そこはすでに見慣れた天井の下だった。

朦朧とした意識の中で、唇を強く噛む。

わずかに明瞭さを取り戻した世界で、無言のまま毛布をかけるソラの腕を掴んだ。

「行くな」

ばらける意識をかき集め、最後の力を振り絞って、ジインはソラを引き寄せた。

「行くな、ソラ……」

データなんていらぬ。助からなくてもいい。だから院に手を出すな。

『ハコ』へ乗り込むなんて、そんなことをしたら、おまえがまた捕まってしまう。

おれがどんな想いでおまえを助け出したと思ってるんだ？

そのすべてを無駄にするつもりか？

声にならない想いが、心の底から浮かび上がっては目眩の渦へと消えていく。

指先にいくら想いを込めてみても、こちらを見つめるまなざしは揺るがず硬いままだ。

おれはもう何もいらぬ。

おまえさえそばにいてくれれば、それでいい。

ただそれだけを望んでいるのに。

「ど……して」

どうして、わかってくれないんだ。

無言のまま、ソラがゆっくりと後じさる。

強く掴んだはずの手が、指先を虚しくすり抜けていく。

温もりが離れ、自分のものではなくなったような腕がシーツの上にぼとりと落ちた。

手を伸ばそうにも、もう体が動かない。

意識を保つ術がない。

何という手酷い裏切り。

あんまりだ。ひどすぎるよ、ソラ。

声にならない言葉の代わりに、涙がこめかみを伝った。

たった一つの想いが、届かない。

その悲しみが込み上げて、視界を滲ませる。

「い……く、な……」

行くな。行くな。お願いだ。

頼むから、行かないでくれ。

手の届かない空色を仰ぎながら、ジインは為す術もなく深い眠りへと引きずり込まれていった。

ジインの呼吸が深くゆっくりなものに安定する。完全に眠りに落ちたことを確かめて、ソラは深いため息を吐いた。

剥き出しの白い腕に目をやる。薬を打ち込まれわずかに赤くなつた部分を指先でそつと撫で、自己嫌悪を噛み締める。

無理やり薬で眠らせるなんて。仕方がないとはいえ、こんな強引なやり方を選択するしかなかったことに、深い罪悪感を覚える。

けれど、こうでもしないとジインは自分の姿が見えないことをいぶかしみ、そしてすぐに感づくだらう。

もしかしたら、カづくでアジトを抜け出し、後を追ってくるかもしれない。

力なく横たわるその腕を楽な位置に戻し、そつと毛布をかける。こめかみに光る涙を、指先で丁寧に拭った。

「……ごめんね」

必ず帰ってくるよ。

絶対にオレが助けてみせるから。

だから、ここで待っていて。

濃紺の闇の中を進む、白い光。

樹木も建物もない平らな荒野の中を、一台のタンクローリーが走っている。

ヘッドライトが照らし出すのは、転がる岩と砂地ばかり。振り返れば地平線に沿ってきらめく第三区の街の光を臨めるが、進む先にはただ暗く果てのない闇があるだけだ。

『エリア85』 第三区的最西端に位置し、軍によって立ち入りが厳しく制限されている厳重警戒区域だ。

区域の真ん中を貫く舗装道路の両側にはLED灯が等間隔に埋め込まれており、電灯も標識もない闇の中を走る車両を目的地まで誘導してくれる。もし誤って道を逸れたならば、侵入車両の妨害用にとあえて放置されたままの岩々に激突するか、辺り一帯に埋め込まれた対車両用地雷で木っ端みじんになるかのどちらかだ。誘導灯は荒野の直前にある第一検問所で通行許可を得た車両のみをセンサーで感知し、その前方40mしか点灯しないようプログラミングされている。

点々と続く光の導く先に、今度は別の白い明りが灯る。近づくにつれ、それが何かの建造物から発せられていることがわかる。次第にはつきりと見えてくるそれは、巨大な白い壁だった。反り立つ壁はとても人が越えられるような高さではなく、羽虫一匹の侵入すら拒むように地平に沿ってどこまでも伸びている。

壁に埋め込まれるように設えられ、闇の中で白い光を放っているあの施設こそが、このタンクローリーの最終目的地……国立魔法院直轄第三研究所の第二検問所だ。

検問所の横、舗装道路の正面には、二重構造になっている分厚い鉄の門が固く閉ざされたまま鎮座している。

門の前で停車するなり慌てた様子でタンクローリーから転がり出

てきた運転手に、長銃を携えた警邏兵が怒号を浴びせる。

「遅いぞ、いつたい何時間待たせる気だ!!」

「も、申し訳ありません! ご連絡したとおり、途中でエンジンに不具合が……」

「黙れ、言い訳など聞きたくない!!」

唾を飛ばしながら、警邏兵が銃の柄で運転手を思いきり小突く。

よろけて尻餅をついた運転手は、砂まみれのまま何度も頭を下げた。

「すみません……すみません……ッ!」

「まったく、雑な仕事しやがって……このことは上に報告するぞ。

貴様の会社とは契約打ち切りだ。辞表でも書いておくんだな! ……

…おい、何している。さつさと移し替える!」

この責任者であるらしい警邏兵が、怒気をまき散らしながら検問所を仰ぐ。検問所の上部、壁の上に設えられた巨大な二台のクレーンが、重低音を発しながらタンクローリーの上へとゆっくり移動した。詰め所から出て来た数名の警邏兵がタンクローリーへと駆け寄り、積まれたタンクを探知機で念入りにチェックした後、クレーンから伸びたワイヤーを取り付け固定する。

「上げる!」という警邏兵の合図で、ゆっくりとタンクが持ち上がった。タンクはトラック部分を残したまま巨大な壁を越え、向こう側に待機していた別のトラックの荷台へと収まった。

運ばれてきた積み荷はすべてここで移し替える規則だ。固く閉ざされたままの門が開くことは滅多にない。

外部からやってきたタンクローリーの役目はここで終わりだが、積み荷であるタンクの最終目的地はもうしばらく先にあった。

タンクを受け取ったトラックが走り出す。荒野の広がる壁の外から一変、こちら側は一角がコンクリートでばりりと舗装され、石ころひとつ落ちていない。

煌煌と電灯に照らされた道路の先、夜の闇にこつ然と浮かび上がる白い巨大な建造物。

国立魔法院直轄第三研究所。

『ハコ』という異名どおり、それは本当に箱のような建物だった。極端に窓の少ない外壁には凹凸がなく、きれいな立方体のかたちをしており、一見するだけでは何のための施設なのか見当がつかない。まったく同じ形の建物が横並びに三つ連なっており、向かつて右の第一棟の地下には第二区からの直通地下鉄道が敷かれている。都心部からの人の出入りはほとんどがその専用鉄道で行われているため、地上には資材や燃料を運ぶための車両しか見当たらず、日中作業の終業時刻を大幅に過ぎている今はそれらもすでにまばらだ。

研究所の裏側、建物から数十メートル先には、断崖絶壁の大陸の端。研究所と崖の間には、捕獲した竜を保存しておく巨大な倉庫が横たわっている。

タンクを乗せたトラックはしんと静まったアスファルトの上を横切ると、向かつて左に位置する第三棟の壁面に開いた入口から建物内へと入った。

そこは天井の高い倉庫のような空間で、丸いタンクがいくつも置かれ、一抱えもありそうな太いパイプの束があちらこちらに横たわっている。パイプは倉庫内を縦横無尽に駆け回り、幾筋にも細く枝分かれして、最終的には壁の内部へと突き刺さっていた。

「ああ、やつと来たか」

詰め所らしき部屋から、作業着の男たちがぞろぞろと出てくる。

「ずいぶん遅れたな」

「詳しくはわからないが、運搬途中でなにか事故があったらしい」

「まったく、こんな時期に事故だなんて。部署替えのゴタゴタでただでさえバタついてるのに」

「発注量を間違えた上の奴らはとっくにご帰宅あそばしたんだらう？」

「そもそも、始業時に必ずタンクが満タンじゃなきゃいけない理由がわからない」

「しかたないだろう、規則なんだから」

愚痴りながらも手慣れた手つきで、作業員たちは到着したタンク

にポンプを繋いでいく。

「内容物確認、接続完了。EN032番、補給開始します」

どん、と何かのスイッチが入り、空気が振動する。横たわる太いポンプが、唸りながらタンク内の液体燃料を吸い出し始めた。

「おい、いま連絡があった。タンクの返却は明日だとさ」

「壁向ここの運搬業者は？ 一度帰すのか？」

「さあな。一晩その場で待たせるつもりじゃないのか」

「うへえ、相変わらず意地が悪いな、壁の奴らは。じゃあトラックはここに放置していいのか？」

「返却が明日なら、このまま置いておくしかないだろう」

ほどなく燃料を移し終えたことを知らせるブザーが鳴り、黄色のライトがピカピカと回る。

「補給完了」

準備の時よりも心なしに軽快な動きで、作業員たちがポンプを片付けていく。

「よし、終業だ。お疲れ」

「お疲れー」

足音と話し声が次第に遠ざかり、非常灯を残して明りが消える。扉の施錠を告げる電子音が、ピピ、と鳴り、後には低いモーター音と淡い緑色の明りだけが残った。

人氣が失せ、しんと静まり返った倉庫に、ことん、とほんのかすかな音が響く。

トラックの荷台で空になったタンク。その上部に設えられたハッチが、内側からわずかに開く。

タンク内からそつと顔を出したのは、ウェットスーツとゴーグルを身にまとい小さなポンベをくわえた小柄な人影 ソラだった。

液体燃料を滴らせながら注意深くタンクから這い出して静かにハッチを閉めると、ソラはすばやくタンクから降りて大きなポンプの束の影に身を潜めた。

ポンベとゴーグルを外して顔を手で拭い、止めていた息を慎重に

吐き出す。

途端に、肺が引きつるように痛んだ。

咳き込みたいのを必死で堪え唾を呑むと、今度は舌から食道、臓腑にまでも焼けつく痛みが走る。

全身を刺す、凄まじい刺激臭。

ゴーグル内に浸入した液体燃料が眼球を焼き、激痛でまぶたを開くことすらままならない。

脳天を突くような鼻腔の痛みと耳を塞ぐ鈍痛が、いつもより速い鼓動とともに跳ね回る。

普通の人間ならば、とつくに昏倒して意識を失っているだろう。

そもそもあれほど小さな酸素ボンベでは、普通ならすぐに酸素を使い果たし、燃料の中でとつくに溺死しているところだ。

“ヒトガタ”のソラは、体にどれほどの負担を強いても命を落とすことはない。肉体の耐久性を最大限に利用し、意識を失わない限界まで呼吸の回数を限りなく少なくする呼吸法を練習したとはいえ、人体に有害な液体燃料の中に潜んで施設内に浸入するというのは想像を遥かに超えて過酷なものだった。

いくら不死身の“ヒトガタ”でも、まともに動けるようになるまで少しかかりそうだ。

せり上がる吐き気と苦悶の呻きをひたすら喉で押しとどめ、ソラは体に付着した燃料が揮発してしまふのをじっと待った。

ああ、水が飲みたい。目を、喉を、体を洗いたい。肺や臓腑まで水で洗浄して、神経を焼くこの毒を今すぐ洗い流してしまいたい。

ひりひりと痛む手のひらで、胸を押さえた。

ウェットスーツの下にぶら下げた、『廃工場』の鍵。

膝を抱えて縮こまりながら、苦痛のすべてを堪えて、呑み込む。

そうだ、苦しくなんてない。

ジンが受けた傷に比べれば。

こんなもの、痛いうちにも入らない。

じくじくと疼くまぶたの裏側に、昨夜の記憶が蘇る。

橙色の光に照らされた、透けるような白い肌。

そこに刻まれた無数の傷。

右胸に染みる、竜毒の痣。

そのすべてを、この網膜に焼き付けた。

無数の傷がどのような理由でついたものかは知らない。

数えきれない傷跡をタオルでなぞりながら、どこで、誰に、という問いが、何度も喉まで出かかった。

それを口に出さなかったのは、正面から訊ねてみてもおそらくジインは何も答えないだろうから。

けれど、どこか悪意を感じるあの傷はすべて、ジインが魔法院に
いる間に受けたものであることは確かだ。

その時ソラがどこにいたかと言えば、無様にも魔法院に捕まりジインの足枷となっていたわけだ。

守って、あげられなかった。

そして右胸の傷にいたっては、自分こそが傷を負わせた張本人だ。
「……傷に、報いよ」

幼い自分を庇って受けた傷。離れている間に受けた傷。そして、
守るべきこの手が負わせた傷。

傷、傷、傷。

傷だらけのジインの体。

その痛みのすべてを、この身であがなおう。
傷に報いよ。傷に報いよ。傷に報いよ。

あの傷に、報いるためなら。

どんな痛みも、耐え抜いてみせよう。

『貧困街』の路地のどこかに、ジインはいた。

薄汚れた灰色の壁。抜け落ちたガラス窓。ひび割れたアスファルトの裏路地はソラと何度も通った道によく似てはいるが、似ているだけで同じではない。

いつか見た景色を、でたらめに継ぎ合わせた世界。見上げる空は白く、どこか薄っぺらだ。

これは夢だ。

ひしゃげて焦げ付いた一斗缶の中で揺れる炎を見るともなしに眺めながら、ジインはその事実気づかないフリをした。

たき火の向かい側に座る透也が、棒で燃えかすをつつきながら他愛ない話をしている。

その向こうでは、先生とチサ姉がおしゃべりに花を咲かせながら洗濯物を干している。

背中の方からは、ユータがトモ兄にまわりつきながら「遊ぼうよ！」とせがむ声。

表の路地からは、群のみんなが楽しそうにはしゃぐ気配がする。

この路地を曲がった先には、おそらく母さんがいる。いると感じるだけで、姿は見えない。顔を思い出せないから、きっと夢の中でも会うことができないのだろう。夢特有の不思議な確信で、ラムネ菓子を土産に持った父親がもうすぐ帰ってくるという予感があったが、こちらもきつと予感があるだけで会うことは叶わないだろう。

居るはずのない人たちが居る、あるはずのない時間。

でまかせを寄せ集めた、優しくて残酷な、ぬるま湯のような夢だ。「おまえ、こんなところにいるのいいのか」

さりげなく透也が問う。それには答えないまま、ジインは抱えた膝に顔を埋めた。

すくめる肩は細く頼りなく、自分がまだ透也と共にいた頃と同じ

幼い姿であることを知る。

いや、もしかしたら、成長したと思っていたのは自分だけで、本当はあの頃と何も変わっていないのかもしれない。

いつだって、流れに翻弄されるだけで。

いつだって、誰も救えない。

何の力もない、ちっぽけな自分。

「おれのしてきたことは、何もかも無駄だったのかな」

膝を抱えたままつぶやく。

おれは、いったい何を間違えたんだろう。

いつだって、ただ守りたいだけなのに。

結局、なに一つ守れなかった。

「まだ間に合うだろ」

「……もう無理だよ」

「間に合うよ」

力強い声に顔を上げる。断固とした響きとは裏腹に、透也は優しく微笑んでいた。

「大丈夫。まだ間に合う」

今ならまだ、と微笑む瞳に、ほんの一瞬、寂しげな色がよぎる。ああ、そうか。

気がついて、ジインは改めてまわりを見回した。

父さん。母さん。先生。トモ兄。チサ姉。ユータ。群のみんな。

幼い自分が守りきれなかった、愛すべき人たち。

この人たちとの時間は、すでに遠く過ぎ去ってしまっていて。

もう何をどうしても、そこへ戻ることはできない。

この人たちを救うことは、もうできない “間に合わない”のだ。

「まあ、間に合わなくてもそれはそれで人生だけだな！」

にかりと笑うと、透也は立ち上がって手を腰に当てた。

「いいか、ジイン。人が生まれて死ぬのに、意味なんてないんだ。

朝起きて、食うもん探して、何もなかったら盗るかなんかして、と

にかくなんか食って、クソして、寝る。以上！ 人生なんてただその繰り返しだ。意味なんてねえよ」

でもよ、と言葉を切って、透也は猫に似たつり気味の目でまっすぐにジインを見た。

「でも、意味なんてなくても、おまえ生きるだろ？ 誰かのこと、好きになつたりするだろ？」

天へ向けて棒切れをぴつと立てると、透也は芝居めいた調子で仰々しく言った。

「生きたいから生きる！ 愛したいから愛す！ 人生なんてそれでいいんだ。無駄でも何でもいい。意味なんてなくなつたつていいんだよ」

「無駄でも、何でもいい……」

透也の、乱暴だがどこか説得力のある言葉に噛みしめ、飲み込む。と同時に、胸につかえていたものが臍へ落ちていくのを感じた。

「だから、さ。守れなかったとか、何もできなかったとか、んなこと、後でゆっくり後悔すりゃあいい。人生なんてダメで元々！ こんなところでうじうじ悩んでたつて時間が過ぎるだけだぞ？ 追いかけたいなら、這つてでも追いかける。愛したいなら、最後までがつり愛してこい」

腕を引かれて立ち上がる。頬の傷をぐにっと歪ませる、あの頃と少しも変わらない笑い方で、透也がにかりと笑った。

「だからホラ、行け！」

思いきり尻を叩かれ、ジインは数歩よろけた。

いつの間にか体が横たわっていた。

違う、覚醒したのだ。

夢から覚めて、現実世界に戻ってきた。

けれど、まぶたが開かない。

眠い。眠い。薬のせいでどうにも眠くて仕方がない。
油断すると、意識が飛んでしまいそうだ。

ああ、何もかもどうでもいい。このまま眠っていられるのなら、
なにもかも、どうだって。

「く、そ……ッ！」

沈みかけた意識を奮い起こして、右腕を持ち上げる。ずるずると
体の上を引きずるように移動させて口元まで運ぶと、ジインは己
の手首に思いきり歯を立てた。

靄のかかった感覚の端で、かすかに痛みが広がる。さらにあごに
力を込めると、遠く鈍かった痛みが次第に鋭いものへと変わった。

わずかに意識がはつきりした隙に、ジインは無理やり体を起こそ
うとした。

ガチン、と金属音がして、左手が何かに引っかかる。

そちらへ視線を移して、ぎよっとした。

左手首に旧式の手錠がはめられ、その一方の輪が簡易ベッドの鉄
パイプに繋がれている。

ソラの仕業だろうか。

「……トイレ行く時どうするんだよ、これ」

どうでもいいようなことを思わず呟く。かすれきった声は自分の
ものではないかのように、ぼつと空気が詰まったような耳にどこ
か遠く響いた。

手錠の輪から手を引き抜こうと試みる。人より細めの自分の手首
に一般的なサイズの手錠はぶかぶかで、どうにかすれば引き抜けそ
うな気がしたが、あと少しのところまで骨が引っかかってしまう。

石けんでも塗ったらどうだろう。

でも、この状態でどうやって洗面所まで？

そもそも、ここの洗面所に石けんなどあったらどうするか？

あつたような気もするし、なかったような気もする。うまく思い
出せない。

ああ、眠い。眠すぎて目が痛い。

気を抜けば意識をさらわれそんな頭では、考えがまるでまとまらなかった。

眠い、ねむい、ネムイ。

ぐらぐらと世界が揺れて、吐き気がする。人のささやき声が聞こえた気がして、ジインはいつの間にか閉じていた目をこじ開けた。

出入り口に吊るされた仕切り布の隙間から、何対かの瞳がこちらを窺っている。

目が合うと、あつと声を上げながら壁の向こうへと隠れた。

ぱたぱたと軽い足音に、床から大人の腰あたりまでの気配。

「こ、ども……？」

どうやら、幼い子どもがいるようだ。

十二、三を過ぎたくらいの少年なら何人か見かけたが、それより年下の子どもはここに来てから初めて見た。

「ばかつ、見つかっただろ！」

「ねえ、まずくない？ やっぱリーザウに言われたとおり奥へ隠れてようよ」

「なに言ってるんだ！ オレたちは戦士だぞ、いま戦わなくていつ戦うんだよ！」

「……そこでなにしてる？」

壁の向こうでささやき合う小さな影たちに声をかける。

ひそひそ声がぴたりと止んだ。

うなずき合うような気配がして、ぱつと仕切り布が払われる。

「動くな！ 変な力を使ったらただじゃおかないぞ！ こっちには銃があるんだからな！」

十にも満たないであろう少年にたどたどしい手つきで銃口を向けられ、ジインは顔をしかめた。

こんな年端のいかない子どもに、扱えもしない武器を持たせるなんて。

間違えて誰かを傷つけてしまったらどうするつもりだろう。自分

を撃ってしまったことだつてあるかもしれない。発砲した際の反動に耐えられずに銃であごを砕く可能性だつてあるし、銃を手に行っているというだけで、幼い子どもであっても攻撃の対象になる可能性だつてある。

「……この連中は、本当にろくなことをしないな」

「おい、魔法士！ なにか武器を持つてるか？」

大人のそれを無理矢理真似たような口調で、少年が言う。

「武器？」

「銃とか、ナイフとか、爆弾とか、そういうのだよ！」

ふと見ると、床に置いてあつたデイバッグにはすでにあらされた痕跡があつた。

どうやら人が寝ている隙に中身を物色していたらしい。

「そんなもの、持ってない」

「うそつけ！ どこかに隠してるんだろ！」

声変わり前の甲高い声が天井に響く。

痛むこめかみをさすりながら、ジインはため息まじりに言った。

「そんなもの持っているなら、それを使ってとつくにここを抜け出して」

冷静なジインの言葉に、少年があつと気づく顔になる。そしてそれをごまかすように、

「ち、ちえっ！ 使えないやつだな！」

言いながら、つばを吐き捨てる真似をした。

決して上品とは言えない大人の仕草を懸命に真似る少年を見て、思わず吹き出しそうになる。

そういえばソラも昔はおれの真似ばかりしてたな。

自分のことを“オレ”と呼び出したのも、確かおれの真似で

「！」

どくんと心臓が跳ね上がる。

そうだ、ソラは。

あいつは、今どこに？

「しかたねえな……じゃあオレだけ先にイーザウのところへ加勢に行くから、おまえら奥へ行って何か武器探してこい」

「ま、待ってよ、おれもいく！」

「わたしも！」

「だって武器がなくちゃ戦えないだろ」

「おまえたち、武器なんて探していったいどうするつもりだ？ 子どもたちの不穏な会話を遮って、ジインが問う。勝ち気そうな瞳がこちらを見た。どこかで見たような、意志の強そうなまなざしだ。

「決まってるだろ、戦うんだよ！」

「戦うって……誰と？」

「誰かはわからないけど……敵だよ！」

双眸をぎらつかせる少年を見て、ふと気づいた。

この少年、誰かに似ている。

強靱な意志を宿した瞳。燃えるように真っ赤な髪。

「おまえ、もしかして」

どん、と世界が揺れた。

簡易ベッドが倒れ、床に投げ出される。天井から鉄くずが降り注ぎ、明かりが激しく明滅を繰り返して影がめちゃくちゃに揺れた。鉄板が倒れるけたたましい音と、床に転がった子どもたちの悲鳴が交錯した。

「な、んだ……？」

頭上を慌ただしく行き交う靴音。どこかの壁が壊れたのだろうか、空気の流れと音が変わる。今まで聞こえなかった銃声が遠くでパラパラと弾け、どこからともなく流れ込んできた煙が辺り一帯をうっすら白く濁らせた。

胸の奥で警鐘が鳴る。

「いったい、何事。」

倒れた鉄板に挟まれ動かせなくなった簡易ベッドに左手を繋がれたまま、ジインは可能な限り身体を伸ばして廊下を窺った。

「おい、だいじょうぶか?!」

壁際に縮こまる子どもたちに声をかける。どうやら誰も鉄板の下敷きにならずに済んだようだ。

我に返った赤毛の少年が、取り落とした銃を慌てて拾った。

「おい、いったい何が、」

子どもたちが再び悲鳴を上げた。その視線の先を見て、ジインは言葉を失った。

血だらけの人間が二人、一方がもう片方の身体を引きずるようにして、廊下をよるめき歩んでくる。

近づくにつれて耳に届く、苦しげな息づかい。

全身を染めるとす黒い赤は、したたる音が聞こえそうなほどで。

倒れた鉄板をよつやつと乗り越えるようにしてジインたちのいる空間へと辿り着くと、血まみれの青年はジインのすぐ目の前の壁に寄りかかるようにしてその場にくずおれた。

その顔を見て、さらに息を呑む。

「おまえ……イーザウ……?」

それがつい先日、自分を拷問にかけた青年だと気づくのに数秒かかった。

体中が血に染まり、顔の半分もべつとりと赤い色に覆われ、埃と血糊で髪の色すら曖昧だ。

さらに、

「あ……おまえ、腕が……」

先日の一件でソラに痛めつけられたはずの左腕が、ない。

それがあるはずの場所は、ただただ血にまみれているだけだ。

腰を下ろした場所から、血だまりが静かに広がっていく。

「おい、早く血を……!」

「わかつてる」

動ける程度の傷であるらしい連れの青年が、仕切り布をナイフで引き裂き、イーザウの止血を試みる。黄ばんだ仕切り布を瞬く間に赤に染め、血は溢れ続けた。

「それじゃだめだ、もつと上を縛らないと……！」

手錠から手を引き抜こうと躍起になりながら、ジインはうなだれたまま動かない青年に必死で声をかけた。

「イーザウ……イーザウ！ しっかりしろ、大丈夫か！？ おい、いったい何がどうなってる！？」

「軍が、」

止めどなく溢れる血を必死で押さえながら、青年が短く言う。

軍が。

その一言で、ジインは状況を把握した。

軍が、攻めて来たのだ。

長年の搜索の末に、ようやく突きとめた『神の左手』のアジトを。
「レ……レインネインは？」

青ざめながら問う。今まで幾度も軍の猛攻をかいくぐってきた『神の左手』といえど、本拠地としていたこのアジトを襲撃されてはひとたまりもないだろう。

おそらくは、壊滅。

もしかしたら、全滅。

廊下へと目をやる。寄り添いながら凍り付いている子どもたちの不安げなまなざしと視線が重なった。

「レインネインとは連絡をとる術がない。逆探知防止のために、誰も通信機を持たずに行った。第二区では旧電波も使えないから」

「第二区？」

その言葉に、ぐぶりと心臓を掴まれた気がした。

そして、思い出す。

薬で意識を失う前に見た、雑然と並ぶ旧式の武器と武装したメンバーたち。

そこに満ちていた、殺気と覚悟。

そして、

「あ……ソラ……」

固い決意に捕われた、あのまなざし。

どうしても、あきらめられないんだ。
ソラ。

まさか、『ハコ』へ？

「おまえ、か……？」

「え？」

掠れた声で我に返る。血で固まった髪の毛の間で、双眸が爛と光った。

赤く焼けつく刃のような、その眼光。

「この場所が……突きとめられる、はず、がない……誰かが、密告したんだ」

イーザウの喉がごぼりと鳴り、唇からどす黒い赤がこぼれた。

「しゃべるな、イーザウ！！」

「お……まえ、が」

力なく投げ出されていた右手が、ゆっくりと上がる。

震える手には、血で濡れた小銃。

「っ、」

簡易ベッドに繋がれた手錠が、がちりと鳴った。

「お、まえさえ……いな、ければ……！」

逃げる、逃げると、警鐘が体中を駆け巡る。

けれど、逃げられない。動けない。

憎悪に燃える眼差しに魂を縫い止められて、呼吸すらできない。

凍り付いた視線の先で、血まみれの指がゆっくりと引き金にかかり。

耳をつんざく音が、響いた。

034 超える

銃声と同時に響く、きん、と甲高い金属音。
痛みはない。衝撃も、ない。

恐る恐る目を開ける。こちらへ向けられた銃口からは、確かに硝煙が上がっている。

何かが、しゃら、と左手首で涼やかな音を立てた。
視線を巡らせて、ジインは息を呑んだ。

「あ……」

左手首と簡易ベッドを繋いでいた手錠。

その鎖が、ちぎれている。

「おまえ、が」

イーザウがゆっくりと銃を下げる。

「おまえさえ、いなければ……ここへ、現れなければ……俺は、今頃……あの人の側で……共に……っ、」

血まみれの顔が、悔しげに歪む。

おまえさえ、いなければ。

イーザウの左腕があつた場所に目をやる。

ジインが受けた拷問の報復として、ソラが骨を砕いた腕。

あの怪我さえなければ、今頃は実行犯の一員として、レインネインの傍らにいたはずだ。

どす黒い赤に濡れた体が、細かく震え出す。

「イーザウ、」

「い……行けよ……“ヒトガタ”の、ところへ」

血まみれの唇が、渋面とも嘲笑ともつかない形にやりと歪んだ。
「おっ、おまえが、……いけば……あの人、に……も、っ、伝わる

……」

イーザウの揺れる眼差しが、ここにはいない誰かを捉える。

鮮烈な笑みがその唇に浮かんだ。

「……あ、のひと、は……、っ、れ、の……、……っ」

一瞬強く輝いたイーザウのまなざしが、ふいに遠くなる。すうつと苦痛が溶け去ったように、イーザウの体から力が抜けた。

遠い誰かを見据えたまま、イーザウは絶命した。

壮絶な死に様に、言葉を失う。

無言の部屋に、遠くからぱらぱらという銃声が届く。

子どもたちが泣いている。

「……キーヴァ、第六ルートですぐにここを出ろ」

固い声で言いながら、青年はイーザウの体から使えそうな武器類をはぎ取りはじめた。

「いやだ、戦う！ オレだって同志だ、逃げるくらいなら戦って死ぬ！」

「お前にはお前の役目がある。チュニたちと一緒に、その魔法士を外まで連れ出してくれ」

「こんな奴、放つとけばいいだろ！」

「アジトが落ちたことをレインネインに知らせるには、そいつをここから逃がすしかない」

「おい、ちよつと待てよ。おれは」

「“ヒトガタ”はレインネインと一緒に『ハコ』に向かった。追いかけて、レインネインにこの状況を伝えて欲しい」

差し出された血まみれの銃を避けるように、ジインは一步後じさった。

「なんで、おれが」

「どうせ脱出路もわからないだろう？ こいつらについていけば外に出られる。その後は、まあ、好きにすればいいが……どうせあの“ヒトガタ”を助けに行くんだろう？ ついでに側にいる誰かに一言、アジトが落ちたと伝えてくれればそれでいい」

アジトは落ちた。

だから、ここへは戻らずにそのまま逃げろ、と。

「……あんだたちはどうする気だ」

「ここで死ぬ」

目と目が合う。その眼差しに、あきらめなどは微塵もなかった。死地へ向かうその双眸には、むしろ生で満ち満ちていて。

「一人でも多くの敵を殺し、一人でも多くの人間の目に俺たちの怒りを焼き付けてから、ここで死ぬ。あんたは俺たちを人殺しだと言った。無関係の人間から見たら、確かにそうだろう。でも、俺たちにとってこれは戦いだ。望む未来を勝ち取るための、俺たちの戦いだ」

「……………」

口を開きかけて、つぶむ。

殺すとか、殺されるとか。

それで未来を勝ち取るとか。

こんなの、絶対間違ってる。

けれど。

「……………イーザウの言った“内通者”ってのは？ そんな奴がいるとしたら、今頃レインネインたちも……………」

「おそらく計画のことまでは漏れてない。漏れていたら、このタイミングでは襲ってこないだろう」

先ほどより近い場所ので、どん、と爆音が上がる。

考えている時間はない。

手錠がぶら下がったままの拳を強く握って、ジインは立ち上がった。

デイバッグをあさって、コートを引っ張りだす。薬類など必要最低限のものをポケットに無理矢理押し込んで、ブーツに足を突っ込んだ。

枕元に置いていた『廃工場』の鍵が、足下に転がっていた。

拾い上げて、首から下げる。

「これを」

名前も知らない青年が差し出す銃と弾倉を、逡巡の後に受け取った。

ぬるりとした感触に、指先が濡れる。

「キーヴァ、皆を頼んだぞ」

悔しげに唇をかんだキーヴァが、ぎらりとこちらを睨み上げ、きびすを返した。

「ついて来い！」

事切れたイーザウをすれ違い様に一瞥してから、後は振り返らずに小さな背中が続く。

廊下は、うつすらと白く煙っていた。まるで巨大な魚の食道のような不気味な通路を、ところどころで弱々しく明滅する明かりを頼りに、倒れた鉄板を乗り越えくぐり抜け、垂れ下がった配線に気をつけながら進んで行く。

時折、頭上や足の下を、敵か味方かもわからない靴音がばたばたと行き過ぎる。その度に息をひそめてやり過ごしながら、ジンと子どもたちは先を急いだ。

「ここは『彩色飴街』なのか？」

額に汗を浮かべながら、荒い息の合間にジンが訊ねる。予想以上に体力の消耗が激しい。病み上がりな上に、一番幼い子どもを抱きかかえ、遅れがちな少年にコートの端を掴ませながら暗がりを進んでいるのだから、当たり前と言えば当たり前だが。

「そうだよ。東二十八楼九層」

「九層？ 意外と地上に近いんだな。今は何時だ？」

「わかんねえよ。たぶん20時とか……22時とかだと思うけど」

夜か。夜ならば、闇に紛れて空を飛べる。誰にも見つからずに『裏』の空港まで行きたかった脱出時とは違い、今回は多少見咎められたとしても『ハコ』へ着くまでに捕まらなければそれでいい。

問題は、自分の気術神経が持つかどうかだ。

脳幹近くにある気術神経に負荷がかかりすぎると、魔法士は意識を失う。酷い場合には脳に障害を負ったり、そのまま衰弱死する可能性もある。

ここを抜け出し、『ハコ』まで空を飛び、侵入してソラを助け出

す。

まともを考えれば、とても神経が保つような行為ではないけれど。……どうにか、保たせるしかないな」

前方から響いた銃声に、ぴたりと足を止めた。

左の壁に開いた横道から、靴音が近づいてくる。

背後を振り返る。身を隠せるような場所はない。

全身をこわばらせながら両手で銃を構えるキーヴァの肩を掴んで、背後へと追いやる。

抗議の声を上げようとするのを手振りで制し、子どもたちを壁際にぴたりと沿わせた。

横道の角にそっと近づき、気配をうかがう。

壁を滴る水音に混じって、辺りを搜索しながら身を隠しつつ進んでくる靴音が、三、四つ。

音だけを頼りにその距離を測りながら、額に銃を当て、深呼吸を一つする。

ひやりとした感触と、さび臭い匂い。

のたうつ羽虫を思わせる音を立てながら、頭上の明かりが明滅を繰り返している。

一気にこちらへ駆けてくる気配に、息を止める。

頭上の照明が暗くなった瞬間に、角から飛び出した。

闇に溶けるような揃いの軍服の腕、足、肩を狙って、続けざまに引き金を引いた。

前方の一人が倒れ、次の一人がよろける。

弾が逸れた三人目の銃口がこちらを向いた。

壁を蹴り、ジインは跳んだ。

壁をうがう銃弾が火花を散らす。

三人目の肩を蹴りつけてその勢いのまま通路を転がり、振り向きざまに軍服の腕を撃ち抜いた。

「走れ!!!」

立ち上がりながら鋭く叫ぶ。明滅する明かりの下を、小さな影が

よぎっていく。

転がる銃に伸ばされた腕を踏みつけ、あごを蹴りつける。

「っ、」

ざわ、と怖気が走り、勘だけで壁際へ飛び退く。と同時に銃声が鳴り、右腕を銃弾がかすめた。

暗闇の向こうの見えない敵へ銃弾を撃ち込みながら、子どもたちの駆けて行った通路へ駆け込む。

倒れかけた鉄板を、右肩の傷が痛むのもかまわずに両手で掴んで引き倒した。

頭上の照明から火花が落ちる。

ジインは『支柱晶』を出現させ、天井にそれをかざした。

何も無いところに炎を立たせられるほどには、ここはピアノ濃度が高くない。

けれど、配管に積もった塵や油を火床にすれば……。

頭の奥で紡いだ念を、天井へぶつける。直後、頭上を這う配管が赤い炎に包まれた。

見えない力でそれを掴み、思い切り引き下ろす。

配管を芯にした炎のカーテンと倒れた鉄板とが、うまく重なり通路を塞いだ。

これで少しは時間が稼げるだろうか。

ほとんど明かりの失せた廊下を、ジインは駆けた。

息が上がりに、ばくばくと心臓が鳴る。

廊下の先がぼんやりと明るく見えてきた。“谷”だ。

建物を継ぎ合わせてできた『彩色飴街』には、楼と楼、建物や部屋の合間に、深い底なしの“谷”が無数に横たわっている。

谷に面した戸口に立ったキーヴァが、呆然と振り返った。

「橋が……ない」

道は、そこで途切れていた。

谷を覗き込む。そこに橋としてかかっていたらしい梯子は、数階層下の配管に引っかかっていた。

「魔法で引き上げるしかないか」

飛空で『ハコ』まで向かうことを考えると、できるだけ“力”は温存しておきたいのだが、仕方ない。

視界の端を、赤い何かがかすめた。

「危ない！」

下を覗き込んでいたキーヴァの首根っこを掴んで思い切り引く。仰け反ったキーヴァのつま先あたりを銃弾がかすめ、火花が散った。

キーヴァの手から離れた銃が、甲高い音とともに階下へと落ちていく。

二人で背後へ倒れ込んだ直後、続けざまに銃声が戸口をえぐった。子どもたちが悲鳴を上げる。

後ろ手に這って、ジインたちは戸口から遠ざかった。

弾は階上から放たれたものようだ。

小さな赤い点が獲物を探して戸口のあたりをうろつくと彷徨うのを見つめながら、ジインは腕の中で震える少年に訊ねた。

「ここ以外に渡れるところはないのか」

「……ない」

掠れた声で少年が言う。

向こう側までは5メートル弱。

自分一人ならば、魔法の補助で容易く跳躍できる距離だ。

背後を振り返る。いつのまにか子どもたちが背中にぴったりと身を寄せていた。

「……やるしか、ないか」

まずは子どもたち一人一人に防護壁をまとわせる。

弾が正面からまともに当たれば厳しいが、それ以外の当たりならば防護壁で受け流すことができるかもしれない。

そして敵に向かって発砲し、向こうの攻撃を封じている間に谷を跳ばせる。

子どももの足だ。もちろん、魔法で跳躍を補助しなければならぬ

だろう。

己以外の人間に魔法を使うことは、本来とても難しい。人間の体から発せられる熱や気が、ピアナクロセイドの干渉を邪魔するためだ。日々魔法に触れ慣れている魔法士や、体内にピアナクロセイドが含まれる“ヒトガタ”が相手ならともかく、触れていない相手の動きを補助するとなると相当な集中力と技術が必要だ。

「力の温存……なんて考えられる状況じゃないな」

小さく嗤って、己の甘い考えを捨てる。

子どもたちと向かい合うと、ジインは膝をついて視線を合わせた。

「いいか、これからおまえたちに魔法を授ける」

「ま……魔法？」

「見えない鎧の魔法だ。この魔法さえあれば、弾に当たらずに向こう側まで跳べる」

子どもたちがぐるりと目を丸くする。恐怖でこわばっていた頬に、わずかに赤みが差した。

「無理だよ。あっちまで跳ぶなんて」

「大丈夫だ」

断言すると、ジインは手をかざして『支柱晶』を出現させた。初めて見る魔法に、子どもたちの目が輝きを増す。

谷の空気が淀んでいるせいでピアナ濃度が比較的高いのがせめてもの救いだ。

「ええと、名前は……」

「チュニ。こつちがセオで、この子はマルカ」

「そうか。じゃあ、チュニとセオは手をつないで。二人一緒に跳ぶんだ。マルカはキーヴァと一緒に、チュニたちの次だ」

フードを深く被らせて、チュニとセオを二人まとめて抱きしめる。深く吸い込んだ息を止めて、意識を集中させた。

二人の体をピアナクロセイドの膜で包み込み、そつと体を離す。

不安げな二人の眼差しをしっかりと受け止めて、力強く頷いてみせた。

「大丈夫。魔法がおまえたちを守ってくれる。合図したら、怖がらずに思いきり跳ぶんだ」

意識の半分をチュニたちに繋げたまま、新しい弾倉を充填する。スライドを引き、戸口へそつと近づく。深呼吸をして息を止めると、ジインは引き金に指をかけた。

ゆらゆらとレーザーサイトが漂う中に飛び出すと、階上の影に向かって続けざまに発砲した。

「行け！！」

ジインの背後をすり抜けて、チュニとセオが戸口から跳ぶ。その体が向こう側の廊下に転がるのを視界の端で確認して、ジインは素早く身を隠した。

途端に雨のような銃弾が戸口に降り注ぐ。

通路の奥まで後退してから、今度はキーヴァとマルカに防護壁をまとわせる。

「いいか、思いきり跳ぶんだぞ」

「何度も言わなくてもわかってる」

マルカを抱いたキーヴァが、緊張した面持ちで戸口を睨む。

先ほどと同じ要領で、ジインは戸口に飛び出すと頭上の闇にめがけて発砲した。

合図とともにマルカを抱いて跳んだキーヴァが、向こう側に着地する。

頬すれすれを銃弾がかすめ、ジインは背後へ転がるように身を隠した。

暗闇の向こうに目を凝らす。キーヴァもマルカも無事なようだ。

今度は自分に防護壁をまとわせる。頭の奥がちくりと痛んだ。

もう痛み始めたのか。

ふるりと頭を振る。不安を胸の奥に押しやって、ジインは通路を駆けた。

戸口を思いきり蹴って、跳ぶ。

途端に銃声が辺りを埋め尽くす。耳の近くを銃弾がかすめた。肩

や足に衝撃を感じたけれど、銃弾は体に達することなく防護壁の表面を滑るように谷底へと逸れていった。

着地して、通路を転がる。右肩の傷を庇いながら、ジインは素早く体を起こした。

「みんな、無事か？」

子どもたちの顔を見回す。暗がりの中で、大きな目がきらりと瞬いた。

「よし、行……っ」

立ち上がった途端に、右胸で痛みがはじけた。

銃弾によるものではない、身に覚えのある痛みに、全身が凍り付く。

竜毒、が。

「ぐ……っ！」

雷に撃たれたような突然の激痛に、膝をつき体を折る。

「おい、どうした!？」

焼けた杭でえぐられるような痛みで、息ができない。

食いしばる歯の奥から、ぐぐもった呻きが漏れる。

こんな時に……!

「う、撃たれたのか!？」

「どうしよう、キーヴァ」

痛い。痛い。体が裂ける。破裂する。

突き上げる悲鳴を飲み込んで、床に額を押し付けた。

このままめちゃくちやに頭を打ちつけて、痛みから解放されたい衝動に駆られる。

痛い。苦しい。もう、止めてくれ。

「う……ウ、ウ……ッ！」

腰に挟んだ銃に震える手を伸ばす。

この痛みから今すぐ逃れたい。

楽になれるのなら、もう、なんだって……。

ちりん、という金属音に、涙でかすむ目を開く。

強く強く、全身全霊の力を込めて、強く念じる。
周囲のピアナクロセイドが淡く発光するほどに、気術神経を震わせた。

静まれ。静まれ。静まれ ……！！

「……………」

ふいに痛みが溶ける。突き刺さった杭が抜けて、肺が一気に解放された。

こわばっていた体をぐったりと投げ出して、全身で息をする。
こめかみを涙が伝った。

止まった。

痛みの残滓が鼓動に合わせてじくじくと疼くけれど、先ほどの激痛に比べたら天国と地獄の差だ。

震える手の甲で口をぬぐい、涙を拭く。

右胸が燃えるように熱い。

困い込まれた重い熱は、行き場を失って右胸に渦巻いている。

右胸から意識をそらさないよう気をつけながら、痛みで疲労した体を無理矢理起こした。

「大丈夫か？」

心配そうに覗き込んでくる子どもたちに、小さく頷いてみせる。

「大丈夫だ」

手錠がはまつたままの左手で、右胸を押さえる。

魔法が途絶えれば、竜毒は再び暴れだすだろう。

気術神経の限界が、この命の限界。

脳の深いところでは、ずきんずきんと鼓動が跳ねている。

迫る終わりを知らせる警鐘は、すでに鳴り始めていた。

「さあ、行こう」

気術神経が焼き切れるまで。

この体が耐えつるところまで。

一歩でも近く、ソラのもとへ。

「待ってるよ、ソラ……………」

おれに黙って、勝手なことばかりしやがって。
会った瞬間、げんこつを食らわせてやるから。
覚悟しておけよ……ソラ。

035 運命の輪は回りだした

電動ドアが音もなくスライドする。

視界が一瞬白で埋め尽くされたあと、水色が一面に広がった。

強い風が頬を叩き、制服の裾をはためかせる。

視界に存在するのは、明灰色の床と柵、雲のたなびく青空と、濃紺の制服がただ一人。

その姿を探し歩くこと数十分。空とこちら側を隔てる柵の前にその姿をようやく見つけ、瑞彦は安堵のため息を吐いた。

「探したぞ」

言いながら歩み寄り、濃紺の制服近くの柵に寄りかかる。

「端末、何度も鳴らしたんだが」

無反応な相手の頭上から嫌みのこもった声を降らせる。柵に背中を預けて座り込み、立てた片膝に顔を埋めていた少年が、そこでようやく顔を上げた。緩慢な動きで腕の端末をちらりと見ると、黒瀬はかけらも興味がなさそうに言った。

「気づかなかった」

「……だろうと思ったよ」

空からの強風が髪をなぶる。ここは防護ドームの外だ。竜の襲来や悪天候から区域を守るため、魔法院はそのほとんどが合成強化アクリルの防護ドームで囲われている。しかし緊急避難用ヘリポートとして使うために、防護ドームから突き出た箇所がいくつか存在する。

その中の一つであるテラスは、今日も閑散としていた。それもそのはずだ。ただ広いだけでベンチの一つもなく、院生の講義室からも離れているこの場所を、貴重な休憩時間を費やしてまでわざわざ訪れる人間などいない。

隣に座る黒髪の少年と、それを度々探しにくる自分以外は。

今日は特に風が強いらしく、空気の固まりがひっきりなしに顔を

叩いて呼吸がしづらい。

確かに爽快感はあるかもしれないが、見晴らしがいいだけでこれと言って面白みもないテラスに足しげく通う黒瀬の気が知れない。

目に入りそうな前髪をかき上げ、裏返る上着の裾を払い落としながら、瑞彦は呆れ顔でぼやいた。

「まったく、物好きだな。そんなにソラが好きなのか？」

黒瀬がはじかれたように顔を上げる。かすかに見開かれた瞳と、少し開いた唇。感情を表すことが極端に少ないその顔に、驚愕の表情がありありと浮かんでいた。

何かおかしいことを言っただろうか。滅多に見ることのないその表情に逆に困惑して、瑞彦は言い訳するように言った。

「いや……いつも見てるだろう？ ここにもよく来てるし、好きなんじゃないのか？」

「……ああ、“空”か」

こちらを見上げる夜空色の瞳が、見る見るうちに興味を失う。

不可解な反応のわけを問いただそうと口を開きかけて、瑞彦はふと動きを止めた。

「どうしたんだ、その唇」

右の唇の端、ほとんど口の内側に近い場所に、傷のようなものが見え隠れしている

「……べつにどうもしませんけど」

不機嫌そうに言って、黒瀬がそっぽを向く。

「どうもしないわけないだろう。そんな傷、いったいどこで」

「どこだっていいでしょう」

片頬を隠すように顔を背けながら、黒瀬が立ち上がる。そのまま立ち去ろうとする肩を掴むと、瑞彦は無理やりこちらへ振り向かせた。

「おまえな、ひとが心配してるのにそういう態度は、」

ひととき強い風が吹く。黒瀬の頬にかかっていた黒髪が、ふわりと舞い上がった。

思わず息を呑む。

「黒瀬……」

青く腫れ上がったまぶた。赤い色のにじむこめかみ。

顔の左側に集中しているそれらの傷は、明らかに誰かに殴られた痕だった。

「おまえ……どうしたんだ、それ」

「べつに。ちょっとぶつけただけです」

「うそつけ。ぶつけたくらいでそんなふうになるはずないだろう。見せてみる」

髪を払いのけようと伸ばした手は、届く前に勢いよく払われた。

「放っておいて下さい」

突き放すような眼差しが、双眸を射る。

行き場のなくなつた手を握り込むと、締め付けられるように胸がぎゅっと痛んだ。

気まずい沈黙の合間を、風が吹き抜けていく。

「……すみません」

きまり悪げに視線をそらした黒瀬が、ぽつりと呟く。

「寝ぼけて、ベッドから落ちたんです。見た目ほど痛まないし、大した傷じゃない。気にしないで下さい」

「でも、」

「それより、何か急ぎの用があつたんじゃないんですか」

この話はこれで終わり。これ以上は訊くなどという言外の態度と、騙されてやる気も失せるようなあからさまな嘘に、ふざけるなという言葉が喉まで出かかる。

なぜ、どうしてそんな傷が？

その傷の向こうに、いったい何を隠している？

目の前の少年に関して知りたいことは山ほどあるが、いくら問い詰めても黒瀬は決して答えないのであるうことを、瑞彦はこの数ヶ月で学んでいた。

言葉を交わすたびに増えていく、“なぜ”、“どうして”。

一步近づくとたびに、あいだに横たわる溝の深さを思い知らされるばかりだ。

ほんの少しでもいい。折れそうなほどの瘦身に暗く冷たいなにかを抱え込んでいるこの少年の、重荷を分つ存在になりたかった。

その願いが叶う日は、果たして来るのだろうか。

「……縞野導師から晩餐のお誘いがあった。この間の課研の発表を気に入って下さったらしい。今夜なんだが、おまえも一緒に来ないか」

「遠慮しておきます」

いつそ清々しいほどの、すげない一言。予想通どおりの答えだ。

覚悟していたはずなのに心のどこかで気落ちする自分を嗤いながら、瑞彦は一応食い下がってみた。

「おまえ、あの縞野導師だぞ？ 古代資料から新たな構築式を考案した複合式術研究の第一人者だ。導師だけじゃない、今夜の晩餐には廉堂範師もご同席なさるらしい。エミハユラ定理の新解釈についての話も聞けるかもしれないんだ。こんな機会は滅多にないぞ。せつかくのチャンスを……」

「沢木さんが代わりに聞いておいて下さい」

式術研究の権威である導師の誘いをにべもなく断って、黒瀬が歩き出す。

肩が触れる距離ですれ違う瞬間、ふいに衝動が突き上げた。

「っ、」

とつさにその腕を掴む。

わずかに驚いた顔が、振り向いてこちらを仰ぎ見た。

青と緑の層を幾千幾万と重ねたような深い色の瞳が瑞彦を映す。

「まだ、何か？」

「あ……いや、べつに」

何でもないと首を振り、きつく掴んでいた腕を放そうとした。けれど、指が動かない。

どうしてだろう。理由はわからないけれど。

この手を、放してはいけない気がした。

「 沢木さん？」

瑞彦の不可解な行動に、黒瀬が怪訝そうに首を傾げる。無理やり引きはがすようにして、瑞彦はゆっくりとその手を放した。

黒瀬はしばらくの間いぶかしげにこちらを見ていたが、すいと視線を逸らすと、踵を返して歩き出した。

裾がはためく後ろ姿を眺めながら、ざわつく胸を押さえる。

この不安は何だろう。

この胸騒ぎは、何だろう。

胸から離れた右手を、そっと見下ろす。

この手で確かに掴んだはずの感触は、強い風にさらわれてすでに消え失せていた。

「手が止まってるわよ、瑞彦」

言われて我に返る。かき消えたテラスの代わりに視界に飛び込んできたのは、暖かみのある照明と白く輝くテーブルクロス、そして宝石のように並べられた料理だ。

「ああ……すまない」

握ったままだったナイフとフォークを一度置くと、瑞彦は込み上げるため息を目の前の少女に悟られぬようそっとかみ殺した。

グラスを手を取って、水を含む。外国産の、かすかに甘みのある軟水だ。

喉元を落ちていく無色透明の液体とともに、胸のわだかまりも綺麗さっぱり消え去ってくればいいのにと、瑞彦は願った。

第二区の北部 企業家や有力者の巨大な邸宅が集まる高級住宅地に建つ沢木家本宅の一室は、ただ静かだった。

窓の外に目をやる。片側の壁一面に広がる窓ガラスには、群青に

浮かぶ新市街の夜景が煌めいている。

人工の明かりに照らされて滲む夜空の色を誰かの瞳と重ねかけて、瑞彦は窓から目をそらした。

「ぼんやりするのはかまわないけど、食事の手を止めるのはやめてせつかくの料理が冷めたらもつたないわ」

瑞彦がグラスを置くのを待つてから、少女は始終うわの空の相手をとがめるでもなくからりと明るい声で言った。

すつと通った鼻筋に、一重の瞳。きりりと涼やかな目元にぼつりと浮かぶ泣きぼくろが、さっぱりとした顔立ちに一雫の色香を与えている。

まっすぐな黒髪をかつちりとしたシニヨンにまとめ、深い紺色のシンプルなワンピースに身を包んだ律子は、幼い頃から教え込まれた気品と落ち着きを指先まで漂わせながら、皿の上の料理をわずかな音も立てずに切り分けた。

「それと、私の前では無理しないで。ため息ぐらい好きだけ吐いてちょうだい」

さらりと言われた言葉に苦笑いする。やはり見抜かれていたらしい。

鋭い洞察力と、感情に流されない冷静な分析。幼い頃から、人間観察に関して律子の右に出るものはいなかった。

「それに、苦悩する男性つて結構セクシーなのよねえ」

かと思いきや、今度は旧家の令嬢とは思えない笑い方で、うふふと笑う。時折おかしな言動が飛び出るところも、昔から変わらない律子の特徴だ。

黒瀬の逃亡を手助けするという背反行為に対して、魔法院長老会より厳重注意及び無期限謹慎を言い渡されてからというもの、瑞彦の周囲は劇的に変化した。とぼつちりはごめんだとばかりに離れていく者、取り入る好機と見て逆に近づいてくる者。絵に描いたように品行方正であったはずの沢木家長子の乱心を嘆く者、反対にその不祥事を影で喜び祝う者。瑞彦の身を心から案じて親身に諭してく

れる者もいれば、かたや己の保身のために必死で見当違いの助言をしてくる者もいる。その反応は実に様々で、今まで見せなかつた一面をさらけ出して皆々が右往左往するその様を、瑞彦は興味深く静観した。

今まで友人だと思っていた人間が手のひらを返したように冷たくなつたり、その反対に今まであまり付き合いのなかつた人間が損得に拘らない人間味のある反応を示してくれたりもして、瑞彦は人という生き物の多様性とその深みにある種の感動すら覚えていた。

赤ん坊の頃からの付き合いである律子は以前と少しも変わらないまままでいてくれた数少ない人間の一人だ。

二人の間に流れる穏やかな空気に安らぎを覚えつつ、瑞彦は皿の上の料理を切り分けて口へと運んだ。ふわりと香る香草と、胡椒のぴりりとした辛み。やわらかな食感と温かな肉汁が口中に広がる。

「美味い」

思わず漏れた呟きに、律子が満足げに微笑む。

「でしょー？ このまえ見つけたお店のシェフに無理を言つてわざわざ来てもらったの。この家の料理もちろんおいしいけど、たまにはこういう趣向もいいわよね」

「こんなに優雅に食事をしていていいんだろうか。一応謹慎中なんだが」

「あら。謹慎中だからこそ、よ。気が鬱ぎがちな時こそ、おいしいものを食べて気分転換しなくちゃ。無理に元気になろうとするのはよくないことだけど、いつもと違うことをしたり美味しいものを食べたりして気分を変えるのはいいことだと思うの。ふふっ、まあ本当は、私がただあなたと美味しいものを食べたかっただけなんだからどね」

もってまわつた言い方や真実を包み隠すことを好まず思つたことを何でも口にする性格は、損得勘定の計略が交錯する魔法院では貴重な存在だ。魔法院一の大家の長男としてその計略のまった中で生きていく瑞彦は、彼女の存在に何度救われたかわからない。一歩

間違えれば差別的で狭量な人間に成長してしまいがちの魔法院で、瑞彦が人として最低限の誠実さを保ったまま育つことができたのも、幼い頃から婚約者と定められ共に過ごしてきた律子の人格によるところが大きかった。

「それに、あなたの謹慎はもうすぐとけるわ。だからこの食事は、その前祝いってことで」

「上に働きかけてくれたのか」

「働きかけたってほどでもないわ。“瑞彦は院に逆らうつもりなんてこれっぽっちもありません。彼はただ、余命わずかな友人を見捨てられなかっただけなんです”……って、おじいさまに直接訴えてみただけ」

直前に目薬さしてね、とあっけらかんと付け加える律子に、瑞彦はあきれ半分感心半分で、

「安城のおじいさまは相変わらず孫娘に弱いんだな。でも、助かった。ありがとう」

「うふふ、涙の代金はスターレット・タワーのアップル・シナモン・クレープでいいわ」

「涙じゃなくて目薬だろう？」

「あら、少しは本物も混ぜってるわよ？ おじいさまの話が長過ぎて、途中で何度もあくびをかみ殺したもの」

「本物の涙なら、クレープだけじゃ安すぎるな」

「婚約者割引の特別価格よ。本当はもつと高いんだから」

このくらいの真珠のピアス程度にはね、と言いながら、律子が入差し指と親指で円を作ってみせる。

「ピンポン玉？ 国宝級だな」

「そうよ。滅多に泣かない私の涙には値千金の価値があるの」

おどける律子に、瑞彦は胸に手を当て慇懃に頭を下げてみせた。

「それでは、大粒の真珠の代わりに大きなバナライスを付けたいと思います」

律子の瞳がきらりと光る。

「キャラメル・ティーも？」

「ミルクたっぷり、飲み放題で」

顔を見合わせて、二人は笑った。心地よい、明るい笑いだ。スターレット・タワーへ行く時は、真珠のピアスを用意していい。

国宝級のピンポン玉はちょっと無理だけど、人より小さめな律子の耳に似合うような、シンプルで可愛いサイズのものを。

“あんなの、ただの冗談だったのに”

あきれ顔で、律子はそう言うだろう。

“これじゃあ、私がおねだりしたみたいじゃない”

そんなふうにして、少し怒るかもしれない。

「……できるだけ小さめの粒にしておいたほうがよさそうだ」

「え？ いまなんて言ったの？」

首を傾げる律子に、なんでもないと頭を振りかけて、瑞彦はふいにわき上がった別の言葉を口にした。

「ありがとう」

ここにいてくれたのが律子でよかったと、心から思う。

胸の奥からわき上がった言葉を、ぐっと噛みしめるように瑞彦は言った。

「律子が側にいてくれて助かった。本当に感謝している。小雪のことも、北見のことも」

「お礼を言われるようなこと、してないわ」

小雪と北見、二人の名を聞いた律子が、小さく肩を落とす。

「二人に関しては本当に力になれなくて……北見くんなんて、沢木の家の人たちが彼に全責任をなすり付けようとするのを回避させるのが精一杯だったわ」

「面倒なことを押し付けて、本当にすまない」

「謝らないで。あなたのせいじゃないわ。そもそも魔法院の人たちの頭が固すぎるのよ。排他的で狂信的。頭にあるのは出世と保身のことばかり。いつだって自分の利益しか考えないんだから」

苛立たしげに言いながら、律子がため息を吐く。

「小雪ちゃんには笹原長老がついているから、家の心配はあまりしてないの。それよりも、問題は小雪ちゃんの気持ちね」

「気持ち……」

「付き合っていたんでしょ？ 彼と。初めて聞いた時は私も驚いたわ。二、三度しか顔を合わせたことがないけれど、なんというか、彼は誰かと楽しく恋愛できるような人に見えなかったから」

蓄積されたデータを分析する科学者のような顔つきで、律子は言った。

「実際、彼は小雪ちゃんに一言の断りもなく魔法院から出て行った。彼がいつたいたいとうつもりで付き合っていたのかはわからないけど、少なくとも小雪ちゃんは彼を愛していた。心が通じ合っていると信じていた人が、何も告げずに突然いなくなつて……しかも、今まさに命を落としかけているなんて……そんなの、とても受け入れられる話じゃないわ」

沈痛な面持ちで、律子が視線を落とす。

「今日もここへ来る前に小雪ちゃんのところへ寄つて来たの。私の前では平気なフリをしているけれど、それが逆に痛々しくて……」

かわいそうにと眉をひそめて、律子はため息まじりに呟いた。

「まったく、あなたも小雪ちゃんも、本当に厄介な人に惚れ込んだものね」

厄介な人。その表現が妙にぴったりで、瑞彦は思わず苦笑いした。惚れ込んだ、という言い方には若干語弊があるような気がしたが、代わりになる言葉が見つからないということは、中らずといえども遠からず、といったところなのかもしれない。

独特の雰囲気と鮮烈な存在感で誰彼かまわず無意識に魅了したあげく、時折見せる心もとなない横顔で側にいる者に思わず手を差し伸べさせるくせに、凜とした孤高さで他者の近接を許さない。

この上なく厄介な人間。

けれど、もう、いない。

急に息苦しさを感じて、瑞彦は襟ぐりを緩めた。

あの時渡した薬は、もう使ったのだろうか。

あの瞳は、まなざしは。

透明な笑顔は、まだこの世界に存在しているのだろうか。

ありがとう、沢木さん。

どこまでも透きとおるような最後の笑顔を思い出しかけて、瑞彦は思わず目をつぶった。

「瑞彦……？」

ばくばくと脈が乱れ、喉が詰まる。

込み上げる情動が通り過ぎるのを、瑞彦は静かに待った。

なあ、黒瀬。

人の心を奪って消え去るなんて、あまりに始末が悪いと思わないか。

やわらかな指が手を包み込む。律子の気遣わしげな瞳が、こちらを見つめていた。

「あなたは精一杯やったわ。沢木家の長子という難しい立場でありながら、できる限りのことをした。最後まで、彼に対して誠実さを失わなかった。婚約者として、友人として、私はあなたを誇りに思う。本当によくやったわ。でも、もう終わったの。これ以上、あなたにできることはないのよ。こんな言い方は冷たいかもしれないけれど、あとは彼の運命に任せるしかない」

手に力を込めて、律子が言う。

「回りだした運命の輪を止めることは、誰にもできないのよ」

律子の言葉を聞いて、気づく。

黒瀬の腕を掴んだあの時。

あの瞬間に、自分が引き止めたかったのは。

黒瀬ではなく、黒瀬の運命だったのかもしれない。

「運命の輪を止めることは、誰にもできない……」

その言葉を噛みしめて、飲み下す。

そう、すべてはもう終わったことだ。

それでも、この悔いが、想いが、尽きることはないのだろう。
胸でわだかまる行き場のない感情を奥の奥へと押しやって、瑞彦は窓の外に広がる夜を見た。

どさり、と重い体が床へと落ちる。

一撃で気絶させた警邏兵の体からカードキーを探し出すと、ソラはパネルを操作してパスワードを打ち込んだ。

肩に受けた銃創から、しゅうしゅうと湯気が上がる。体が熱い。まるで蒸し風呂の中に放り込まれたみたいだ。

あごから滴る汗を手の甲で拭うと、ソラはカードキーをセキユリティーパネルに通して再びパスワードを入れた。

定期的に変わるパスワードの組み合わせは、ジインの端末内のデータから算出したものだ。

ポオン、と丸みのある電子音とともに、モニターに文字が表示される。

“ 第一検問所 車体番号 W C O 3 0 1 5 D 4 S - 0 4 4 6 の通行を許可しますか？ ”

銃声とともに背中に衝撃を受け、ソラはパネルの上に突っ伏した。焼けた鉄を押し付けられたかのように、腹部が熱くなる。

振り返ると、入り口近くで倒した警邏兵の一人が立ち上がり、こちらへ銃口を向けていた。

「う……動くな……！」

怯えと嫌悪が入り交じった視線にゆらりと向き直ると、ソラは一息でバネのように飛び上がり、デスクを踏み台にして跳躍した。

「ひ……っ！」

ソラが跳んだ軌跡を、銃弾がむなしく通過する。

空中で体をひねると、ソラはその勢いで警邏兵の横つらを蹴り付けた。逃げ出そうとしていた体は吹っ飛んで壁に激突し、動かなく

なる。

まずい。死んだかな。

警邏兵の首が折れていないことを願いながら、ずたずたの腹部を押さえて着地する。

ぱたた、と床に血痕が散った。

「ば……ばけ、もの……」

数歩離れた床から掠れた声が上がる。声の主の警備兵を一蹴りで黙らせると、ソラはセキユリティーパネルのほうへと向き直った。急激に吐き気がこみ上げて、その場に嘔吐する。どす黒い赤と鮮やかな赤が混じり合った液体を床にぶちまけた。鉄臭い、嫌な匂いが鼻を突く。せえせえと肩で息をしながら、ソラは震える手を見下ろした。

先ほどまでの熱さはきれいさっぱり消え失せて、今は震えるほどに寒い。きつと、血を流し過ぎたせいだろう。

けれど、まだ動ける。

口元を拭いながら、ソラは己の体を冷静に観察した。

銃弾の貫通した穴から、どくどくと流れ出る血。内蔵も確実に傷ついているだろう。もちろん痛みもあるけれど、すぐに塞がる傷とわかってるので耐えられるし、もしかしたら、一般的な人間が感じるそれよりも軽いのかもしれぬ。

手指を握ったり開いたりしてみる。若干反応が鈍い気もするが、それでも常人よりは俊敏に動いていた。

これほど血を流せば、普通ならショック性なんとかで、とつくに動けなくなっているはずだ。

きつと普通の人間とは基本的な構造が違うのだろう。

「ほんとうに、ばけもの、だな」

絞り出すように呟いて、辺りを見回す。『ハコ』の第三棟のセキユリティー、及び地上経由の大型貨物用搬入経路を管理するセキユリティールームには、ソラが倒した警邏兵が累々と転がっていた。ジインの端末に保存されていたセキユリティー情報とソラの超人

的な身体能力を駆使しながら、燃料倉庫からここまで一気に攻め込んだ。

多勢にも臆さず、銃口にも怯まず。

銃弾が体を貫くのも構わずに、突き進み。

撃たれても撃たれても、決して止まらずに。

その狂ったような猛進ぶりで、相対するものに恐怖を植え付けながら。

「……化け物なら、化け物らしく、ね」

腹部からしゅうしゅうと湯気が立つ。

パネルの前へ戻ると、ソラは血で濡れた指先でキーを押した。

血痕の散ったモニターの表示が緑色に変わる。

“ 第一検問所 車体番号 W C O 3 0 1 5 D 4 S - 0 4 4 6 の通行を許可します ”

これでレインネインたちの乗った車両は、第一検問所を通過して地雷の埋まる荒野の誘導路を通り、第二検問所へ到達することができる。第二検問所とそこからの経路は、武力行使で強行突破する予定だ。

気絶した警邏兵の服を剥ぎ取る。どつしりと血を吸った服を脱ぎ捨てると、ソラは警邏兵の制服に身を包んだ。服の下からにじむ血を防弾衣で覆い隠し、足下に転がる銃を拾い上げる。

ここからが本番だ。

警備がさらに厳しい第二セキュリティポイントを抜けて、上階のデータ室へ。

目の前の巨大なモニターの端には、第二セキュリティポイントを含む上階の各部屋が映し出されている。人気の少ない施設内はどこも静かで、侵入者の来襲に気づいた様子はない。

朱世から譲り受けたプログラム・チップは、モニタリング情報をダミーのものにすり替え、ソラの侵入をうまく隠蔽してくれているようだ。

気絶した警邏兵の一人を担ぎ上げる。この先のエレベーターで、

生体認証が必要なのだ。

この上なく無謀で、力任せな計画。

果たしてうまくいくだろうか。

しゅうしゅうと湯気を上げる胸に手を置いて、お守りの鍵に祈る。

「……だいじょうぶ」

大丈夫。オレは、化け物だ。

どんなに傷ついても死なない。倒れない。怯まない。

このまま不死身の体でどこまでも突き進み、望む未来を勝ち取ってみせよう。

そう、この化け物の力で。

運命だって、ねじ曲げてみせるよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9903e/>

ソラニワ

2011年11月20日20時05分発行